九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 26 －

福岡県三井郡大刀洗町所在
宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡

1993

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 26 —

三井郡大刀洗町所在宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は、昭和58・59年度に調査を実施した三井郡大刀洗町宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第26集として取りまとめたもので、先土器時代から近世まで長期間にわたる生活の営みが残された貴重な遺跡であります。

発掘調査の記録としては、十分に満足のいくものではありませんが、本書が地域の文化財の理解と愛護の一助になれば幸いです。

なお、調査にあたり御指導・御助力を頂いた関係各位ならびに地元の方々に対して心から感謝申し上げます。

平成5年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安常喜

例　言

1. 本書は、昭和56・58・59年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した三井郡大刀洗町所在の十三塚遺跡・宮巡遺跡・春園遺跡の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の26冊目にあたる。
2. 遺構の実測は、石山勲・木下修・馬田弘稔・伊崎俊秋・日高正幸・平島文博・向田雅彦・下村精一が行い、写真撮影は、木下・伊崎・平島が行った。
3. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館・文化課甘木事務所で行った。また、鉄器の処理は、九州歴史資料館横田義章氏にお願いした。
4. 遺物の実測は、木下・伊崎・平島が行った。
5. 挿図の製図は、豊福弥生・鶴田佳子・塩足里美・近藤美恵子さんの助力を得、木下・伊崎・平島が行った。
6. 遺物の写真撮影は九州歴史資料館石丸洋氏と木下が行った。
7. 本書の執筆は、木下・馬田・伊崎・平島が分担し、文末に記した。
8. 本書の編集は木下が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 5

Ⅲ　宮巡遺跡 …… 7

1．調査の概要 …… 7

2．遺構と遺物 …… 8

(1)　道路状遺構 …… 9
(2)　溝 …… 10
(3)　土　壙 …… 13

3．おわりに …… 14

Ⅳ　春園遺跡 …… 15

1．調査の概要 …… 15

2．先土器時代の遺構と遺物 …… 16

(1)　調査区の設定 …… 16
(2)　層　序 …… 16
(3)　遺物の出土状況 …… 17
(4)　出土石器 …… 21

3．古墳時代から中世の遺構と遺物 …… 29

(1)　竪穴住居跡 …… 29
(2)　掘立柱建物跡 …… 37
(3)　土　壙 …… 45
(4)　ピット …… 60

(5) 溝 …… 63
(6) その他の遺構と遺物 …… 68

4. 近世の遺構と遺物 …… 69

(1) 近世墓 …… 69
(2) 土 壙 …… 118
(3) その他の遺構と遺物 …… 119
5. おわりに …… 119

V 十三塚遺跡 …… 123

1. 調査の概要 …… 123

2. 遺構と遺物 …… 124

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1 (1) 宮巡・春園遺跡航空写真 …… 5
(2) 宮巡・春園遺跡遠景（調査前・西から） …… 5

〔宮巡遺跡〕

図 版 2 (1) 道路状遺構（西から） …… 8
(2) 道路状遺構（東から） …… 9
図 版 3 (1) 道路状遺構と６号溝（東から） …… 9
(2) 道路状遺構東半 …… 9
図 版 4 (1) 道路状遺構土層断面Ａ－Ａ’ …… 9
(2) １号溝 …… 9
(3) ３・２号溝 …… 9
図 版 5 １号溝土層堆積状況と出土遺物 …… 10

図　版　6　　２号溝土層堆積状況 …… 11
図　版　7　(1)　１号土壙 …… 13
　　(2)　１号土壙土層堆積状況 …… 13
図　版　8　(1)　２号土壙 …… 14
　　(2)　２号土壙土層堆積状況 …… 14
図　版　9　(1)　３号土壙 …… 14
　　(2)　３号土壙土層堆積状況 …… 14

〔春園遺跡〕

図　版 10　(1)　春園遺跡から東方を望む …… 15
　　(2)　春園遺跡遠景（西から） …… 15
図　版 11　(1)　春園遺跡Ａ区全景（南から） …… 15
　　(2)　春園遺跡Ａ区南半 …… 15
図　版 12　(1)　春園遺跡Ｂ区西半（南から） …… 15
　　(2)　春園遺跡Ｂ区東半（西から） …… 15
図　版 13　(1)　春園遺跡Ｂ区東半（南から） …… 15
　　(2)　春園遺跡Ｂ区西半（東から） …… 15
図　版 14　(1)　C～G－4～10調査区 …… 16
　　(2)　K～O－15～24調査区 …… 16
図　版 15　(1)　基本層序 …… 16
　　(2)　K－19区土層堆積状況 …… 18
図　版 16　(1)　E－4区遺物出土状況 …… 19
　　(2)　G－10区遺物出土状況 …… 20
図　版 17　　遺物出土状況 …… 20
図　版 18　　E－4区出土石器（表・裏） …… 21
図　版 19　　C～G－4～10区出土石器（表・裏） …… 21
図　版 20　(1)　スタンプ状石器・磨石 …… 25
　　(2)　K～O－15～20区出土石器（表・裏） …… 25
図　版 21　　フリント製石器（表・裏） …… 28
図　版 22　(1)　１号竪穴住居跡遺物出土状況 …… 29
　　(2)　１号竪穴住居跡 …… 29
図　版 23　(1)　１号竪穴住居跡カマド …… 30

(2) 床面遺物出土状況 …… 30
図 版 24 1号竪穴住居跡出土土器 …… 30
図 版 25 1号竪穴住居跡出土土器と不明土製品 …… 35
図 版 26 (1) 2号竪穴住居跡（南から） …… 35
(2) 2号竪穴住居跡（西から） …… 35
図 版 27 (1) 1号掘立柱建物跡（北から） …… 37
(2) 2～5号掘立柱建物跡（南から） …… 40
図 版 28 (1) 2号掘立柱建物跡（北から） …… 40
(2) 3号掘立柱建物跡（東から） …… 42
図 版 29 3・4・6号掘立柱建物跡（東から） …… 42
図 版 30 (1) 5号掘立柱建物跡（北から） …… 43
(2) 6号掘立柱建物跡（東から） …… 44
図 版 31 (1) 4号土壙（西から） …… 47
(2) 4号土壙下層（東から） …… 47
図 版 32 (1) 4号土壙遺物出土状況（北から） …… 49
(2) 4号土壙土錘出土状況 …… 49
図 版 33 (1) 4号土壙出土土器・土錘 …… 49
(2) 5号土壙（南から）と出土土器 …… 49
図 版 34 (1) 8～10号土壙（南から） …… 50
(2) 8号土壙出土遺物 …… 51
(3) 10号土壙遺物出土状況 …… 51
図 版 35 (1) 16号土壙（西北から） …… 54
(2) 16号土壙土層堆積状況 …… 54
図 版 36 (1) 17・18号土壙（北から） …… 54
(2) 17号土壙遺物出土状況（南から） …… 56
図 版 37 17号土壙出土土器 …… 56
図 版 38 (1) 18号土壙（西から） …… 58
(2) 19号土壙（南から） …… 58
図 版 39 (1) 1号ピット（東南より） …… 60
(2) 3号ピット（東から） …… 60
(3) 6号ピット（北東より） …… 62
図 版 40 (1) 1～3号溝全景（北東から） …… 63
(2) 1号溝土層体積状況と遺物 …… 65

(3) 2・3号溝（北西から） …… 66
図 版 41 (1) 4～6号溝（西から） …… 66
(2) 6号溝土層堆積状況 …… 66
図 版 42 (1) 7～9号溝（西から） …… 66
(2) 7号溝土層堆積状況 …… 66
(3) 8号溝土層堆積状況 …… 67
図 版 43 (1) 9号溝屈曲部 …… 67
(2) 7・9号溝の切り合い …… 66
(3) 9号溝土層堆積状況と出土遺物 …… 67
図 版 44 近世墓群西半（南から） …… 69
図 版 45 (1) 近世墓群全景（南から） …… 69
(2) 1～7号墓付近近景（南から） …… 69
図 版 46 (1) 近世墓西半（西から） …… 69
(2) 19～30号墓近景（西から） …… 69
図 版 47 (1) 1号墓（東から） …… 69
(2) 12号墓（東から） …… 79
図 版 48 (1) 近世墓調査風景 …… 79
(2) 14号墓（西から） …… 79
図 版 49 (1) 17号墓（西から） …… 81
(2) 17・18号墓（西から） …… 81
図 版 50 (1) 19号墓（西から） …… 82
(2) 20号墓（西から） …… 82
図 版 51 (1) 21号墓上部（西から） …… 82
(2) 21号墓（南から） …… 82
図 版 52 (1) 22号墓上部（西から） …… 85
(2) 22号墓（東から） …… 85
図 版 53 (1) 33号墓（東から） …… 89
(2) 34号墓（東から） …… 89
図 版 54 (1) 39号墓（西から） …… 90
(2) 41号墓（北から） …… 93
図 版 55 (1) 45・46号墓（南から） …… 94
(2) 48号墓（西から） …… 94
図 版 56 (1) 49・51号墓（北から） …… 97

(2) 53号墓（東から） …… 100
図 版 57 (1) 55号墓（西から） …… 100
(2) 55号墓副葬品出土状況 …… 100
(3) 出土数珠玉 …… 101
図 版 58 (1) 57号墓（東から） …… 101
(2) 58号墓（東から） …… 103
図 版 59 (1) 59号墓（西から） …… 103
(2) 60号墓（東から）と出土数珠玉 …… 103
図 版 60 (1) 62号墓（西から） …… 105
(2) 63号墓（北西から） …… 105
図 版 61 (1) 64号墓（西から） …… 107
(2) 66号墓（西から） …… 108
図 版 62 (1) 68号墓（南から） …… 109
(2) 77号墓（東から） …… 113
図 版 63 (1) 75号墓（東から） …… 111
(2) 副葬品出土状況と数珠玉 …… 112
図 版 64 近世墓出土土器 …… 79
図 版 65 (1) 3・19号墓出土鉄釘 …… 82
(2) 15・37・45号墓出土鉄釘 …… 94
図 版 66 (1) 46号墓出土鉄器1 …… 94
(2) 46号墓出土鉄器2 …… 94
図 版 67 (1) 49・59号墓出土鉄釘 …… 103
(2) 13・46・48・53・66号墓出土鉄器 …… 108
図 版 68 (1) 12号土壙（南から） …… 118
(2) 12号土壙（1・2）および採集古銭 …… 118

挿　図　目　次

第　1　図　九州横断自動車道路線図 …… 2
第　2　図　建設中の九州横断自動車道（甘木市方向） …… 4
第　3　図　周辺遺跡分布図(1/50,000) …… 折り込み
第　4　図　北方に城山を望む …… 6

〔宮巡遺跡〕

第　5　図　宮巡遺跡地形図（1/2,000 ） …… 7
第　6　図　A－A’土層断面図（1/60） …… 8
第　7　図　宮巡遺跡遺構配置図（1/300） …… 折り込み
第　8　図　道路状遺構断面図（1/60） …… 9
第　9　図　1号溝土層断面図（1/30） …… 10
第　10　図　2号溝土層断面図（1/30） …… 11
第　11　図　1・6号溝出土土器実測図（1/3） …… 11
第　12　図　1・3号溝出土鉄器実測図（1/2） …… 11
第　13　図　4・5号溝断面図（1/30） …… 11
第　14　図　1・2号土壙実測図（1/30） …… 12
第　15　図　3号土壙実測図（1/30） …… 13

〔春園遺跡〕

第　16　図　安政四年銘の墓石 …… 15
第　17　図　石鏃実測図（1/2） …… 15
第　18　図　春園遺跡地形図（1/2,000） …… 16
第　19　図　先土器時代調査区（1/800） …… 17
第　20　図　土層断面図（1/40） …… 18
第　21　図　遺物出土分布図1（1/200・1/4） …… 19
第　22　図　遺物出土分布図2（1/200・1/4） …… 20
第　23　図　出土石器実測図1（1/2） …… 22
第　24　図　出土石器実測図2（1/2） …… 23

第 25 図　出土石器実測図3（1/3）…… 24
第 26 図　出土石器実測図4（1/2）…… 26
第 27 図　出土石器実測図5（1/2）…… 28
第 28 図　春園遺跡・遺構配置図（1/600）…… 折り込み
第 29 図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 29
第 30 図　1号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 30
第 31 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）…… 31
第 32 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3・1/6）…… 32
第 33 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図3（1/6）…… 33
第 34 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図4（1/6）…… 33
第 35 図　不明土製品実測図（1/2）…… 34
第 36 図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 36
第 37 図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 37
第 38 図　1号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 38
第 39 図　出土土器実測図（1/3）…… 39
第 40 図　2号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 39
第 41 図　3号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 40
第 42 図　4号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 41
第 43 図　5号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 42
第 44 図　2・5号掘立柱建物跡，4号土壙出土土錘実測図（1/2）…… 43
第 45 図　6号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 44
第 46 図　1～3・5・7号土壙実測図（1/30）…… 45
第 47 図　4号土壙実測図（1/20・1/40・1/6）…… 46
第 48 図　4号土壙出土土器実測図1（1/3）…… 47
第 49 図　4号土壙出土土器実測図2（1/3）…… 48
第 50 図　7号土壙出土鉄鏃実測図（1/2）…… 50
第 51 図　5・7・8・10・11・13号土壙出土土器実測図（1/3）…… 50
第 52 図　8～10号土壙実測図（1/60）…… 51
第 53 図　11・12号土壙実測図（1/30）…… 52
第 54 図　13～15号土壙実測図（1/30）…… 53
第 55 図　16号土壙実測図（1/60）…… 54
第 56 図　17～19号土壙実測図（1/30）…… 55
第 57 図　17号土壙出土土器実測図1（1/3）…… 56

第 58 図　17号土壙出土土器実測図2（1/6）…… 57
第 59 図　18号土壙出土土器実測図（1/3）…… 58
第 60 図　1・5号ピット実測図（1/30）…… 59
第 61 図　2号ピット実測図（1/30）…… 60
第 62 図　3・4号ピット実測図（1/30）…… 61
第 63 図　6号ピット実測図（1/30）…… 62
第 64 図　A区南壁土層断面図（1/60）…… 63
第 65 図　1～10号溝土層断面図（1/30）…… 64
第 66 図　1号溝出土鉄器実測図（1/2）…… 65
第 67 図　3・6号溝出土土器実測図（1/3）…… 65
第 68 図　9号溝出土土器実測図（1/3）…… 67
第 69 図　採集遺物実測図（1/3）…… 68
第 70 図　7・8号溝 …… 68
第 71 図　近世墓遺構配置図（1/800）…… 69
第 72 図　1～3号墓実測図（1/30）…… 70
第 73 図　3・19号墓出土鉄釘実測図（1/2）…… 71
第 74 図　4・5号墓実測図（1/30）…… 72
第 75 図　6～9号墓実測図（1/30）…… 74
第 76 図　近世墓出土土器実測図（1/3）…… 75
第 77 図　10～12号墓実測図（1/30）…… 77
第 78 図　13～15号墓実測図（1/30）…… 78
第 79 図　16・17号墓実測図（1/30）…… 80
第 80 図　18～20号墓実測図（1/30）…… 折り込み
第 81 図　21・22・26号墓実測図（1/30）…… 83
第 82 図　23～25・27・28号墓実測図（1/30）…… 84
第 83 図　29～33号墓実測図（1/30）…… 87
第 84 図　34～39号墓実測図（1/30）…… 88
第 85 図　40～43号墓実測図（1/30）…… 91
第 86 図　44・47・48号墓実測図（1/30）…… 92
第 87 図　45・46号墓実測図（1/30）…… 95
第 88 図　46号墓出土鉄器実測図（1/2）…… 96
第 89 図　49・51・52号墓実測図（1/30）…… 98
第 90 図　50・53～56号墓実測図（1/30）…… 99

第 91 図　55号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）…… 100
第 92 図　57～59・62号墓実測図（1/30）…… 102
第 93 図　60号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）…… 103
第 94 図　6号土壙，60・61・63～65号墓実測図（1/30）…… 104
第 95 図　55・60・75号墓出土数珠玉実測図（1/1）…… 105
第 96 図　66・67・69・72号墓実測図（1/30）…… 107
第 97 図　近世墓出土鉄器実測図（1/2）…… 108
第 98 図　68・70・71・73～75号墓実測図（1/30）…… 110
第 99 図　75号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）…… 111
第 100 図　76～79号墓実測図（1/30）…… 114
第 101 図　15・37・45・49・59号墓出土鉄釘実測図（1/2）…… 118
第 102 図　12号土壙（1・2），採集銭貨実測図（1/2）…… 118
第 103 図　十三塚遺跡周辺地形図（1/2,000）…… 123
第 104 図　竪穴住居跡実測図（1/60）…… 124
第 105 図　出土土器実測図（1/3）…… 124

表　目　次

表 1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表 …… 折り込み
表 2　出土石器一覧表 …… 21
表 3　55号墓出土数珠玉計測表 …… 101
表 4　60号墓出土数珠玉計測表 …… 106
表 5　75号墓出土数珠玉計測表 …… 112
表 6　近世墓一覧表 …… 115～117
表 7　土壙一覧表 …… 119

I　調査の経過

九州横断自動車道は、佐賀県鳥栖市の鳥栖ジャンクションで九州縦貫自動車道に接続する。福岡県は小郡市・三井郡大刀洗町・甘木市・朝倉郡朝倉町・同杷木町を通過し、大分県日田市に至る。この建設に係る埋蔵文化財の発掘調査は昭和54年度に始まり、平成2年度の12ヶ年に及び、調査面積は529,188㎡に達する。平成3年度以降は調査箇所の報告書作成にあたっており、平成4年度は25集（鞍掛遺跡・前田遺跡・西の迫遺跡）、26集（宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡）、27集（上の原遺跡）の3冊を公刊した。報告書の作成にあたっては、福岡県文化課甘木事務所ならびに太宰府事務所、九州歴史資料館において整理作業を実施した。

本報告書には、三井郡大刀洗町に所在する宮巡・春園・十三塚の3遺跡を報告する。

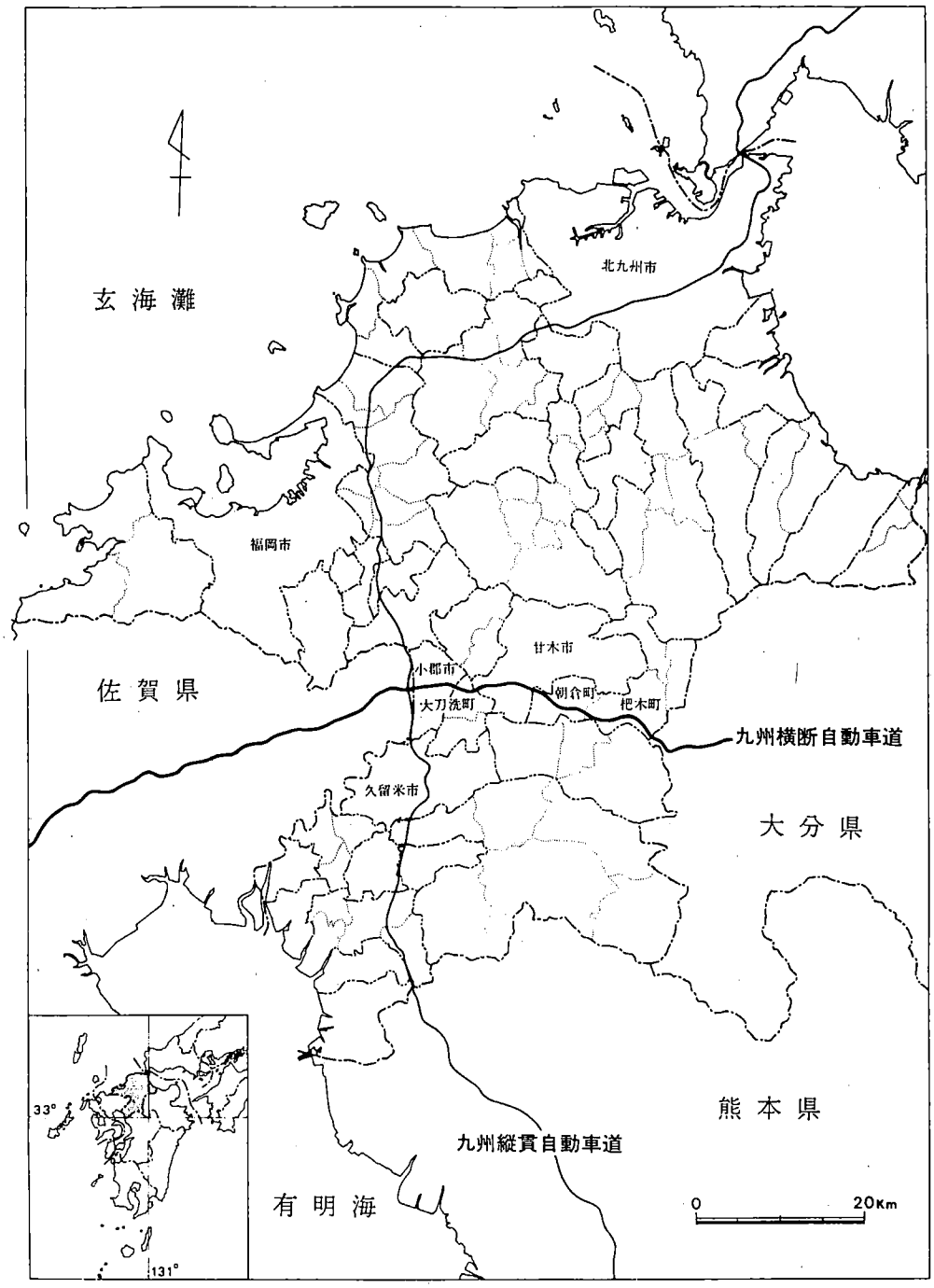
宮巡遺跡は昭和59年2月20日から60年3月31日まで3,600㎡を調査した。路線内をほぼ東西方向に縦断する道路状遺構の他、溝・土壙・柱穴を検出したが、遺物の量は少量であり、短期間で調査を終了した。

春園遺跡は、昭和59年3月24日から7月14日まで6,800㎡を調査した。遺跡は宮巡遺跡に隣接する東側台地上に立地する。数多くの近世墓は比較的遺存状態が良好で、棺に打ちつけられた釘や玉類の出土を見ている。古墳時代から中世にいたる竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝等の集落関係の遺構も検出され、下層からはナイフ形石器・角錐状石器を伴なう先土器時代の包含層が確認され、2ヶ所の地点を調査している。

十三塚遺跡は昭和56年4月13日から4月30日まで700㎡を調査した。調査区内の一部から古墳時代の竪穴住居跡1軒のほかは新しい溝・柱穴を検出したのみである。調査は石山勲・馬田弘稔が担当した。

調査関係者は下記のとおりである。

	昭和58年度	昭和59年度
日本道路公団福岡建設局		
局　長	今村　浩三	今村　浩三
総務部長	落合　一彦	菱刈　庄二
管理課長	梅田　道人	森　宏之
管理課長代理	野口　利夫	野口　利夫
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所		
所　長	乗松　紀三	乗松　紀三
副所長	西田　功	西田　功
副所長（技術）	中村　義治	中村　義治



第 1 図 九州横断自動車道路線図

表 1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査年度と面積												備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落・歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市委託完了	15集
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000						小郡市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700						完了	10集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500	7,300	10,100						完了	13集・16集
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし完了	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路状遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・古墳・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃　甲条本郷	古墳集落	34,400			700		300								完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落・墓地	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000							完了	2・5・8 14・17集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			8,100										遺構なし完了	
13	〃　東条理	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600											完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200												完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	A.B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400									完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	
17	口ノ坪遺跡	〃　牛鶴	近世・積石	100						100							完了	
18		〃　〃	散布地	2,550					300								遺構なし完了	
19-A	塔の上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200							完了	9集
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落・奈良墓地	20,000							8,400						完了	
19-C/D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100						完了	
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400						完了	
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落・中世	46,900							8,400						完了	
21-B	経塚遺跡	〃　〃	散布地					800	600		2,300						完了	
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地・奈良集落								9,650						完了	
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地、古墳集落								12,300						完了	18・27集
22-A/B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800							完了	
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落・墓地	5,000							3,420						完了	
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落・古墳	2,600						2,600							完了	
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地、歳田廃寺	5,400						1,050	6,650						完了	
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400						完了	
26		〃　須川	散布地	1,600				70									遺構なし完了	
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500	16,000				完了	
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458								完了	
29-A	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600				5,240	2,100			完了	
29-B	妙見古墳群	〃　〃	古墳方形周溝墓										4,660				完了	
30	鎌塚遺跡	〃　菱野・山田	縄文、弥生・集落	4,000									6,550				完了	22集
31	山の神遺跡	〃　山田	縄文、古墳	2,000									1,980				完了	22集
32		〃　〃	散布地	2,400				300									遺構なし完了	
33	長田遺跡	〃　〃	縄文、弥生・古墳集落	2,000									5,500	2,000			完了	
34	金場遺跡	〃　〃	縄文、古墳	3,600									680	15,400			完了	
35-A	上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生、散布地	2,600									880	2,900			完了	20集
35-B	恵蘇山遺跡	〃　〃	古墳集落										2,400				完了	20集
36	稗畑遺跡	〃　〃	古墳散布地	2,000									3,980				完了	20集
37	大迫遺跡	〃　〃	奈良・平安、火葬墓・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集
38	外之隈遺跡	〃　〃	弥生・中世、箱式石棺	125									5,150	12,600		1,200	完了	
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳、中世散布地	22,000							320	3,400					完了	21集
39-B/C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃									11,000					完了	21集
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700					完了	
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400					完了	
42	江栗遺跡	〃　〃	中世一字一石経	8,000							300	9,700					完了	
43	大谷遺跡	〃　若市	古墳群	12,000								500	7,560				完了	
44		〃　久喜宮	散布地	1,800									150				遺構なし完了	
45	笹隈遺跡	〃　〃	〃	2,400								400	3,710				完了	
46	夕月・天園遺跡	〃　古賀	〃	1,800								300	2,210	225			完了	
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200					完了	
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文・弥生・中世集落、墓地	1,800								6,800					完了	
49		〃　林田	散布地	3,200								150					遺構なし完了	
50		〃　〃	〃	2,400								200					遺構なし完了	
51	楠田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500					完了	
52-A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1,000	1,250				完了	
52-B	二十谷遺跡	〃　〃	〃										1,550				完了	
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700					完了	
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生、中世	1,800								2,700					完了	
55		〃　〃	散布地	1,600								100					遺構なし完了	
56		〃　〃	〃	2,400								800					遺構なし完了	
57	柿原遺跡	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場完了	4・6・12 19集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	〃	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710						土取場完了	23集
杷木インターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落									6,450					完了	25集
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600					完了	25集
杷木インターC	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落	100,000								1,270	1,270				完了	25集
杷木インターD	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180				完了	
〃		〃　〃	古墳										2,400	4,000			完了	
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	80,340	82,710	49,125	700	1,200		

庶務課長	松下　幸男	松下　幸男
用地課長	岩下　　剛	岩下　　剛
工務課長	山口　宗雄	山口　宗雄
小郡工事区工事長	友田　義則	友田　義則

福岡県教育委員会	昭和58年度	昭和59年度
教 育 長	友野　　隆	友野　　隆
教育次長	安部　　徹	安部　　徹
管理部長	伊藤　博之	伊藤　博之
文化課長	藤井　　功	前田　栄一
文化課長補佐	中村　一世	中村　一世
庶務係長	松尾　　満	松尾　　満
事務主査	長谷川伸弘	長谷川伸弘
調査第二係長	栗原　和彦	栗原　和彦
主任技師	木下　　修	木下　　修（調査担当）
	新原　正典	新原　正典
	児玉　真一	児玉　真一
	中間　研志	中間　研志
	小池　史哲	小池　史哲
技　　師	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋（調査担当）
文化財専門員	木村幾多郎	
臨時職員	日高　正幸	
調査補助員	平島　文博（現　三輪町教育委員会）	
	向田　雅彦（現　佐賀県鳥栖市教育委員会）	
	小田　和利（現　九州歴史資料館）	
	田中　康信（現　瀬高町教育委員会）	

発掘作業には次の方々が参加した。

下村　精一・高山　浩一・古賀　　勇・安丸ミノリ・藤井カツエ・棚町トキヨ・棚町タツ子
矢ヶ部スマ子・古賀チドリ・棚町スマエ・日比生スギエ・柳シズカ・今村テル子・堀江ミチエ
池松テル子・黒岩ナルミ・佐藤ムミカ・棚町マサ子・中島トミ子・中村タエ子・飯田スミカ
高木キトシ・安丸ユタカ・人見シズカ・安丸シノブ・堀内マサオ・棚町　ソノ・安丸ハル子
下村よし子・佐田キミカ・斉田ミチ子

その他、大刀洗町教育委員会、地元山隈区、鬼木和憲氏には種々御助力をいただいた。記して謝意を表します。

報告書作成に係る平成４年度の関係者は下記の通りである。

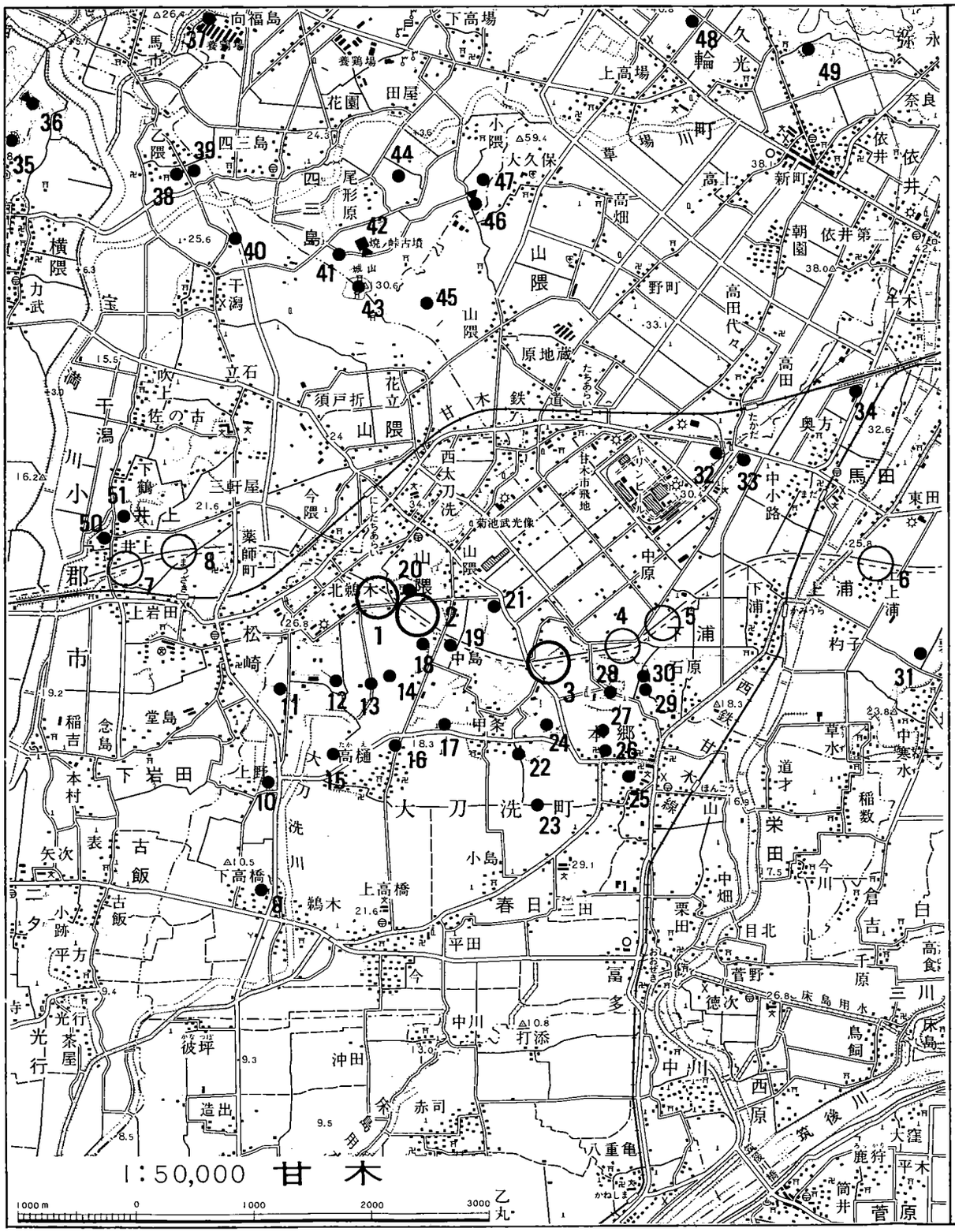
日本道路公団福岡建設局

	局　　長	加藤　興史	中島　英治（前任）
	次　　長	渡辺　国几	高野　　武（前任）
	総務部長	三重野堅二	岡本　房徳（前任）
	管理課長	九津見朝信	江良　信弘（前任）
	管理課長代理	塚本　文康	

福岡県教育委員会

総　括	教 育 長	光安　常喜
	教育次長	月森清三郎
	文化課長	森山　良一
	同文化財保護室長	柳田　康雄
	同　室長補佐	井上　裕弘
庶　務	文化課管理係長	毛屋　　信
	主任主事	安丸　重喜
整　理	北九州教育事務所参事補佐	木下　　修
	北筑後教育事務所技術主査	馬田　弘稔
	南筑後教育事務所技術主査	伊崎　俊秋
	三輪町教育委員会	平島　文博

第　2　図　建設中の九州横断自動車道（甘木市方向）



1．宮巡遺跡
2．春園遺跡
3．十三塚遺跡
4．立野遺跡
5．宮原遺跡
6．上上浦遺跡
7．井上薬師堂遺跡
8．高松家墓地
9．高橋城跡
10．砂取遺跡
11．二塚西遺跡
12．木の間遺跡
13．二塚東遺跡
14．馬ケ田遺跡
15．八田遺跡
16．辻遺跡
17．又原遺跡
18．十ケ渕遺跡
19．中西又原遺跡
20．山隈城跡
21．山隈遺跡
22．甲条神社遺跡
23．畑築地遺跡
24．屋敷付古墳群
25．三原城跡
26．町浦遺跡
27．西森田遺跡
28．辰口遺跡
29．温泉遺跡
30．向八坂遺跡
31．平塚川添遺跡
32．馬田上原遺跡
33．馬田ひばりケ丘遺跡
34．上川原遺跡
35．横隈鍋倉遺跡
36．三国の鼻古墳
37．向福島遺跡
38．乙隈天満宮遺跡
39．乙隈東畑遺跡
40．干潟遺跡
41．松尾古墳群
42．焼ノ峠古墳
43．花立山城跡
44．金山遺跡
45．山隈窯跡
46．小隈古墳
47．小隈窯跡
48．栗田経田遺跡
49．仙道古墳
50．井上廃寺
51．井上北内原遺跡

第 3 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

Ⅱ 位置と環境

宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡は、いずれも三井郡大刀洗町に所在する。九州横断自動車道は大刀洗町北部の北鵜木・山隈・本郷間約2.5kmを通過する。その大部分が沖積地で、試掘の結果、上記の3ヶ所のみに遺跡が確認された。

西流して有明海に注ぐ筑後川に、北方の筑紫野市・夜須町・甘木市の山塊より、宝満川・大刀洗川・小石原川が支流を伴なって久留米市・北野町で合流する。遺跡はそれら河川が作りだす沖積平野（両筑平野）の中央部付近に所在する。この沖積平野の中央には独立丘である城山（標高130m）があり、周辺には、国指定史跡である焼の峠古墳（前方後方墳）や初期須恵器の窯跡である小隈窯跡・山隈窯跡、採集資料ではあるが三稜尖頭器・ナイフ形石器を出土した金山遺跡（註1）等がある。

宝満川・大刀洗川・小石原川が形成する段丘上には数多くの遺跡が知られる。先土器時代から縄文時代の遺跡では、尖頭器を出土した三国小学校遺跡、今回報告する春園遺跡、曽畑式土器を出土した金山遺跡がある。弥生時代の遺跡では横隈鍋倉遺跡、干潟遺跡、井上薬師道遺跡や大刀洗町の二塚東遺跡・砂取遺跡・辰口遺跡・甲条神社遺跡で土器の散布や甕棺の出土が報告（註2）されている。古墳時代では三国の鼻古墳・松尾古墳群のほか、馬ヶ田遺跡・木の間遺跡屋敷付古墳群が、奈良時代以降では、山田寺系の瓦を出す井上廃寺や、大集落である干潟遺跡が知られる。近世では、宝暦年間の百姓一揆に係る高松八郎兵衛一門の高松家の墓所が調査され、日本道路公団の協力により隣接地に移転、整備事業を実施している（註3）。

しかし、近年の九州横断道路関係ならびに大刀洗町の圃場整備事業に係る発掘調査（註4）の結果、これら河川の段丘以外の沖積地ないし氾濫原とされた箇所においても遺跡の存在が知られてきた。大刀洗町向八坂遺跡では弥生時代中期の貯蔵穴、古墳時代後期の竪穴住居跡が、温水遺跡では、弥生後期の竪穴住居跡、中世の建物跡が、西森田遺跡ではやはり中世の掘立柱建物跡、町浦遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓、後期の竪穴住居跡、奈良時代の建物跡が調査されている。また、甘木市立野・宮原遺跡においては数百におよぶ奈良時代以降の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出された。昨年から調査を継続し、6重の環濠と300軒以上の弥生時代中期から古墳時代初頭の集落遺跡である平塚川添遺跡も、低地を上手く利用した遺跡である。それらを考慮すると現在ほとんど遺跡が確認されていない筑後川右岸についても注意が必要となろう。

なお、当地域における歴史的環境については、九州横断道7・16集（註5）などに詳しいので参照されたい。

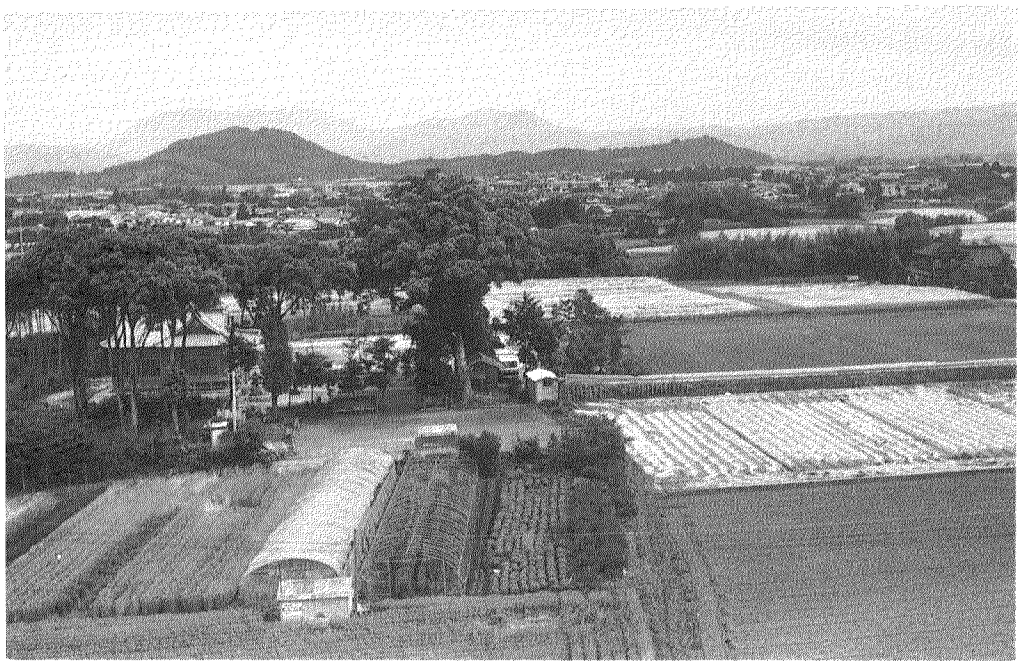
註１　夜須町教育委員会「金山遺跡」 夜須町文化財調査報告書第４集 1981

註２　福岡県教育委員会「福岡県遺跡等分布地図（久留米市・小郡市・三井郡編）」 1979

註３　福岡県教育委員会「小郡市所在高松家墓地の調査」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告16 1990

註４　大刀洗町教育委員会「大刀洗町内遺跡群発掘調査概報－平成３年度－」 1992

註５　福岡県教育委員会「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告７・16」 1986・1990



第 4 図　北方に城山をのぞむ

宮巡遺跡

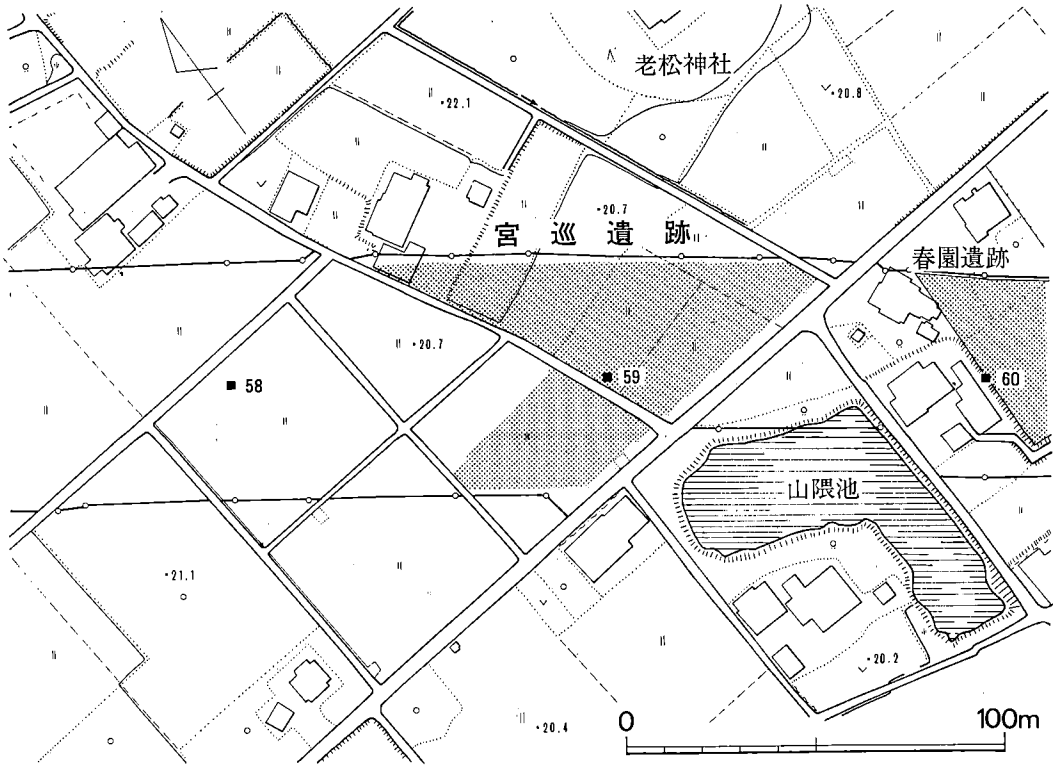
Ⅲ 宮巡遺跡

1. 調査の概要

宮巡(みやめぐり)遺跡は三井郡大刀洗町大字山隈字宮巡に所在する。筑後川の支流である大刀洗川は、山隈の本村西方、宮巡橋の上流60mの所で分岐する。遺跡はその本流と支流とに囲まれた水田地帯の中にある。

遺跡の標高は20.7mを測り、すぐ南東側に山隈池、西側70mには前述した大刀洗川の支流が南流する。周辺の水田面との比高ではこの地区が最も低い。東側には先土器時代・古墳時代から近世墓を検出した春園遺跡が隣接するが、西側では小郡市に接する県道鳥栖甘木線間には試掘の結果、遺跡は確認されていない。

調査は表土下40～50cmの淡赤褐色土（第6図25層）まで重機にて除去し、全面調査を実施した。



第 5 図 宮巡遺跡地形図（1/2,000）

第６図は調査東端の土層堆積状態である。道路状遺構の側溝である１・２号溝と３号溝が断面図に現われている。

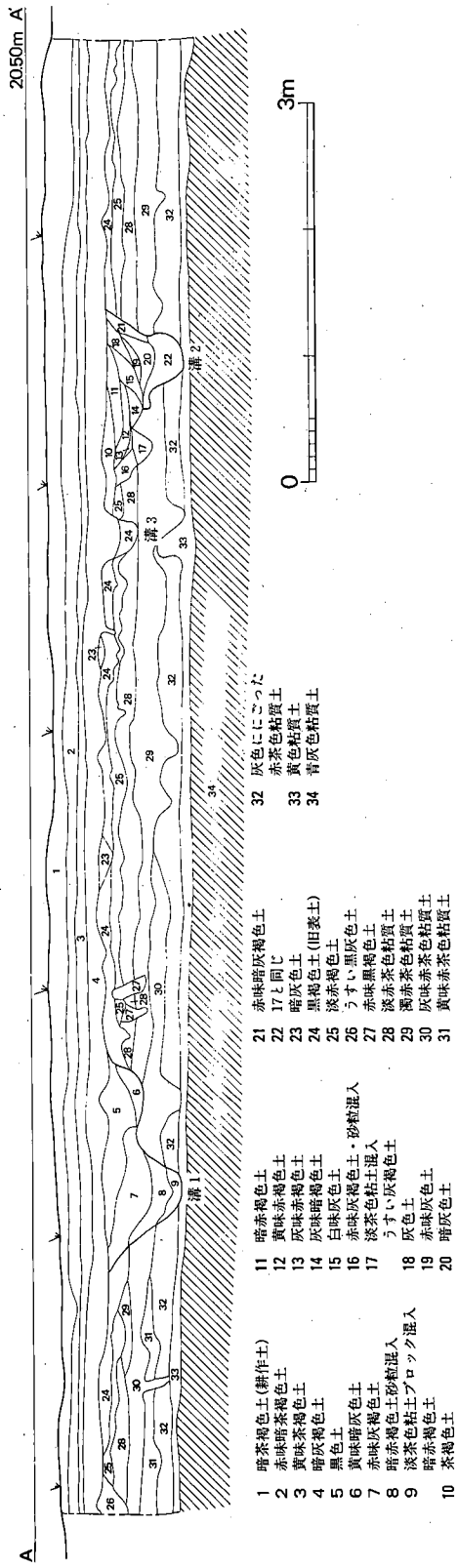
基本的な土層の堆積状態は表土層が標高20.3mにあり、水田の耕作土が20cm、次いで水田床土である第２層赤味暗茶褐色土（層厚5～10cm）、第3層は黄味茶褐色土（層厚5cm）でこれも床土と思われる。第４層は暗灰褐色土（層厚５～15cm）で、その下に旧表土層である第24層の黒褐色土（層厚8～12cm）が堆積し、道路状遺構はこの黒褐色土を切り込んでいる。以下、第25層の淡赤褐色土(層厚3～10cm)、第28層淡赤茶色粘質土（層厚８～18cm）、第29層濁赤茶色粘質土（層厚10～30cm）、第32層灰色に濁る赤茶色粘質土（層厚12～20cm）、第33層黄色粘質土（層厚7cm）、そして第34層青灰色粘質土に達する。表土から青灰色粘質土まで約1.2mあり、標高は19.25m前後である。なお、道路状遺構の側溝は第33層の黄色粘質土まで掘り込まれる。

土層の堆積状態は整合である。第28層以下、29・32・33層の基本は粘質土であり、その下に青灰色粘土層が現われる。隣接した段丘上の春園遺跡の土層図（第20図）を見ると、第６層以下に砂礫層、シルト層・礫層があり、大刀洗川に洗われていた事が判っている。その後に５層以上の粘質土の堆積を見るが、宮巡遺跡の青灰色粘質土はその段階に澱みとして残された堆積物であろう。

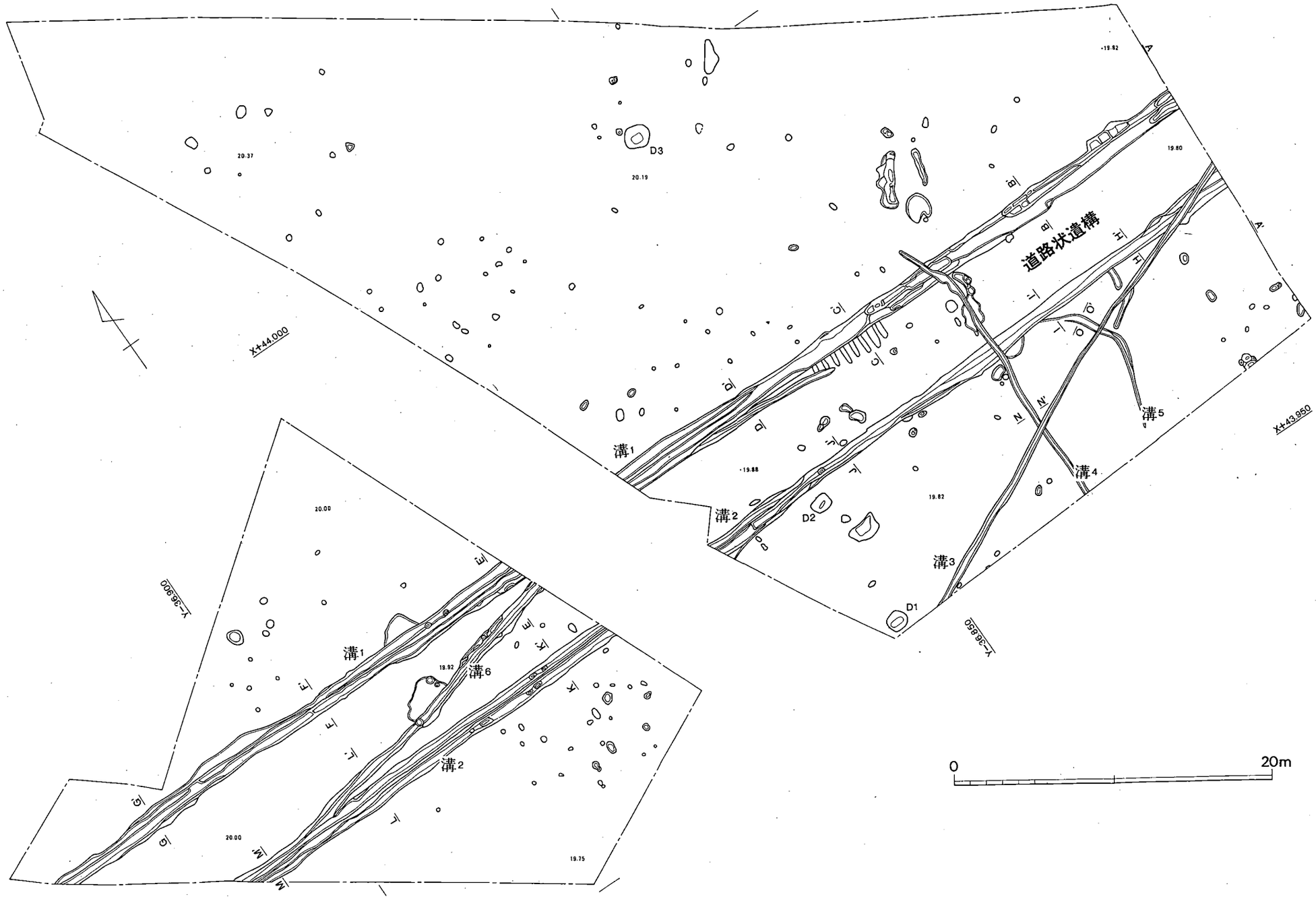
2. 遺構と遺物

検出された遺構は、調査区を東西に走る道路状遺構とそれを切る溝状遺構４条、土壙３基と柱穴群である。出土遺物は極めて少量で、各遺構の時期決定が難かしい。

（木下）



第 6 図 A－A′土層断面図（1/60）



第 7 図　宮巡遺跡遺構配置図 (1/300)

(1)　道路状遺構（図板2～6, 第7～10図）

調査区南側で、均衡な間隔をとり略東西方向N－89°30′－Eに85m走る2条の溝（1・2号溝）がある。これらの間隔は東から西へやや広がり4.5～6mを測る。溝は、表土から40～50cmほどの深さにある黒褐色土（旧地表土）から穿たれている。路面にあたる部分については、道路構築の際、基礎工事としての版築等の痕跡はみられない。しかし、調査区東壁の土層観察（第6図）により、この2条の溝の間の旧地表土の不陸が著しく、約1m間隔の凹みが観察できる。これは荷車の「ワダチ」の跡と考えられる。

それぞれの溝の状況は、1号溝については、溝が連綿と営まれる間に幾度かの改修が施され、調査区西側の東端部では2条に分かれ、南側が後世に穿たれ、西流にかけ再び1条となる。流れの方向は、溝底部の標高から中央が浅く、東西に若干深くなり明確にできない。けれども周辺地形から勘案して西流し、大刀洗川支流に流下するものであろう。規模は、深さが30～60cm、幅90～120cmを測る。

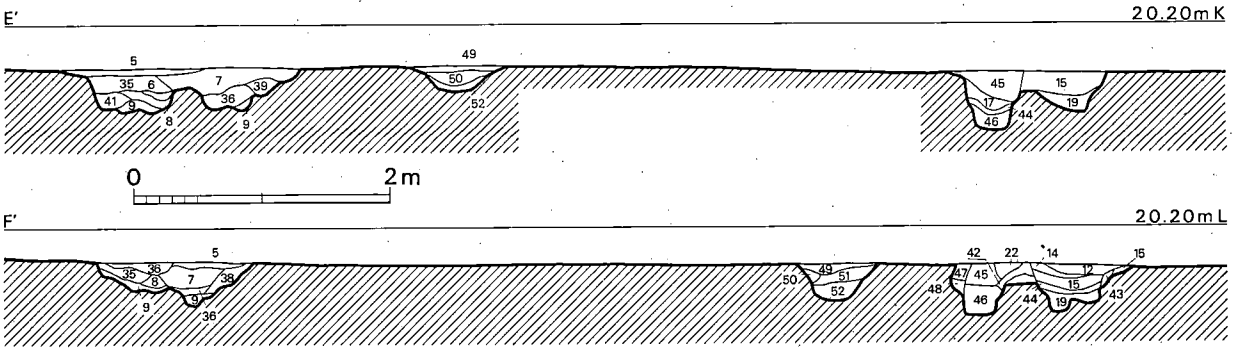
2号溝も調査区中央で2条に分かれ、西流につれ1条にもどる。流れの方向は、溝底部の標高により1号溝と同様に東から西へ流れることが知れる。規模は、深さ30～60cm、幅65～110cmを測る。

また、予断ではあるが、調査区東側の中央で1号溝を切っている数条の平行な溝がある。この溝の堆積土は暗茶褐色土で表土すなわち耕作土である。これは牛蒡などの深根作物収穫による痕跡と考える。

8～10図の土層名は、第7図調査区東側の土層名に準じ、および追加して命名している。

出土遺物（図版5, 第11図1・3, 第12図1）

土　器　1・3は1号溝が4号溝に切られる付近で、1は上層から、3は下層から出土した。1は



5　黒色土
6　黄味暗灰色土
7　赤味灰褐色土
8　暗赤褐色土砂粒混入
9　淡茶色粘土ブロック混入暗赤褐色土
12　黄味赤褐色土
14　灰味暗褐色土
15　白味灰色土
19　赤味灰色土
22　淡茶色粘質土混入うすい灰褐色土
35　灰味黒色粘質土
36　小砂混入灰褐色土
38　赤味灰褐色土＋黒褐色土
39　黄味灰色土
41　9＋砂多量に含
42　暗灰色粘質土
43　緑味暗灰色粘質土
44　白色砂粒混入黄味白色粘質土
45　黒褐色粘質土
46　砂粒混入黒色土
47　斑状灰黄色粘質土黒褐色粘質土
48　黄色粘質土混入黒褐色粘質土
49　緑味灰黒色土
50　黄灰色土
51　灰褐色土
52　灰味黄褐色土

第　8　図　道路状遺構断面図（1/60）

推定口径17cmで、色調は内外面ともに赤橙色を呈し、胎土に細砂粒を含む、焼成良好。外面天井部は回転ヘラ削り、内面はナデである。3は須恵器蓋の口縁部小破片である。器面はすべて回転ナデ調整で、色調は内外面ともに淡灰色を呈し、胎土・焼成ともに良。

鉄　器　鉄鋤先である。1号溝の西端下層より出土した。やや不均整なU字形を呈する。一端が折落し、また刃部が中央から肩にかけて丸みをおびている。使用による歯こぼれであろう。断面はY字状を呈し、柄を装着した痕跡はみられない。推定幅12cm、長さ11.5cmを測る。

(2)　溝

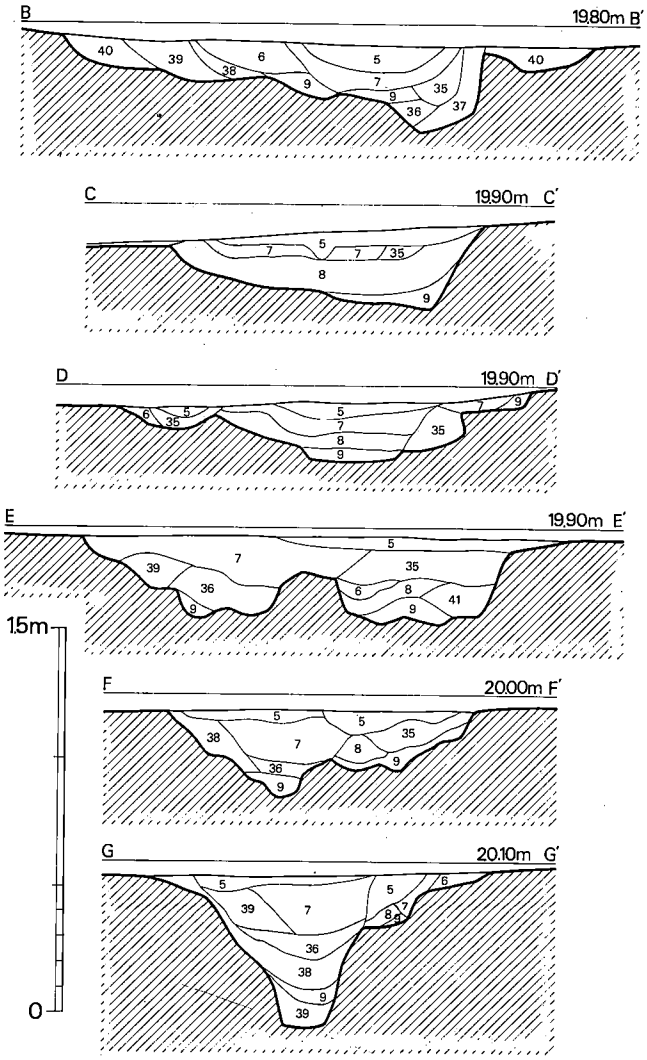
調査区内の溝状遺構は、1・2号溝以外に4条ある。その内3条は調査区の東側で1・2号溝を切っているが、6号溝は1・2号溝を結んでいる。

3号溝（図版4, 第7図）

南西部で北東から南西へ流れ、2・4・5号溝を切っている。断面形状は、円みをもつ逆台形を呈し、溝の深さは、5～10cm、幅20～55cmを測る小型のものである。溝底部には、旧表土である黒褐色土(24)が堆積している。

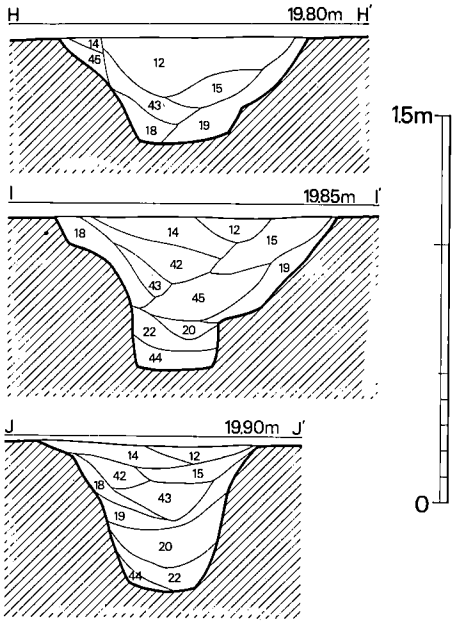
4号溝（第13図）

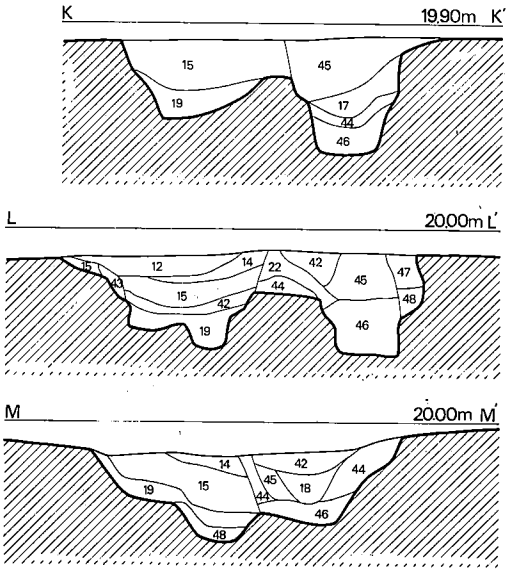
調査区南東部で北から南へ流れ、1・2号溝を切り、3号溝に



5　黒色土
6　黄味暗灰色土
7　赤味灰褐色土
8　暗赤褐色土砂粒混入
9　淡茶色粘土ブロック混入、暗赤褐色土
35　灰味黒色粘質土
36　小砂混入灰褐色土
37　斑状赤色粘土混入灰褐色土
38　赤味灰褐色土＋黒褐色土
39　黄味灰色土
40　赤色粘質土ブロック混入黒褐色土
41　9＋砂多量に含

第　9　図 1号溝土層断面図（1/30）





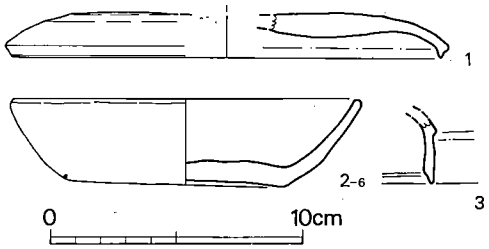
12 黄味赤褐色土
14 灰味暗褐色土
15 白味灰色土
18 灰色土
19 赤味灰色土
20 暗灰色土
22 淡茶色粘土混入うすい灰褐色土
42 暗灰色粘質土
43 緑味暗灰色粘質土
44 白色砂粒混入黄味白色粘質土
45 黒褐色粘質土
46 砂粒混入黒色土
47 斑状灰黄色粘質土、黒褐色粘質土
48 黄色粘質土混入黒褐色粘質土

第10図 2号溝土層断面図（1/30）

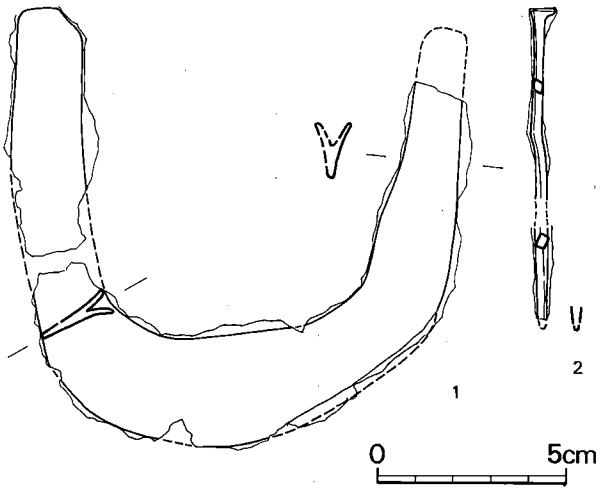
切られる。断面形状は逆台形を呈し、規模は、深さ3～10cm、幅20～40cmを測る。

5号溝（第13図）

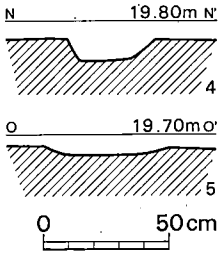
2号溝の南、4号溝の東側で東に弧を描く。その中ほどを3号溝に切られている。断面形状は、円みを帯びてやや凹む程度のもので、溝



第11図 1・6号溝出土土器実測図（1/3）



第12図 1・3号溝出土鉄器実測図（1/2）

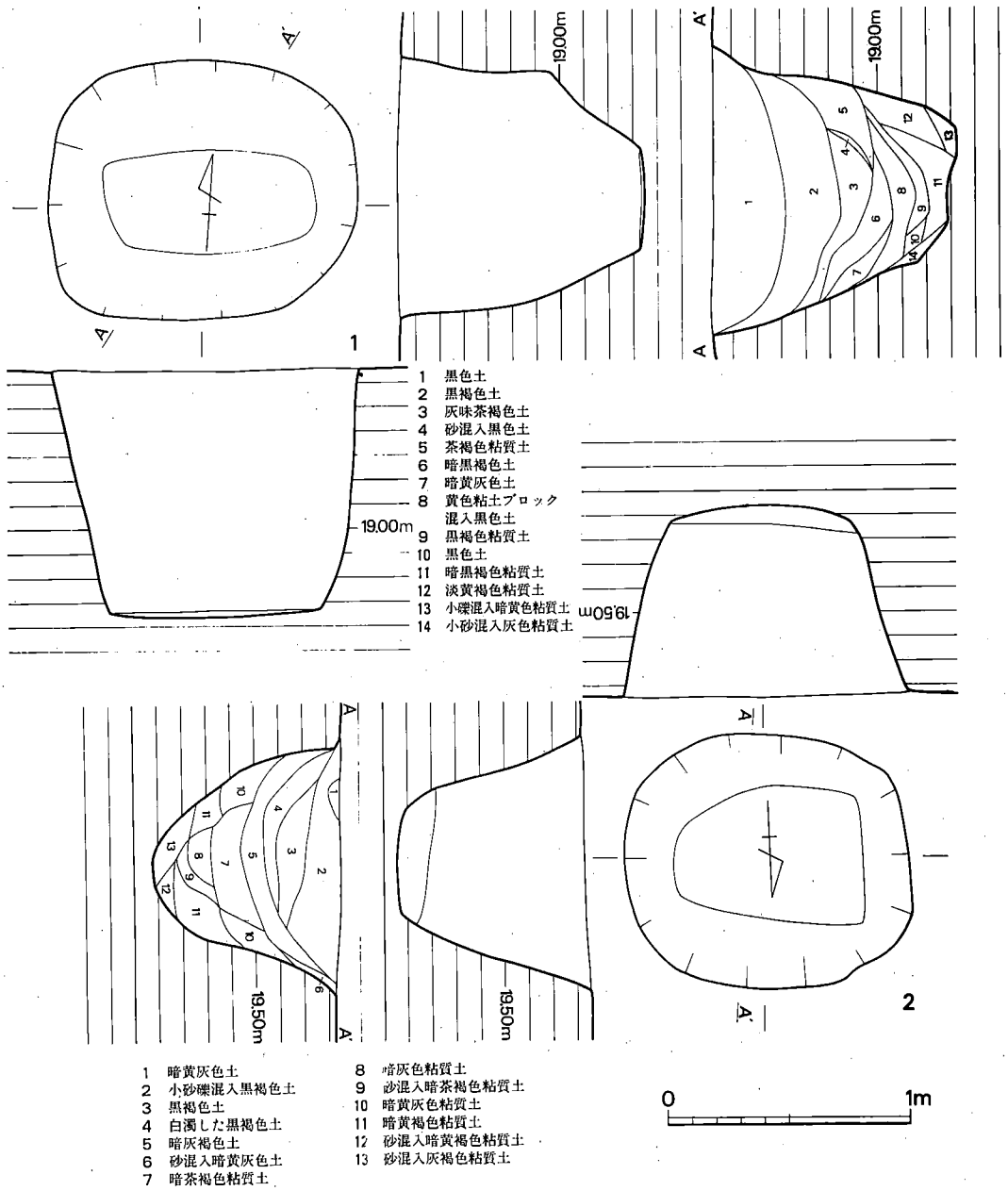


第13図 4・5号溝断面図（1/30）

の深さも3～10cmと浅く、幅は17～55cmほどで不規則である。

6号溝（第7図）

西調査区で1号溝と2号溝を結んで、北東から南西に走る。底部は均衡であり、流れの方向は



第 14 図　1・2号土壙実測図（1/30）

不明である。しかし、この溝が1号溝・2号溝に関係があるものであれば、それぞれの結接する部分では、1号溝が高く、2号溝が低くなっている。このことは、この溝が1号溝から2号溝への流れをもつことが窺える。

出土遺物（第11図2）

溝の中位層から出土した土師器杯である。口径13.6cm、底径8.6cm 、器高3.5cmを測る。底部外面糸切り、体部内外面横ナデ、底部内面ナデ調整が施される。色調はうす橙色を呈し、胎土良、焼成あまい。

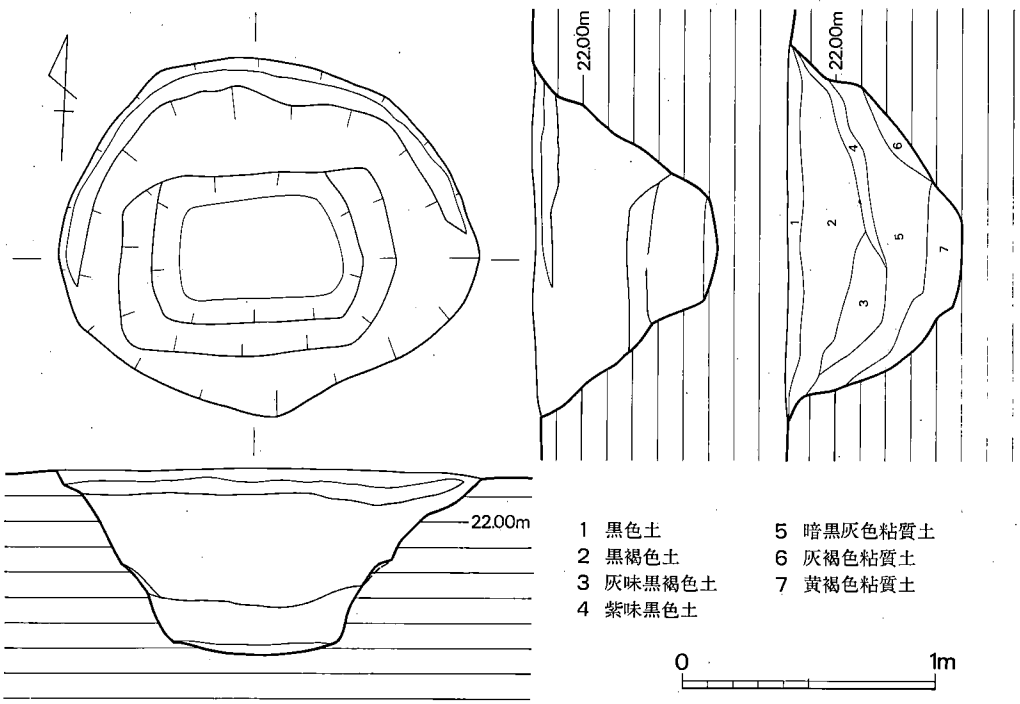
(3) 土　壙

この遺跡では、多数の壙や小ピットを検出した。しかし、出土遺物は無く、その多くは深度も浅く、相互に関連づけられるものでもなかった。この内以下の3基については、形状や構造も明瞭であった。

1号土壙（図版7, 第14図）

東側調査区の南端に位置し、長軸方位をN－85°30′－Eにとる。

土壙の法量および形状は、上縁長軸で127.5cm、短軸で107cmの楕円形を呈する。壙底面で



第 15 図 3号土壙実測図（1/30）

は、長軸87cm、短軸43cmを測り、長円形を呈する。深さ10cmを測る。一方、壙の断面形状は、北側壁が深さ60cmほどで外に張り出し、屈折して平坦な底部へとつながる。南側はゆるやかに外に弧を描きながら立ち上がる。出土遺物は皆無である。

2号土壙（図版8, 第14図）

1号土壙の北9mほどで、2号溝の南側に位置する。長軸方位をN－88°－Wにとる。

土壙の法量および形状は、上縁長軸で118cm、短軸106cmの歪円形を呈する。底面は長軸77.5cm、短軸56cmのいびつな台形を呈する。深さは79cmを測り、壙断面形状は、壁が急傾斜で、底面はレンズ状を呈する。また、任意の断面土層状況観察により、壙が穿たれ、使用により埋ったのちに、再度穿ったようすが窺えた。しかし、これは同一使用目的によるためのものか否かは不明である。出土遺物皆無。

3号土壙（図版9, 第15図）

東側調査区の中央で1号溝から17mほど北に位置する。長軸方位をN－87°－Eにとる。

壙の法量・形状は、上縁長軸166.5cm、短軸142cmで歪卵形を呈する。底面長軸65cm、短軸40cmの隅円長方形を呈し、断面ゆるく立上がり、上縁につながる底面はレンズ状を呈する。壁面は幾段かの稜をもち、底面付近では規格性を感じられるが、上縁は無作為に穿たれている。出土遺物皆無。

3. おわりに

宮巡遺跡では、平行に走る同等規模の2条の溝跡を「道路状遺構」とした。同様な遺構は、周辺で2例みられる。一つは、後述する春園遺跡（7・8号溝）で、もうひとつは小郡前伏遺跡(註1)である。宮巡遺跡と春園遺跡のものは併存するものではないが、ともに略東西方向に走り、「筑紫」と「豊」を結ぶ道と考えられる。一方、小郡前伏遺跡のものは、「西鉄大牟田線」に平行して南北に走り、春園遺跡、宮巡遺跡から西向して、この付近で交差し、大宰府へと繋がるものであろう。また、これらの時期については、宮巡遺跡の須恵器杯蓋は6世紀中頃であり、この時期に構築されたものとしては、余りにも規模が大きい事業であるように思われる。1号溝上層から出土した土師器杯蓋の時期は8世紀中頃と考えられ、小郡前伏遺跡と同じである。一方春園遺跡は土師の小破片が出土するのみで、時期を明確にできないが、おおむね8世紀頃の所産と考えられる。

また、土壙については、いずれも出土遺物が無く、時期が不明であるが、それぞれが無関係に存在するものではなく、相互に関連して機能するものであることが窺える。落し穴であろう。

（平島）

（註1）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告11」1987

春園遺跡

Ⅳ 春園遺跡

1. 調査の概要

春園（はるぞの）遺跡は大刀洗町大字山隈字春園に所在する。福岡県遺跡等分布地図（久留米市・小郡市・三井郡編）では弥生時代の甕棺の出土地650004として登録されている。

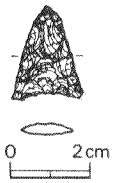
遺跡は大刀洗川右岸の河岸段丘上に立地する。町道を挟んで宮巡遺跡が西側に接するが、それより1.5～2mほど高く、旧状は水田・竹林ないし墓所であった。北側に隣接して残る墓石は仲家代々のものであり、最も古くは享保七（1722）年に溯り、宝暦・文化・安政・文久から明治・昭和と続く。調査で検出された79基の近世墓と関係するものもあるかと思われる。

調査区はA・B区と2ヶ所に分けた。A区は東側にあたり、標高17m前後の低位段丘面である。古墳時代の竪穴住居跡1軒・土壙1基・溝2条、平安時代の溝3条のほか土壙・溝・柱穴等が検出された。B区は最高所22.7mを測る中位段丘上にあり中央部南側は大きく削平され、水田化されている。近世墓79基によって破壊された部分も多いが、奈良時代の竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡6棟・土壙5基やそれ以降の土壙・溝等が検出された。また、遺構調査中に黒曜石や安山岩製剥片の出土を見たので発掘区を設定し、下層の調査を実施した結果、ナイフ形石器・角錐状石器等の良好な資料を得る事が出来た。なお、縄文時代の遺物として安山岩製石鏃が採集されている。

第 16 図 安政四年銘の墓石

石 鏃（第17図）

14号近世墓付近採集の安山岩製石鏃で完形品。凹基無茎式で両面に荒い調整を施す。長2.2cm、幅1.8cm、厚0.25cm。縄文時代の所産であろう。



第17図
石鏃実測図(1/2)

2. 先土器時代の遺構と遺物

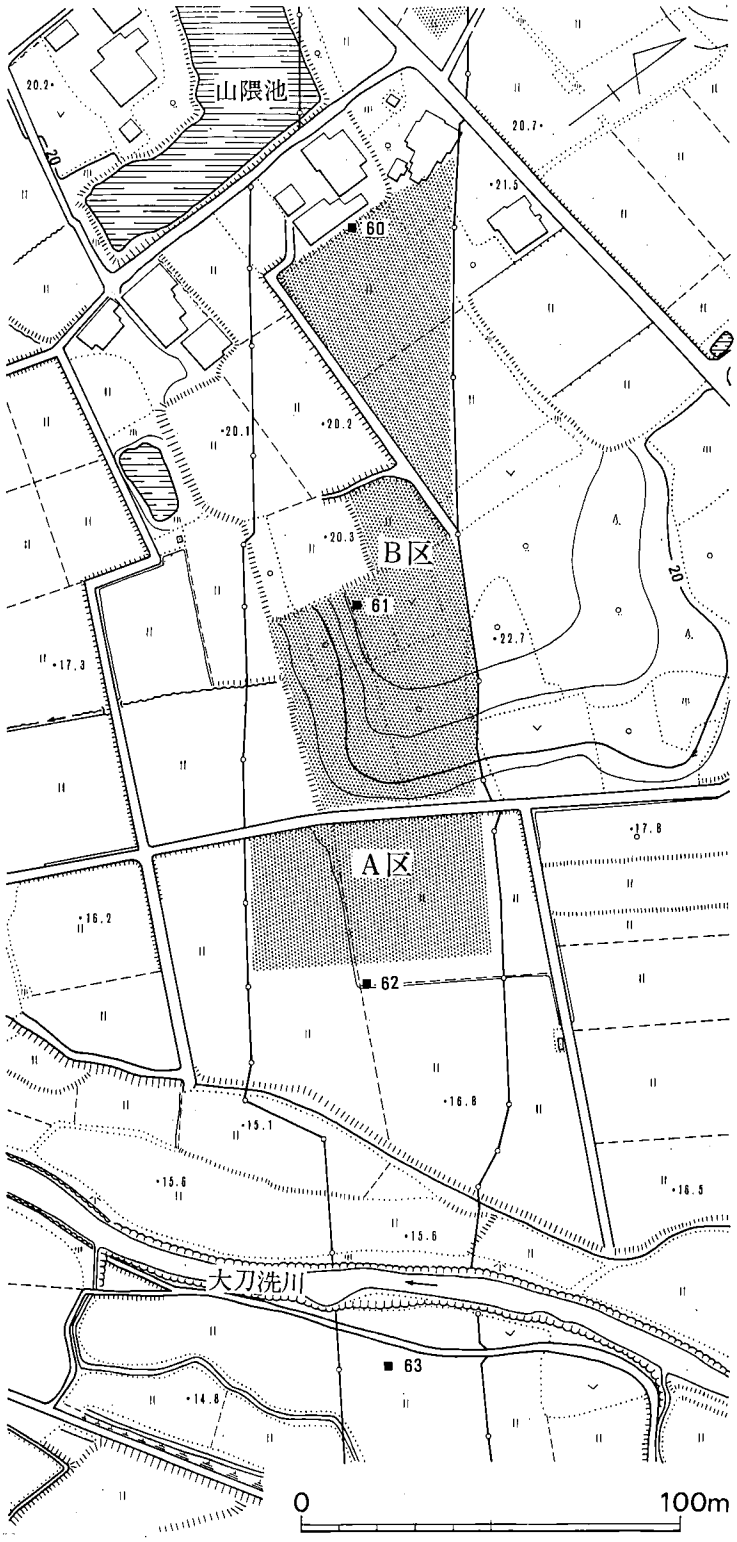
(1) 調査区の設定（第19図）

遺物の散布がみられたB区について、座標軸上に東西はアラビア数字、南北はアルファベットを付した4mグリッドを全域に設定した。そのうち、西側のC～Gの4～10グリッド、東側のK～O・15～24グリッド2箇所について全面調査を実施した。

(2) 層　　序（第20図）

遺跡の基本層序を調査区の中央削平部分、N16グリッド西側を3mほど掘り下げて作図した。

1a層は耕作土で層厚22cm。1b層は黒色土で20cm前後。2a層は暗茶褐色粘質土で10cm前後。この3枚の土層は既に重機にて除去されており、調査区の北端部で観察される（第20図K19）。しかし、3層との接面に若干遺存する部分もあり、剥片が若干出土している。2層は茶褐色土で粘質。層厚15～20cm。先土器時代の遺物は2a層の若干を除いて、すべてこの層中出土である。C6グリッド付近では30cmを超す層厚をもち、下の3層との接面は凹凸が著しい。また、下位になるとやや黄味を帯びる。3層



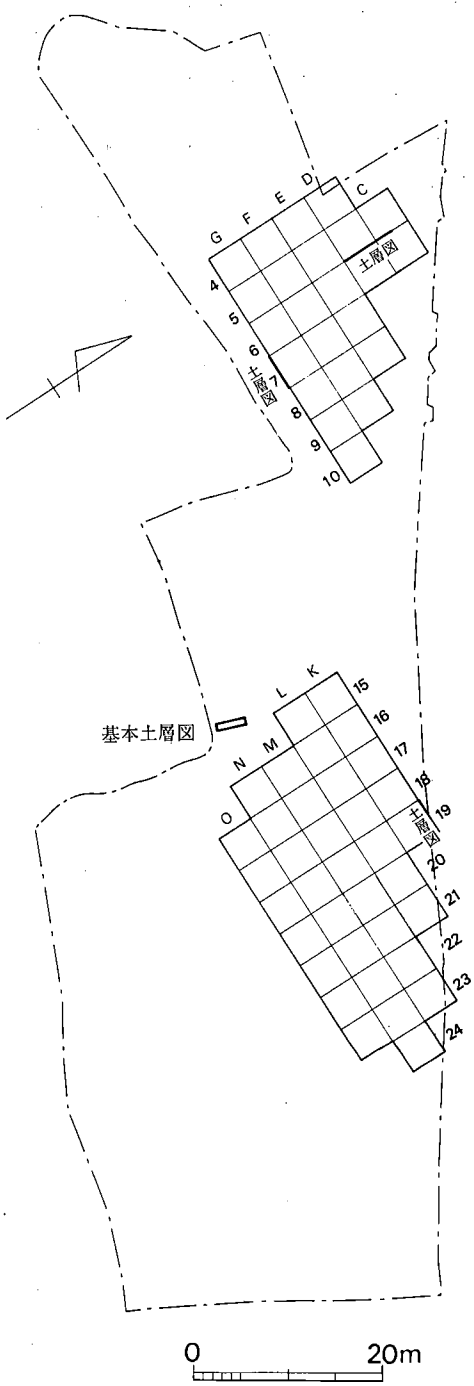
第 18 図 春園遺跡地形図（1/2,000）

は赤褐色土で層厚10cm内外。8列では北に厚く、南に薄い。この層以下は何ら遺物は出土しない。4層は暗黄褐色土で層厚10～20cm。5b層は暗赤褐色土でマンガン粒を含む。層厚10～15cm。56層は灰黄褐のシルト層で5～15cm。5c層は5b層にマンガン粒を含み25～40cmと厚い。6層は砂礫土で間層。7層はシルト層でやはり間層。8層はこげ茶色を呈す砂層で、部分的に粘土ブロックが見られる。15～40cm。9層は鶯色砂層で23～28cm。10層は淡赤黄褐色粘土層で層厚10～20cm。11層は暗鶯色砂層で層厚30～55cm。12層は砂礫層で20cm内外。13層は灰色礫層となる。6層以下は砂・粘土・礫の互層であり、大刀洗川の氾濫原となっていたのであろう。

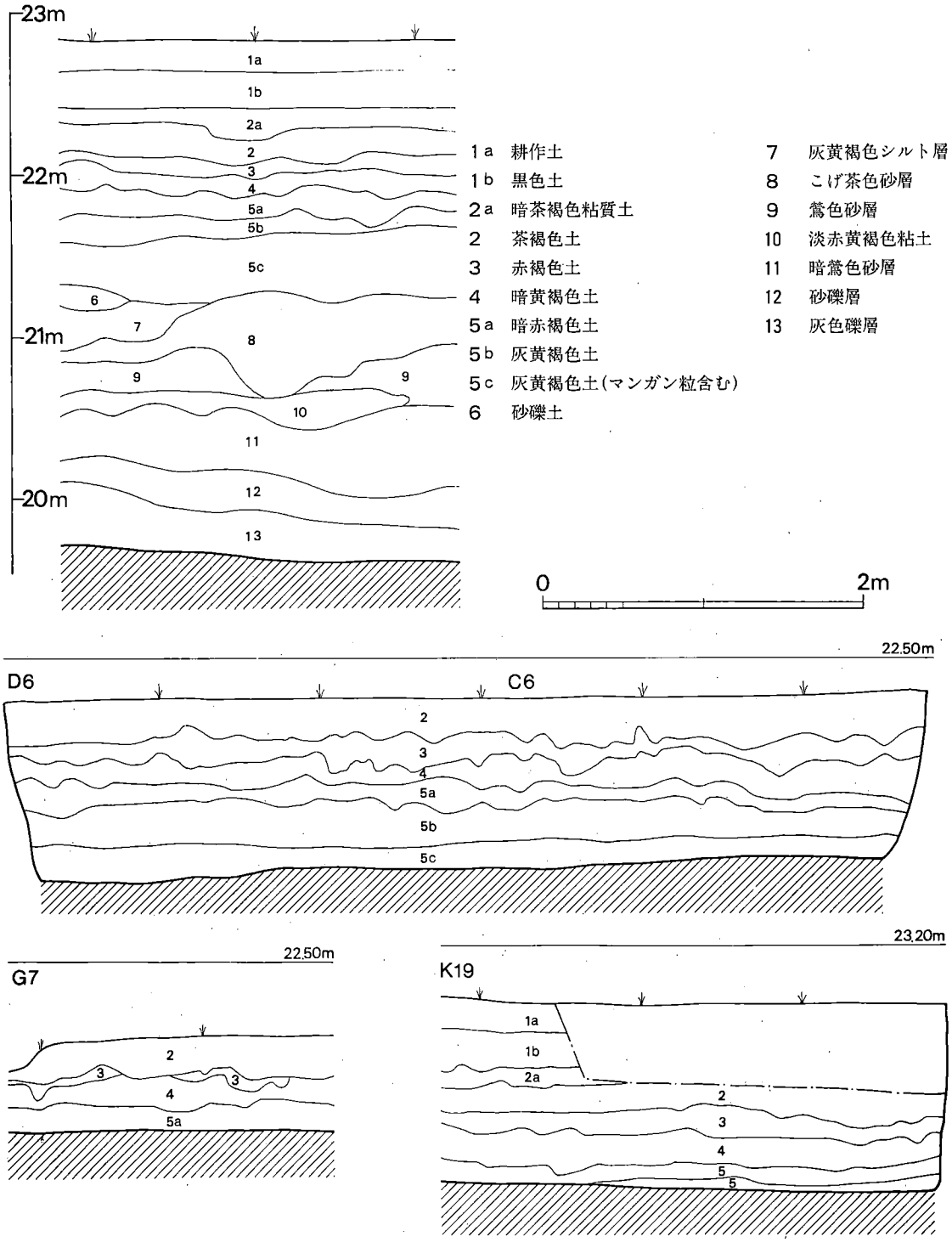
土層図は他にC・D6区西壁、G7区南壁、K19区北壁を図示している。

(3) 遺物の出土状況

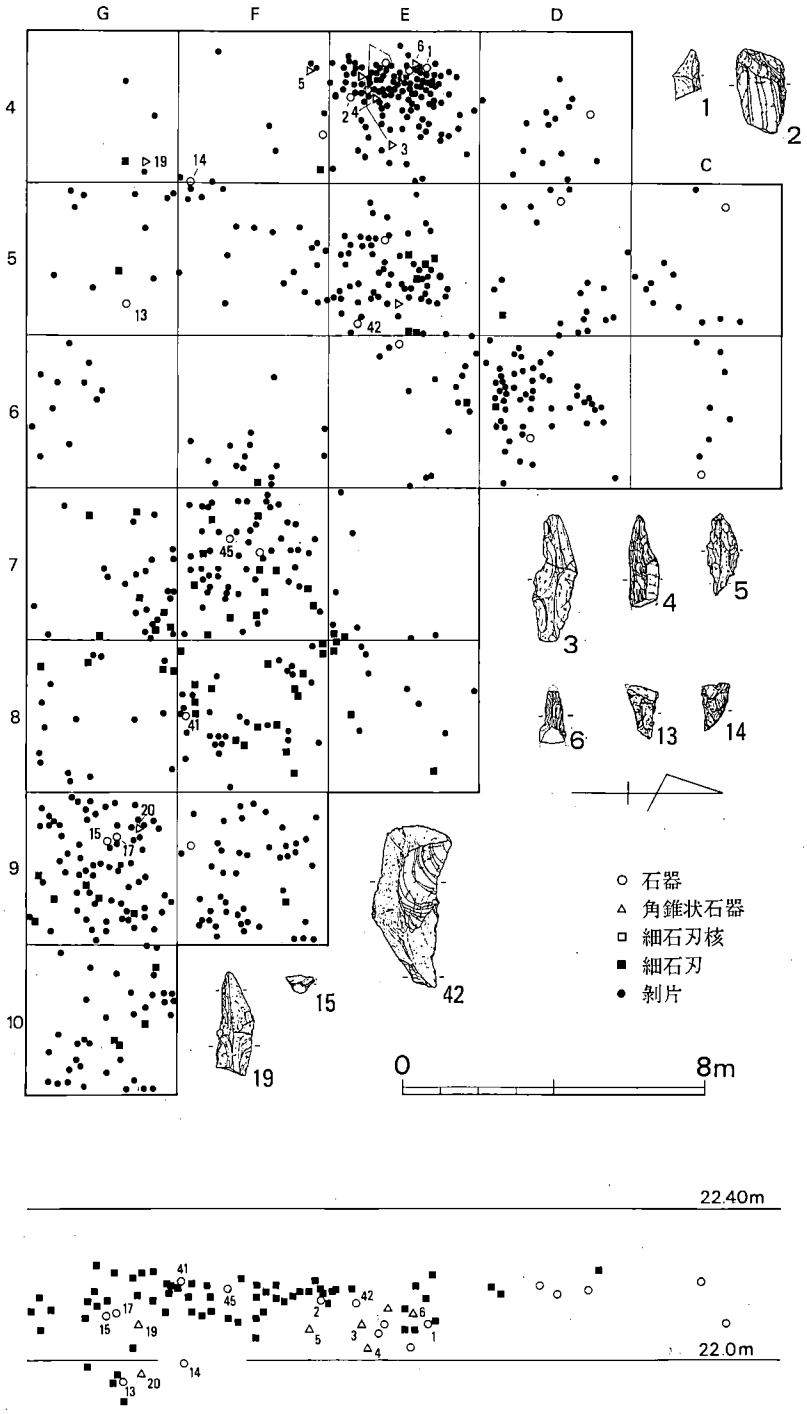
遺物は遺構検出時の資料を除き2層出土である。前述したように遺物を包含する第2層の茶褐色土は層厚15～20cmと薄く、断面観察でも分層出来なかった。従って、同層中を10cmほどで便宜的に分け上層・下層とした。量的には上層に737点、下層357点と上層に多く出土する。



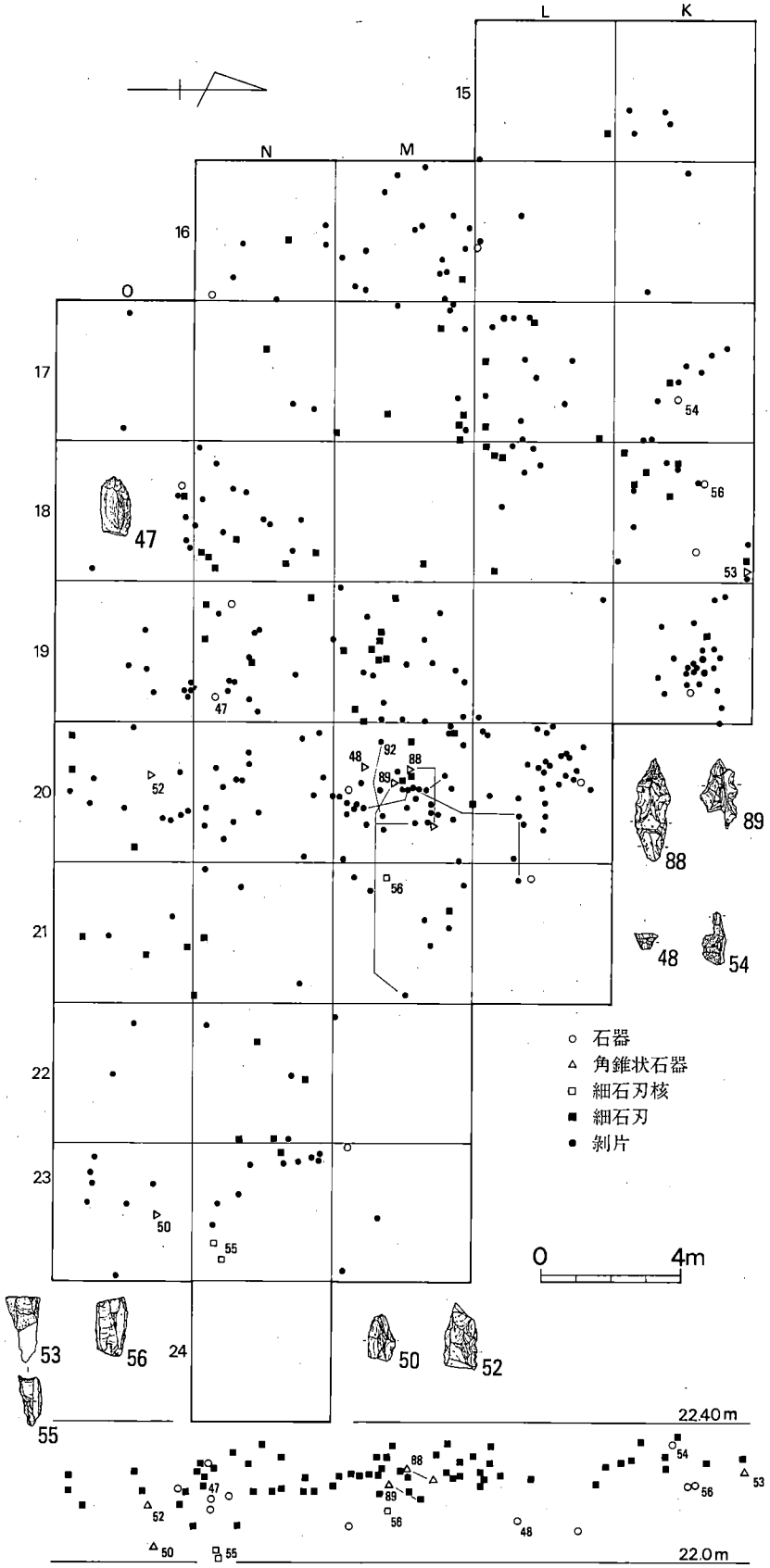
第 19 図 先土器時代調査区（1/800）



第 20 図 土層断面図 (1/40)



第 21 図 遺物出土分布図1 (1/200・1/4)



第 22 図 遺物出土分布図2 (1/200・1/4)

分布状況を見ると、E4・5区、F7・8区、G9・10区、K19区、M20区に集中箇所があり、C列以北、0列以南、17列以西、22列以東は希薄である。出土した石器はナイフ形石器・台形石器・台形様石器・角錐状石器・細石刃核・細石刃・彫器・石核・使用痕のある剥片・スタンプ状石器・敲石・磨石・剥片等である。器種別に見ると、角錐状石器が平均的に下位から出土し、細石刃は上位に集中する。特にE4区2層下位の集中箇所では、ナイフ形石器1・角錐状石器4・石核1・磨石1・剥片が出土したが、細石刃はまったく伴なっていない。

石材は黒曜石・安山岩・フリント製・玄武岩・花崗岩・砂岩があり、そのうち約58％が黒曜石、38％が安山岩系で、黒曜石には姫島産のものが5点含まれる。前述したE4区の遺物はいずれも安山岩製であり、フリント製の石器はM20区に集中する。

(4) 出土石器

2層より出土した石器は1,094点で、他に採集されたナイフ形石器、細石刃が各1点あり、内訳は表2のとおりである。以下、グリッド別に説明を加える。

表 2 出土石器一覧表

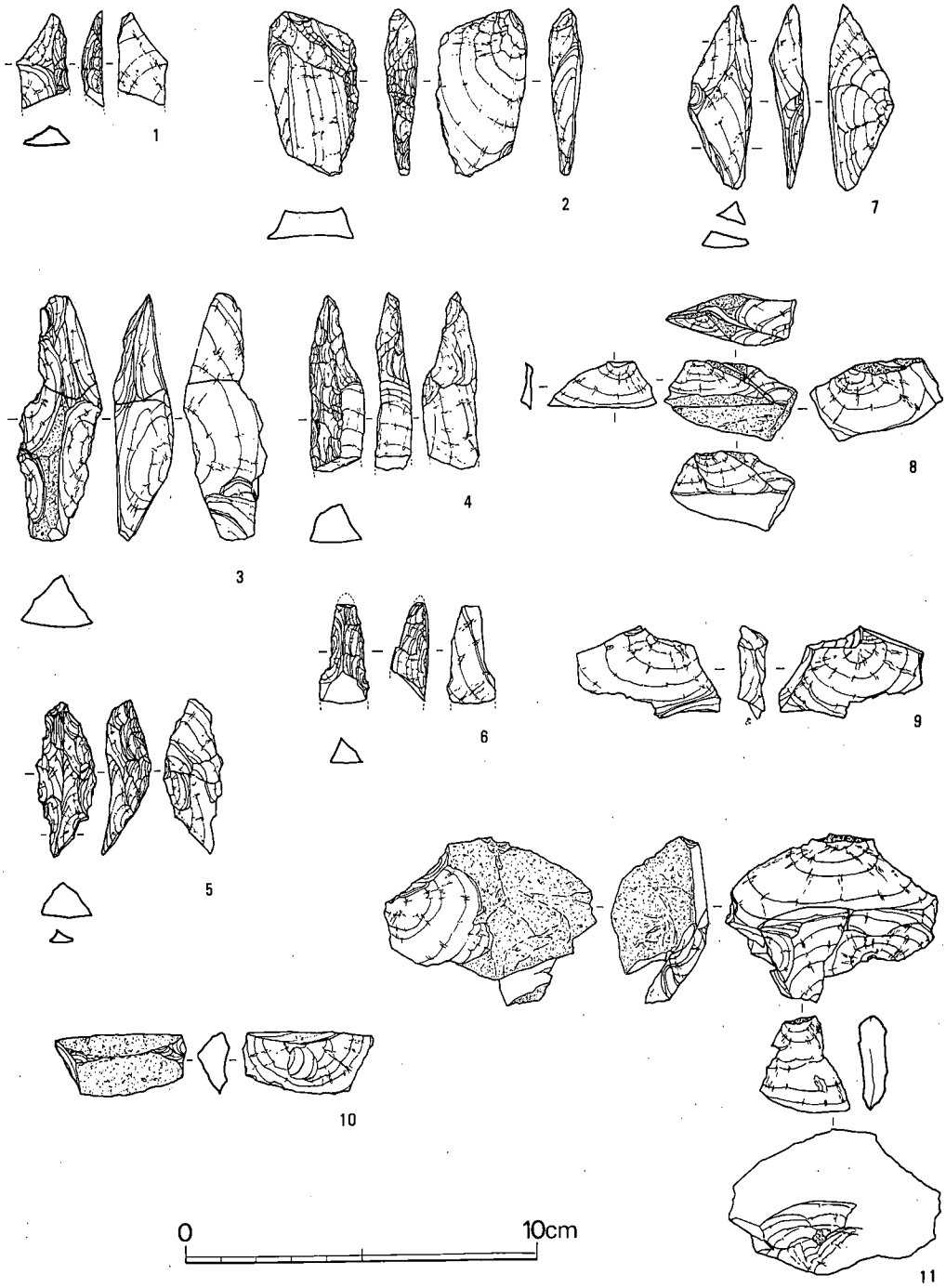
層　位	ナイフ形石器	台形石器	台形様石器	角錐状石器	細石刃核	細石刃
2 層 上	1	4	0	6	1	126
2 層 下	2	1	2	8	1	14
計	3	5	2	14	2	140
石　核	スクレパー	U F	剥・砕片	彫　器	その他	計
7	3	2	584	0	4	737
3	0	3	314	1	7	357
10	3	5	898	1	11	1,094

E4区の石器（第23・25図）

2層の下部より安山岩製のみの石器群が集中して出土した

ナイフ形石器（1・2） 1は横長剥片を素材とし、片側辺に調整を加える。基部を欠く。断面は三角形。2は上層出土で1・3～6とは伴なわない可能性もある。幅広で長方形、断面台形を呈す。傾斜した打面から剥出した横長剥片の末端部が形成する側辺のみに急角度の調整加工を施し、一部表面側から細かい調整を加える。刃部の傾きは長軸に対して70度と緩やかである。長さ4.6cm、幅2.5cm、厚0.8cm。

角錐状石器（3～6） いずれも部厚な横長剥片を素材とし、稜線が通るので断面が三角形を呈す。調整は主要剥離面を除く2面に施される。3は2つに折れて出土した。1.45cmと最も部厚く、長6.9cm、最大幅2.3cmの完形品。両端とも平坦面を有すが図示した下方部は自然面を中央部付近から残す。4は欠損品で、端部は尖る。一部稜上からの細調整も施す。残長4.9cm、最大幅1.



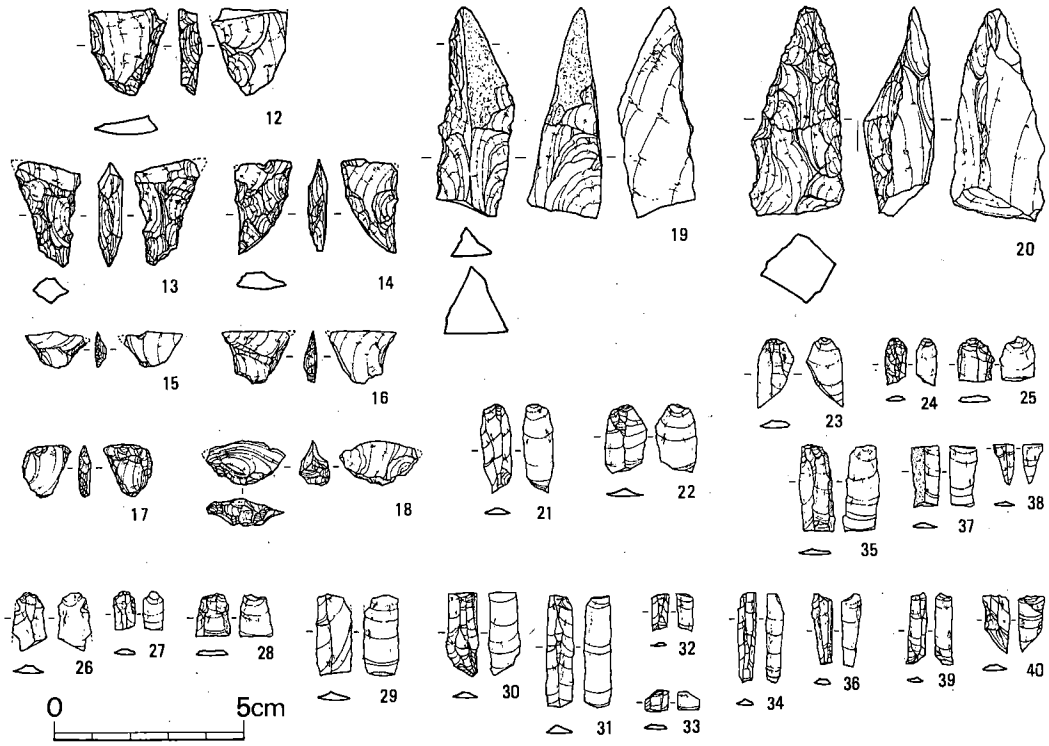
第 23 図 出土石器実測図1 (1/2)

5cm、厚1.1cm。5は尾状の薄い端部を有す完形品で、中央部から先端にかけて部厚い特徴がある。全長4.4cm、幅1.6cm、厚1cm。6は両端部を欠損する。残長2.8cm、幅1.4cm、厚1.2cm。4点出土したが、形状的には片側辺が内弯する3・4・6や、端部が平坦な3、尖る4～6に分けられよう。

剝　片（7～10）　いずれも横長剝片である。7は三角形の整った剝片で、側辺に刃遣しの調整を加えればナイフ形石器となるもの。長5.1cm。8は接合資料で、剝片のネガティブの面に旧側面が残る。9も同様である。10は角礫の一端に剝離を加え、そこを打面として剝出した最初の剝片で、幅3.6cm、長1.7cm。

石　核（11）　接合資料である。分割された角礫の残された自然面を打面として、幅3.5cmほどの横長の剝片を連続的に剝出する。接合した剝片はやや縦長のもので、目的とする剝片ではない。大きさは6×4cm、厚2.8cm。

磨　石（44）　欠損品であるが、長円形を呈す玄武岩製。全体的に良く使用され磨れている。残長8.8cm、厚5.5cm。



第　24　図　出土石器実測図2（1/2）

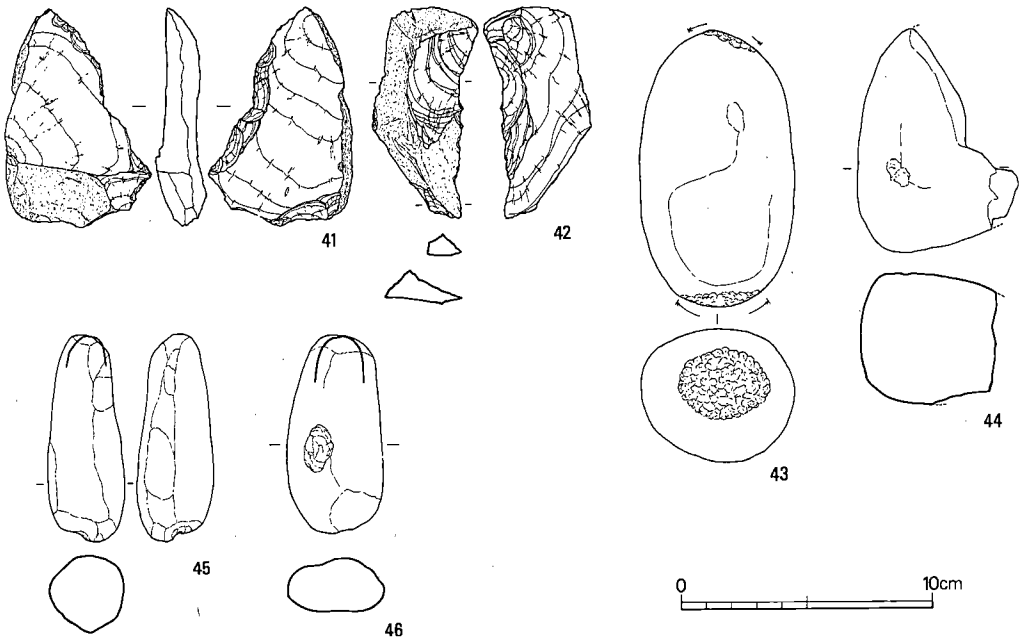
C～G－4～10区出土石器（第24図12～40・第25図41～43・45・46）

E4区2層下部出土以外の石器である。

ナイフ形石器（12） 基部破片で、横長剥片を素材とする。右側辺に荒い調整を加える。幅1.95cmで採集品。

台形様石器（13・14） 両者とも横長の剥片を素材とし撥状を呈し、平坦剥離を施す。13はほぼ完形品で基部を柄状に整える。長軸と刃部がなす角度は76度を測る。長2.7cm、厚0.6cm、G5区2層下部出土。14は基部側を欠損する。主要剥離面の調整は打瘤部を除去する以外は少なく、刃部における細かい剥離は刃こぼれである。刃部角は83度で13に比べて平坦。F4区2層下部出土。両者とも漆黒の黒曜石製。

台形石器（15～18） いずれも2層上部出土で良質の黒曜石製。縦長剥片を折断して用いる百花台型（15～17）、不定型の剥片を用いる18の2者がある。15・16は刃部に接する2辺が内弯して撥状を呈し、直線刃。 17は素材の関係から片側が切れたようになる。側辺の調整は15・17が3側辺、16は刃部と対峙する辺には加工しない。15は長0.9cm、幅1.6＋α cm、厚0.3cm。16は長1.3cm、幅2.3＋α cm、厚0.3cm。17は長1.3cm、幅1.3cm、厚0.3cm。15・17はG9区、16はF10区出土。18は外弯刃で、反対側の辺に調整を施す。あるいは粗雑なナイフ形石器とした方がよいかもしれない。長1.2cm、幅2.1cm、厚0.6cmでG8区出土。



第 25 図 出土石器実測図3（1/3）

角錐状石器（19・20）　E4区下部出土の4点（3～6）に比べて大型で、先端部を有す。両者とも安山岩製の部厚い横長剥片を素材とし、中央部付近で折れている。19は断面三角形で、主要剥離面側から大きな調整を施し、左側辺のみは細調整を端部まで加えるが、右側辺は自然面をそのまま残す。残長5.5cm、幅2cm、厚1.75cm。G4区2層下部出土。20は断面方形状を呈す。両側辺から平坦な調整を施し、稜を持たない。他の2面は原石から剥出した面で加工していない。両面加工の尖頭部の未製品の可能性もある。残長5.5cm、幅2.3cm、厚1.8cmでG9区2層下部出土。

細石刃（21～40）　すべて黒曜石製である。頭部から末端部までの完形品はなく、頭部から中間部、中間部、中間部から末端部のいずれかに属し、折断して使用されたと推測される。21は長2.3cm、幅0.8cm。37は自然面が残る中間部資料で、長1.6cm、幅0.7cm。31は中間部で、長2.9cm、幅0.7cm。38は末端部で、長1cm、幅0.5cm。25・36には刃こぼれの痕跡が顕著である。36の採集資料を除いて2層上部出土で、30・39はE5区、27はE7区、23・34・35・38はF7区、28・33・37はF8区、22・25はG7区、24・32はG8区、31はG9区、21・26・29・40はG10区出土。

削　器（41・42）　両者とも安山岩製で2層上部出土。41は幅広の剥片で、自然面と反対側に調整を施す。長8.8cm、幅5.7cmでF8区出土。42は縦長の剥片の末端部に微調整を施し刃部とする。大きく自然面を残し、打瘤は除去する。長8.4cm、幅3.5cm、E5区出土。

敲石（43）　長円形を呈し、断面不整円形の花崗岩製。上下両端に細かな敲打痕が残る。長11cm、幅6.4cm、厚5.3cm。H10区の遺構検出時に2層直上から出土。

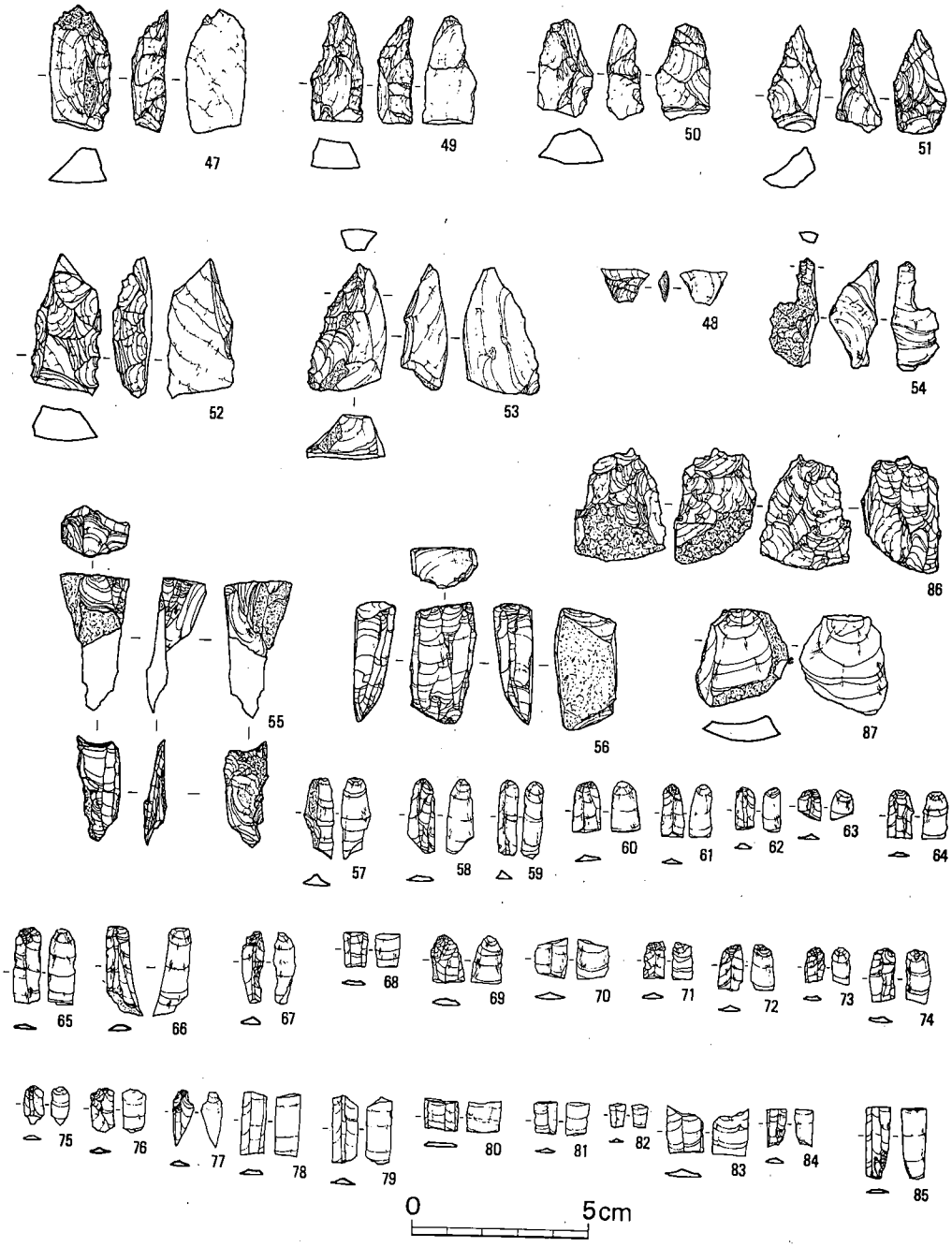
スタンプ状石器（45・46）　45は乳棒状を呈す。長8.2cm、上部幅1.5cm、下部幅2.6cmで、断面は不整円形で3cm前後。細身の頭部および周縁は平滑に近い。下端部には敲打痕がわずかに残り、欠損しているのか不明であるが、大きく凹む。薄いピンク色を呈す流紋岩系で風化著しい。46は長7.85cm、上部幅2.3cm、下部幅3.5cm、厚2.1cmを測り、やや扁平である。頭部は丸みを有し、体部に敲打によると思われる凹み部がある。薄緑色の風化が著しい玄武岩製。両者ともG9区2層上部出土。

K～O－15～24区出土石器（第26図）

ナイフ形石器（47）　表皮に近い横長の剥片を素材とし、片辺に急角度の調整を加える。刃部は直線刃。長3.5cm、幅1.6cm、厚0.9cm。安山岩製で、N19区2層下部出土。

台形石器（48）　縦長剥片を折断して横方向に用いた百花台型で、16に類似し両側辺が内弯する。長1cm、幅1.35cm、厚0.3cm。暗灰色を呈す黒曜石製で、L21区2層下部出土。

角錐状石器（49～53）　黒曜石製の49～51は小型である。49は横長剥片を素材とし、中央部断面は台形、先端部付近は三角形に近い。両側辺から稜にかけて調整を施す。残長3cm、幅2cm、



第 26 図 出土石器実測図4 (1/2)

厚0.8cm。50も破損品であるが、先端は生きており平坦に近い。稜を有し、断面は三角形に近い。底面側は大きな剥離によって平滑化し、両側辺は稜にむけて荒い調整を施す。残長2.7cm、幅1.5cm、厚0.95cm。51は分類に不安がある資料で、横長剥片を素材とし、左側辺は主要剥離面から、右側辺は稜上から調整を加える。残長2.9cm、幅1.4cm、厚1.1cm。52・53は大型品で、G4・9区出土の19・20に類似するが、調整が片側に限定される点、相違がある。52は縦長の剥片を素材とし、断面台形状を呈す。調整は右側辺で、平坦に近い。安山岩製。長4cm、幅1.8cm、厚0.9cm。53は幅広で部厚な横長剥片を素材とする。断面台形状で、左側辺のみに主要剥離面から調整を施し、上部には微調整を加えるので、スクレパー状の刃部を呈す。不純物の多い漆黒の黒曜石製。長3.6cm、幅2.3cm、厚1.2cm。49・51はM20区、50はO23区、52はO20区、53はK18区出土で、53が2層上部他は下部出土。

彫　器（54）　円礫の表皮付近の剥片で、2条の樋条剥離がある。漆黒の黒曜石製で、K17区2層直上出土。

細石刃核（55・56）　55は原石内の亀裂から細石刃剥出中に破損したものである。打面は円形に近く調整を施す。側面には自然面が大きく残るが、全体的には円錐形に近い。打面長1.9cm長3.9cm。N23区2層下部出土。56は円礫を素材とする。裏面全体に自然面を残し、側面には打面と反対側からの縦長調整を施す。上下両端は円礫の表皮を除いた面があり、細石刃は上部の未調整傾斜打面から剥出される。正面観は長方形で、側面は扁平。漆黒の黒曜石製。M21区2層上部出土。

細石刃（57～85）　黒曜石製とハリ質安山岩製があり、ハリ質安山岩は79を含め2点のみである。断面は三角形ないし四角形を呈し、打面調整が施こされているもの（60・61・65・69）も多い。66は完形品で、末端部には自然面を残す。長2.4cm、幅0.7cm。77も完形品で、長1.5cm、幅0.6cm。完形品は他に1点出土している。他は頭部から中間部、中間部片で、57は長2.3cm、幅0.8cm。70は中間部で0.9cmと幅広。83は幅1cmを測る。すべて2層上部出土で、L15区は69、L17区は67、L18区は77、M16区は60・64、M17区は61・75・78・83、M19区は76・81、M20区は70・71・80、N18区は59・73、N19区は65・82、N22区は79・85、O20区は66、O21区からは57が出土した。

石　核（86）　黒曜石製の円礫で、打面を90度転移しながら不定形な剥片を剥出する。K18区2層上部出土。長3.1cm、幅2.1cm。

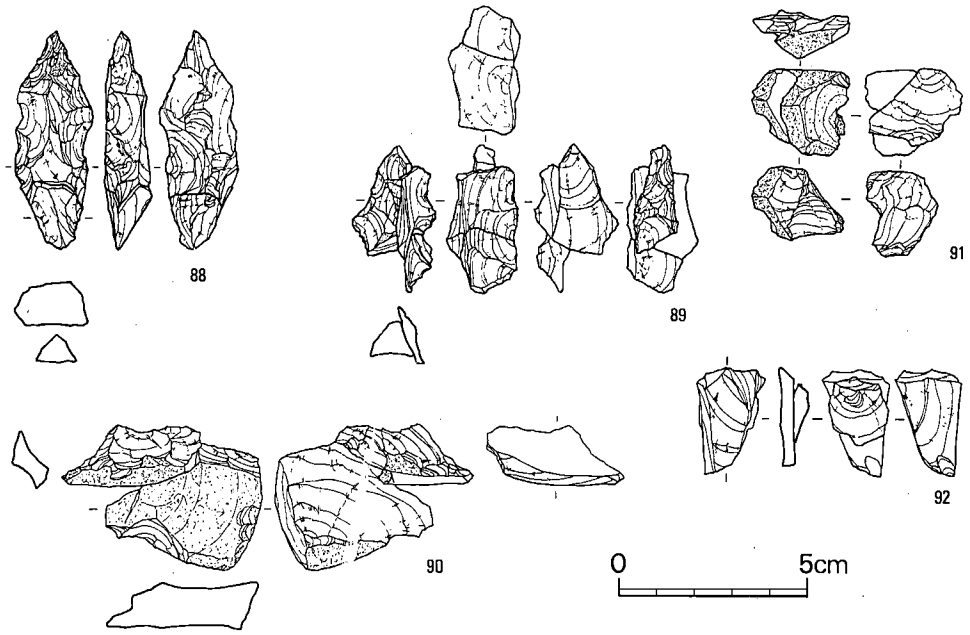
使用痕のある剥片（87）　幅広の縦長剥片で、鋭い側縁に刃こぼれが見られる。ハリ質安山岩製でO24区2層直上出土。

フリント製の石器（第27図88～92）

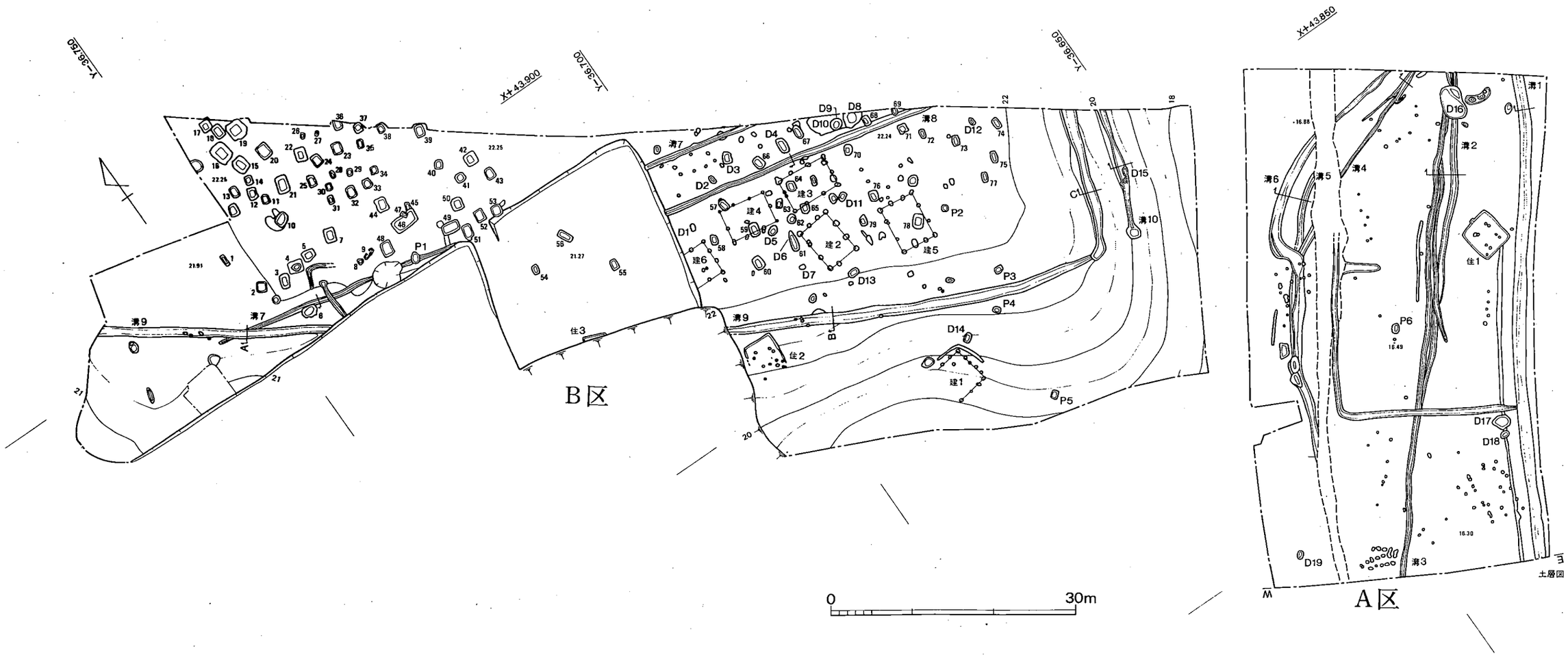
淡黄灰色と灰白色が縞状に混ざり込んだ色調を呈すフリント製の石器を一括した。M20区の2層上部に集中して出土し、E4区のナイフ形石器・角錐状石器を主体とする石器群と似た出土状況を示す。石器としては角錐状石器のほかは剥片で接合資料もある。

角錐状石器（88・89）　大小2点あり、両者とも完形品。88は2つに折れて出土した。両側辺が外弯し、尖る端部と平坦に近い端部を有す。横長の剥片を素材とし、断面は中央部が台形、両端は三角形を呈す。側面の調整は主要剥離面からのみ施され、裏面も平坦にするための調整が著しい。長5.7cm、最大幅2cm、厚1.1cmを測る。89aは長2.9cmと小型のもので、側面を形成する2つの剥片と接合する。横長の剥片を用い、中央に稜が入るように両側辺に調整を加え稜上からも微調整を施す。断面三角形で、端部は一方が尖り、片方は平坦である。幅1.6cm、厚1.1cm。bは素材となった剥片の主要剥離面を打面として剥出された剥片で、側面を形成する。幅2cm。cはその前段階の剥片。この両剥片の末端部は角錐状石器の稜上より3.5mmほど高い位置にある。b・cの表面には3回の小さな剥離面が残されているが、いずれも、主要剥離面を打面として剥出されている。

剥　片（90～92）　90は接合資料である。表皮盤状の大きな剥片に平行四辺形を呈す剥片が接合する。原石を半割し、そこを打面として周辺部を剥離して行く。91は角礫の表皮付近で、一端を除去し、そこを打面として連続的に剥片を剥出している。92も同様に未調整の傾斜した打面から縦長に近い剥片を剥出している。（木下）



第　27　図　出土石器実測図5（1/2）



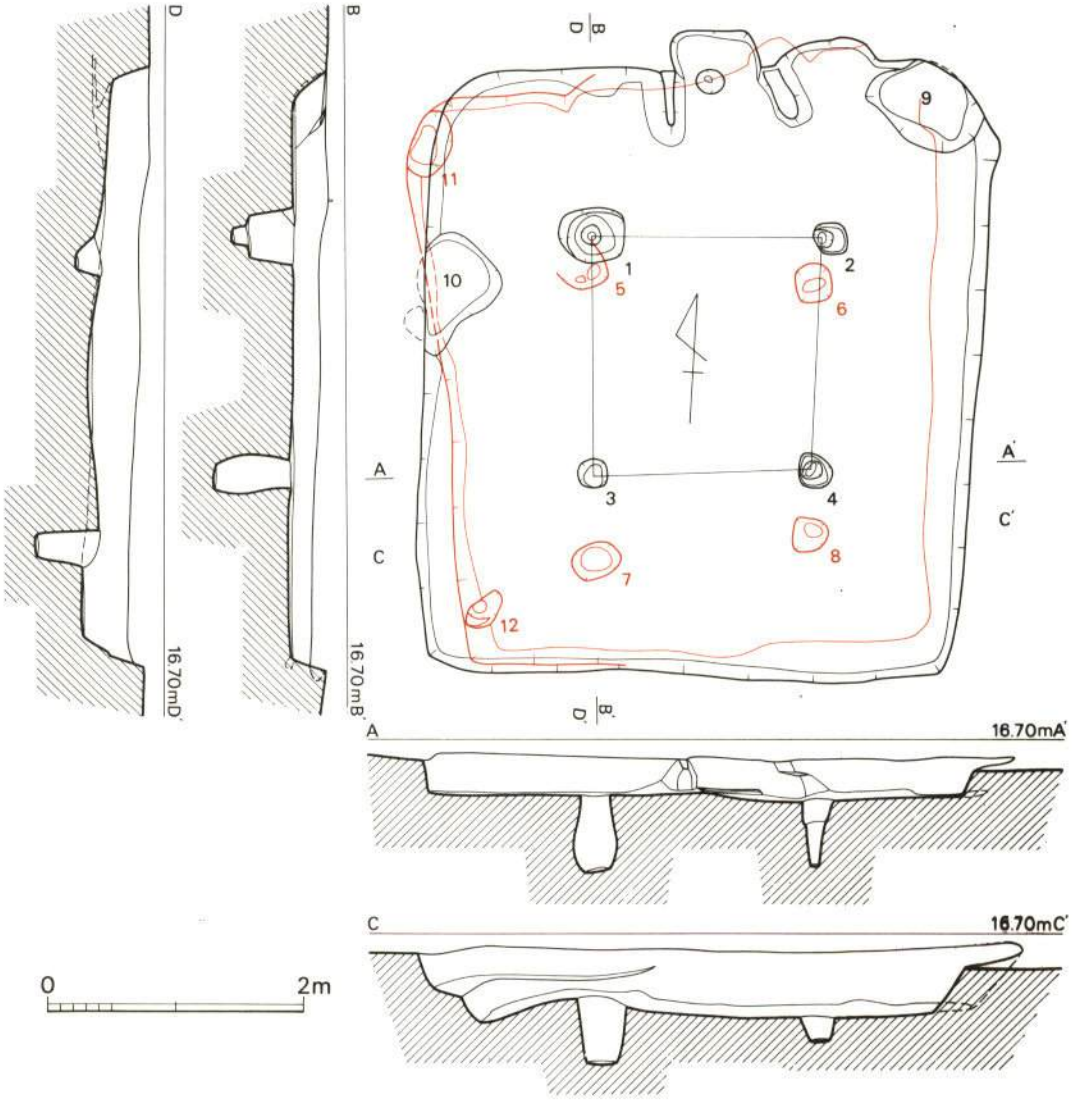
第 28 図 春園遺跡遺構配置図 (1/600)

3. 古墳時代から中世の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版22、第29図）

調査区を、北東から南西へ走る里道を挟んでA区とB区に分けて調査した。第1号竪穴住居跡は調査区南西側のA区北東部で検出された。

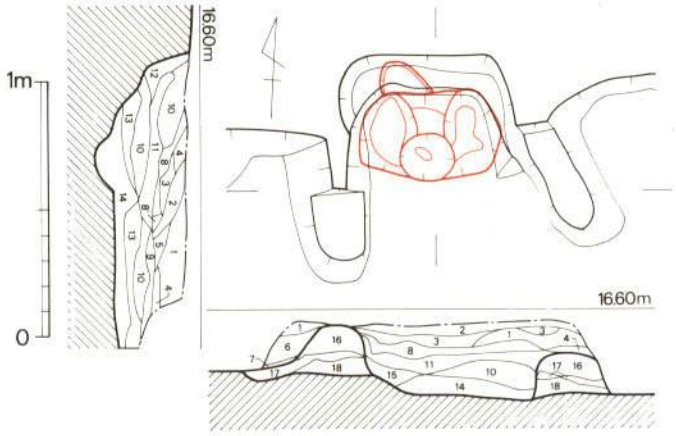


第 29 図 1号竪穴住居跡実測図（1/60）

主軸方位をN-4°-Wにとり、平面形状は隅円方形を呈する。規模は4.6～4.9m×4.2～4.3mを測る。壁面は30～48cmあり、立ち上がりは急である。覆土は自然堆積で、カマドは北壁に付設される。主柱穴はP1～P4で、深さ50～60cmである。また、P9、P10がある。柱間は東西175cm、南北175cmの均等な方形に配す。床面は貼り床が施され、北にやや高くなる。床下からP5～P8とP11、P12が検出され、P5～P8は、旧住居の主柱穴である。深さは、P7が50cmと深く、他は20cmほどである。柱間は東西170cm、南北P5－P7で220cm、P6－P8は190cmを測る。

カマド（図版23、第30図）北壁中央部に付設され、住居壁面に対してやや歪んでいる。長さ現存で96cm、幅100cmを測る。天井部は崩壊し、黄味灰色土⑧や赤味黄灰色土⑪で築かれていたであろう。また袖部は粘土で築かれている。

出土遺物はカマド付近および東側で集中して出土した。



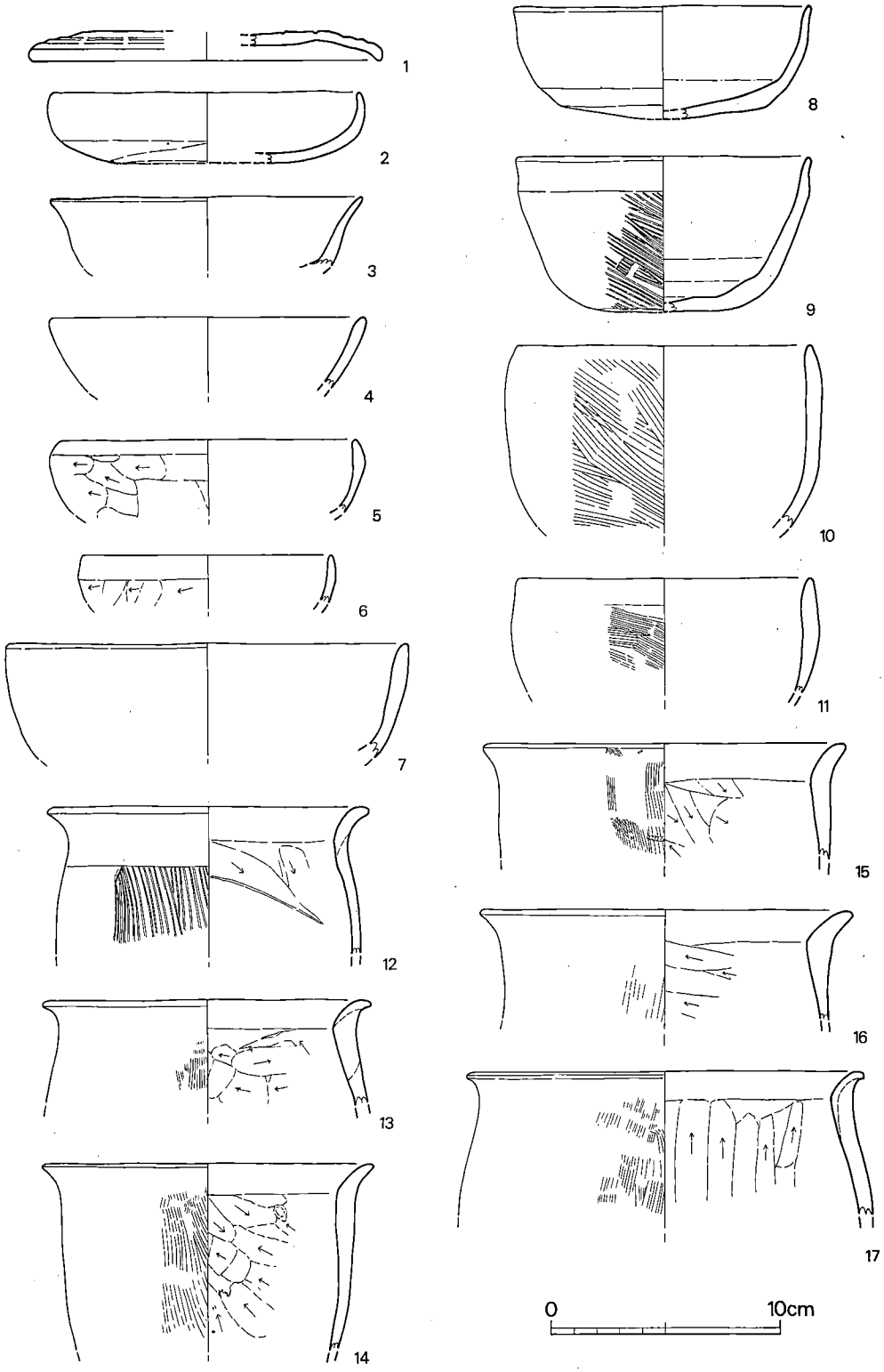
1 暗紫黒色土　2 黄味灰色土　3 黄味灰黒色土　4 白味灰色土　5 赤味灰色土　6 赤味灰色砂質土　7 黄色砂　8 黄味灰色土　8 砂質　9 紫味黒灰色土　10 黄味暗灰色土　11 赤味黄灰色土　12 11の強い赤味土　13 褐味灰色土　14 黒色土　15 赤色土(焼土)　16 黄味暗灰色砂質土　17 暗黄灰色土　18 17＋14

第 30 図　1号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

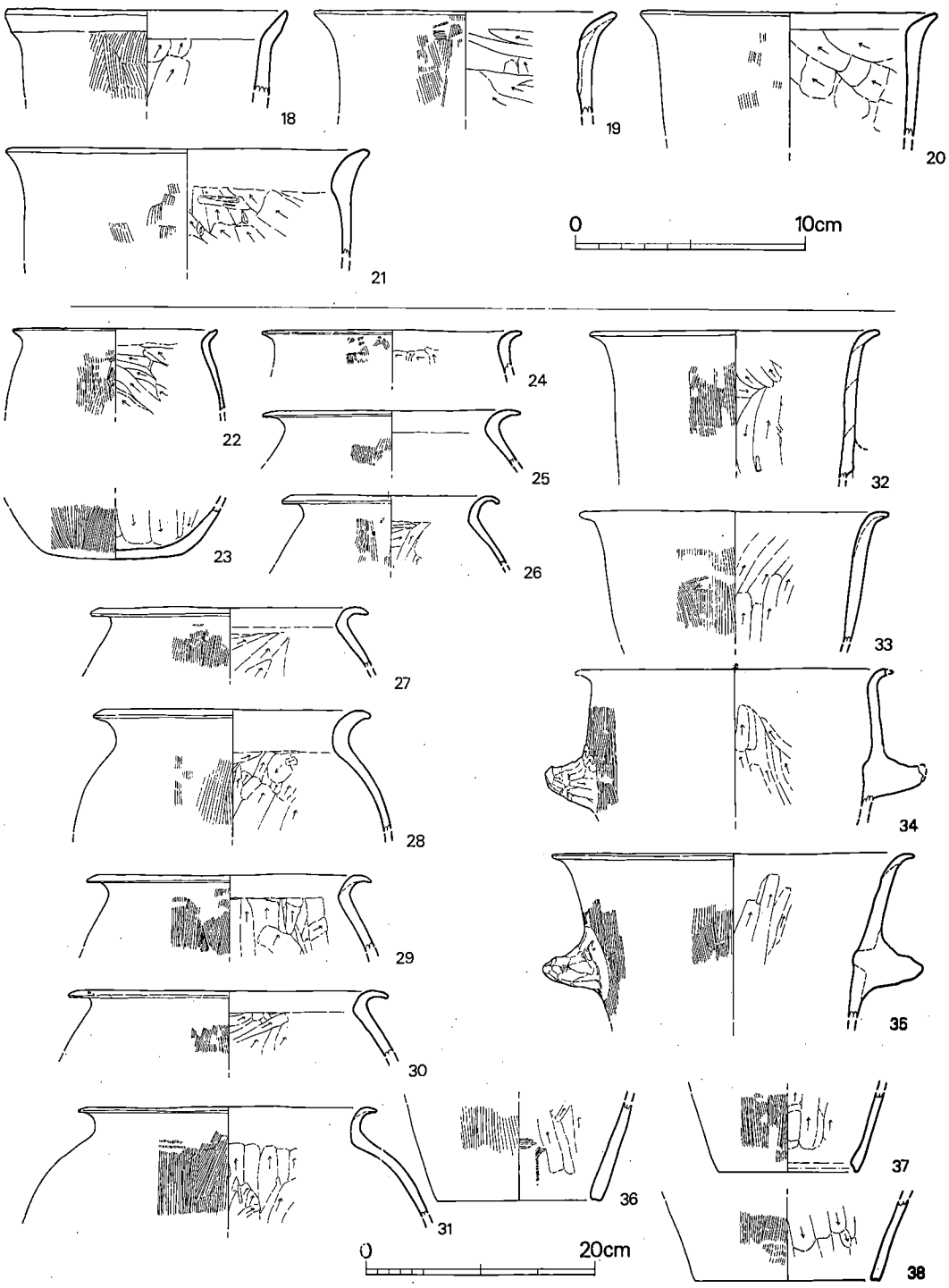
出土遺物（図版24・25、第31～35 図）

須恵器（1）　杯蓋でカマド西脇床面から出土した。この住居跡唯一の須恵器である。口縁～天井部にかけての小破片で、復原口径15.3cm。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。青灰色を呈し、胎土に白色砂粒を若干含む。

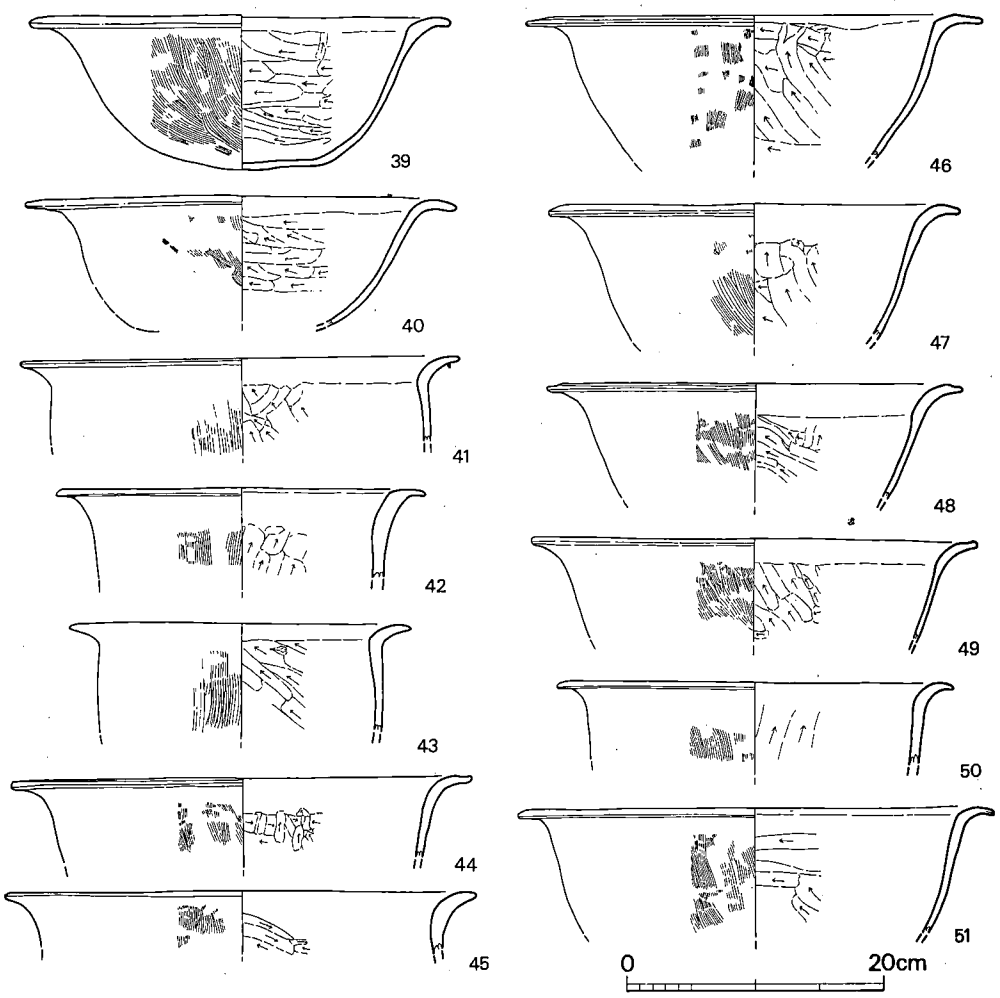
土師器（2～52）　2～7は杯。2は淡橙色を呈し、底部外面黒変する。胎土に褐色砂粒を多量に含む。外面体部から底部にかけて削り、他は横方向ナデを施す。3はくすんだ橙色を呈する。調整は全面横ナデで、ロクロを使用したように精美である。4は口縁部小破片で、内面淡橙色、外面赤褐色を呈する。横ナデ調整を施し、その際の水引痕が器表に残り、凹凸を呈している。5・6はともに小破片で、内面から外面口縁部まで横ナデ、それ以下は手持ヘラ削りを施す。赤褐色を呈する。7は口縁部から体部の小破片で、赤褐色を呈し、胎土に褐色、白色砂粒を含む。また横ナデの際に生じたと思われる縦方向の切裂が器表面に表われている。4はカマド外で、5は南側床面、6はP1から出土した。8～11は椀。8は青緑灰色を呈し、胎土に黒色、白色の微砂粒を少量含む。焼成はややあまく、器表面磨滅が著しい。口縁から体部は内外面とも横ナデ、底



第 31 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

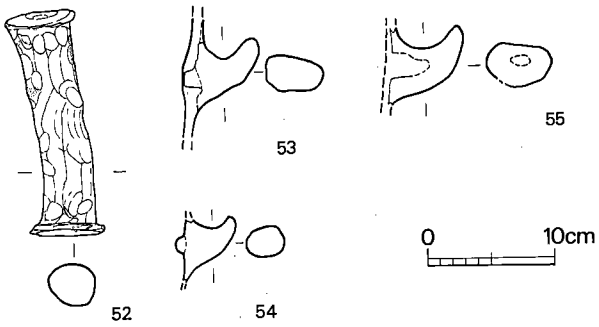


第 32 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3・1/6）



第 33 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/6)

部内面はナデ、外面はヘラ削りののちナデを施す。9・10は小破片で黄橙色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。9は底部～体部下半内面ナデつけののち体部から外面口縁部を横ナデ、それより下位にハケを施す。10は外面ハケ、外面口縁部から内面ナデを施す。11も破片である。明褐色を呈し外面ハケ、外面口縁部～内面ナデを施す。9はカマド東の床面とP1出土のものが接合した。10、11は



第 34 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/6)

第 35 図 不明土製品実測図 (1/2)

床面出土。12～31・41～45・50は甕。12～20は小型のもので、体部内面ヘラ削り、外面ハケで、口縁部は横ナデを施す。色調は淡橙色～褐色を呈し、13、17、19の内面が黒変している。胎土には若干砂粒を含む。焼成は、13、20がややあまく、他は良好である。しかし、全般に器表面磨滅が見られる。23は底部片で内面体部ヘラ削り、外面ハケ、底部は内、外面ともナデツケを施す。その他は内面頸部～肩部ヘラ削り、口縁部横ナデ、外面ハケを施す。14・15・22・27～29・31・50は床面、13・17・25はP2付近密集地より出土。43は、住居跡南側床面のものとP3出土の遺物の接合資料である。23・26は下層で近接して出土しており、同一個体と考えられる。他は覆土中より出土。32～38は甑。32～35は甑上半部で体部内面ヘラ削り、外面ハケを施し、32・34・35は把手付接部でナデつけ、また内面も把手付接部については、ナデつけが施されている。32はすでに把手は欠落しているが、付接の痕跡があり最下部では付接のための突起（ヘソ）の跡がある。また、35でも同様なものが見られた。36～38は甑の底部片で、体部内面ヘラ削り、外面ハケ、底部端部は横ナデを施す。色調は淡橙色～茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を含む。焼成はおおむね良。34・36・37は床面、33はカマドおよびその付近の西側から出土、35は覆土中およびP2、38は床面下層から出土した。39・40・46～49・51は鉢である。いずれも淡橙色～茶褐色を呈する。体部内面ヘラ削り、外面ハケ、頸部内面に稜をもつ。頸部内面から外面にかけて横ナデを施す。また、唯一底部まで残っている39の底部は、内面一方向へのヘラ削り、外面体部から連続してハケを施している。器表面に凹凸が目立つ。また胎土に多くの砂粒を含んでいる。焼成はまちまちであるが、全体的にやや磨滅気味でありあまい。39は床面とP2の接合資料で、40、46～48は床面、他は覆土中から出土した。52はカマド前面から出土し、このカマドの支脚である。色調が下から上に青灰色～赤・淡黄色へと変化し、上半部に煤が付着する。53～55は把手、53・54は接合部に突起をもち、逆に55は中空となっている。また55の接合面には粗いカキ目が施され、接着の際の工夫と考えられる。色調は淡橙色～褐色を呈する。

不明土製品（第35図）　植物繊維痕が付着した小形の粘土板が、住居跡内に散在して出土した。出土した土器から6世紀頃の時期である。（平島）

2号竪穴住居跡（図版26、第36図）

B区東半部の西南寄り、丘陵の傾斜度が変換する付近の平坦部側に営まれている。南側の壁は欠失して、残存するのは北壁全部と東西壁の一部である。東壁の一部と北・西壁にはやや幅広い周壁溝が巡る。東壁の周壁溝の途切れた南側には円礫と土器片が床面に密着して出土し、その周辺には若干の焼土があった。もとカマドがあったのだろう。

遺存する部分からもとのプランを復原するのはやや難しいところもあるが、P1～P4を主柱穴とし、この平行四辺形を呈する主柱穴プランに見合うような壁面を考えれば、東西4m、南北4.

5mほどの規模が復原されよう。このとき床面積は約16.7㎡となる。

主柱穴としたP1～P4はいずれも床面から70cm程の深さを持ち、そしてまた全てがやや斜めに掘り込まれている。

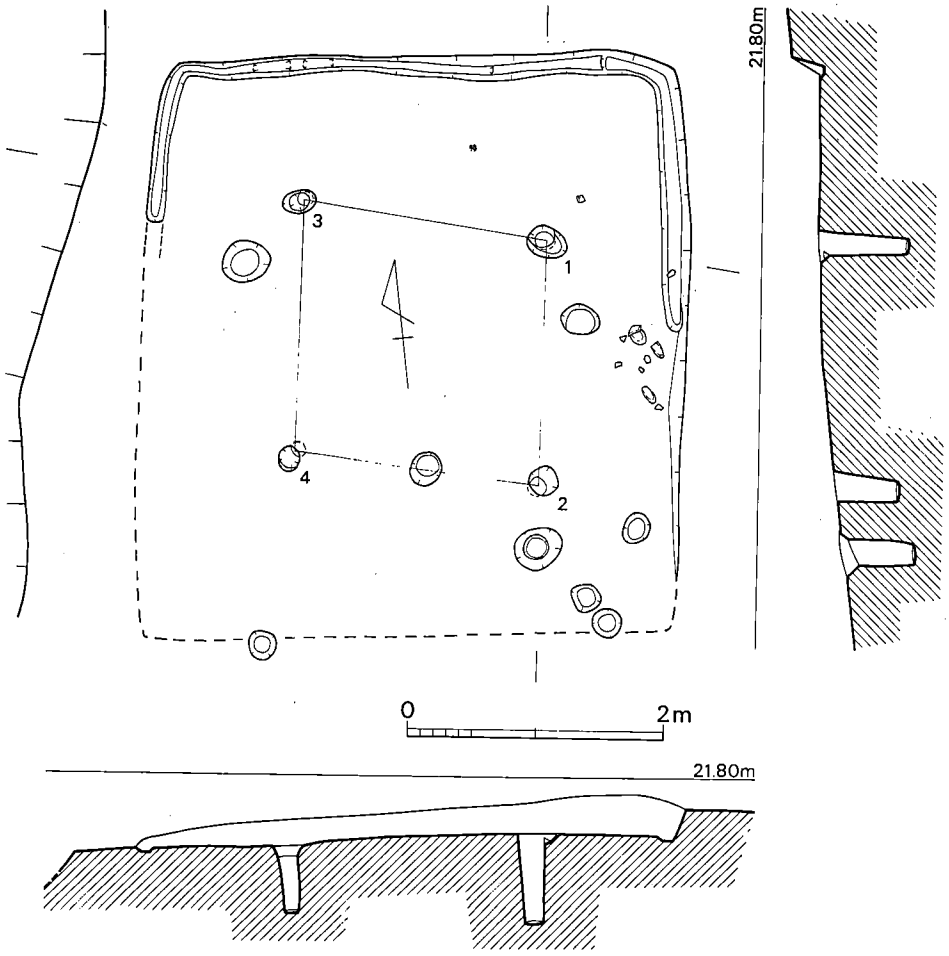
カマドは東壁中央付近にあったと思われるが、全て壊されていて痕跡のみであった。このカマドを通る主軸方位はS－75°－Eである。

床面より出土した土器からみて8世紀前半代に廃棄された住居跡と考える。

出土遺物（第37図）

全体の出土量はごく僅かである。須恵器と土師器の土器以外の遺物はない。

須恵器（1～3）　1は蓋の破片であり、撮みが付くと思われる。口縁部は断面L字形に屈折する。



第 36 図 2号竪穴住居跡実測図（1/60）

天井部外面は断続的ながらも左回りの回転ヘラ削りが施される。約1/4の破片で復原口径13.4cm。2も蓋の破片で生焼けである。3は高台付椀の破片である。口縁部外面は自然釉がかかって灰黒色を呈するが、体部から底部にかけての外面には自然釉がかかっていない。これはこの椀を倒立にして重ね焼きしたことの痕跡とみてとれる。1・3は床面、2は埋土中より出土した。

土師器（4～6）　4は椀の破片だろう。5は甕で器表の磨滅が著しい。体部内面はヘラ削りを施す。6は甑であろう。底端部周辺は黒変している。4は埋土中、5はピット内、6は床面から出土した。（伊崎）

3号竪穴住居跡（第28図）

B区の中央南側で、そのほとんどが削平され、住居跡の北壁が確認できるのみである。一辺2.85m、深さ25cmを測り、比較的平坦な床面を持つ方形住居跡である。覆土から土師器小破片が出土したが、図化できなかった。古墳時代から奈良時代であろう。（平島）

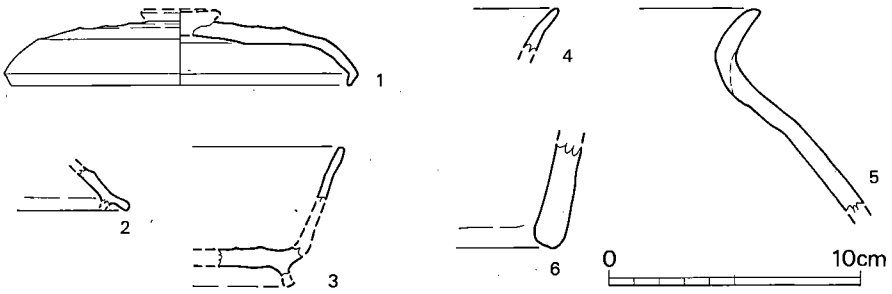
(2) 掘立柱建物跡

B区東半部に6棟を検出した。2～6号の5棟は10号溝の内側にあり、1号のみ外部南方に位置する。1・6号は完存しないが、1号は南北棟、6号は東西棟と推定される。2～5号の4棟については、2・5号が南北、3・4号が東西に棟のある長方形建物で、いずれも桁行3間の中央柱間を広くとるという特徴がある。

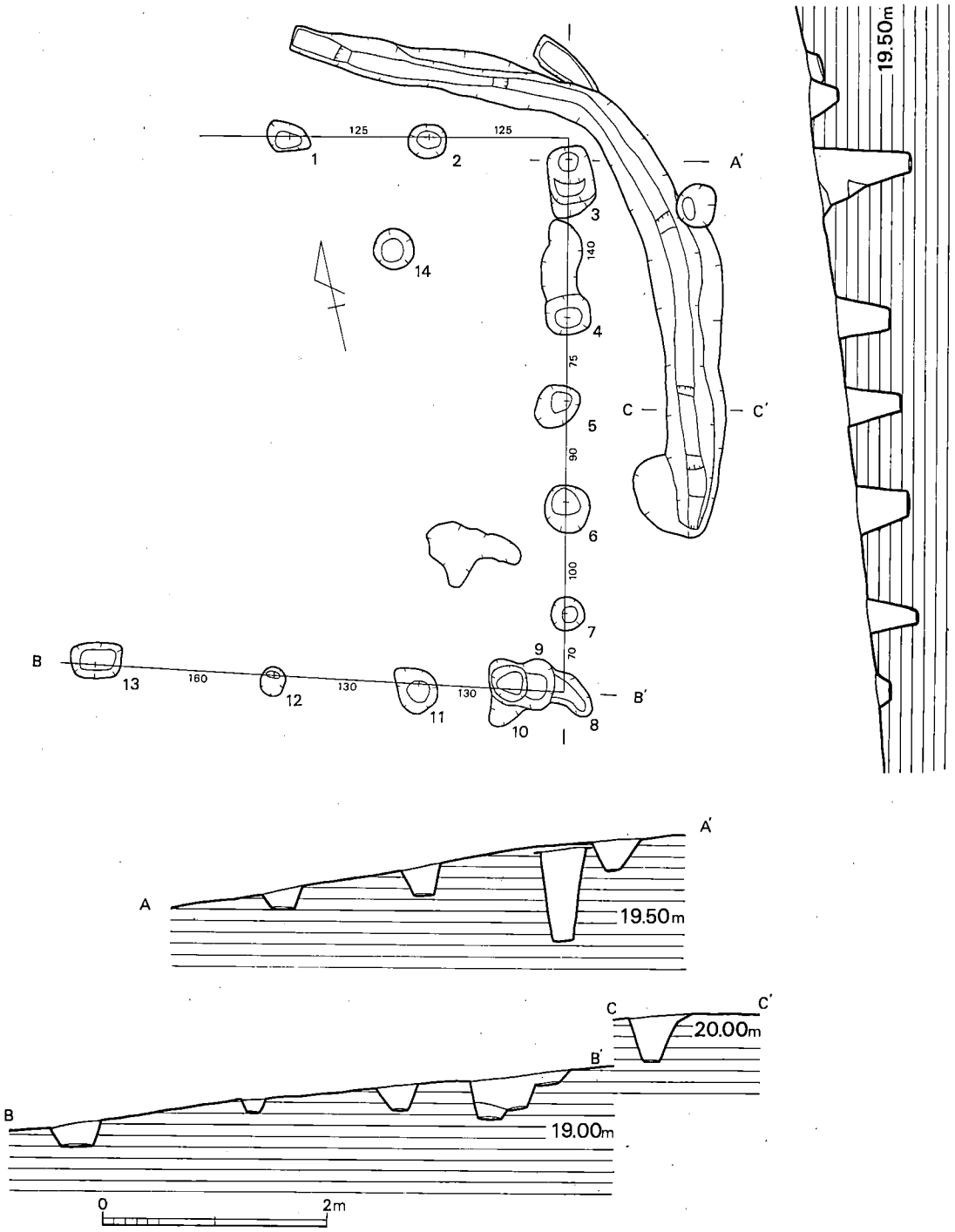
1号掘立柱建物跡（図版27、第38図）

B区東半部の中央南端付近、傾斜面の途中に営まれている。柱並びが一部揃わないことと斜面上であること、西半部の柱穴群が見当らないことなど建物として十分でない要素も多いが、ここでは建物跡として扱っておく。

柱列が全て揃うのはP3～P8の6個であるが、ここもP5とP7を補助柱と考えれば3間の間取



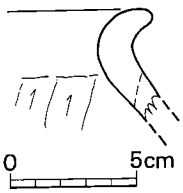
第 37 図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



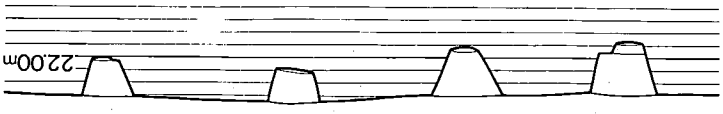
第 38 図 1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

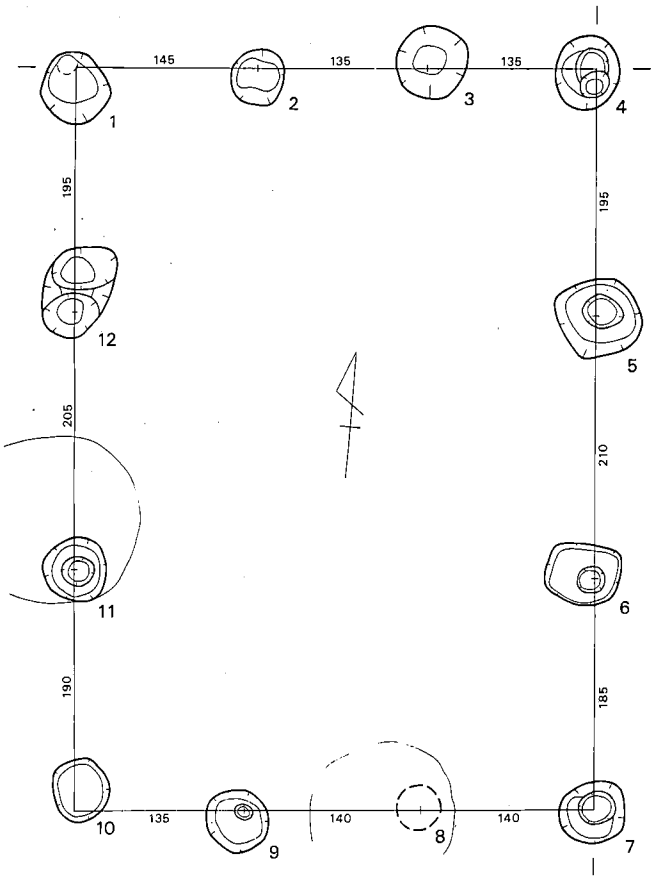
りとなる。P13より西の方に柱穴がなかったとは言えないが、いまは2×3間の南北棟の建物と捉えておきたい。梁行4.2mに桁行が4.95mとなる。P3〜P8の並びで主軸方位はN－13°－Eをさす。

柱穴群の北から東にかけてL字に近い弧状に小溝が配されている。建物に付随するものと考えてよいだろう。コーナー部分から西方・南方へと低くなっていき、端部においてともに一段高くなる。溝内から土師器の甕の破片が出土している。8世紀代のものと思われる。



第39図　出土土器
実測図（1/3）





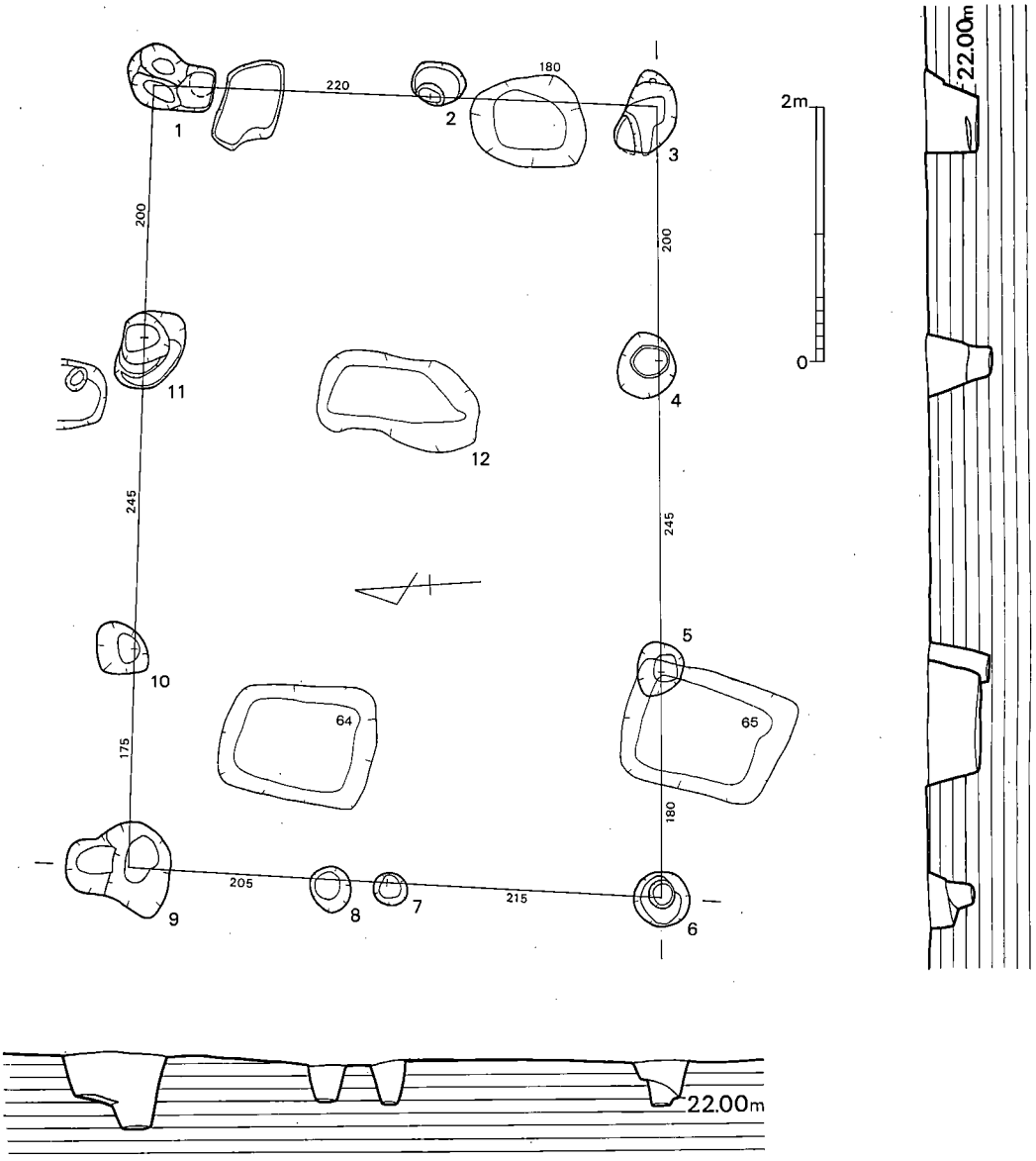
第　40　図　2号掘立柱建物跡実測図（1/60）

出土遺物（第39図）

土師器甕の口縁部破片である。その外反度は著しい。内面体部はヘラケズリを施す。

2号掘立柱建物跡（図版28、第40図）

B区東半部の中央よりやや西にある3×3間の南北棟の建物である。梁行4.1m、桁行5.9mを測り、その占有面積は約20㎡である。P4からP7の柱筋でN－5°－Wの方位をとる。木根の

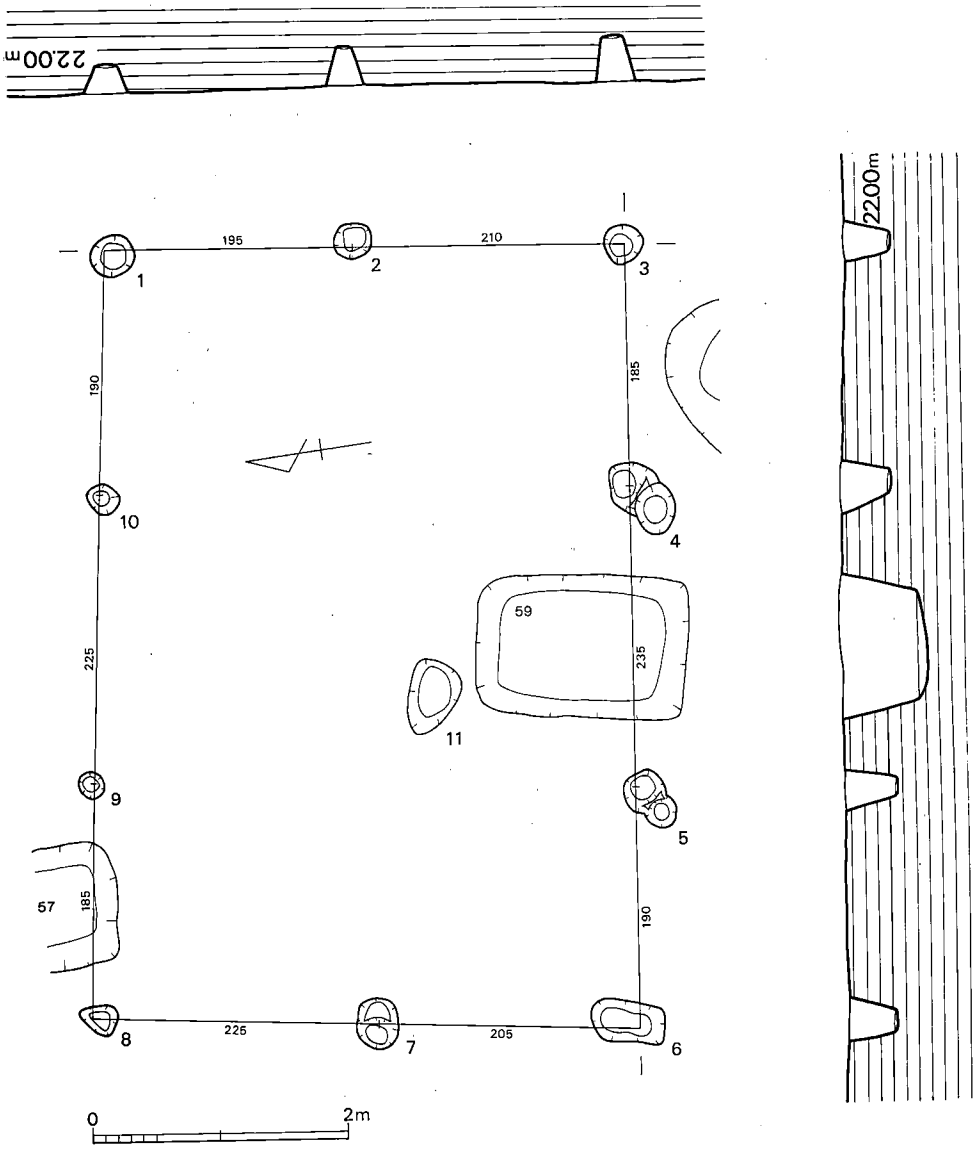


第 41 図 3号掘立柱建物跡実測図（1/60）

抜跡によってP8にあたる柱穴は欠失する。P3より7～8世紀代かと思われる土師器片が出土しているが図示にたえない。P1からは土錘が出土した。

出土遺物（第44図13）

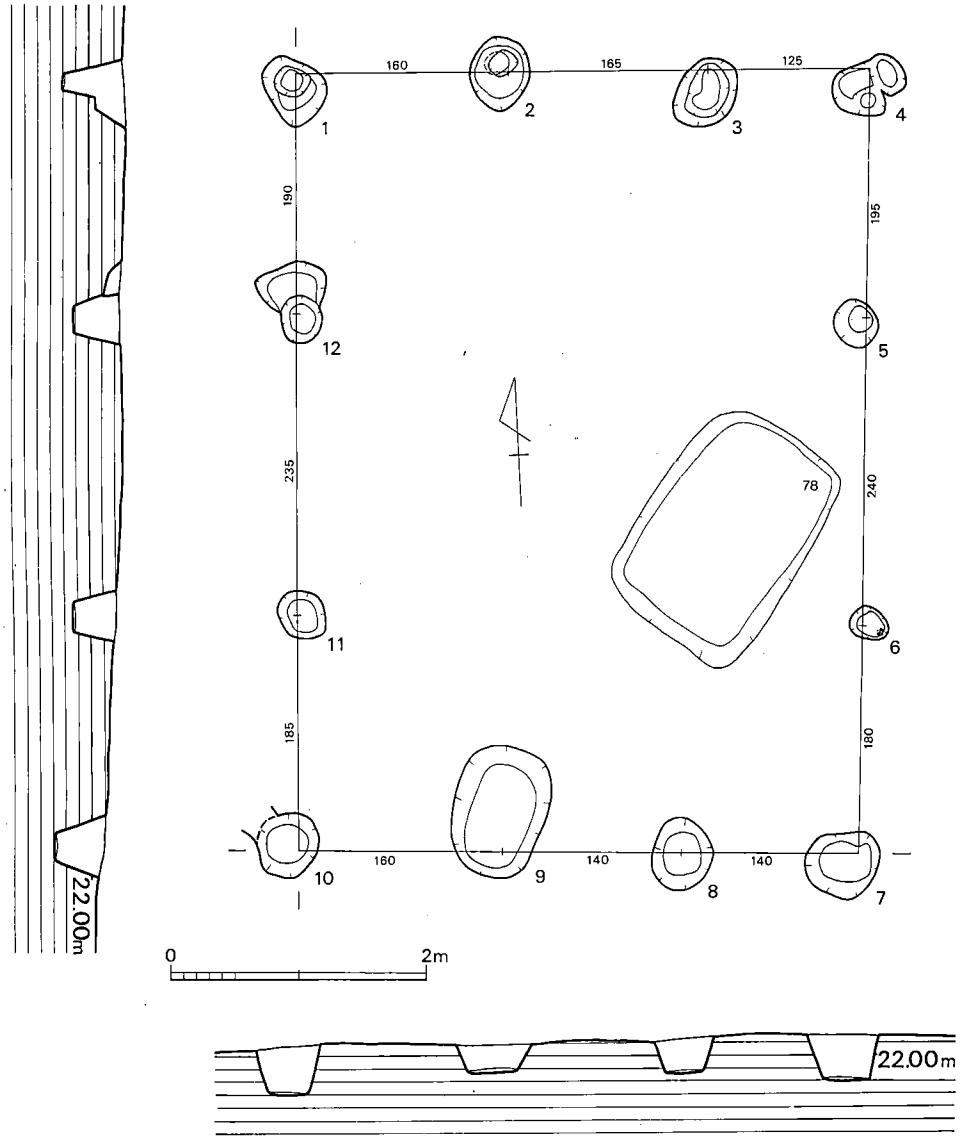
P1出土の管状の土錘で、全長5.4cm、最大径1.25cm、重さ6.75gを測る。直径4mm程の棒に、精選された粘土をねじりながら巻きつけて成形しており、ねじったときの縞模様が残る。



第 42 図 4号掘立柱建物跡実測図（1/60）

3号掘立柱建物跡（図版28、第41図）

2号建物跡の北にあり、4号建物跡とは2.5 m離れてその東側に位置する。2×3間の東西棟であり、主軸方位はP3－P6の柱筋でN－93°－Eとなる。梁行4～4.2m、桁行6.2mで西の梁行が少し長い。占有面積は20.6㎡。P12としたやや大きめのピットは補助柱として使っていたかもしれない。P5は65号土壙に切られている。P1より7～8世紀代らしい土師器甕片が出土したものの図示にたえない。



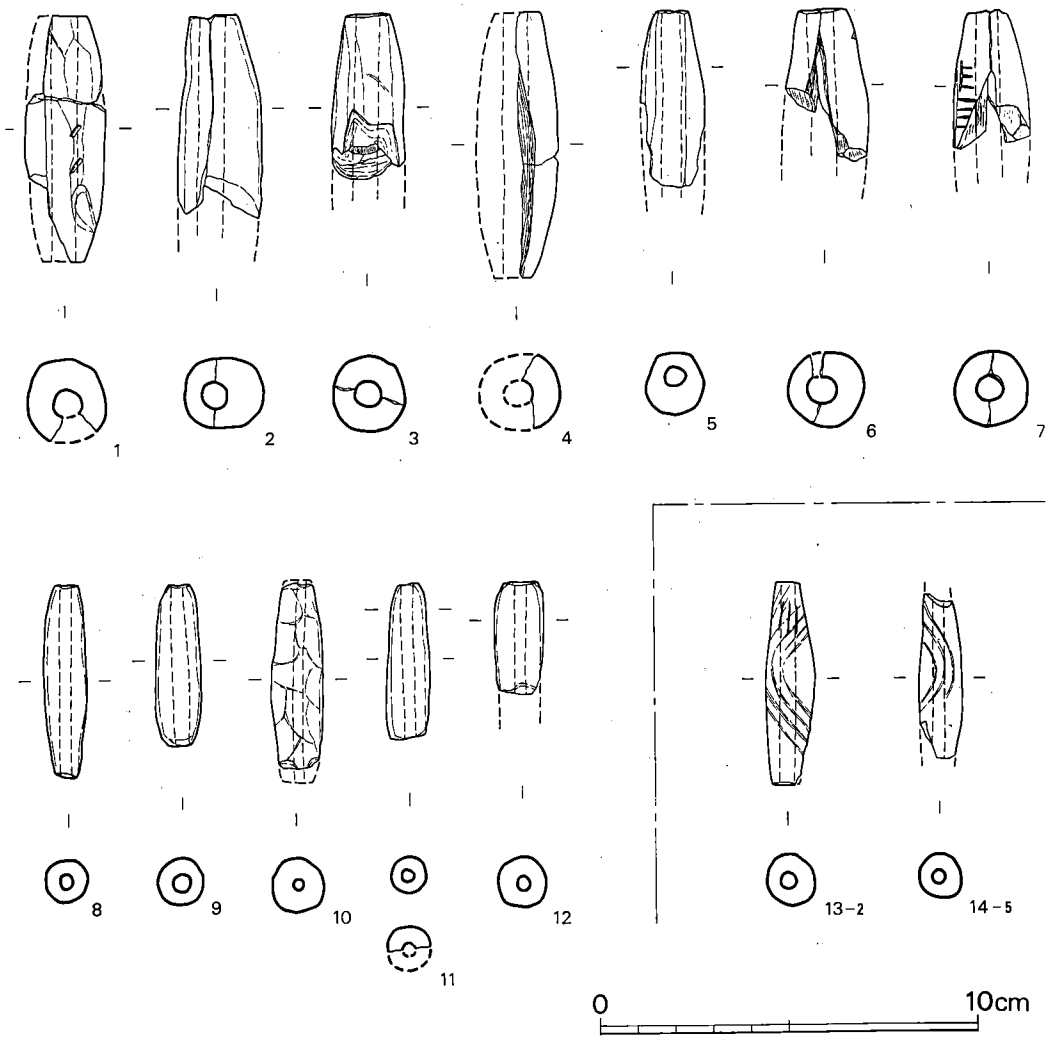
第 43 図 5号掘立柱建物跡実測図（1/60）

4号掘立柱建物跡（図版29、第42図）

3号建物跡の西隣りにある2×3間の東西棟の建物である。57・59号土壙と重複するが、柱穴との直接の切合いはない。柱穴はいずれもかなり小さめである。梁行4.1 ～4.3m、桁行は6～6.1mで西の梁行が少し長い。主軸方位はP3－P6の柱筋でN－98°－Eをとる。占有面積約20.5㎡。出土遺物は全くなかった。

5号掘立柱建物跡（図版30、第43図）

2号建物跡の東方にある3×3間の南北棟建物で、梁行4.4m、桁行6.1m前後の規模である。

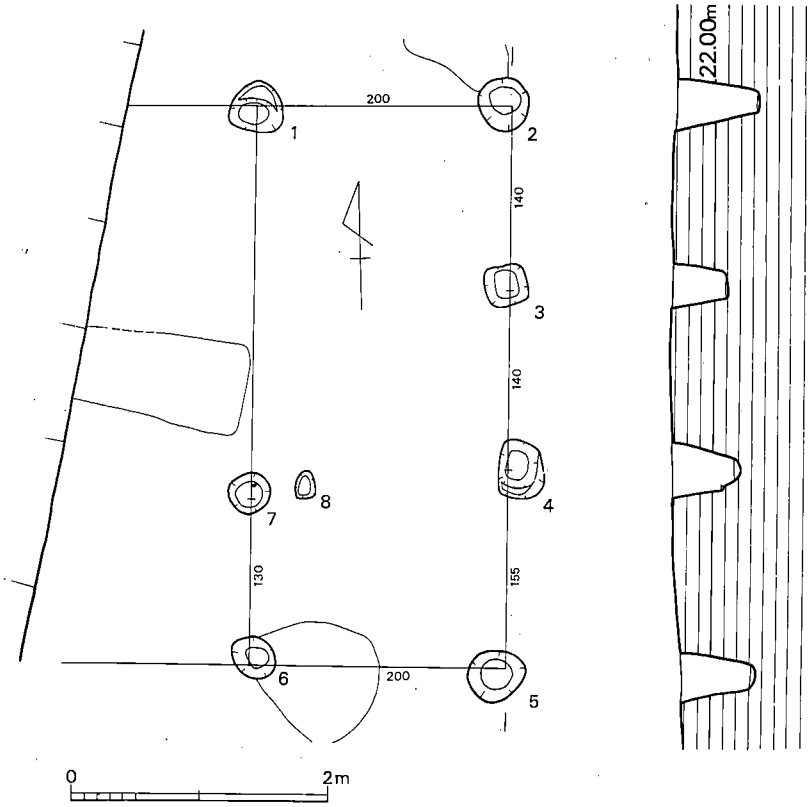


第 44 図 2・5号掘立柱建物跡，4号土壙出土土錘実測図（1/2）

P4－P7の柱筋でN－4°－Eの方位をとる。占有面積は約21.1㎡。この建物の廃絶後に78号土壙が営まれている。P1より土錘が1点出土したのみである。

出土遺物（第44図14）

P1出土の土錘で、両端部を欠失する。現存長4.4cm、重さ5.7g。体部中央にねじってできた粘土の縞模様があり、2号建物跡出土品と同様のつくりである。



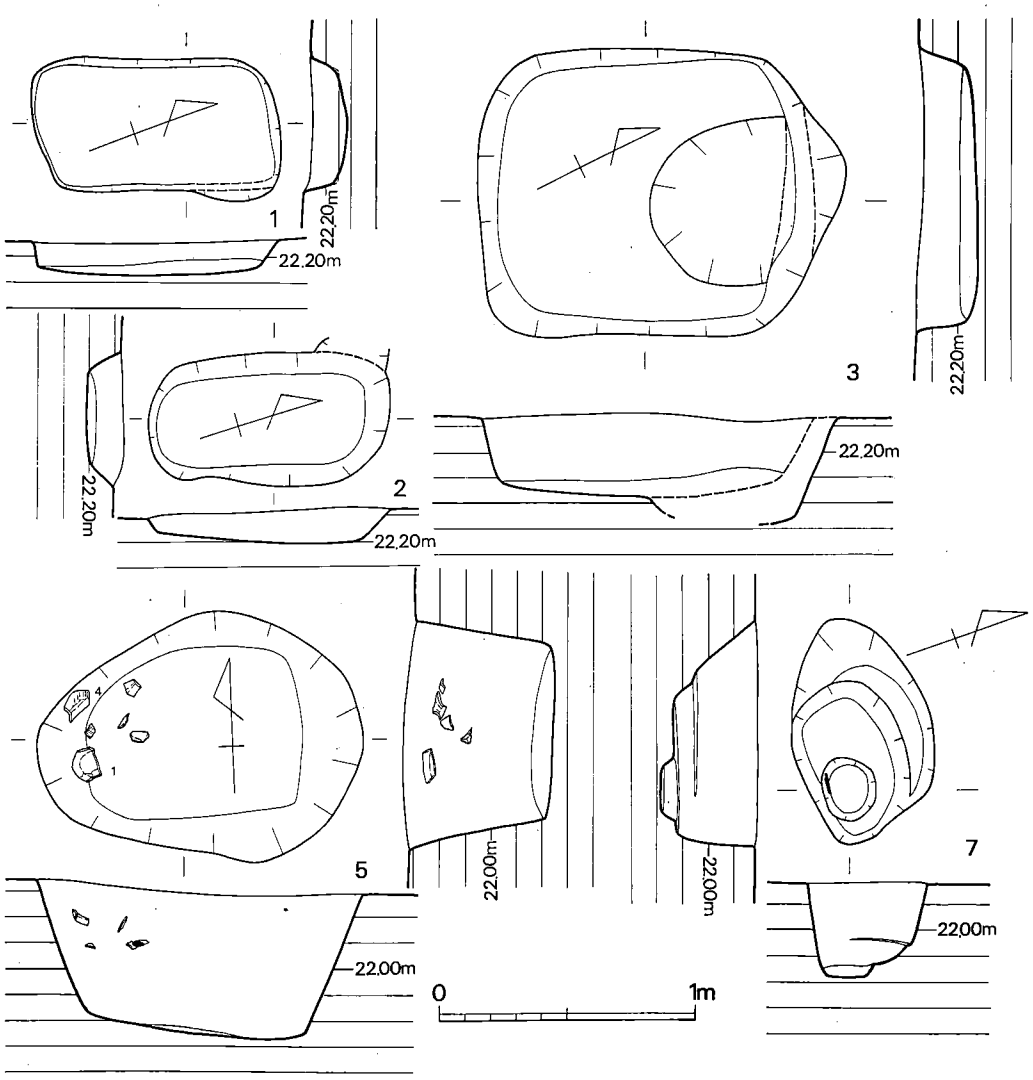
第 45 図 6号掘立柱建物跡実測図（1/60）

6号掘立柱建物跡（図版29・30、第45図）

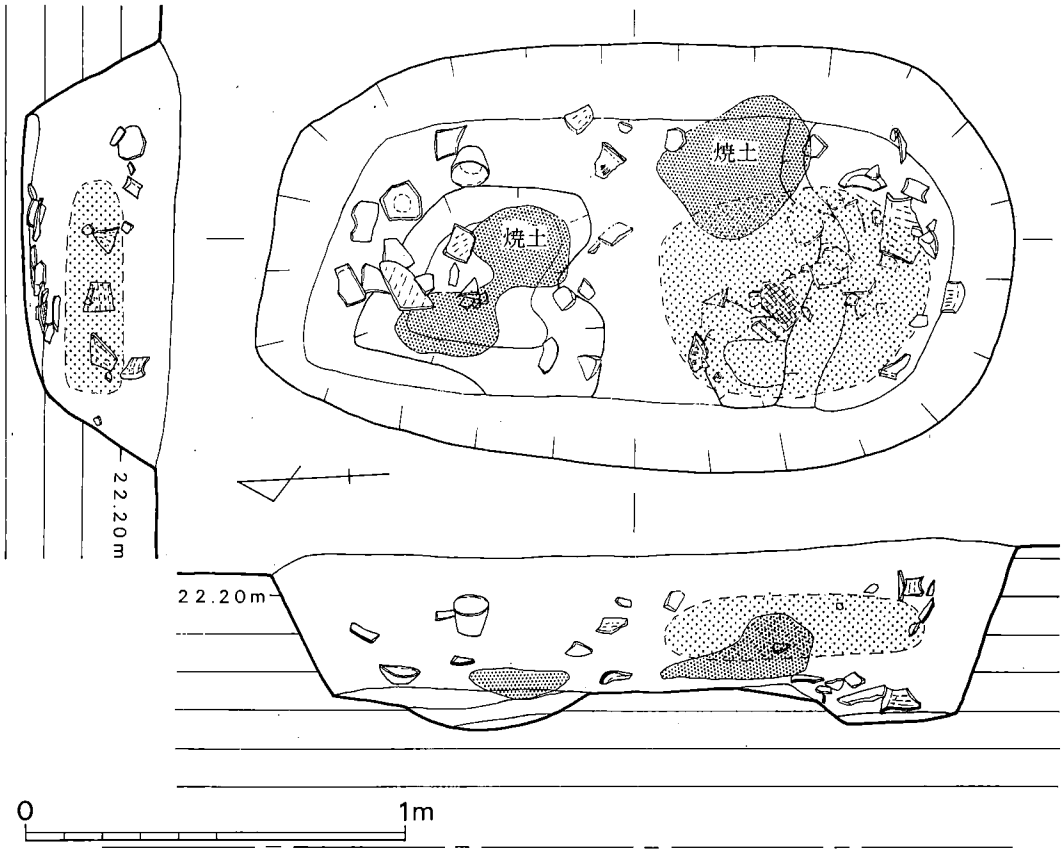
4号建物跡の西方にある。西半部が削平されて遺存しないが、梁行3間の4.45m、桁行もおそらく3間で6m強の東西棟建物であったと思われる。P2－P5の柱筋でN－3°－Eの方位を示す。P1から7～8世紀代の所産と思われる土師器甕の破片が出土した。（伊崎）

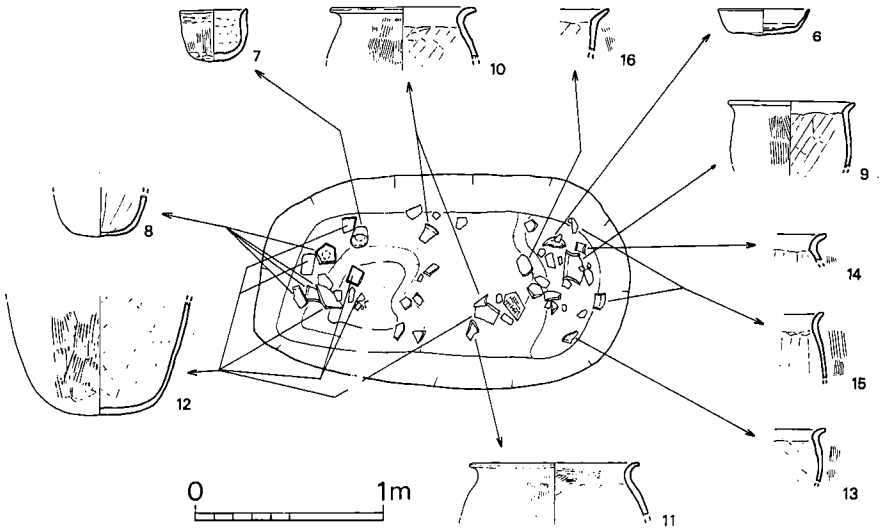
(3) 土 壙

A区に5基（15～19号）、B区に14基検出された。A区の5基は調査区に散在し、B区は掘立柱建物跡の周辺にまとまる。隅円長方形、長円形プランを呈す。4号土壙の主軸は3号掘立柱建物跡と直交し、出土した遺物からも関連した遺構と判断される。その他の土壙からの遺物は少量で、5・13号土壙が掘立柱建物跡群と近い時期が考えられる。6・12号土壙は近世の項で説明を加える。



第 46 図 1～3・5・7号土壙実測図（1/30）





第 47 図 4号土壙実測図 (1/20・1/40・1/6)

1号土壙（第46図）

B区中央削平部のすぐ東に位置し、9号溝と6号掘立柱建物跡に挾まれている。長軸方位N－19°45'－Eにとる。壙の法量および形状は、上縁長軸96cm、短軸51cm。底面は、長軸91cm、短軸45cm、ともに隅円平行四辺形を呈する。深さは12cmを測る。壙の断面形状は急傾斜の壁からやや膨らむ底部となる。埋土に木炭が多量に混入していた。出土遺物は皆無で時期は不明。

2号土壙（第46図）

B区で1号土壙の東6mほどで7号溝と9号溝の間に位置する。長軸方位をN－17°15'－Eにとる。壙の平面形状等は、上縁長軸長94.5cm、短軸52cm、底面長軸80.5cm、短軸35cmを測り、歪長円形を呈する。深さは、13cmと浅く、断面壁部で急傾斜を呈し、南北方向に膨らむ底部となる。遺物は出土しなかった。

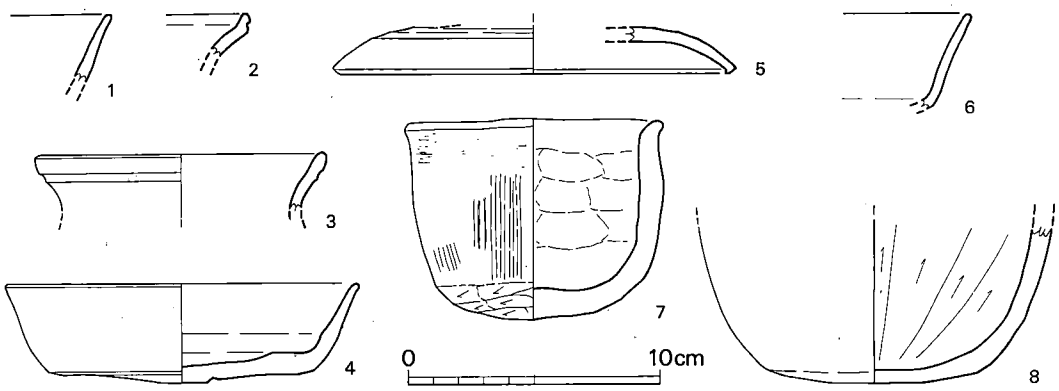
3号土壙（第46図）

2号土壙の東3mで、長軸方位N－26°－Eにとる。壙の形状等は、長軸部の一方が攪乱を受け明確でないが、しかし上縁推定長軸長132cm、短軸111cm、底面推定長軸111cm、短軸99cmの隅円方形を呈する。深さは32cmである。断面の形状は急傾斜を呈する壁からレンズ状に膨らむ底面となる。遺物は出土しなかった。（平島）

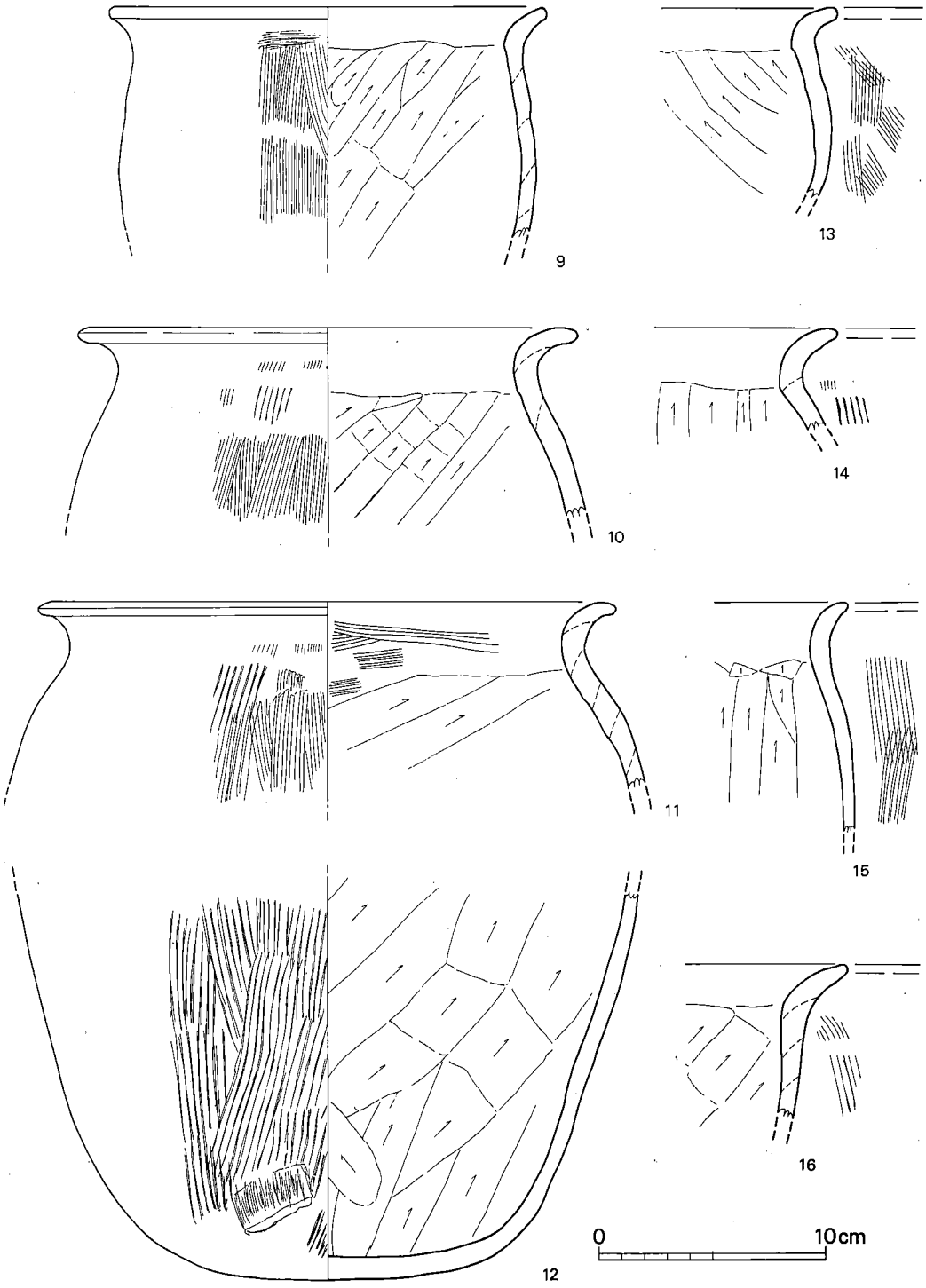
4号土壙（図版31、第47図）

B区東半部で7号溝と8号溝にはさまれた中、3号土壙と8～10号土壙との間にある。これの南には8号溝を隔てて3号掘立柱建物が位置する。

南北に長い楕円形プランで、短軸101cm、長軸200cmを測る。検出面から壙底まで35cmの深さであるが、南北両端にはそれより一段低くなった部分がある。埋土中には多くの土器片が



第 48 図 4号土壙出土土器実測図1（1/3）



第 49 図 4号土壙出土土器実測図2 (1/3)

入っていたが、層として集中することはなく、上下層に一様に出土した。焼土の塊も見られた。特に注目されるのは南半部の埋土中位あたりから土錘がまとまって出土したことである。ほとんど全てが破損しており、土器も含めて、不要になった物品をまとめて投棄するために掘られた土壙であったと思われる。8世紀中葉に比定される。

出土遺物（図版33、第48・49図）

須恵器は杯・椀・甕・平瓶、土師器は壺・高杯・甕があり、土錘は2.95kgもの重量にあたる破片が出土した。

須恵器（1～4）　1・4は杯である。4の外底部はケズリのあとにナデを施し、ヘラ記号がある。復原口径14cm、器高3.9cm。2・3は壺か平瓶の口縁になろう。

土師器（5～16）　5は須恵器を模倣した杯蓋で、口縁部の断面は三角形を呈する。6は高杯の杯部であろう。7～16は甕で、小型から大型まである。7は完形品であり、粘土塊から引き出した手づくねである。外底部は手持ちのヘラケズリが施される。口径9.1～10.2cm、器高7.9cm。8は安定感のある底部で、口頸部の破片もあるが接合しない。9は最下層から出土した。復原口径19.2cm。10は外反度の著しい口縁を有し、復原口径22cm。11は大型品で、復原口径25.4cm。12はやはり大型品の胴下半部であり、外面は刷毛目というよりは木の小口による擦過とした方が適当である。13～16は口縁部から胴部にかけての破片で、ともに内面はヘラケズリ、外面は刷毛目を施している。

土　錘（第44図1～12）　2.95kgのうち、小口部分が少しでも残っている破片は552点あった。またその中で約半分が残存するのは146 点であった。これらを勘案するに、100～150個体はあるものと考えてよいだろう。いま図示するのは12点である。これらは形状と大きさによって2種類に分けられる。

Ⅰ類（1～7）　全長6.5～8cm程、最大幅が約1.7～2.2cmになるものである。孔の中に縦長の条線が見えるものがあるので、おそらく竹を芯棒としてそれを2枚の粘土板で包んで成形しているらしい。外面の調整は一部にケズリを見るが、多くはミガキに近いナデである。7の外面には条線風の圧痕がある。

Ⅱ類（8～12）　全長4.2～5.4cm、最大幅1.1～1.3cm程の大きさのものである。芯棒に粘土を巻きつけてのち表面をケズリ、そのあとなでて仕上げているのが大半である。10は粘土を押さえつけたままで成形をおえている。　（伊崎）

5号土壙（図版33、第46図）

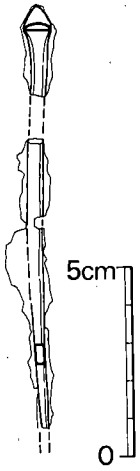
4号掘立柱建物跡のすぐ南で3号土壙の南11mに位置する。長軸方位をN－87°45′－Wにとる。壙の形状等は、上縁長軸長が128cm、短軸90cmで卵形を呈し、底面は長軸85cm、短軸66cmの半長円形を呈する。深さ57cmを測る。断面は壁急傾斜を呈し、やや膨らみをもつ底

面となる。遺物に壙中位層から、須恵器高台付杯と土師器甕が出土した。奈良時代である。

出土遺物（図版33、第51図1・4）

須恵器（1） 高台付の杯である。内外面口縁部から体部にかけて回転ナデ、内面底部ナデつけを施す。口径13.8cm、器高5.1cm、高台径9cmを測る。淡灰色を呈し、焼成ややあまい。

土師器（4） 小形の甕である。内面頚部から肩部にかけてヘラ削り、外面ハケ、口縁部は横ナデを施す。口径15.8cmを測る。淡橙色を呈し、胎土に細砂粒を含む。焼成良。しかし、やや磨滅気味である。



第50図 7号土壙出土鉄鏃実測図（1/2）

7号土壙（第46図）

2号掘立柱建物跡の西で6号土壙の南4mに位置する。長軸方位はN－69°30′－Wをとる。壙の形状等は、上縁長軸87cm、短軸56cmの歪卵形を呈する。小形のものである。底面は、3段に穿たれている。壙内から鉄鏃と甕片が出土した。深さ最大38cmを測る。断面は、平坦なピット部から2段経て急傾斜を呈する壁となる。時期は奈良時代であろう。

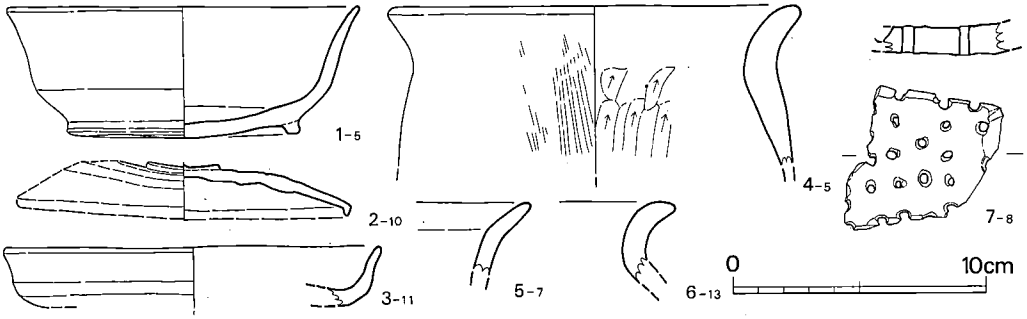
出土遺物（第50・51図5）

土師器 極小の甕破片である。内面灰味淡橙色、外面淡褐色を呈する。胎土に細砂粒を若干含み、焼成は良い。現存部全面横ナデが施される。

鉄 鏃 片丸造の細根篦被鑿箭式で2本に折攪している。茎部銹出著しい。

8～10号土壙（図版34、第52図）

B区東側の調査区中央で北東調査区境に検出された。土壙の重複遺構で、切り合い関係は10→9→8号土壙となり、8号土壙が最も新しい。8号土壙は、壙の南半で大半が調査区外であり、測定可能な部分で北西～南東幅上縁で250cm、底面190cmで、歪円形を呈する。また調査区



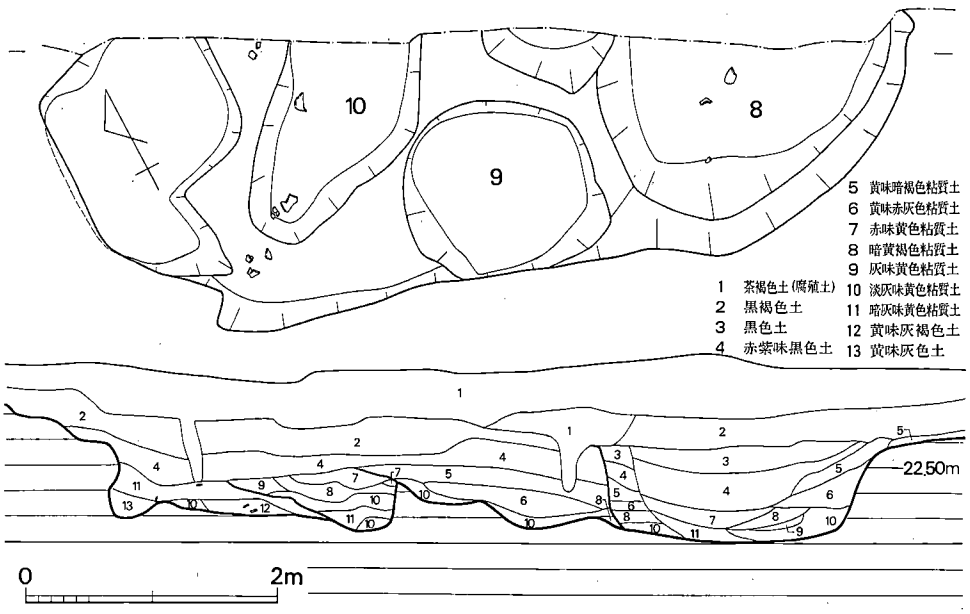
第 51 図 5・7・8・10・11・13号土壙出土土器実測図（1/3）

壁の土壌堆積状況観察により、壙が第1次堆積の跡に再度穿たれて、構築されていることが知れた。また底部から甑の底部片や甕片等が出土した。断面は、深さ78cmで急傾斜の壁面からやや膨らむ底面となる。9号土壙は壙中央部南に位置する。長軸方位をN－78°－Wにとる。壙の形状等は、上縁長軸が152cm、短軸141cmの歪円形で、底面は長軸125cm、短軸127cmの隅円台形を呈する。断面は、深さ72cm、壁面急傾斜でレンズ状に膨らむ底面となる。10号土壙は、8・9号土壙を包み込むように位置する。これも8号土壙同様に、大半が調査区外となる。壙の形状等は、推定長軸長上縁で540cm、底面500cmで、不整長円形を呈する。断面は深さ72cmで急傾斜の壁から凹凸のある底面となる。底面の凹凸であるが、これは、調査区壁の壙内堆積土観察により、10号土壙が3期にわたり、掘りかえられたために生じたことが知れた。当初の10号土壙の壙内が堆積土で充満したのち壙の南東側を掘り下げ壙を構成することをくりかえしている。第1期の堆積土の中から須恵器杯蓋片と、土師器甕片が出土した。時期は8世紀頃である

出土遺物（図版34、第51図2・7）

須恵器　2は坏蓋で10号土壙の第1期堆積層中より出土した。小破片で、復原口径13cm、高さ2.1cmを測る。外面天井部から体部は回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。灰白色を呈し、胎土に砂粒を少量混入する。焼成良。

土師器　7は甑で、底部の小破のみである。8号土壙の下層より出土した。淡褐色を呈し、胎土



第 52 図　8～10号土壙実測図（1/60）

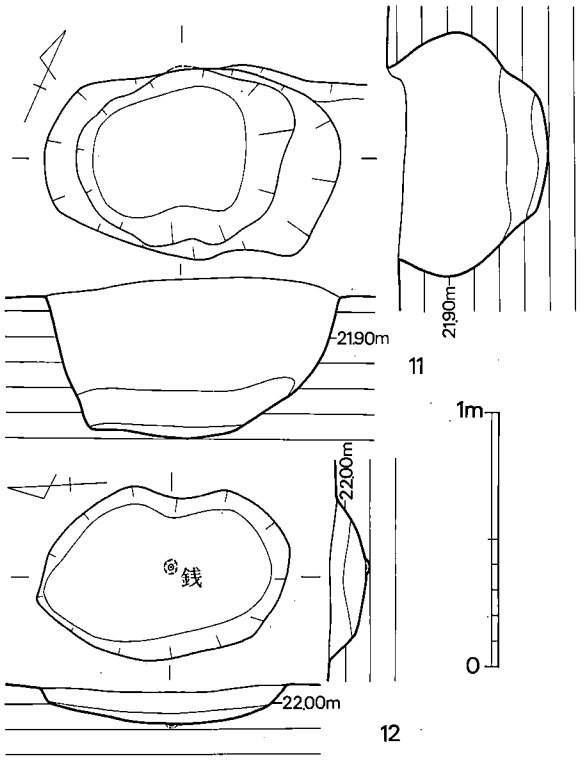
に砂粒を若干含んでいる。焼成は良好である。

11号土壙（第53図）

3号掘立柱建物跡の南側で、近年攪乱穴の中に残っていた。長軸方位をN－65°45′－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸118cm、短軸74cm、底面長軸60cm、短軸46cmを測り、不整長円形を呈する。断面は深さ63cmでダルマ状を呈する。また、上層で出土して、ともなうものであるか、明確ではないが土師器杯が出土した。平安時代に下ろう。

出土遺物（第51図3）

土師器　7号土壙の上層で攪乱層とやや混在する部分で出土した杯の小破片で、復原口径15cm、推定器高2.4cm。内外面ともに回転ナデを施す。淡褐色を呈し、胎土精良にして焼成堅緻である。



第　53　図　11・12号土壙実測図（1/30）

13号土壙（第54図）

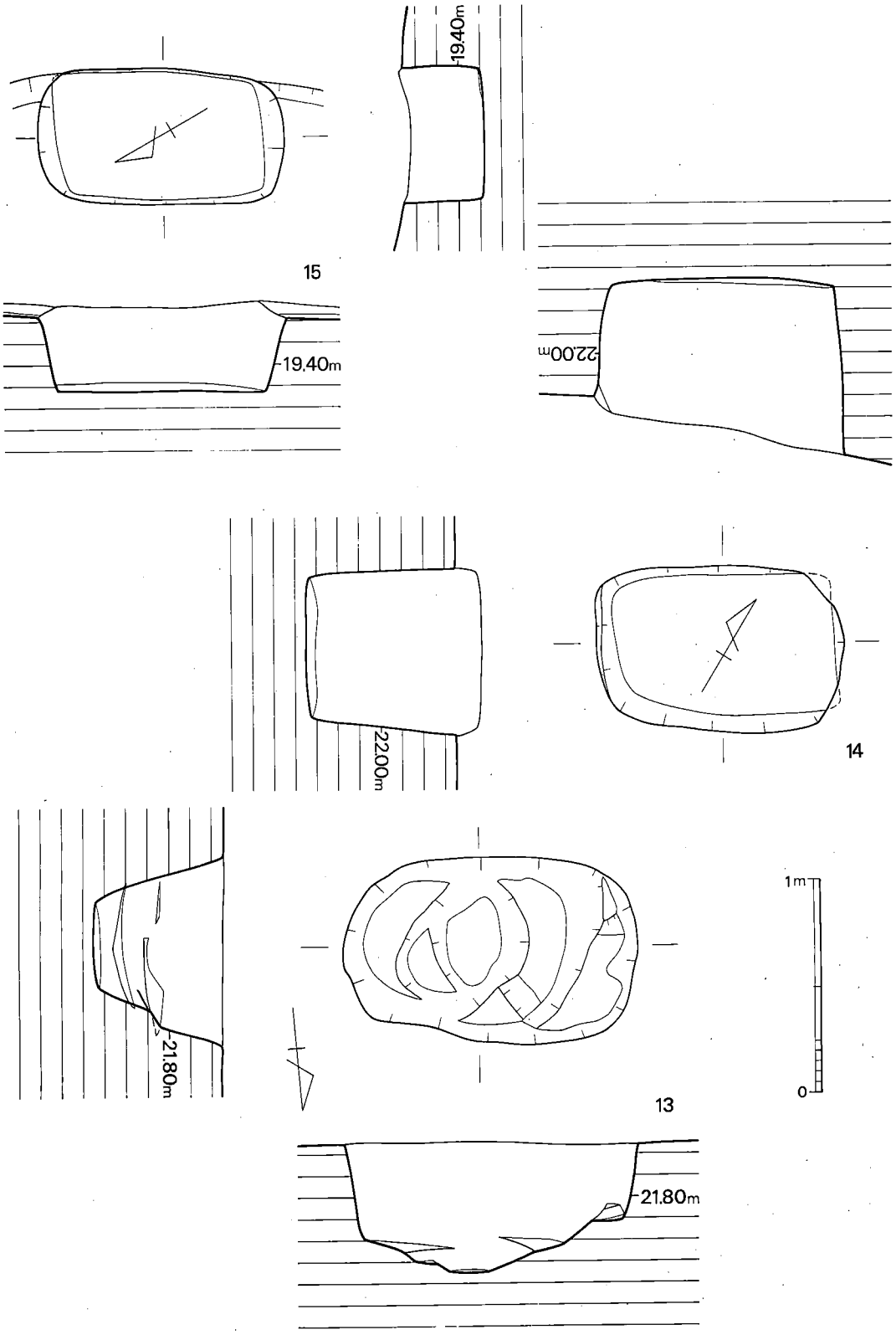
5号掘立柱建物跡の西で2号掘立柱建物跡のすぐ南に位置する。長軸方位をN－84°45′－Wにとる。壙の形状等は、上縁長軸137.5cm、短軸85cmで歪長円形を呈する。底面は幾段も有し、最底面は、長軸26cm、短軸42cmを測り、上縁とは直交している。また平面形状は米粒形を呈する。断面は、深さ60cm、壁面は急傾斜で緩く段落ちし、平坦な底面となる。埋土より土師器甕の小破片が出土している。

出土遺物（第51図6）

土師器　甕の口縁部の極小破片である。全体に横ナデで、内面頸部下はヘラ削りが見られる。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成はややあまい。

14号土壙（第54図）

1号掘立柱建物跡の北東に位置し、長軸方位N－58°30′－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸116cm、短軸77cm、歪長円形を呈し、底面長軸102cm、短軸65cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ79cm、ほぼ直立する壁面から平坦な底面となる。遺物は出土していない。



第 54 図 13～15号土壙実測図（1/30）

15号土壙（第54図）

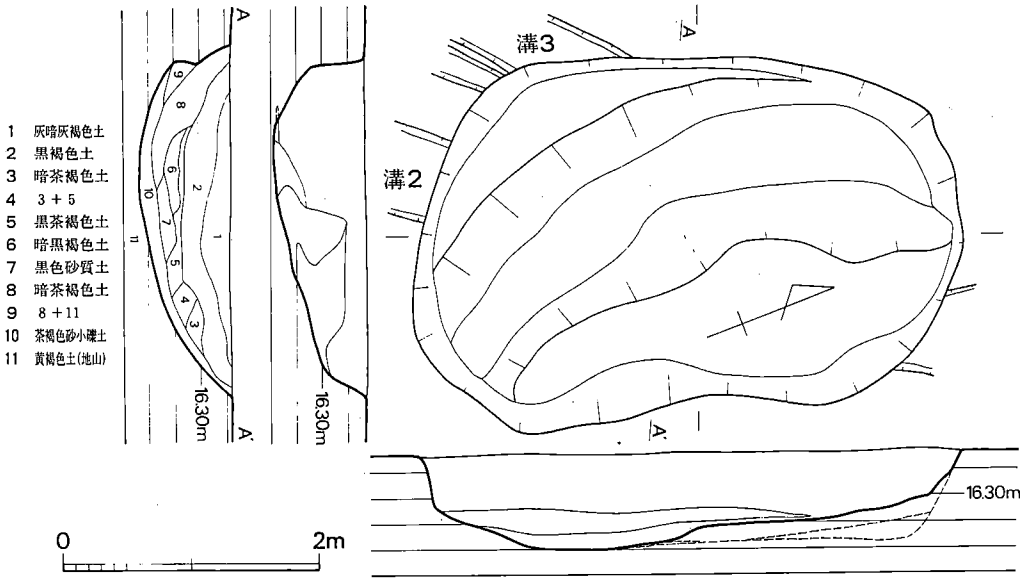
B区の東端に位置し、略南北に走る10号溝を切っている。長軸方位はN－30°－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸115cm、短軸63cm。底面長軸96cm、短軸60cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ42cm、直立した壁面から平坦な底面となる。遺物は出土していない。

16号土壙（図版35、第55図）

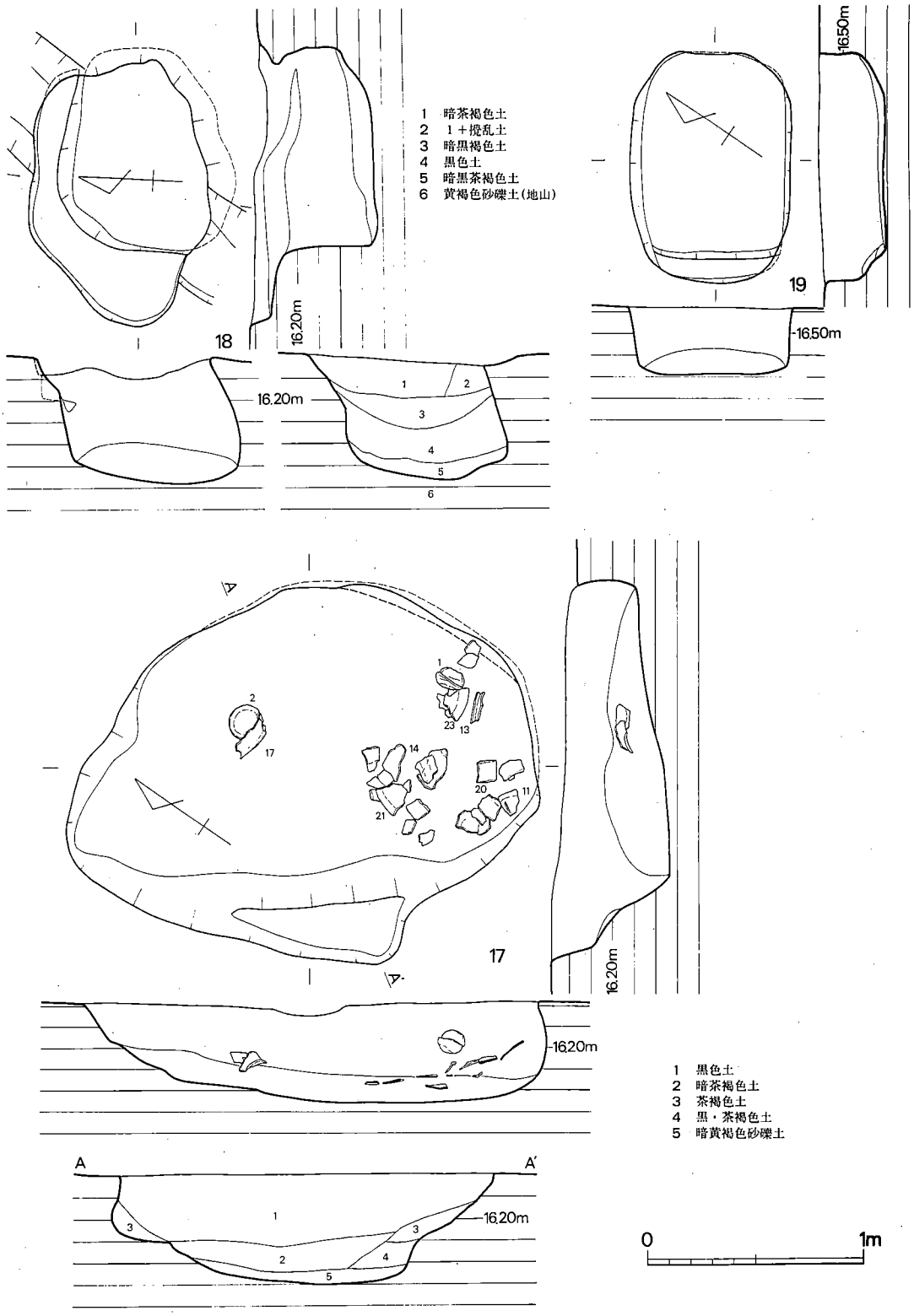
A区の北端中央に位置し、2・3号溝を切っている。長軸方位はN－21°15'－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸212cm、短軸132cmの不整長円形を呈する。底面には、ほぼ中央部に西に膨み弧を描く、幅150 ～110cm、深さ15cmほどの溝状の凹みがある。しかし、これは、壙自体の機能を大きく左右するものではないであろう。底面の規模は、長軸200cm、短軸117cmを測る不整長円形を呈する。深さ37cmを測り、壁面急傾斜を呈し、下位に膨らむ底面となる。遺物は出土していないが、切り合い関係から古墳時代後期より新しい。

17号土壙（図版36、第56図）

A区南寄りで1号溝のすぐ西に位置する。長軸方位をN－35°－Wにとる。壙の形状等は、上縁長軸222cm、短軸174cm、底面長軸221cm、短軸131cmを測る歪長円形を呈する。深さ46cmを測り、北から南東にかけて袋状を呈し、他はほぼ直に立つ。底面は、やや不整ではあるが膨みをもつ。壙内より多種多量の土師器が出土した。7世紀後半頃に比定される。



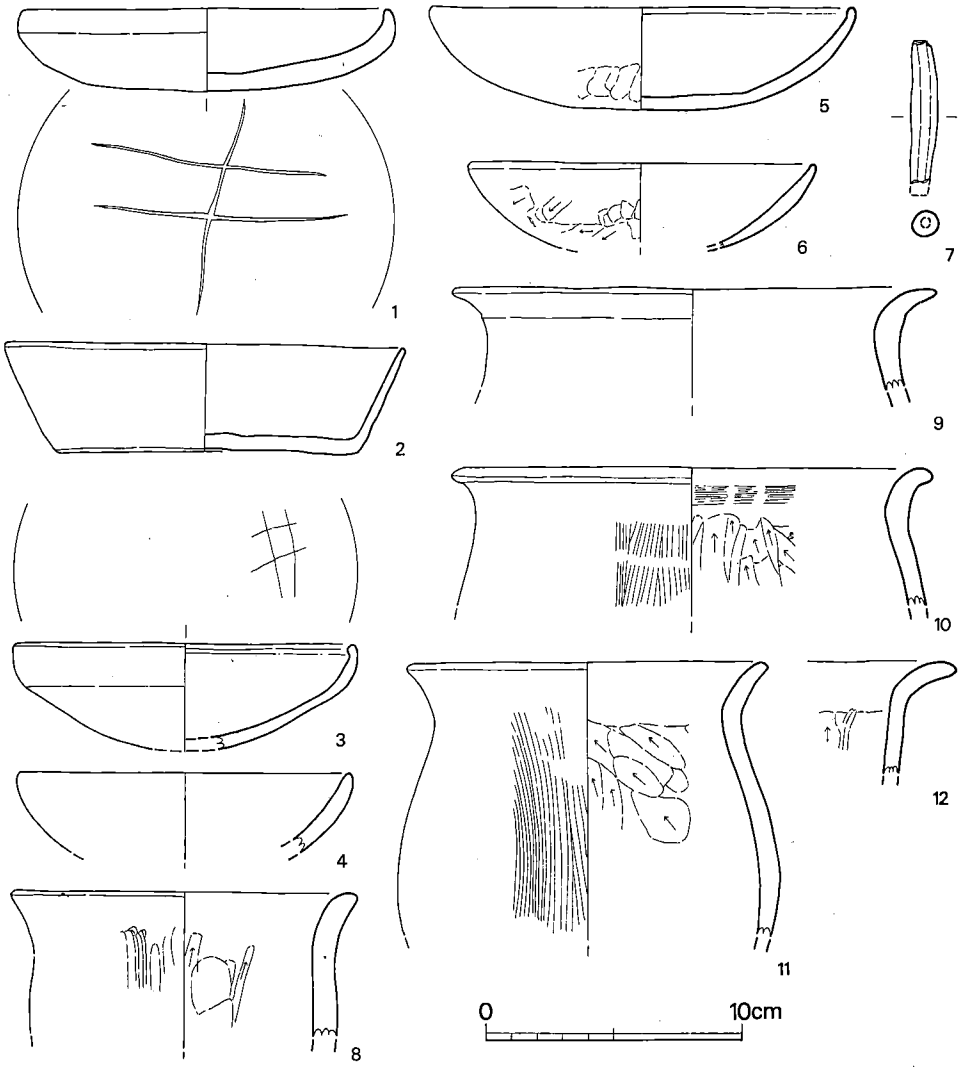
第 55 図 16号土壙実測図（1/60）



第 56 図 17～19号土壙実測図 (1/30)

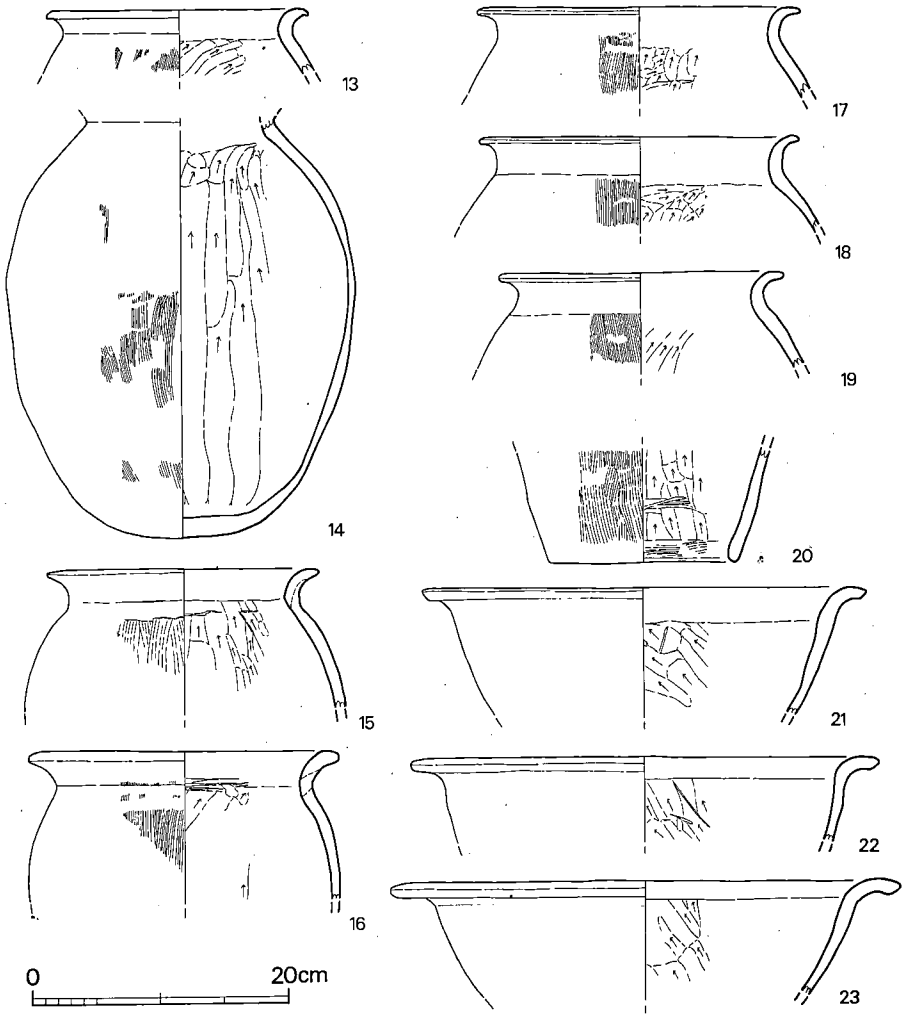
出土遺物（図版37、第57・58図1～23）

土師器　1～6は杯で、1は内面赤褐色、外面にごった淡橙色を呈す。胎土は精良で焼成良。体部内面一方向からのナデつけ、外面無造作なヘラ削り、口縁部は横ナデを施す。外面底部に「≠」状のヘラ描きがある。口径14.2cm、器高3.2cmを測る。2は底部ヘラ切りを施す。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。焼成良。法量は、口径15.5cm、底径11.8cm、器高4.3cmを測る。3・4・6はいずれも小破片で、ともに復原口径13cmほどで濃い橙色を呈する。3は内面底部に「#」状のヘラ描きを施す。6は外面底部手持ちによるヘラ削り、他はナデが施される。5は、他



第　57　図　17号土壙出土土器実測図1（1/3）

と比して大形のもので復原口径16.4cm、器高4cmを測る。内面淡灰色から淡橙色、外面淡褐色から淡橙色を呈する。胎土、焼成良。器面は、外面体部下半から底面が手持ちヘラ削り、他はナデ、横ナデである。8～19は甕。8・11は小形のものである。8は口縁部から体部上半の破片で内面明褐色、外面くすんだ明褐色を呈する。胎土に少量の微砂粒を含む。口縁部横ナデ、頸部下は外面ヘラ磨き、内面ヘラ削りの後一部をナデつけている。11も小破片で、淡橙色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。焼成はあまく器壁が一部磨滅している。口縁部横ナデ、頸部下は内面ヘラ削り、外面縦方向のハケを施す。12は口縁部のみの小破片で、内面暗灰色、外面淡褐色を呈する。胎土に少量の微砂粒を含む。口縁部横ナデ、頸部下は、内面ヘラ削り、外面縦方向に磨いている。9・10・13～19は、おおむね淡褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良



第 58 図 17号土壙出土土器実測図2 (1/6)

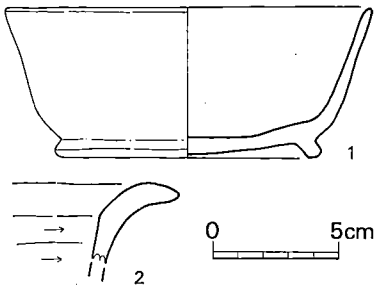
である。調整は口縁部横ナデ、頸部下内面、縦または斜位方向のヘラ削り、外面縦方向のハケを施す。15は、頸部に製作時の粘土継目が残る。また16は、頸部に横方向に数条の工具痕と思われるものが残る。20は甑の底部のみの破片で、底部端部は横ナデ、内面のみ横方向ハケを施し、それより上位は内面縦方向ヘラ削り、外面縦方向ハケを施す。復原底径は14.4～15.0cmの楕円形気味を呈する。21～23は鉢で、いずれも淡褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。焼成は良。口縁部横ナデ、頸部下内面ヘラ削り、外面磨き、21は赤色スリップがけを施す。

土　錘（7）　淡褐色を呈し、胎土が精良であるので質が良く感じる。この土壙では、1点のみ出土した。

この土壙から出土した土器は、上層、下層にかかわらず接合した。このことは、この土壙が短期間に埋没、もしくは埋設されたものであろう。

18号土壙（図版36・38、第56図）

17号土壙のすぐ南に位置し、長軸方位N－87°－Eにとる。壙は、上縁長軸121cm、短軸80cmの不整形を呈する。底面は、最下部で長軸91cm、短軸75.5cmを測る。また、30cm程上部に北から西にかけ段をもつ。深さ56cm、東から南へかけて袋状の壁となり、他は直立する。上層より高台付杯が出土している。8世紀頃と思われる。



第59図　18号土壙出土土器実測図（1/3）

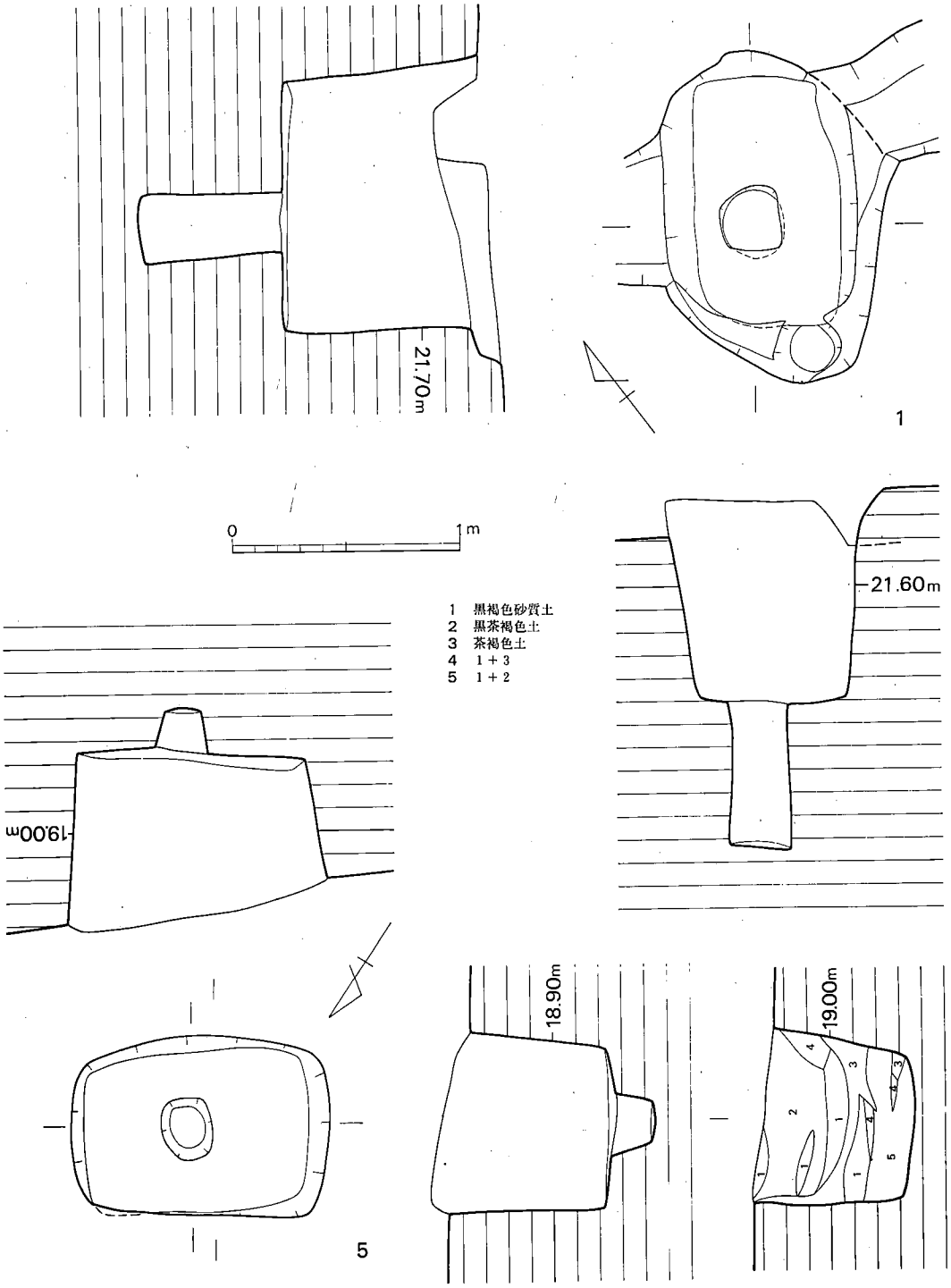
出土遺物（第59図）

須恵器（1）　杯で淡灰色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。焼成ややあまい。口径14.4cm、高台径9.8cm、器高5.9cmを測る。

土師器（2）　鉢で口縁部の小破片である。淡橙色～淡褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。焼成ややあまい。

19号土壙（図版38、第56図）

A区南西端に位置する。長軸方位N－56°15′－Eをとる。壙の形状等は、上縁長軸105.5cm、短軸75cm。底面長軸91cm、短軸67cmを測る。南西側に高さ10cmほどの浅い段を持ち、長円形を呈する。深さ30cm、壁は直立し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



第 60 図 1・5号ピット実測図 (1/30)

(4)　ピ　ッ　ト

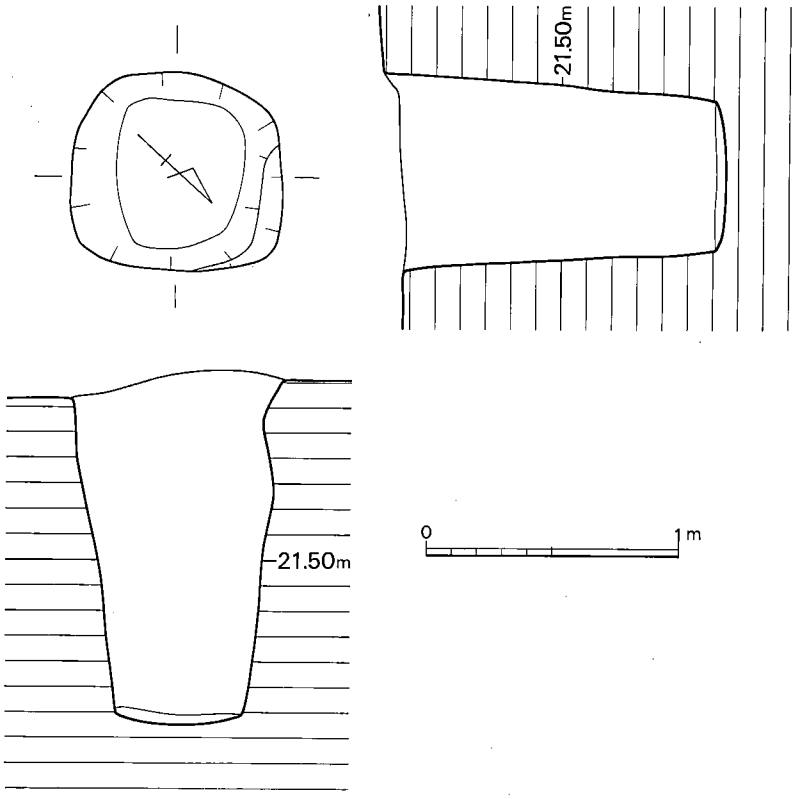
A区から1基（6号）、B区から5基（1～5号）の6基を検出した。プランは不整円形を呈すものが多く、5号ピットが72cmと最も浅く、4号ピットは147cmを測る。壁が垂直に近く立ち上がるのが特徴で、1・5号ピットの底面には小穴を穿つ。分布状態は2～5号ピットが列状をなす。

1号ピット（図版39、第60図）

B区の西側で7号溝に切られている。長軸方位N－37°－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸136cm、短軸94cmの不整形を呈する。底面は長軸109cm、短軸63cmの長円形を呈する。中央に直径25cm、深さ65cmのピットをもつ。断面は、深さ97cmで壁面が直立し、平坦な底面となる。壙の構造から「落し穴」であろう。

2号ピット（第61図）

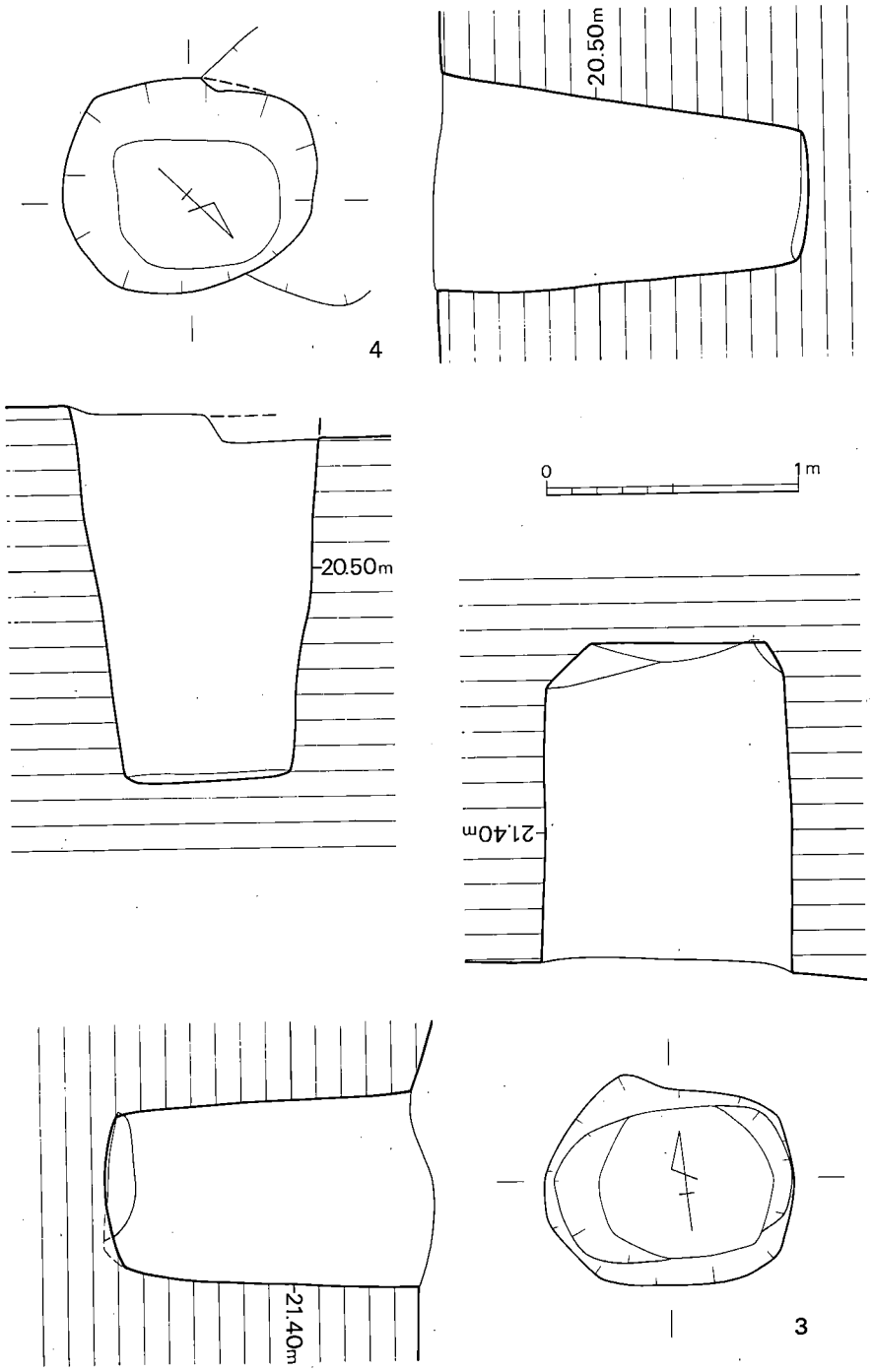
5号掘立柱建物跡の東3mほどに位置する。長軸方位をN－38°45'－Wにとる。壙の形状等は、上縁長軸83.5cm、短軸78cm、底面長軸50cm、短軸58cmで隅円方形を呈する。断面は円柱形を呈し、深さ132cm、直立する壁面から平坦な底面とつながる。



第　61　図　2号ピット実測図（1/30）

3号ピット（図版39、第62図）

2号ピットの南10mほどで10号溝の直北に位置する。長軸方位はN－83°30'－Wにとる。壙の形状等は、上



第 62 図 3・4号ピット実測図 (1/30)

縁長軸98.5cm、短軸77.5cmの歪長方形を呈し、底面は長軸69cm、短軸58.5cmで歪円形をなす。
深さ127cmで直立する壁、平坦な底面を呈する。全体に円柱状を呈する。

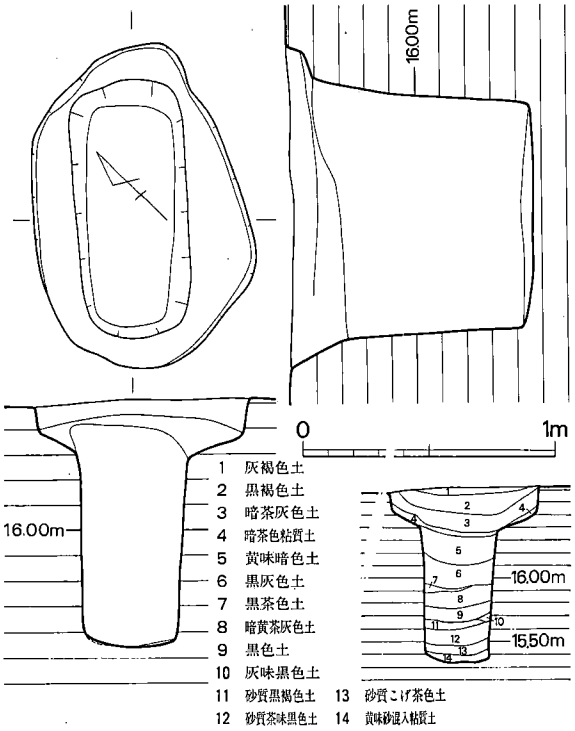
4号ピット（第62図）

3号ピットの南で10号溝を挟んで位置する。これも2・3号ピットと同様に円柱状を呈する。長軸方位をN－44°－Eにとる。壙の形状は、上縁長軸98cm、短軸85cmの歪卵形を呈し、底面長軸64cm、短軸50.5cmを測り、長円形を呈する。断面は、深さ147cm、直立する壁と平坦な底面となる。

5号ピット（第60図）

4号ピットの南13mほどに位置する。これは、1号ピット同様に壙底面中央に小穴をもつタイプのものである。長軸方位N－55°30′－Eにとる。形状は、上縁長軸113.5cm、短軸78cm。底面長軸99cm、短軸68cmを測る隅円長方形を呈する。深さは72cmを測り、直立する壁から平坦な底面となる。小穴は直径25～23cm、深さ20cmの長円形を呈する。

6号ピット（図版39、第63図）



第 63 図 6号ピット実測図（1/30）

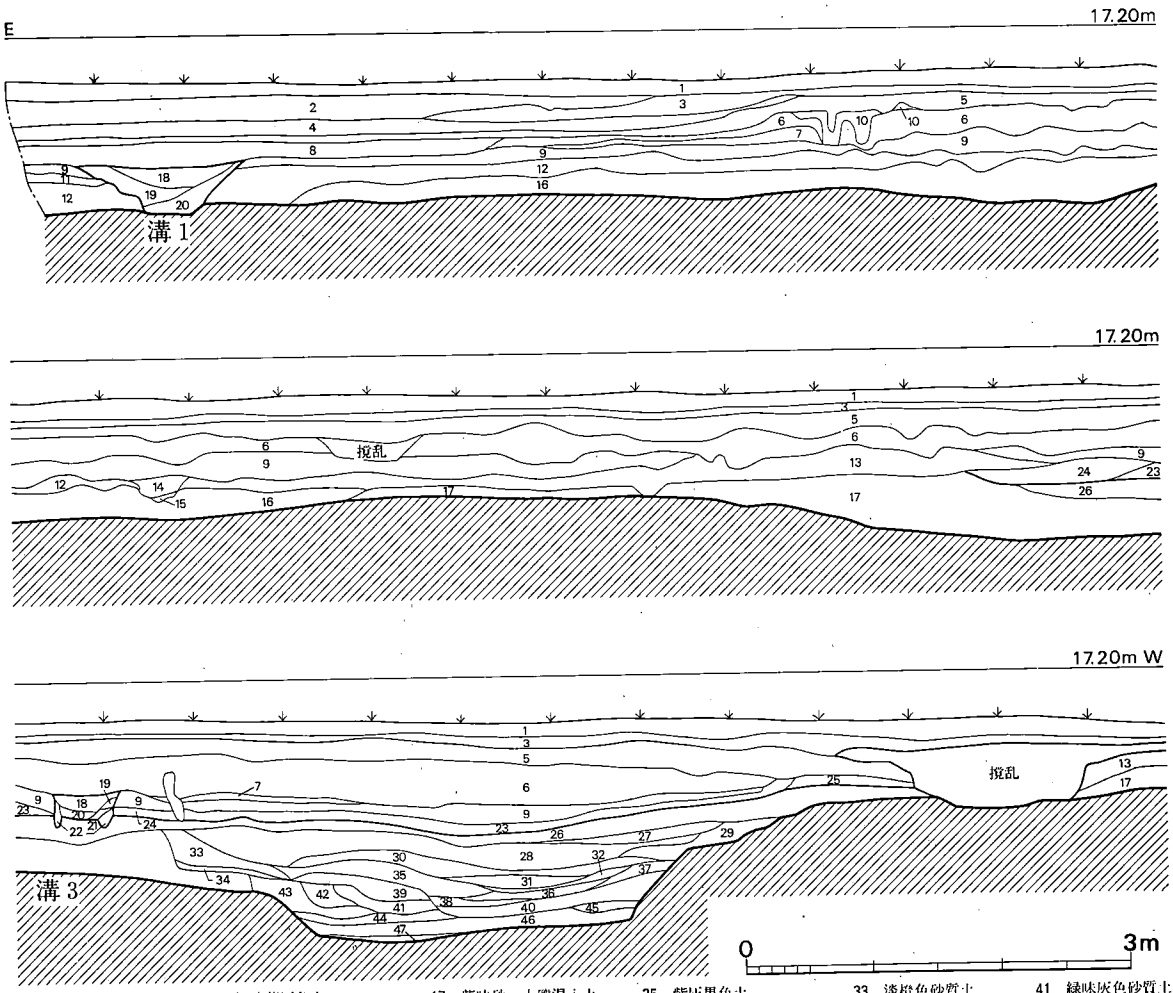
A区の中央で3号溝の西4mに位置する。長軸方位をN－45°－Eにとる。形状は、深さ20cmほどの浅い1段目と深さ80cmほどの2段目の2段掘りとなり、1段目の上縁長軸は127cm、短軸84cm、底面長軸125.5cm、短軸81cmを測る歪長円形を呈する。2段目は、上縁長軸104cm、短軸44cm。底面長軸89cm、短軸35cmの長円形を呈する。断面に直立する壁とややレンズ状に膨らむ底面となる。堆積は、順層の自然堆積である。

いずれも出土遺物は皆無であり時期を決定することはできない。しかし、壙内の堆積土は暗黒褐色土あるいは黒色土であり、13・14号土壙内の堆積土と同じである点から、これらの時期とほぼ同時期の奈

良時代頃と考える。また性格については、壙内に小穴をもつ1・5号ピットは明らかに「落し穴」と考えられる。また6号ピットも、壙内に小穴をもたないが、細長い壙の形状は、小動物の動きを静止させるには充分なものであり同様と考える。2〜4号ピットについては、略円形を呈する落し穴であろう。

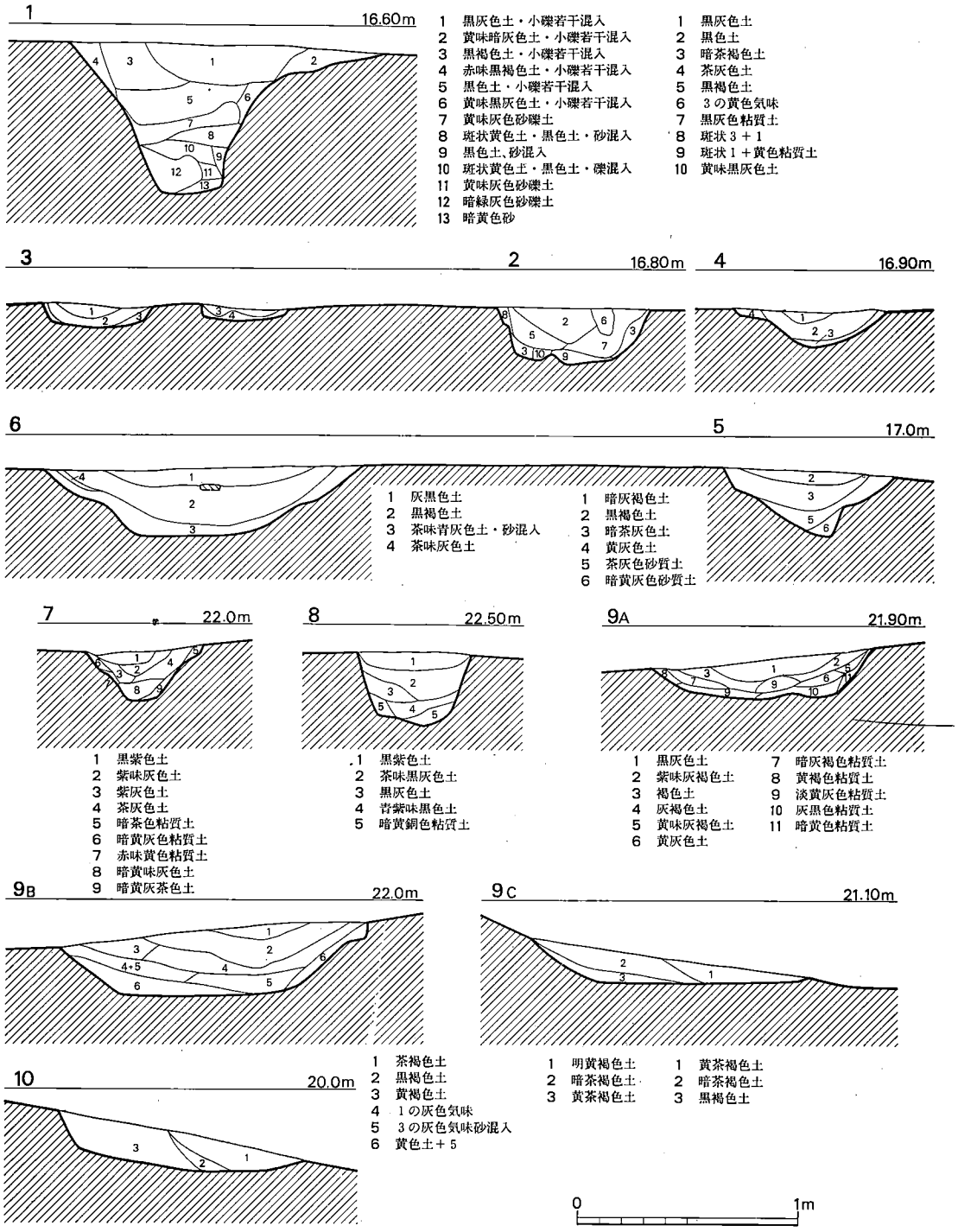
(5) 溝

春園遺跡では、10数条の溝を確認した。このうち、明らかに近年の所産であるものを除いた



1 表土
2 斑状黒褐色土(床土)
3 赤味灰黒色土(床土)
4 青褐色土(砂粒少量含)
5 暗褐色土
6 黒褐色土
7 暗紫灰色土
8 紫灰色土
9 橙味紫灰色土
10 6の砂質暗色
11 灰色暗黄色粘質土
12 砂質暗黄褐色土
13 小礫混入砂質暗紫灰色土
14 9の砂質暗色土
15 13の暗色土
16 砂小礫混入濃い肌色土
17 紫味砂・小礫混入土
18 黒褐色土
19 砂質灰味黒色土
20 紫灰黒色土
21 暗灰色土
22 斑状・黒灰色橙色土
23 6の赤味土
24 小礫混入、紫灰色土
25 紫灰黒色土
26 青灰色砂質粘質土
27 26の黄味土
28 砂質青灰色と黄色隔合土
29 白色気味青灰色砂質土
30 黄色気味青灰色粘質土
31 暗紫青色粘質土
32 青灰色砂質土
33 淡橙色砂質土
34 クリーム色粘質土
35 暗緑青灰色粘土
36 暗紫青灰色粘土
37 淡青灰色砂質土
38 淡色の36
39 灰色砂質土
40 緑味青灰色粘質土
41 緑味灰色砂質土
42 黄味、緑灰色砂質
43 淡黄灰色粘質土
44 淡緑青灰色粘質土
45 44と同じ
46 緑灰色砂質土
47 淡緑灰色粘質土

第 64 図 A区南壁土層断面図 (1/60)



第 65 図 1～10号溝土層断面図 (1/60)

10条について述べる。

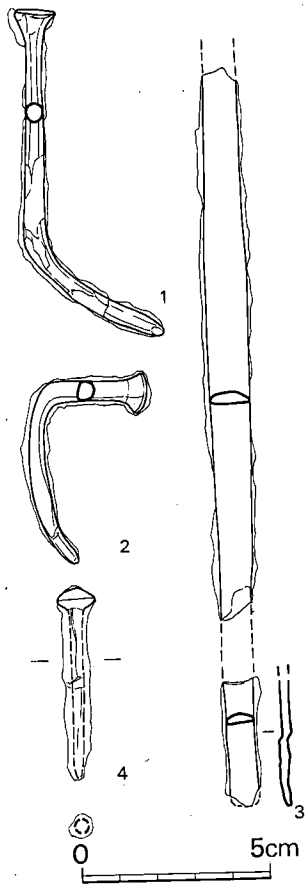
A区では6条の溝があり、1～3号溝は北東から南西方向へ、ほぼ大刀洗川に並行して走る。4～6号溝は西側にあり、各々が切り合っている。台地上のB区には4条の溝があり、7・8号溝は5.4mの間隔を持って平行するし、道路状遺構の可能性もある。9・10号溝も東側で平行し、9号溝はL字形に屈曲し、台地の縁辺を囲繞する。13世紀中葉頃の時期だが、相当する遺構は調査区域内に無い。

1号溝（図版40、第65図）

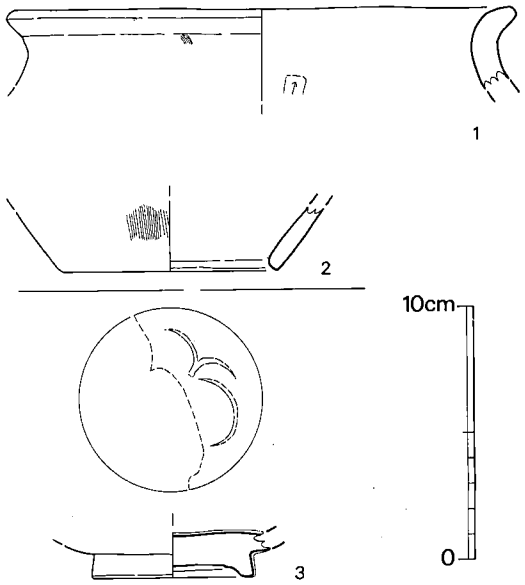
A区の東側を北東から南西に走る。幅1.5～2mで、深さ45～74cmを測る。流れの方向は、溝底部の標高から、南西から北東方向であろう。この調査区で唯一しっかりとした溝である。

出土遺物（図版40、第66図1～3）

1・2は、断面円形で頭部も円形を呈す鉄釘で、いずれも近年のものであろう。また、3は断面蒲鉾型を呈し、幅0.7～1.1cm、厚さ3～3.5mmの鉈であろう。



第66図　1号溝出土鉄器実測図 (1/2)



第67図　3・6号溝出土土器実測図 (1/3)

2号溝（図版40、第65図）

1号溝の西を北東から南西に走り、調査区北東壁から42mで3号溝に切られる。幅70cm、深さ24cmを測る。この溝も1号溝同様に南西から北東に流下するものである。遺物は出土していない。

3号溝（図版40、第65図）

3号溝は、2号溝に並行に走り、北東辺から11mで分岐して南西方向に走り、浅く消滅する。また、2号溝を切る。幅30～70cm、深さ20cmほどである。流水の方向は、北東から南西に流れる。

出土遺物（第67図1・2）

土師器甕と甑の小破片が出土した。1は甕で復原口径19.6cmで、淡橙色を呈し、胎土に小砂粒を多量に含む。口縁部横ナデ、内面頸部下位はヘラ削りを施す。2は甑底部片で、復原底径8.6cm、淡褐色を呈し、胎土・焼成良。外面ハケ、底部は横ナデを施す。

4号溝（図版41、第65図）

北東の調査区境の中央から西に走り、5号溝を切り、6号溝に切られる。幅30cm、深さ5～20cmである。

5号溝（図版41、第65図）

調査区の北東西辺から13mで、攪乱溝の下から検出され、18mほど南西に走り、6号溝に合流する。幅80cm、深さ10～40cmである。

6号溝（図版41、第65図）

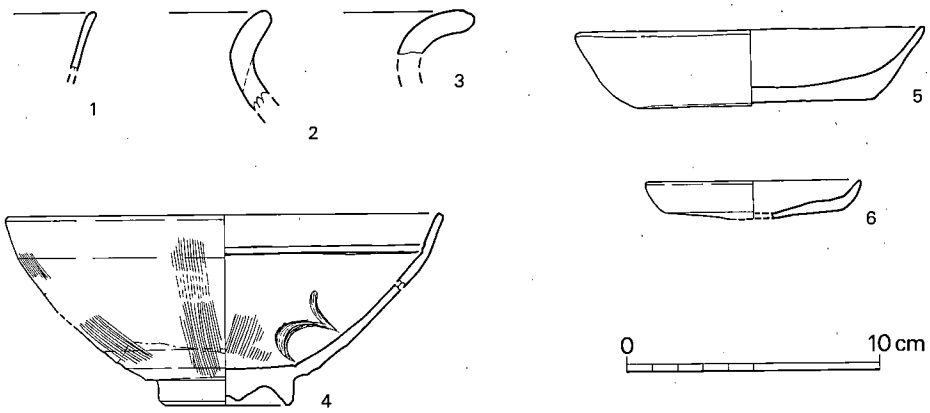
調査区の北西辺から7.5mで攪乱溝の下から検出され、40mほど南西に流れ、再び攪乱溝に切られる。幅1.3～1.9m、深さ20～30cmである。

出土遺物（第67図3）

青磁椀片が出土した。残存状況は底部の1/2で、復原底径6.4cm、深緑色を呈する。

7号溝（図版42・43、第65図）

B区東半部の北端にて東西方向に15mのび、途中が削平されているが、同西半部にてその続きとして32mが検出された。西端部は9号溝によって切られている。これの南5.4mを隔てて8号溝が全く同一の方向（N－102°－E）に平行して掘られている。両溝間の5.4mは正しく3間分であり、この両溝は同一期に掘られたものと考えてよいだろう。溝の上端幅約55cm、深



第 68 図 9号溝出土土器実測図（1/3）

さ約25cmであった。出土遺物はない。

8号溝（図版42、第65図）

7号溝の南にあり、同じ方向に掘られた溝である。この7・8号溝は道路（幅5.4m）の側溝と考えるのが妥当であろう。埋土中より土師器杯の破片が出土しているが図示しえない。

9号溝（図版43、第65図）

B区東半部の東端付近でN－20°－Eの方向で19m南下してきて、直角に近い角度で折れ曲がってN－117°－Eの方位で西方へのびてゆく溝である。47mほどのびてきて削平され、そのあとまた西半部で29m分が現れる。本来は断面逆台形状に掘られたものである。幅1～1.4m、深さ0.3mが残る。13世紀中葉～後半の頃に掘削されたものであろう。

出土遺物（図版43、第68図1～6）

出土量はきわめて少ない。1は須恵器椀の破片である。2・3は土師器の甕の口縁部片である。4は青磁碗の破片で、同安窯系の輸入陶磁である。口径17.4cm、底径5.3cm、器高7.5cmを測る。5は土師器杯で、口径13.7cm、底径9.7cm、器高2.9cm。外底面は糸切り離し後に板目圧痕が付く。6は土師器小皿で、口径8.3cm、底径7cm、器高1.5cmを測る。糸切り離し痕がある。

10号溝（第65図）

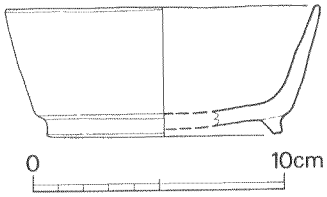
9号溝の南北方向部分と平行して、その東方に3mを隔てて全長16.5mが検出された。南端部分は土壙状になって終わっている。途中で15号土壙と重複する。おそらく9号溝と同じときに掘削されたものであろう。

(6)　その他の遺構と遺物

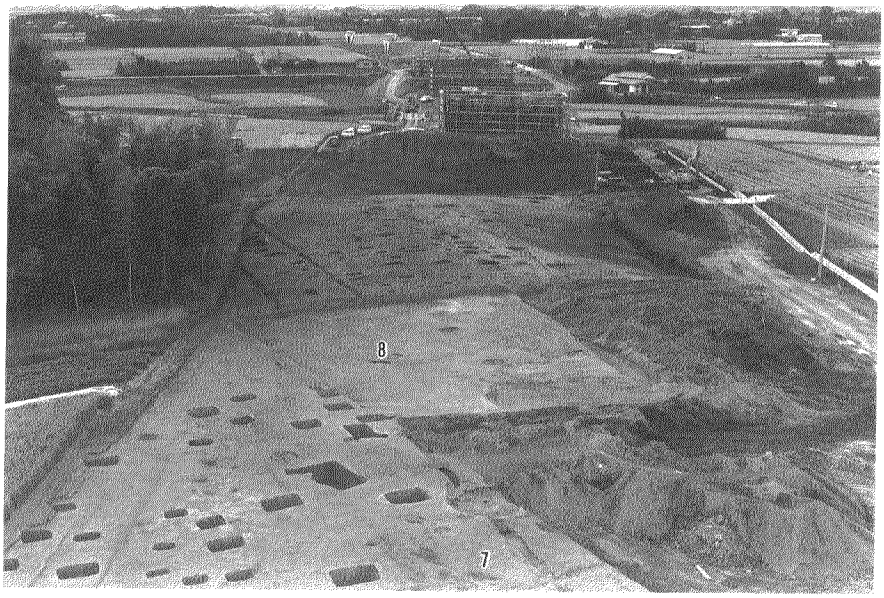
古墳時代から平安時代にかけて若干の柱穴が検出されているが、まとまるものは無い。

出土遺物（第69図）

須恵器の高台付杯で、口縁部は外方へ直線的に広がる。高台は高0.7cmほどでほぼ直に立つ。口径11.4cm、器高4.8cm、高台径8cm。遺構検出時の出土資料で、建物跡群に伴うものであろう。



第69図　採集遺物実測図（1/3）



第 70 図 7・8 号 溝

4. 近世の遺構と遺物

(1) 近 世 墓

春園遺跡では、79基を数える近世墓が検出された。すべてB区の台地上にあり、いずれも標石をもたず百数十年の時の流れの中で眠り続けてきた。発掘当時、調査地は畑・竹林等で覆われ、近世墓所在の痕跡すらなかった。以下、近世墓を個別に述べるが、人骨についての正式の鑑定をしていない点おことわりをしておきたい。

1号墓（図版47、第72図）

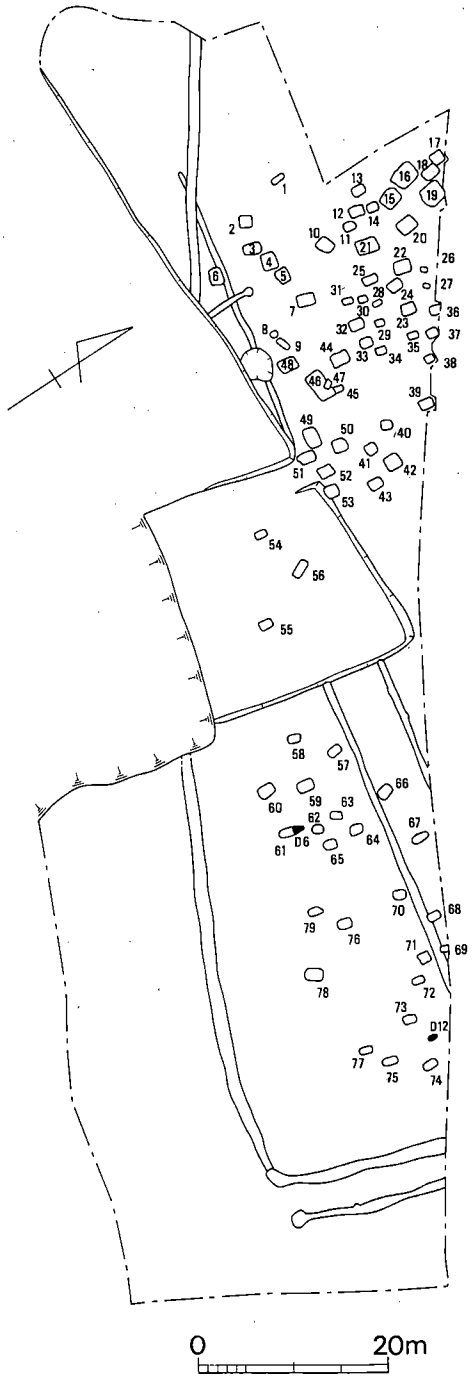
春園遺跡の西端で、2号墓の北5mほどに位置し、墓壙は、主軸をN－4°－Wにとる。

発掘時の遺構の状況は墓壙南辺部を径60cmほどの穴により削平され、これは覆土の状況から判断して近年の撹乱と思われる。

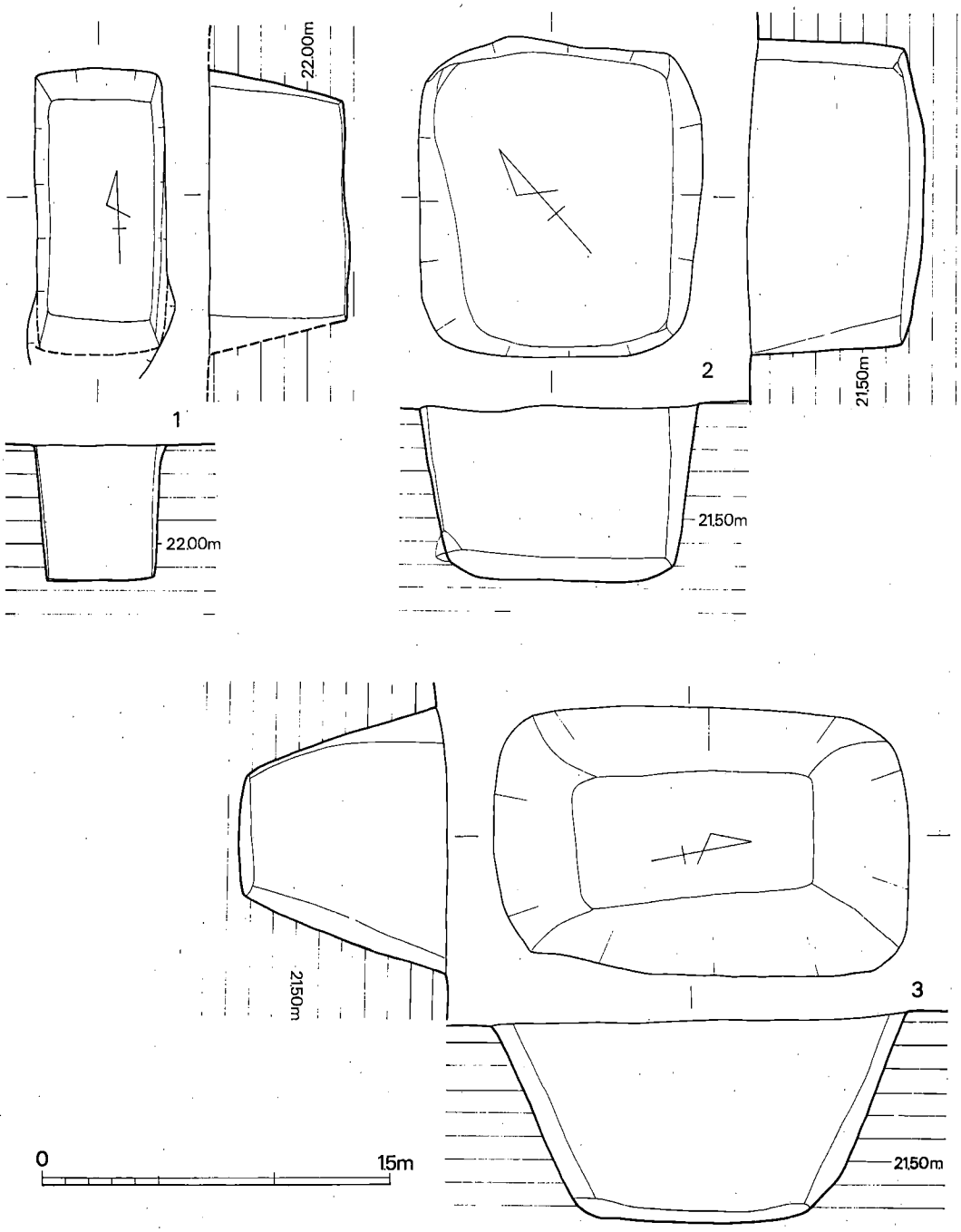
墓壙の法量および形状は、上縁の長軸で約122cm、短軸で55.5cmの長方形を呈する。壙底面では、長軸92.5cm、短軸44.5cmで上縁と同じく長方形を呈する。深さは58cmを測る。壙の断面形状は、底面平坦で、壁は直に立ち上がる。

1号墓の埋土は、概ね黄色粘質土、茶褐色粘質土、黒色土等が斑文状に混合した状況である。これは、春園遺跡における他近世墓も同様の状況を示している。

1号墓の棺の種別は、後述する16号墓等のような木桶の痕跡はみられず、また、その他棺を判断しうる手懸かりもない。唯一の棺を想定できるものとして墓壙の形状がある。墓壙は狭長なかたちをしており、木桶での埋



第 71 図 近世墓遺構配置図（1/800）



第 72 図 1～3号墓実測図 (1/30)

葬は不可能であろう。すなわち、1号墓は木棺であり、その狭長さから小児用の座棺もしくは寝棺とも考えられる。

墓壙内よりの人骨および副葬品等の出土はみられない。

2号墓（図版45、第72図）

2号墓は、1号墓の南で、東に3～5号墓が連なり、その南側で東西方向に走る7号溝がある。主軸をN－35°30'－Eにとる。

墓壙の法量および形状は、上縁の長軸で134.5cm、短軸で120.5cmを測る隅円方形を呈し、墓壙底面で長軸125cm、短軸95.5cmで北東方向に若干開く隅円台形を呈する。墓壙の深さは76cmを測る。壙の断面形状は、底面凹むレンズ状の丸みを呈し、壁面ほぼ直に立ち上がる。

埋土は、1号墓と同様に黄色粘質土を基調とした斑文状を呈す。

2号墓も1号墓同様に棺の痕跡を検出できず、墓壙の規模から早桶もしくは木棺と考えられる。人骨や副葬品等の出土は一片もみられない。

3号墓（図版45、第72図）

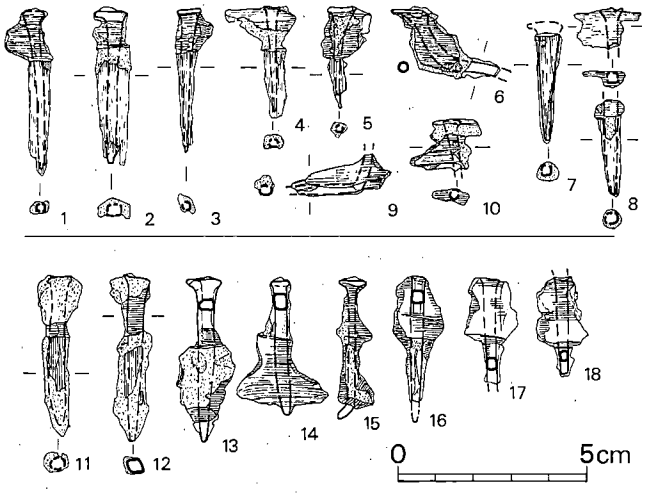
3号墓は、2号墓のすぐ東側で、6号墓の北5mほどに位置し、主軸をN－6°－Eにとる。

墓壙の法量および形状は、上縁長軸で179cm、短軸で116cmを測る隅円長方形を呈し、底面では長軸103cm、短軸55cmであり、平面形状は上縁と同じく隅円長方形を呈する。深さは90cmを測る。壙の断面形状は、底面若干凹むレンズ状の丸みをもち、壁面は急傾斜を呈する。

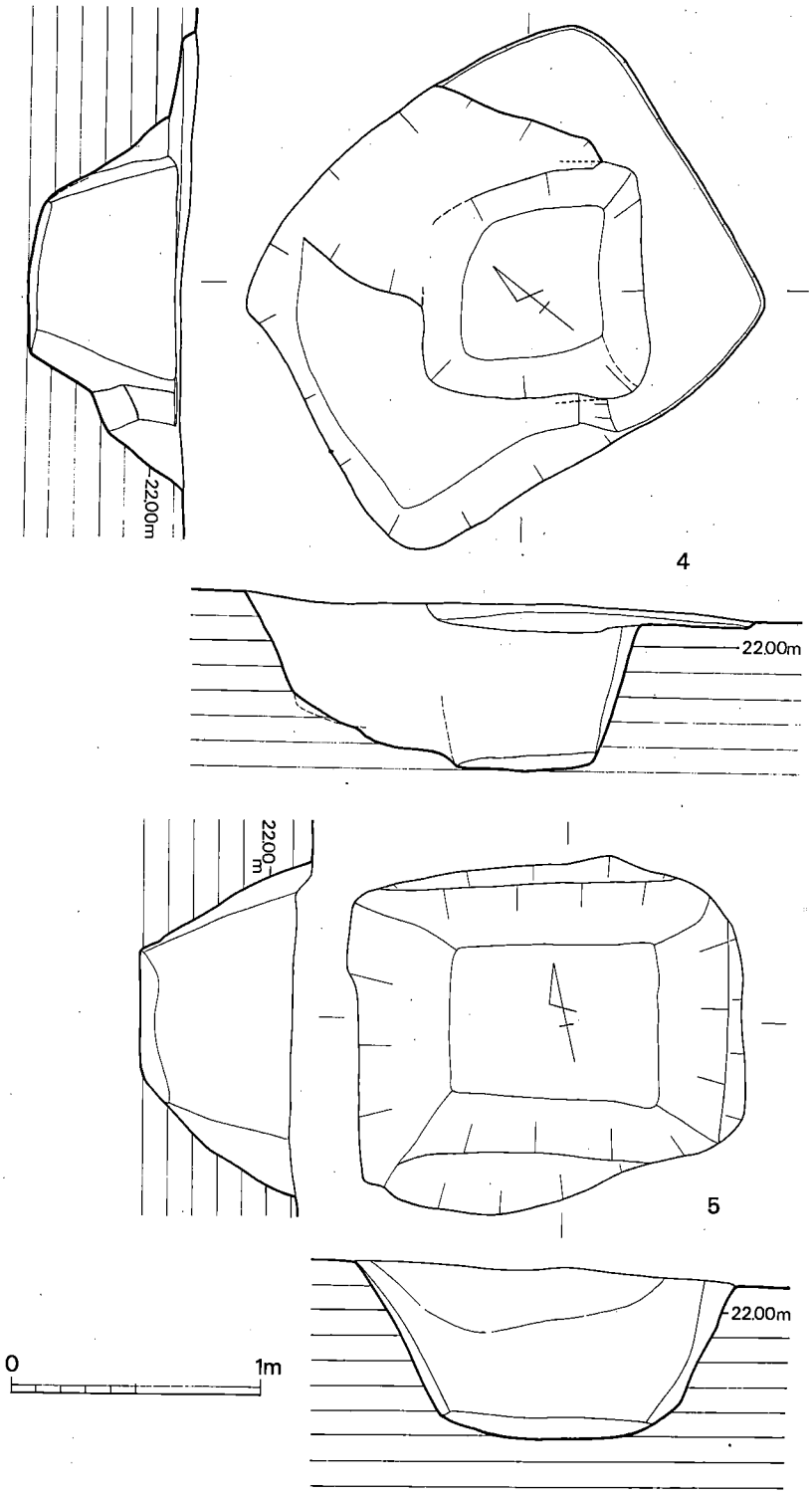
3号墓からは、墓壙底のやや北寄りの位置で歯を検出した。その他骨片等の出土はみられない。また、副葬品等の出土はみられない。しかし、棺材と思われる釘を検出した。壙の形状や歯の出土位置から木棺による埋葬と考える。

出土遺物（図版65、第73図1～10）

1～5・7・8・10は、長さ3～4cm、断面方形を呈し、頭部を一方向に折り曲げている。9は鋤状を呈している。また、6は著しく曲がっている。



第 73 図 3・19号墓出土鉄釘実測図（1/2）



第 74 図 4・5号墓実測図 (1/30)

4号墓（図版45、第74図）

4号墓は、3・5号墓と東西方向に連なり、10号墓の南6mに位置し、主軸をN－36°－Wにとる。

4号墓の発掘状況は、墓壙の上から東西180cm、南北160cmの方形土壙に攪乱を受ける。攪乱は、西側で著しく4号墓底にまで達する。

墓壙の法量および形状は、上縁で両軸とも約87cmを測り、壙底面は東西58cm、南北55cmを測る台形状方形を呈する。深さは59cmを測る。壙の断面形状は、残存状況の良い南東壁で直に立ち上がり、三壁ともに同様であろう。底面はほぼ平坦である。

埋土は、他の近世墓と同様に黄色粘質土を基調とする斑文状を呈する。また、攪乱部分の覆土も4号墓埋土とほぼ同様の土質であり、若干黄色味がつよい。

棺の形態は、墓壙の形状および規模から木棺もしくは早桶と考えられる。人骨、副葬品等の出土はみない。

また、攪乱穴であるが、埋土およびその形状等を勘案すると、穴上部は広く浅く穿ち、墓壙の検索をしたようすが窺え、西に広く墓壙を掘り下げ、墓壙底面付近まで達している。このことにより、この攪乱穴が4号墓を穿つことを目的としたものである。すなわち、この穴が4号墓の盗掘または改葬のためであることを物語る。

5号墓（図版45、第74図）

4号墓のすぐ東に位置し、7号墓の西3.5m、10号墓の南6mほどに位置する。2～5・7号墓と東西に連なる。主軸をN－84°－Eにとる。

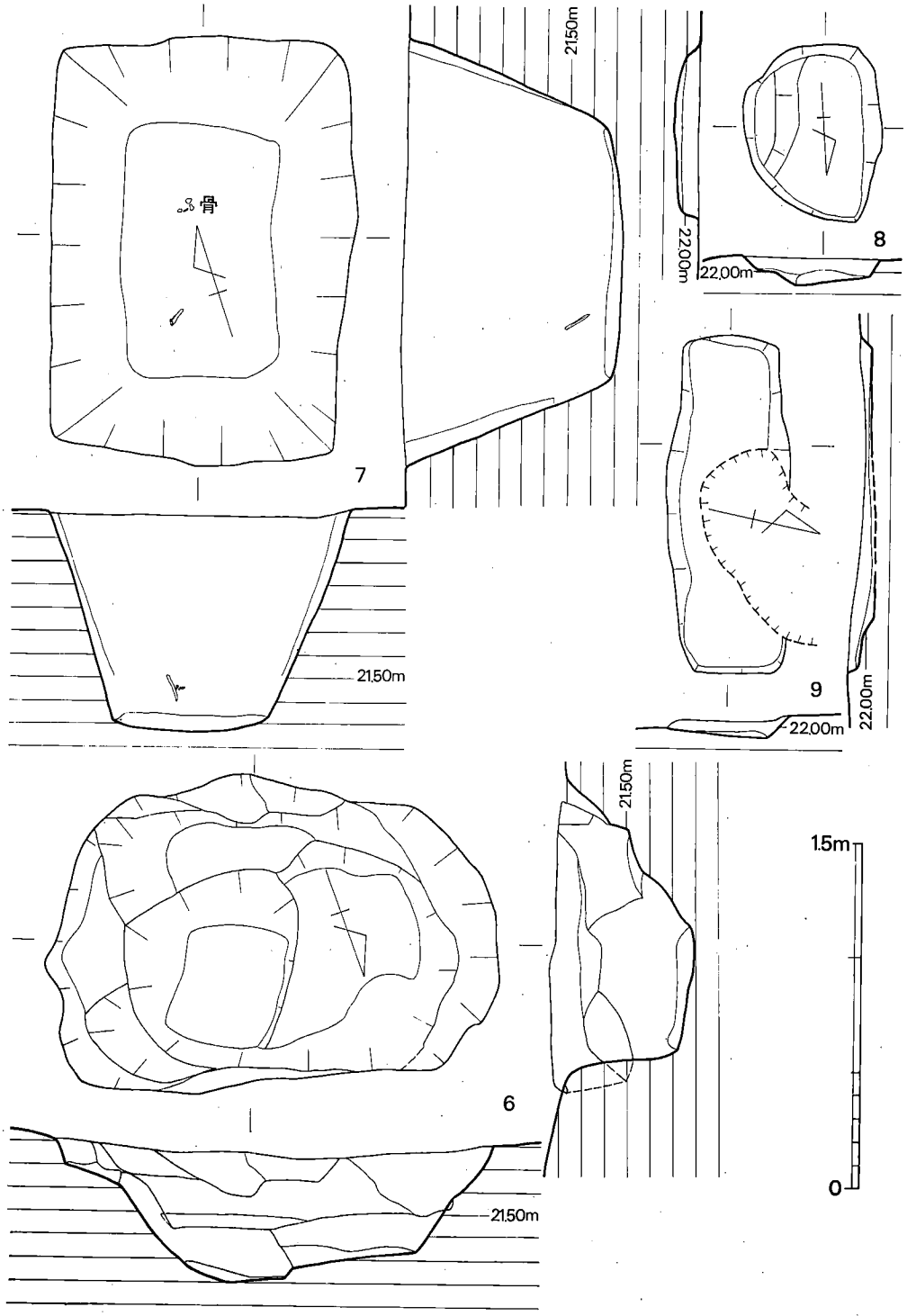
墓壙の法量および形状は、上縁長軸で154cm、短軸で124.5cmの隅円長方形を呈し、底面では長軸83.5cm、短軸62.5cmで長方形を呈する。深さは66cmを測る。壙の断面形状は、底面は凹むレンズ状の丸みをもつ。壁面は長軸である東西方向は緩い傾斜を呈し、南北はややきつい傾斜を呈している。

棺の形態は、明白に成しえないが、しかし、墓壙の形状から推定して、棺は早桶か、もしくは木棺と思われる。人骨、副葬品等の出土はみられない。

6号墓（図版45、第75図）

2・4号墓の南5mほどで、7号溝を切って穿っている。上部より改葬もしくは盗掘と思われる二次的な掘削が行われる。6号墓の本来の墓壙は、壙のやや東寄りで一段深い方形を呈する部分であろう。主軸をN－27°－Eにとる。

墓壙の法量および形状は、上縁の現存長で90×76cmを測り、歪円形を呈するが、しかし、本来は径90cmの円形を呈するものであろう。底面は53×42cmの歪長方形を呈する。深さは、



第 75 図 6～9号墓実測図（1/30）

墓壙検出面より約60cmほどである。墓壙の断面形状は、底面南西方向に極めて緩い傾斜を呈している。しかし、ほぼ平坦である。また、壁面は北東面が直に立ち上がり、南東、南西壁ではやや緩い傾斜を呈している。棺の形態は、墓壙の形状から判断して、早桶か木棺と考えられる。人骨、副葬品等の出土は検出できない。

7号墓（図版45、第75図）

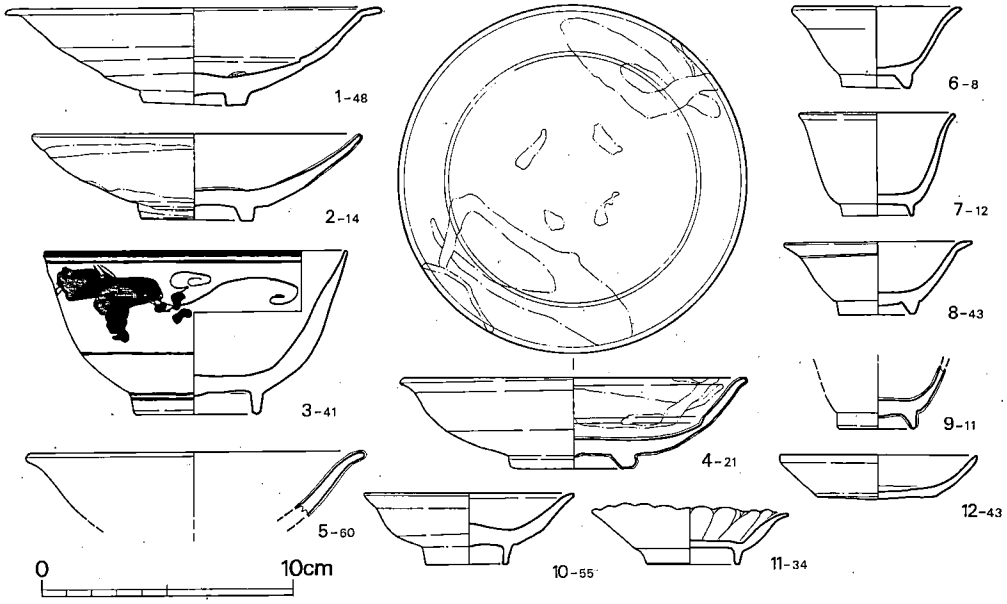
5号墓の東3.5m、8・9号墓の北5mほどに位置し、主軸をN－11°30'－Eにとる。

墓壙の法量および形状は、墓壙上縁で185×131.5cm、底面で108.5×64.5cmを測り、ともに案外整った長方形を呈する。深さは93cmを測る。墓壙の断面形状は、底面では平坦であるが、若干底部に張り出し、壁面は底部から上縁にやや開き気味となる。

また、7号墓からは、数片の骨片と両端を欠損した骨体部1本を確認した。骨片は極めて小片であり、詳細な部位は断言しえない。けれども頭骨の一部と考える。また、骨体部であるが、これは右脛骨の骨体部約1/3が残存しているものである。これらの人骨では、ともに年齢、性別を決定することは不可能である。

棺の形態であるが、その痕跡は墓壙掘削の際、検出できなかった。しかし、壙の形状や人骨の出土状況から座棺であることは確かであるが、棺が早桶かもしくは木棺かは判別できない。

墓壙内からは、副葬品等は出土していない。



第 76 図 近世墓出土土器実測図（1/3）

8号墓（第75図）

7号墓の南5mで、7号溝の北に位置し、主軸をN－2°－Wにとる。

墓壙は極めて小形で浅い、しかし、埋土の状況が他の近世墓と同様である点から、この壙も近世墓とした。墓壙の形状等は、上縁長軸75cm、短軸60cmの不整方形を呈し、底面は、東側に上縁から6cmほどに段をもつ。最低面の法量は、長軸68.5cm、短軸28cmを測り、不整形を呈する。深さは10.5cm、壁面緩傾斜を呈し、底面は凹レンズ状を呈す。人骨は検出できず、ただ、埋土から杯（盃）が1点出土した。

棺については、墓壙が極めて浅く、痕跡もみられない。しかし、その規模から小児用の座棺と考えられる。

出土遺物（第76図6）

墓壙埋土から杯（盃）が1点出土した。口径6.6cm、器高3.2cm、高台径2.6cmを測る。青味乳白色を呈する。12号墓や34号墓の状況から、この墓でも棺上に副葬されたものであろう。

9号墓（第75図）

8号墓のすぐ東に位置し、主軸をN－72°－Eにとる。

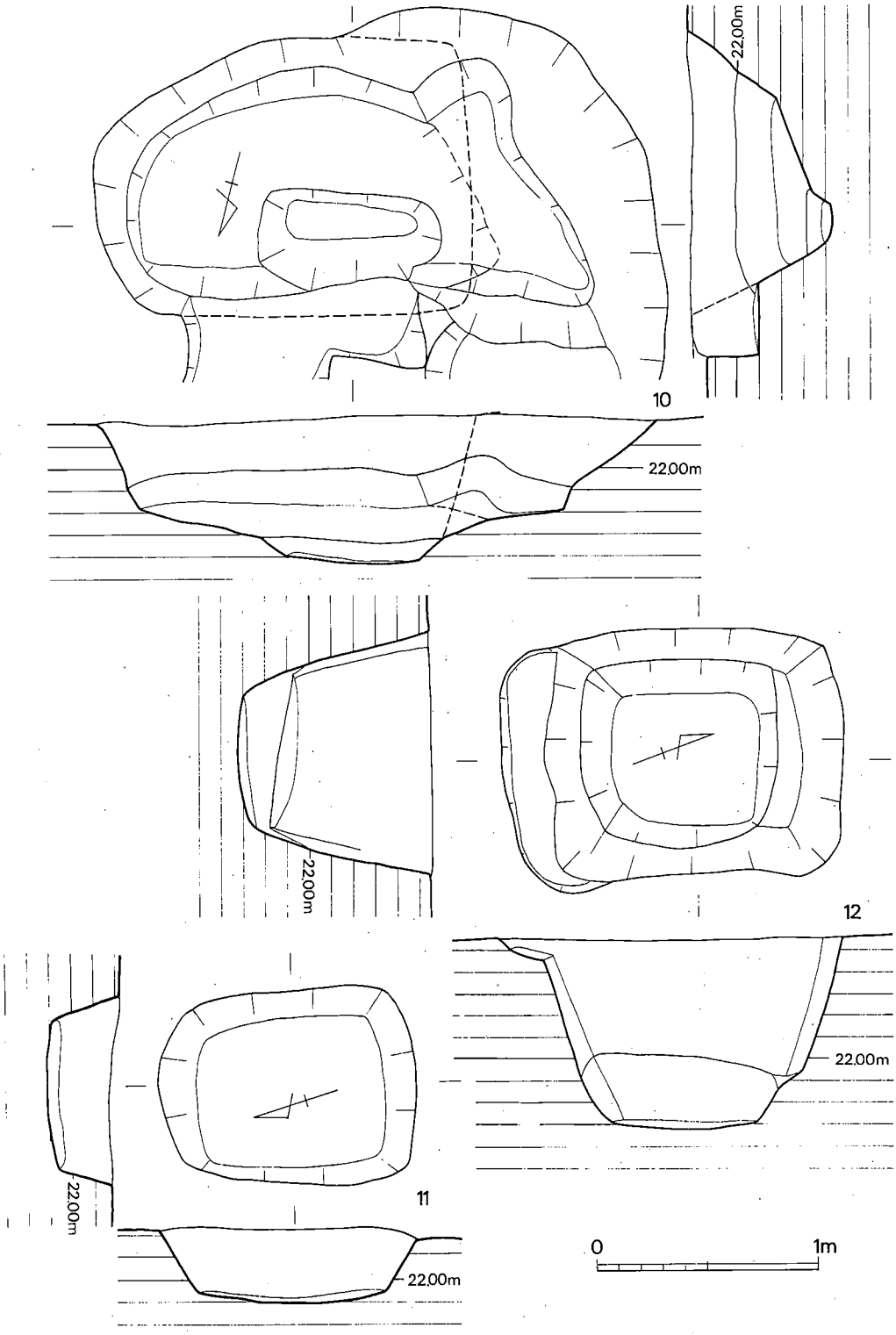
墓壙の北東部を80×43cmの穴で攪乱を受けている。墓壙の形状等は、上縁長軸148cm、短軸で51.5cm。底面長軸138.5cm、短軸34.5cmを測る長方形を呈する。断面は、深さは6cm、緩い傾斜をする壁面から平坦な底面となる。また、墓壙北東部に緩い段をもち、「枕」の形跡を窺わせている。人骨、副葬品等は検出されない。棺の形態は、枕の痕跡から寝棺と考えられる。

10号墓（第77図）

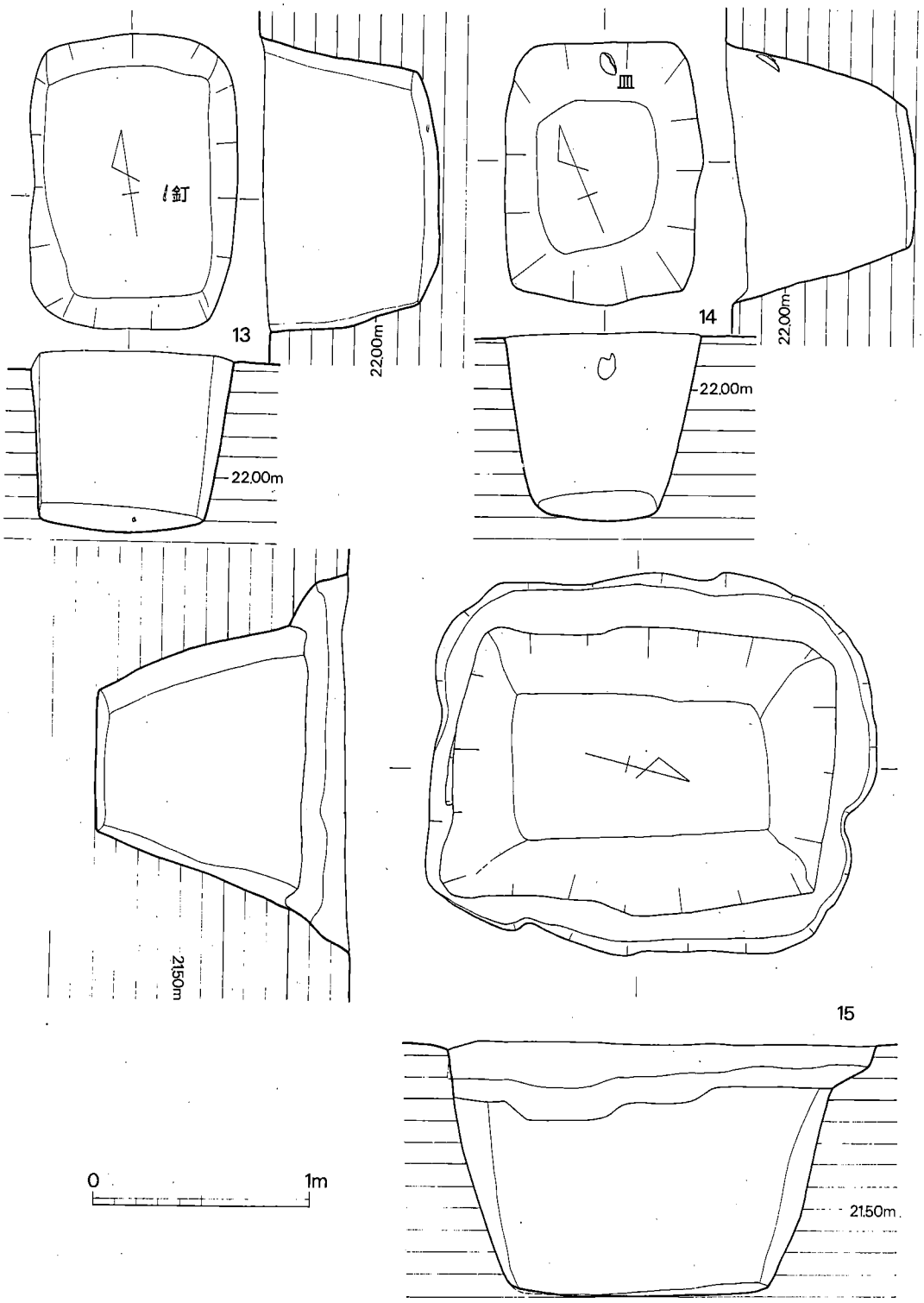
4・5号墓の北5mに位置する。北から南西にかけて攪乱をうけ、盗掘穴と考えられる。また、墓壙の底部北西に位置する83×35cmの長円形の穴も盗掘時のものである。壙の主軸はN－84°－Eにとる。推定上縁長軸171cm、短軸で124.5cm。底面長軸125cm、短軸62.5cmの隅円長方形を呈するであろう。断面は、深さは57cm、南壁および西壁が急傾斜を呈し、底面は中央に緩く傾斜している。人骨および副葬品等は盗掘によるものか不明。棺の形態は、墓壙の形状から座棺の木棺と考えられる。

11号墓（第77図）

10号墓の北1.5mに位置する。壙の主軸はN－11°－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸116.5cm、短軸で87cm。底面長軸84.5cm、短軸67.5cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さは31cm、壁面は緩い傾斜を呈し、ややレンズ状に膨らむ底面となる。墓壙内埋土から杯（盃）が1点出土した。その他人骨および出土品等は検出されない。棺の形態は、墓壙の状況から明確



第 77 図 10～12号墓実測図 (1/30)



第 78 図 13～15号墓実測図 (1/30)

にできないが、規模からみて座棺の早桶か木棺と考える。

出土遺物（第76図9）

墓壙埋土から杯（盃）が1点出土した。体部から口縁部を欠損している。法量は、残存器高2.5cm、高台径2.9cmを測る。白色を呈する。棺上に副葬されたものであろう。

12号墓（図版47、第77図）

11号墓のすぐ北西に位置する。墓壙の主軸はN－15°30′－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸155cm、短軸で112cmの隅円長方形を呈し、底面は長軸66cm、短軸60cmの隅円方形を呈する。断面は、深さは87cm、急傾斜を呈した壁面からやや膨らみをもつ底面となる。墓壙の中位層から杯（盃）が出土した。杯は口縁を下に向けて水平な位置をとっている。これは、棺上に副葬したものであろう。人骨等はみられない。棺の形態は、墓壙の形状や副葬品の状況から考えて、座棺の木棺か早桶と考えられる。

出土遺物（図版64、第76図7）

墓壙の中位層から杯（盃）が1点出土した。口径6.1cm、器高4.1cm、高台径2.8cmを測る。乳白色を呈する。棺上に副葬されたものであろう。

13号墓（第78図）

12号墓の北西2mほどで、墓壙の主軸はN－2°30′－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸136cm、短軸で93.5cmの隅円長方形を呈し、底面長軸106.5cm、短軸76cmの歪長方形である。断面は、深さは81.5cmで北壁は急傾斜、他は直立して、やや膨らみをもつ底面となる。墓壙底面やや北よりに歯片を、中央東寄りに鉄製品が出土した。棺の形態は、歯片の出土位置や墓壙の形状から座棺の木棺か早桶と考える。

出土遺物（図版67、第97図1・2）

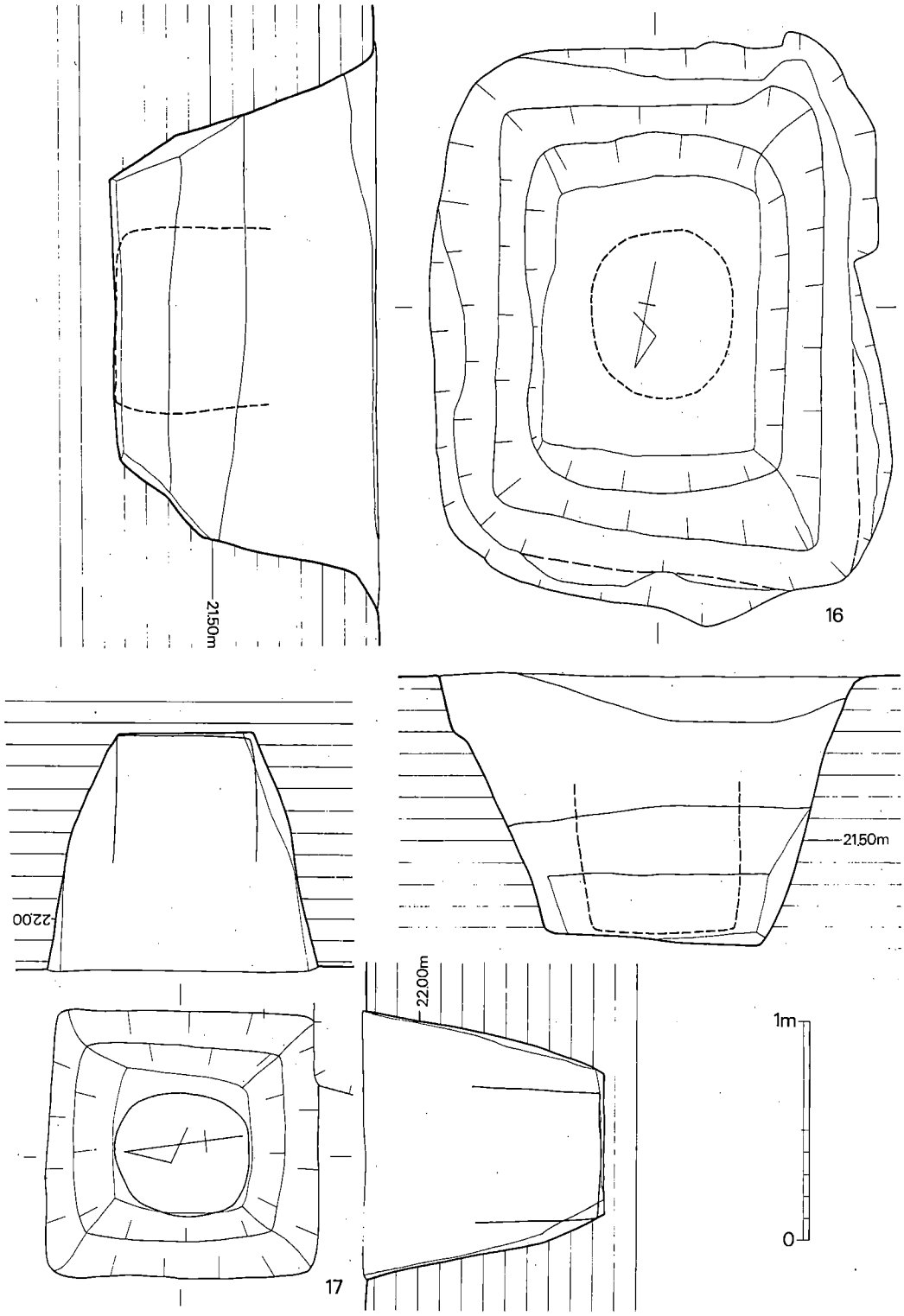
リング状の頭部をもつ金具が2点出土した。これは、箪笥等の棹通し金具の一部と思われる。

14号墓（図版48、第78図）

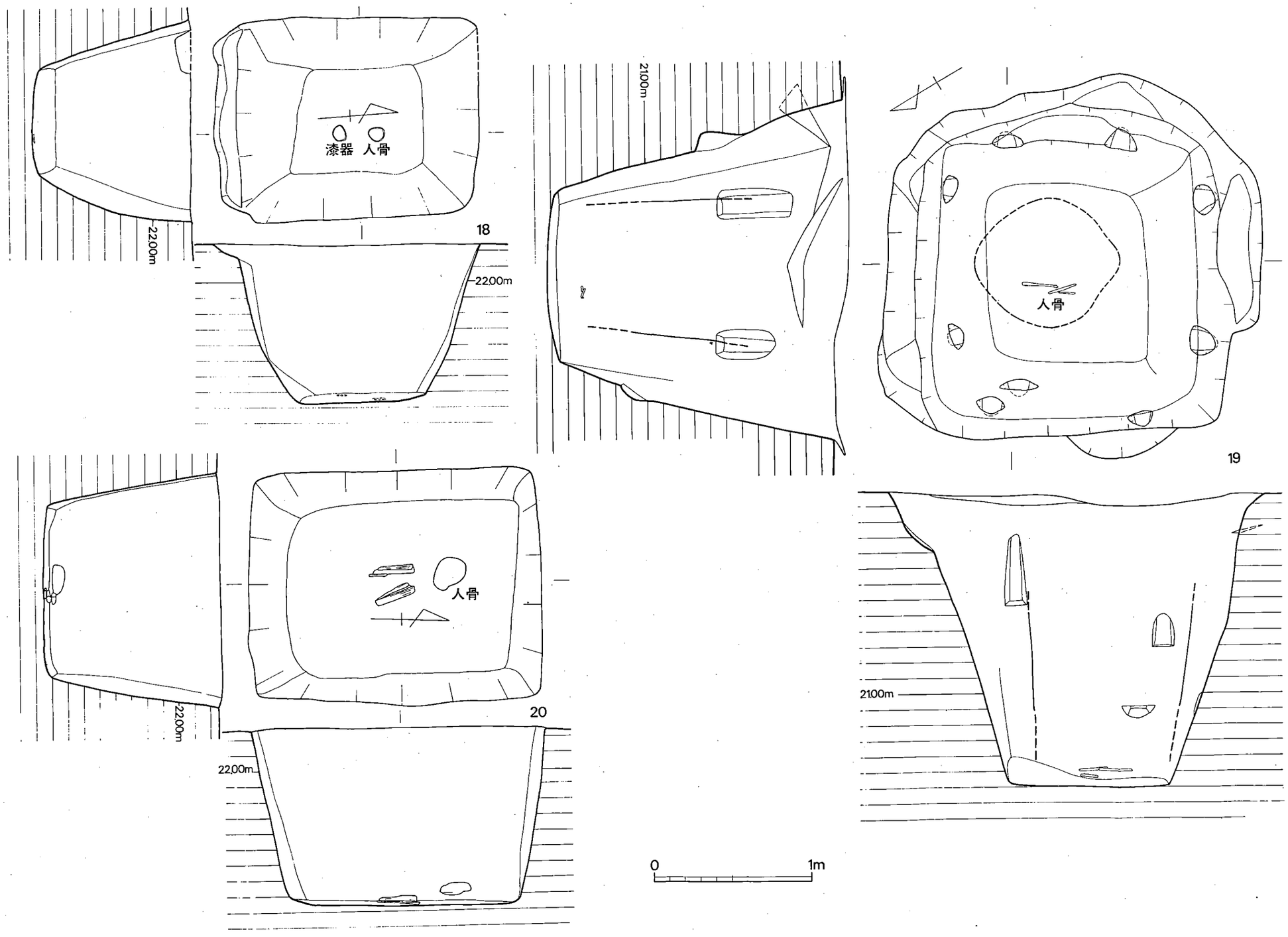
13号墓の東2mに位置する。墓壙の主軸はN－16°－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸120cm、短軸91cmの長方形を呈し、底面は長軸67cm、短軸55.5cmの歪長方形を呈する。断面は、深さは86cmで急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。墓壙の上層から小皿が出土した。これは、12号墓同様に棺上に副葬したものであろう。人骨等は検出できない。棺の形態は、墓壙の形状等から木棺または早桶と考えられる。

出土遺物（図版64、第76図2）

墓壙の上層から皿が1点出土した。内面と外面の体部中位まで灰釉が施された跡に、口縁部に



第 79 図 16・17号墓実測図 (1/30)



第 80 図 18～20号墓実測図 (1/30)

青緑釉を施す。内面に蛇の目の釉剝ぎを施し、砂目が4ケ所ある。口径12.9cm、器高3.4cm、高台径4.5cmを測る。素地は乳桃色を呈し、緻密である。これも棺上に副葬されたものであろう。この皿は、肥前産のもので、近年調査された嬉野町の「内野山北窯」のものと酷似している。17世紀後半のものであろう。

15号墓（第78図）

14号墓のすぐ北で、墓壙の主軸はN－21°－Wにとる。墓壙の形状等は、2段掘りとなり、上縁長軸205cm、短軸175cmの不整長方形を、底面長軸117cm、短軸65.5cmの長方形を呈する。断面は、深さは115cmで急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。埋土から鉄釘が2点出土した。他は、何らの出土もみない。棺の形態は、墓壙底面の狭長な形状から座棺の木棺と考える。

出土遺物（図版65、第101図19）

墓壙から2本検出したが、図化できたのは、この1本のみである。頭部を一方向に押し曲げ、断面は方形を呈する。

16号墓（第79図）

調査区の北西端で15号墓の北に位置する。墓壙の主軸はN－18°－Wにとる。墓壙内に棺の形跡が検出でき、径80cm、深さ70cmの円柱状を呈している。棺は早桶であろう。墓壙の法量等は、上縁長軸240cm、短軸199cm。底面長軸128.5cm、短軸98cmの長方形を呈する。断面は、深さ121cmで稜をもつ急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。人骨、副葬品等は皆無。

17号墓（図版49、第79図）

16号墓の北3mほどで、墓壙の主軸はN－0°30'－Eにとる。この墓も16号墓と同様に径60cm、深さ60cmの円柱状を呈する早桶の痕跡が検出された。墓壙の法量等は、上縁長軸124cm、短軸122cm。底面長軸64cm、短軸63cmの方形を呈する。断面は、深さ109cmで急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。人骨、副葬品等は皆無。

18号墓（図版49、第80図）

17号墓のすぐ南東に位置し、墓壙の主軸はN－3°45'－Eにとる。墓壙底面北側から径10cmほどで頭骨の痕跡とその中から歯片が検出され、南側からは漆器が出土した。しかし、漆器については今回の報告からは割愛する。墓壙の形状等は、上縁長軸168.5cm、短軸127cmの長方形を呈し、底面長軸107cm、短軸77cmの台形を呈する。断面は、深さ99.5cm、やや外反し

て弧を描く壁面から平坦な底面となる。人骨、副葬品等は皆無。棺の形態は、墓壙の形状等から座棺の木棺または早桶と考えられる。

19号墓（図版50、第80図）

18号墓の東に隣接して、墓壙の主軸はN－30°45'－Eにとる。大形のもので、上縁220cm、底面115×100cmの方形を呈する。墓壙の上縁は、形状がややみだれ、掘り広げられたようである。断面は、深さは188cmと深く急傾斜を示す壁面に「足掛け」と思われる棚状のものが四壁に設けられえている。底面はやや膨らみをもつ。

棺の形態については、径90～105cm、高さ70cmほどで早桶の痕跡が検出された。さらにその下層25cmほどで鉄釘と下肢骨を検出した。特に鉄釘の散布範囲が南北60cm、東西40cmの範囲で、鉄釘の向きから方形の棺の痕跡を示すものであろう。このことは、同一墓壙に2種類の棺の痕跡を物語るもので、下層の方形棺の被葬者が葬られた後、数年後に上層早桶の被葬者が葬られたものであろう。そのことは、この墓壙の上縁形状が乱れていることでも物語られている。被葬者間の関係は、相方の人骨の検出をみないので不明であるが、しかし、何らかの血縁的な繋がりをもつものであろう。また、下層の人骨については、発掘時にその形状を知れた程度で、取り上げは出来なかった。

出土遺物（図版65、第73図11～18）

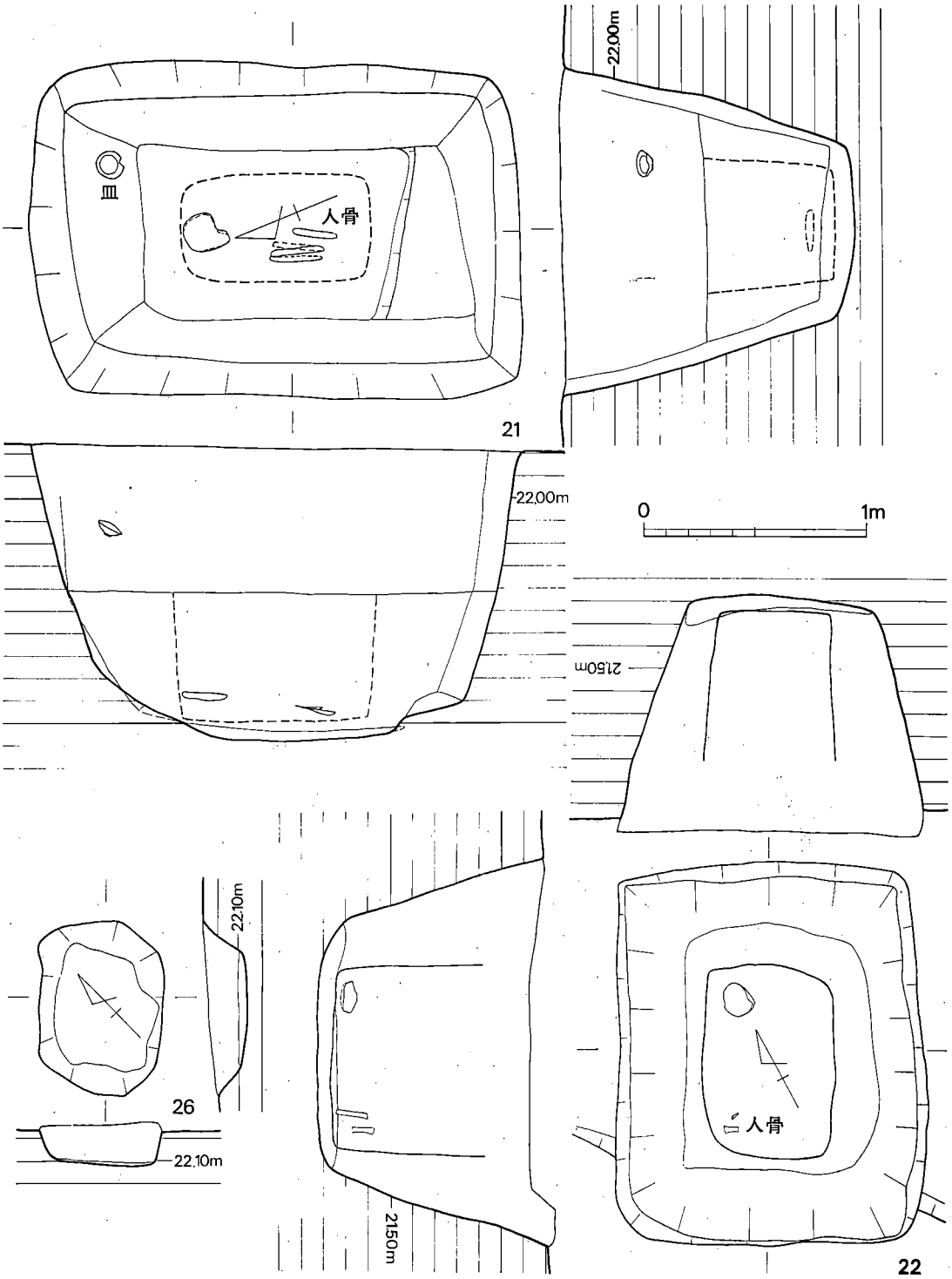
鉄釘で長さ3～4cm。断面方形を呈し、頭部を一方向に折り曲げている。

20号墓（図版50、第80図）

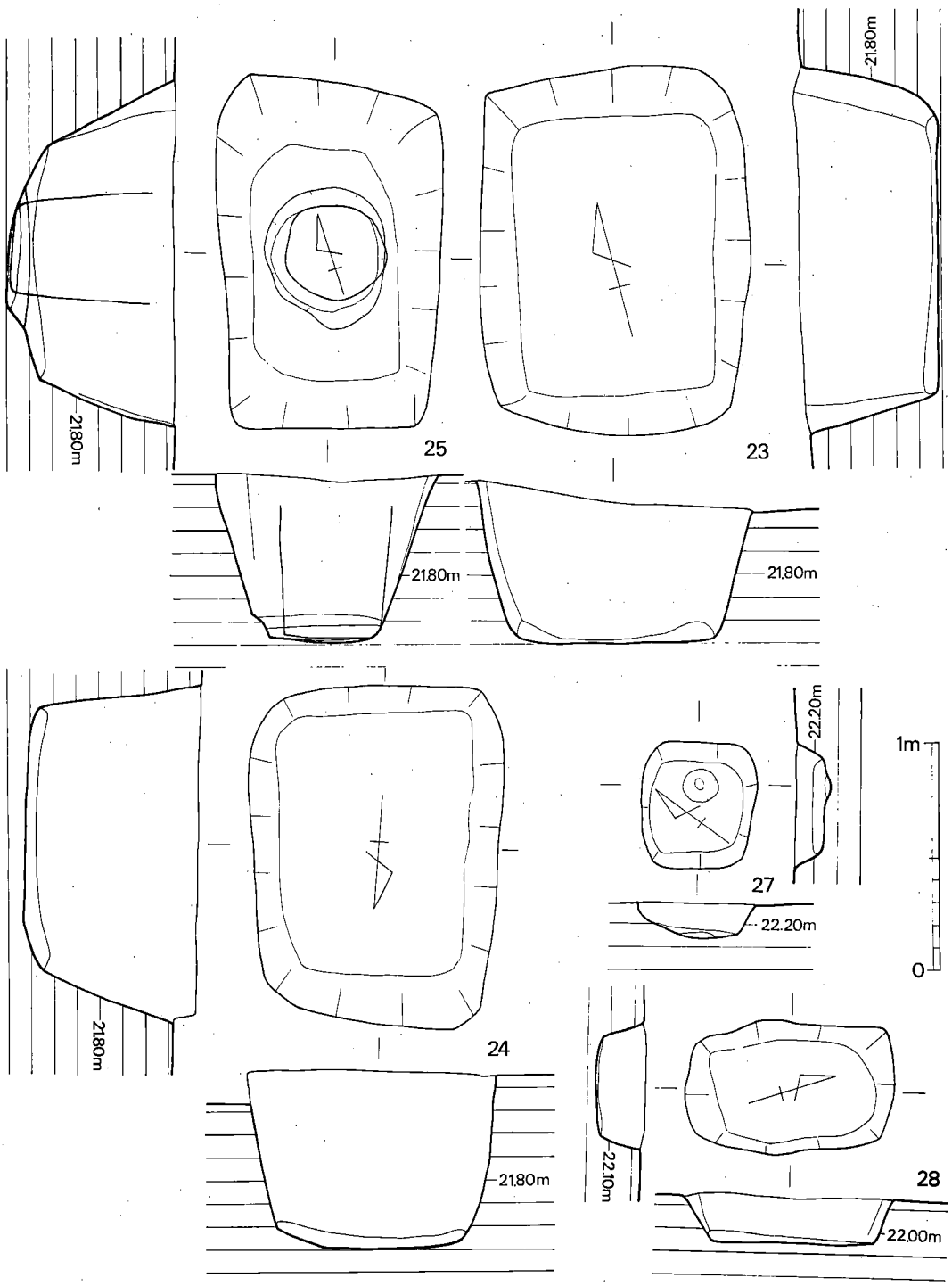
19号墓の南3mで、墓壙の主軸はN－2°－Wにとる。墓壙内中央に頭骨と上肢骨・下肢骨が検出できた。頭骨は全面を下にしており、下顎骨はすでにない。下肢骨は、左右の大腿骨であった。性別不明。墓壙の形状等は、上縁長軸で185.5cm、短軸150cm。底面長軸145.5cm、短軸109.5cmの長方形を呈する。断面は、深さ110cmで急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、墓壙の形状、規模および人骨の出土状況が、後述する21号墓の棺の痕跡と同一であり、同様に方形の木棺（座棺）であろう。

21号墓（図版51、第81図）

調査区の北東部で、20号墓の南4mに位置する。墓壙の主軸はN－23°－Eにとる。墓壙底部からやや浮いた状況で人骨を検出した。人骨は頭蓋骨、尺骨、焼骨片であった。また、墓壙内に棺の痕跡が残り、南北90cm、東西55cmほどの長方形を呈し、高さ60cmの規模をもつ座棺の木棺と考えられる。墓壙の形状等は、上縁長軸で219.5cm、短軸145.5cmの長方形を、底面は長軸142.5cm、短軸74.5cmの歪長方形を呈する。また、底面南側に高さ5cmほどの浅い



第 81 図 21・22・26号墓実測図 (1/30)



第 82 図 23～25・27・28号墓実測図 (1/30)

段をもつ。墓壙の深さは130cmである。一方、墓壙内上位層で小皿が出土した。これは、棺上に副葬されたものと考えられ、棺の高さを示し、本来の棺は高さ80cmであろう。

出土遺物（図版64、第76図4）

陶器皿で、口径13.5cm、器高3.6cm、底径4.9cmを測る。淡黄色を呈し、緑色で2か所に円形に施釉される。また、砂目は4個ある。

22号墓（図版52、第81図）

20号墓の南東4mで、墓壙の主軸はN－25°45′－Eにとる。墓壙底面の北側から頭頂を下にして頭蓋骨、南側から上腕骨、脛骨を検出した。性別不明。また、棺の痕跡があり、南北87cm、東西83.5cm、深さ65cmを測る方柱状を呈する。棺は方形の木棺（座棺）であろう。墓壙の形状等は、上縁長軸で172.5cm、短軸135cm。底面長軸111.5cm、短軸83.5cmの長方形を呈する。断面は、深さ103cmで壁面急傾斜を呈し、レンズ状の底面となる。

23号墓（第82図）

22号墓の東4mで、墓壙の主軸はN－18°－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸で159cm、短軸119cm。底面長軸121.5cm、短軸86cmの長方形を呈する。断面は、深さ60cmで急傾斜の壁面から平坦な底面となる。人骨、副葬品等は皆無。棺の形態は、座棺の木棺であろう。

24号墓（第82図）

22号墓と23号墓の間に位置する。墓壙の主軸はN－2°15′－Wにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸148.5cm、短軸107.5cm。底面長軸115cm、短軸82cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ77cmで直立する南壁以外は急傾斜を呈し、底面はやや膨らみをもつ。人骨、副葬品等は皆無。棺の形態は、座棺の木棺と思われる。

25号墓（第82図）

23号墓の南3mで、墓壙主軸をN－17°－Eにとる。墓壙内に径50cm、高さ60cmの早桶の痕跡を検出した。墓壙形状等は、上縁長軸で150cm、短軸96cmの長方形で、底面長軸101cm、短軸63cmの歪長方形を呈する。深さは72.5cm、壁面急傾斜を呈し、底面は早桶を据える部分は、棺に合わせて掘り凹められている。人骨、副葬品等は皆無。

26号墓（第81図）

23号墓の北東2mほどで、墓壙の主軸はN－44°45′－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸で78.5cm、短軸54.5cmの不整楕円形で、底面長軸51.5cm、短軸45.5cmの不整形を呈す

る。深さ17.5cmで急傾斜を呈する壁面とやや膨らみをもつ底面となる。人骨、副葬品等皆無。棺は、小児用の座棺で木棺と思われる。

27号墓（第82図）

26号墓の東1.5mで、墓壙主軸をN－53°30'－Eにとる。墓壙の形状等は、上縁長軸で50cm、短軸48.5cm。底面長軸39cm、短軸40.5cmの方形を呈する。極めて小形のものである。また、北東部の底面に径15cmほどの凹みがある。断面は、深さ12.5cmで緩い傾斜を呈する壁面とレンズ状に膨らむ底面となる。人骨、副葬品等皆無。棺の形態は、その規模から小児用の座棺で木棺と思われる。

28号墓（第82図）

24号墓の南3mほどで、墓壙主軸をN－17°30'－Eにとる。墓壙の規模は、前述の26・27号墓と同様に小形のもので、小児用と考えられる。壙の形状等は、上縁長軸で91cm、短軸56cm。底面長軸70cm、短軸43.5cmの不整長方形を呈し、深さ20cmで壁面急傾斜を呈し、平坦な底面となる。人骨、副葬品等皆無。棺の形態は、座棺で木棺と考えられる。

29号墓（第83図）

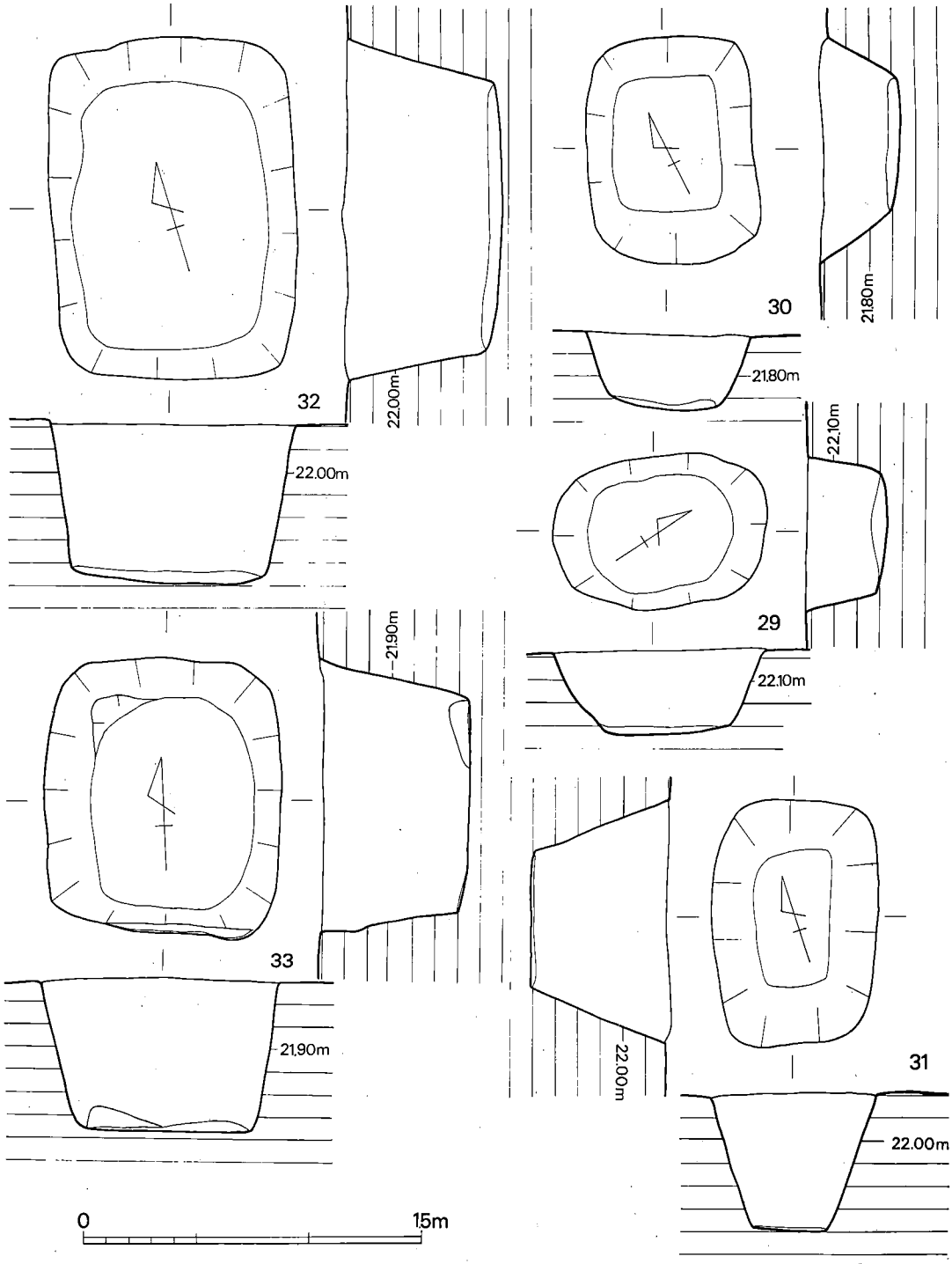
28号墓のすぐ東に位置する。墓壙主軸をN－34°－Eにとる。墓壙は、上縁長軸で94cm、短軸67cm。底面長軸64.5cm、短軸50.5cmの長楕円形を呈す。断面は、深さ35cm、急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺で被葬者は小児であろう。人骨、副葬品等皆無。

30号墓（第83図）

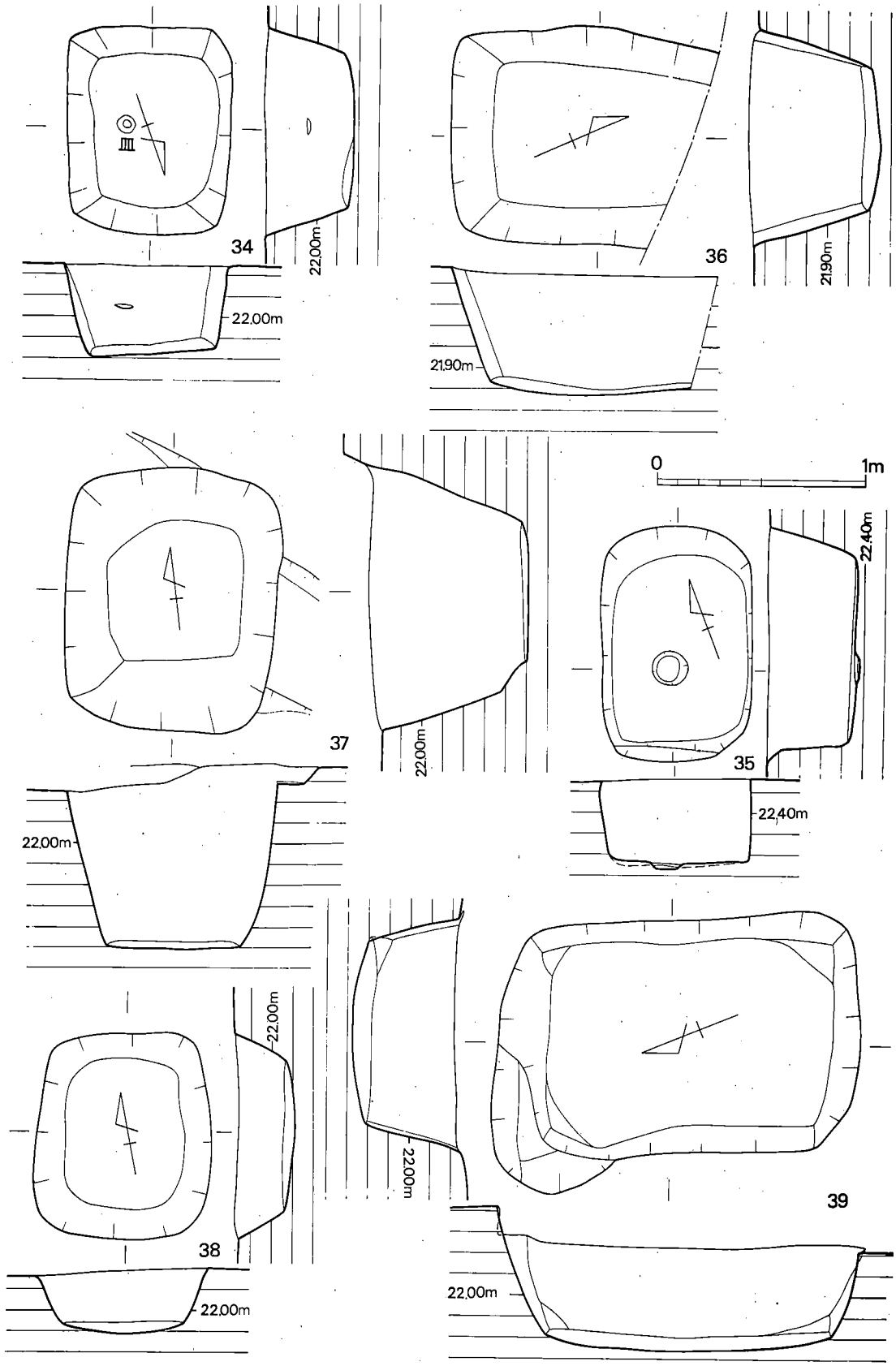
24号墓の南3.5mで、墓壙主軸をN－26°30'－Eにとる。墓壙の形状は、上縁長軸で99cm、短軸72.5cm。底面長軸59cm、短軸47.5cmで隅円長方形を呈する。断面は、深さ32cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺で小児用であろう。人骨、副葬品等皆無。

31号墓（第83図）

30号墓のすぐ南で、墓壙主軸をN－18°30'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で108.5cm、短軸72.5cm。底面長軸60.5cm、短軸33cmで隅円長方形を呈する。深さ60cmで急傾斜を呈す壁面から平坦な底面となる。1号墓をひとまわり小形にしたタイプである。人骨、副葬品等は出土をみない。



第 83 図 29～33号墓実測図 (1/30)



第 84 図 34～39号墓実測図 (1/30)

32号墓（第83図）

31号墓の東2mで、墓壙主軸をN－16°30'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で150cm、短軸108.5cm。底面長軸117.5cm、短軸86.5cmで長方形を呈する。深さ69cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺もしくは早桶と考える。人骨、副葬品等皆無。

33号墓（図版53、第83図）

32号墓の東に位置する。墓壙主軸をN－3°15'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で121cm、短軸105cmで隅円方形を呈し、底面長軸92cm、短軸72.5cmで卵形を呈する。深さ66cmで壁面急傾斜を呈し、平坦な底面となる。底面の平面形状から棺の形態を勘案すると、座棺の早桶と考えられる。人骨、副葬品等の出土はみない。

34号墓（図版53、第84図）

29号墓の南東3mで、墓壙主軸をN－19°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で98cm、短軸78.5cm。底面長軸73cm、短軸59cmで長方形を呈する。深さ42.5cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。また、墓壙内東寄りの中位層から磁器小皿が出土した。これは、紅皿と考えられるもので、棺上あるいは棺内に副葬されたものであろう。一方、人骨は残っていない。前述の副葬品の出土状況から棺の形態は、座棺の木棺あるいは早桶と考えられる。また、副葬品の紅皿から被葬者は女性と考えられる。

出土遺物（図版64、第76図11）

棺上に副葬されたもので、花弁状の型枠による成形で、現形はやや歪んでいる。口径8cm、器高2.2cm、高台径4cmを測る。

35号墓（第84図）

34号墓の北3.5mで、37号墓のすぐ南に位置する。墓壙主軸をN－22°－Eにおく。墓壙底面に径15cmほどの小穴をもつが、しかし、これは極めて浅く、墓壙の構造上、何らの意味は無いと考える。墓壙の形状は、上縁長軸で107cm、短軸71cm。底面長軸88.5cm、短軸65cmの隅円長方形を呈し、深さ41cmで直立する壁面と平坦な底面となる。棺の形態は、墓壙の規模から座棺の木棺または早桶と考えられる。人骨、副葬品等の出土はみられない。

36号墓（第84図）

23号墓の北東3mに位置する。墓壙主軸をN－23°30'－Eにおく。墓壙の北側が調査区外となり、長軸現存長で上縁115cm、底面95cmを測る。短軸は上縁103cm、底面66.5cmで平

面形状長方形を呈する。断面は、深さ45cmで急傾斜する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺と考えられる。人骨、副葬品等の出土はみられない。

37号墓（第84図）

調査区境で36号墓の南東2mに位置し、墓壙主軸をN－7°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で125cm、短軸101.5cmの隅円長方形を呈し、底面は長軸67cm、短軸65cmの歪方形を呈する。断面は、深さ80cmで急傾斜した壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺の木棺か早桶であろう。人骨、副葬品等は皆無。墓壙内から鉄釘片2点出土した。

出土遺物（図版65、第101図20・21）

共に破片である。20は頭部を欠失し、21は両端をかいている。断面は共に円形を呈する。

38号墓（第84図）

37号墓の南東2mで、墓壙主軸をN－11°15'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で97.5cm、短軸82.5cm。底面長軸72cm、短軸57cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ28cmで急傾斜を呈する壁面からレンズ状の底面となる。棺の形態は、小形の座棺で木棺か早桶かは不明である。しかし、墓壙の規模から小児用であることは知れる。人骨、副葬品等は皆無。

39号墓（図版54、第84図）

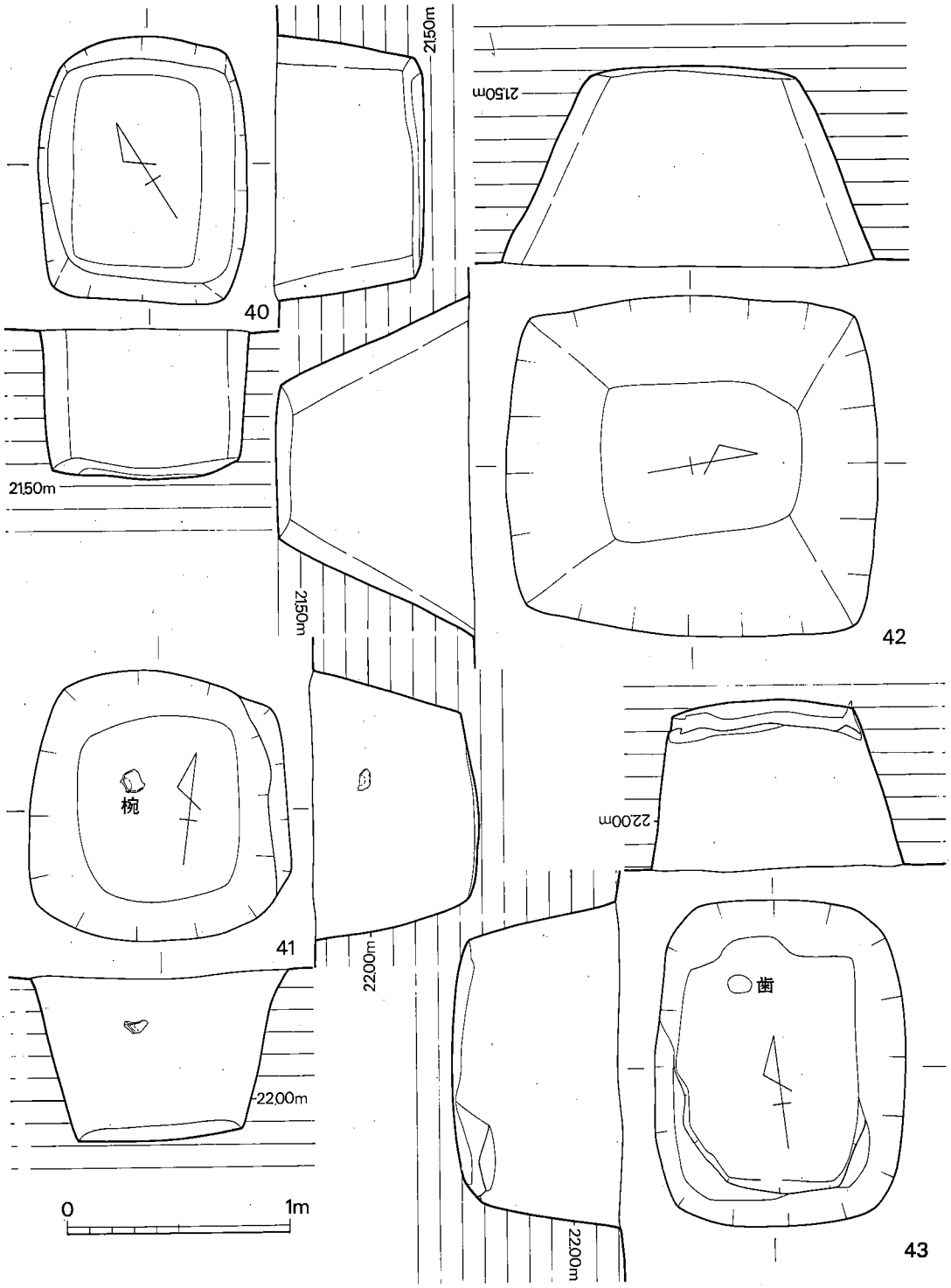
調査区境で38号墓の南東5mに位置する。墓壙主軸をN－22°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で173.5cm、短軸112cm。底面長軸136cm、短軸87.5cmを測る隅円長方形を呈する。断面は、深さ59cmで急傾斜を呈する壁面から膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺、寝棺の区別もつかない。人骨、副葬品等はみられない。

40号墓（第85図）

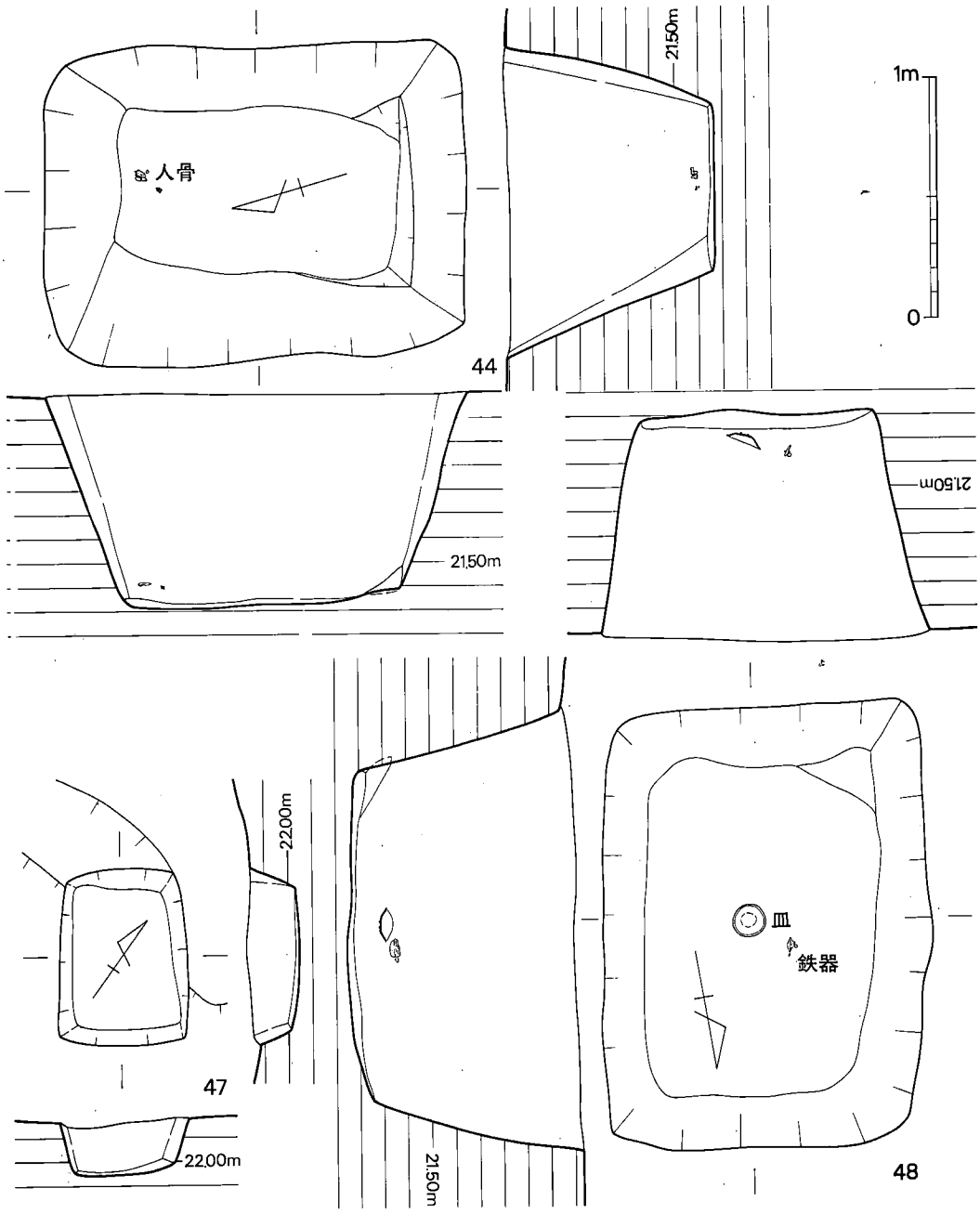
39号墓の南5mで、墓壙主軸をN－33°－Eにおく。墓壙底面に浅く凹む稜が検出された。これは、棺の痕跡と考えられ、この墓の棺形態は、座棺の木棺である。墓壙の規模は、上縁長軸117.5cm、短軸94cmで、底面長軸97cm、短軸83cmの隅円長方形を呈する。深さ67cmで急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。人骨、副葬品等はみられない。

41号墓（図版54、第85図）

40号墓の南3mで、墓壙主軸をN－4°45'－Wにおく。墓壙の形状は、上縁長軸で119cm、短軸107cm。底面長軸82cm、短軸72cmの隅円方形を呈する。深さ75cmを測り、急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。墓壙の中位層から磁器椀片が出土した。棺上副



第 85 図 40～43号墓実測図（1/30）



第 86 図 44・47・48号墓実測図 (1/30)

葬品であろう。棺の形態は、座棺で木棺か早桶と考える。人骨の出土はみられない。

出土遺物（図版64、第76図3）

棺上に副葬されたもので、葡萄か、もしくは蔓草の模様の染付が施された椀の破片で、口径12cm、器高6.6cm、高台径4.5cmを測る。やはり肥前系の磁器であろう。

42号墓（第85図）

40号墓の東4mで、主軸をN－9°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸167cm、短軸150.5cmの方形を呈し、底面長軸90cm、短軸67cmで隅円長方形を呈する。深さ86cmで急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺か、もしくは早桶となるであろう。人骨、副葬品皆無。

43号墓（第85図）

42号墓の南2mで、主軸をN－7°15′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸146cm、短軸112.5cmの隅円長方形。底面長軸100cm、短軸81.5cmで不整長方形を呈する。深さ75cmで急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。棺の形態は、墓壙の北東部底面から歯が出土し、被葬者の頭部もこの位置と考えられるので、座棺であろう。木棺か早桶かは定かではない。副葬品は、土師器小皿と杯（盃）が埋土から出土した。

出土遺物（図版64、第76図8・12）

共に墓壙埋土から検出された。8は、磁器の杯（盃）で、口径7.3cm、器高3cm、高台径3cmを測る。外面体部下半から高台内は釉が施されていない。12は土師器小皿で、口径7.8cm、器高1.7cmを測る。内面底部に少量ではあるが赤色の付着物があり、「紅」と思われる。紅皿である。

44号墓（第86図）

33号墓の南3mで、主軸をN－16°30′－Eにおく。墓壙の北部中央に頭骨片と歯が出土した。形状は、上縁長軸176.5cm、短軸129cm。底面は長軸115cm、短軸68.5cmで長方形を呈する。深さ87.5cmで急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺であろうが、木棺か早桶かは定かではない。しかし、墓壙の狭長さから木棺と考えるべきであろう。

45号墓（図版55、第87図）

44号墓の東3mで、主軸をN－29°－Eにおく。墓壙の南側を46号墓に切られている。また、墓壙内部は北に底面から40cmほどで段をもち、2段掘りとなる。形状は、現存する長軸上縁で94cm、底面下段で40cm、上段で43cmを測る。短軸上縁70cm、底面68cmで長方形を

呈するであろう。深さ65cmで急傾斜する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、墓壙から鉄釘等が出土する点から極めて小形の座棺の木棺と考える。人骨、副葬品は検出できない。

出土遺物（図版65、第101図22～28・図版67、第97図10）

この墓では、大小2種類の鉄釘が検出された。それはいずれも断面円形を呈している。また、頭部も円形を呈する。鉄器は、シルクハット状を呈し、高さ1.6cm、外径1.7cm、鍔径3.4cm、孔径1.6cmを測る。棹頭の飾り金具と考えられる。

46号墓（図版55、第87図）

45号墓を切り、47号墓に切られる極めて大型の墓壙である。主軸をN－84°30′－Wにおく。墓壙の形状は、上縁長軸323.5cm、短軸165cm。底面長軸330cm、短軸177.5cmの長方形を呈する。壁面は直立し平坦な底面となる。深さは113cmである。壙内からは、釘等の多量の鉄製品が出土した。一方、墓壙内から木片も出土しているが、その出土位置や向きに何らの方向性・規則性がみられない。この点から埋葬時の本来の位置を留めるものではないであろう。このことは、釘の出土状況も同様である。

出土遺物（図版66、第88図1～31・図版67、第97図15～17）

1～30は鉄釘である。1～20は大形のもので、21～30は小形ので断面円形、頭部も丸頭となる。31は鎹である。15・16は、鞍状を呈し、四隅両端に突起をもつ。用途は不明であるが、15の一辺には木片が付着する。17は断面方形を呈する棒状のものである。15・16は不明鉄器。

47号墓（第86図）

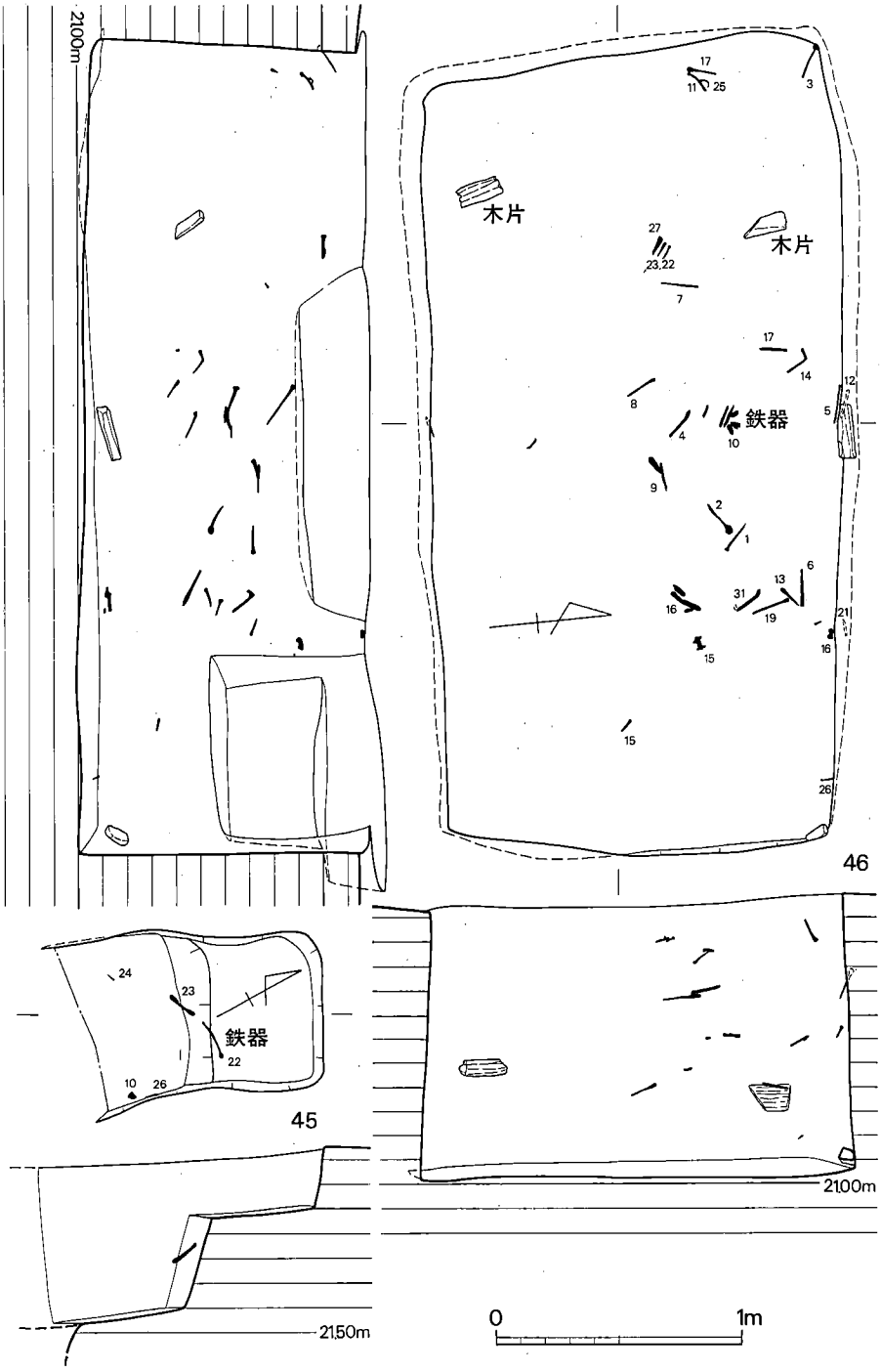
46号墓の北中央部を切っている小型の墓である。主軸をN－35°45′－Wにおく。墓壙形状は、上縁長軸74.5cm、短軸53cm。底面は長軸59cm、短軸41.5cmで長方形を呈する。深さ22cmで急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺で小児用と考えられる。また木棺か早桶かは定かではない。人骨、副葬品は皆無。

48号墓（図版55、第86図）

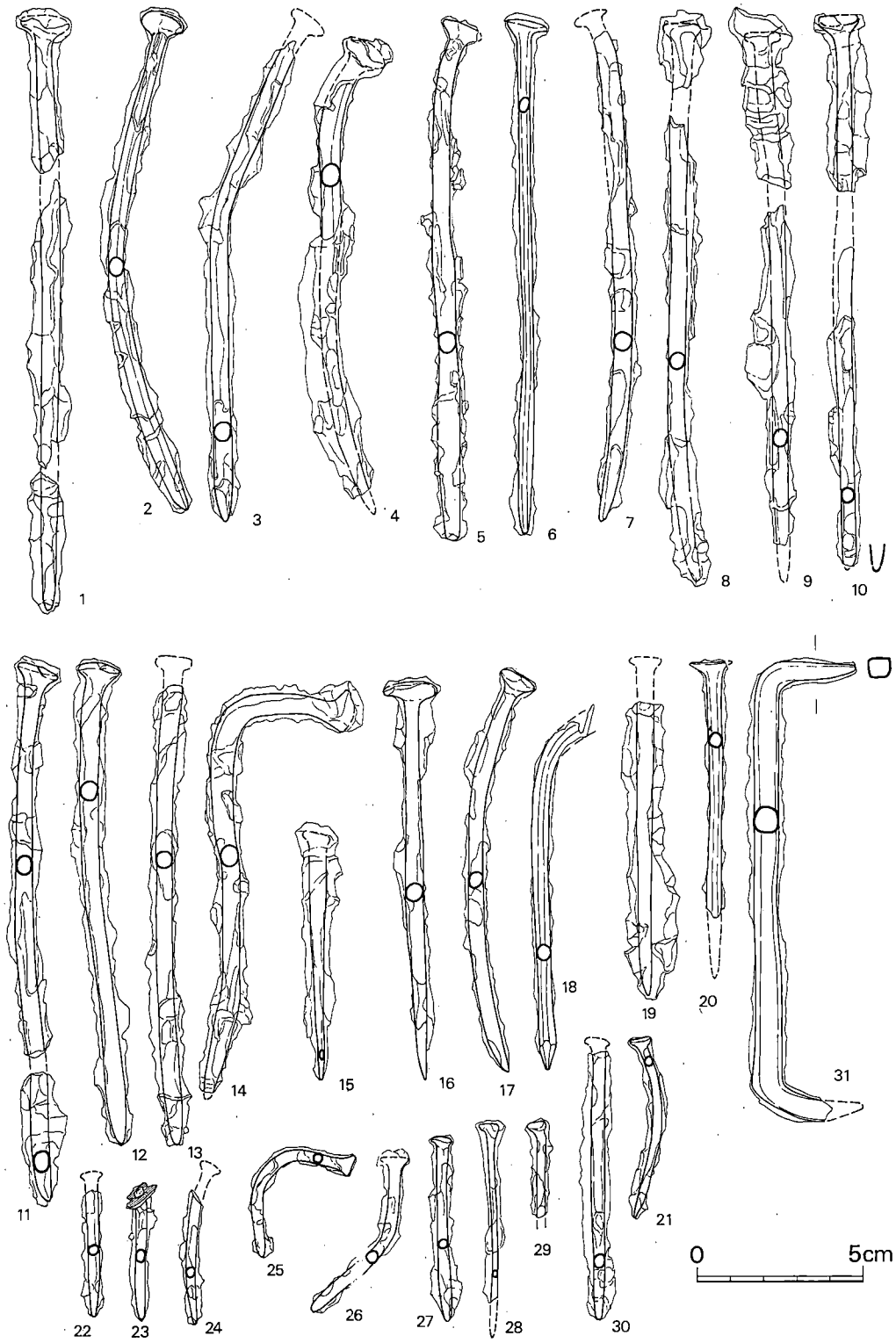
46号墓と9号墓の間で、主軸をN－10°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸183.5cm、短軸136.5cm。底面長軸133cm、短軸96.5cmで長方形を呈する。深さ92cmで急傾斜を呈する壁面から不陸のある底面となる。墓壙中央底部で不明鉄器と陶器小皿が出土した。小皿は棺内副葬品で、鉄器は棺の金具と考えられる。棺の形態は、やや規模は大きいが座棺であろう。木棺か早桶かは定かではない。人骨は検出できなかった。

出土遺物（図版67、第76図1・図版67、第97図3）

陶器小皿で、口径14.6cm、器高3.8cm、高台径4cmを測る。淡い黄銅色を呈する。砂目が



第 87 図 45・46号墓実測図 (1/30)



第 88 図 46号墓出土鉄器実測図 (1/2)

4個残る。鉄器は、箪笥等の金具と考えられる。頭部環状の鋲で、鉄の板に1.5cmほどの間隔をもって留められている。閂状を呈している。

49号墓（図版56、第89図）

46号墓の南東4mほどで、主軸をN－75°15′－Wにおく。墓壙形状は、上縁長軸216.5cm、短軸129cm。底面は長軸183.5cm、短軸103.5cmで長方形を呈する。墓壙の底面四隅に深さ5～10cmの小穴がある。これは、棺の埋葬に際して墓壙内に棺を埋納するための工夫であろう。深さ95cmで急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、墓壙の規模や四隅の小穴の付設から寝棺の木棺であろう。人骨、副葬品は皆無。ただ1点覆土より座金付きの釘が出土した。断面円形を呈する。

出土遺物（図版67、第101図29）

断面円形の鉄釘で、全長7.9cmを測る。頭部に座金をもち、座金の下にキルト地の黒色のパウンドがある。極めて近年のものであろう。

50号墓（第90図）

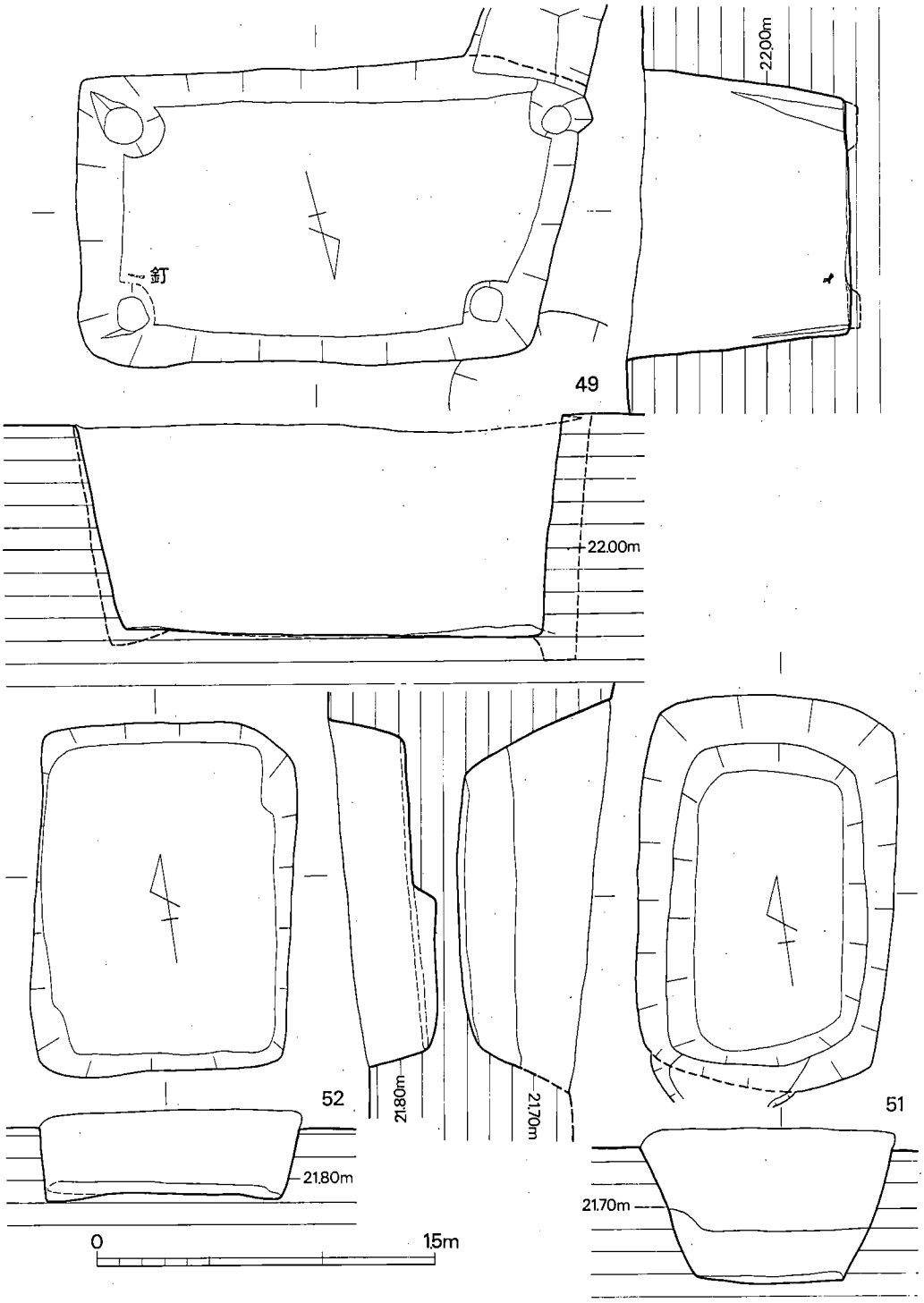
46号墓の東6mで、主軸をN－17°45′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸162.5cm、短軸139cm。底面長軸98cm、短軸75cmの隅円長方形を呈する。深さは78cmで、急傾斜の壁面からレンズ状の底面となる。壙内からは、釘等の多量の鉄製品が出土した。棺の形態は、墓壙の規模から座棺と考えられる。早桶か木棺かは不明である。人骨、副葬品等は検出されなかった。

51号墓（図版56、第89図）

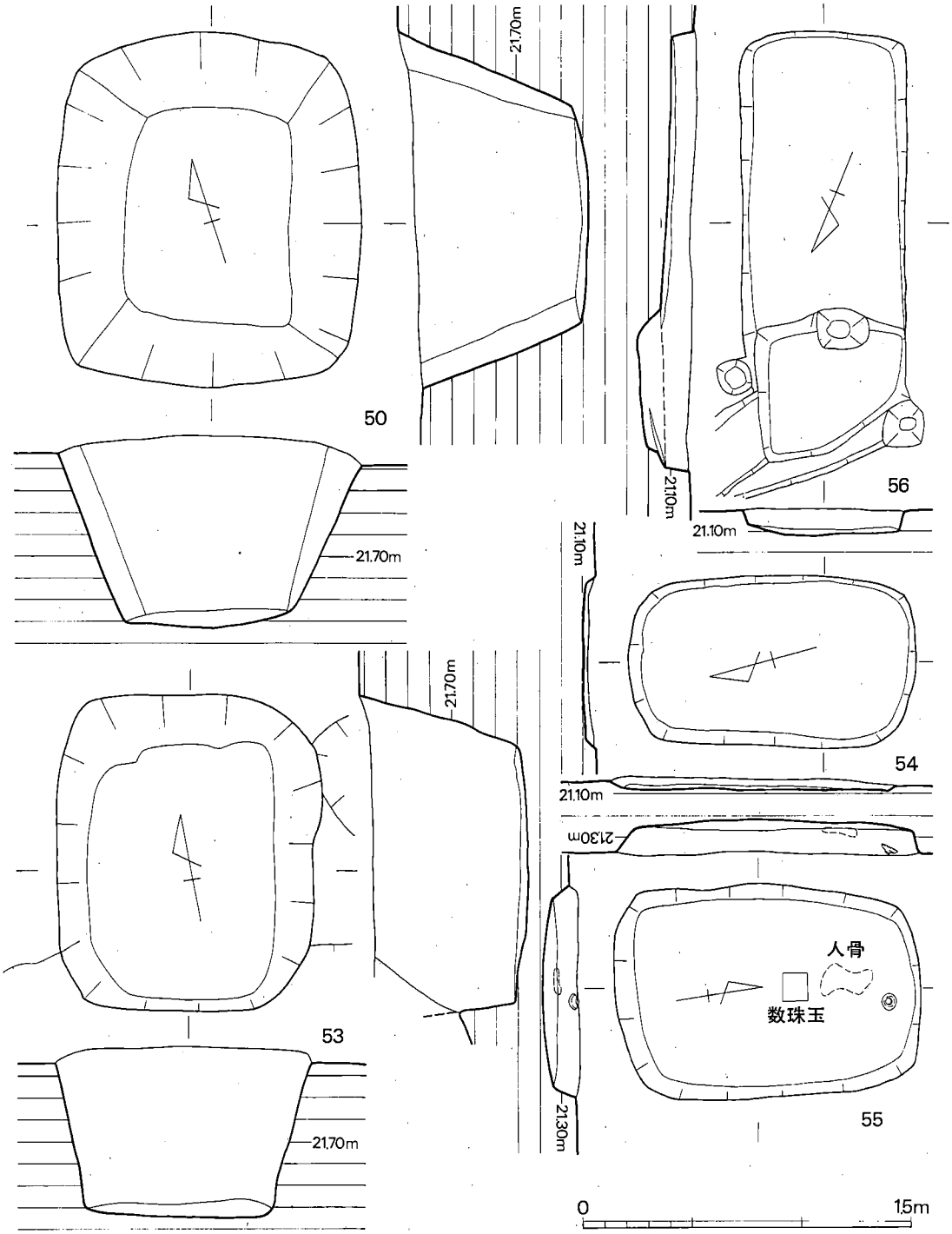
49号墓の南東で、50号墓の南4mに位置する。主軸をN－8°45′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸177.5cm、短軸113.5cm。底面長軸122.5cm、短軸65.5cmの隅円長方形を呈する。深さは60cmで、壁面急傾斜でやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、墓壙の形状から寝棺の木棺と考えられる。人骨、副葬品等は検出されなかった。

52号墓（第89図）

51号墓の北東2mで、53号墓のすぐ西に位置する。主軸をN－7°45′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸156.5cm、短軸113.5cm。底面長軸139cm、短軸103.5cmの長方形を呈する。深さ29cm、壁面急傾斜から平坦な底面となる。棺の形態は、寝棺か座棺か不明である。人骨、副葬品等は検出されなかった。



第 89 図 49・51・52号墓実測図 (1/30)



第 90 図 50・53～56号墓実測図（1/30）

53号墓（図版56、第90図）

52号墓の西2mで、主軸をN－10°15′－Eにおく。墓壙の南が削平され、墓壙の規模は、現存上縁長軸140cm、短軸118cm。底面長軸117.5cm、短軸86cmの隅円長方形を呈する。深さ70cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶か不明である。人骨、副葬品等皆無。

出土遺物（図版67、第97図8・9）

鉄製の環頭をもつ鋲である。これも48号墓で出土したものと同様に2本が対になるものであろう。

54号墓（第90図）

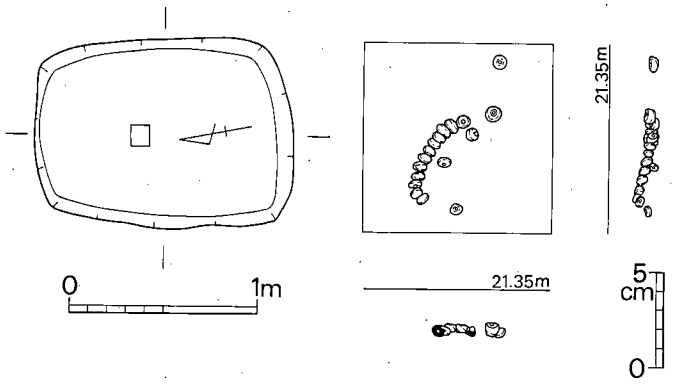
53号墓の南8mほどで、54号墓より以前の近世墓から一段低い位置に55号・56号墓とともにある。この部分は、近年の耕作地整備により削平を受けている。墓壙は主軸をN－16°45′－Eにおく。墓壙の上部を削平され、深さ5cmほどが残る。墓壙の規模は、上縁長軸131.5cm、短軸79cm。底面長軸121.5cm、短軸72cmの隅円長方形を呈する。急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶になるであろう。人骨、副葬品等皆無。

55号墓（図版57、第90・91図）

54号墓の南東10mで、墓壙主軸をN－11°－Eにおく。墓壙の上部を54号墓同様に削平され、深さ14cmほどが残る。しかし、墓壙内からは、粉状になった骨や歯と浅い杯（盃）と中央部に数珠玉が出土した。墓壙の規模は、上縁長軸140cm、短軸99cm。底面長軸127cm、短軸87cmの隅円長方形を呈する。急傾斜を呈する壁面から不陸がある底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶になるであろう。

出土遺物（図版64第76図10・図版57第95図）

10は、磁器小皿で口径7.4cm、器高2.8cm、底径3.2cmを測る。形状から紅皿かと思われる。また、数珠玉は23個検出した。全体に磨滅が著しく、表面が粉状に剥落している。ガラス製であろう。径は5.1～7mm、厚さは3.9～5.7mm、重さは平均



第 91 図　55号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）

0.15gを測る。計測値は表3のとおりである。

表 3　55号墓出土数珠玉計測表

単位（mm／g）

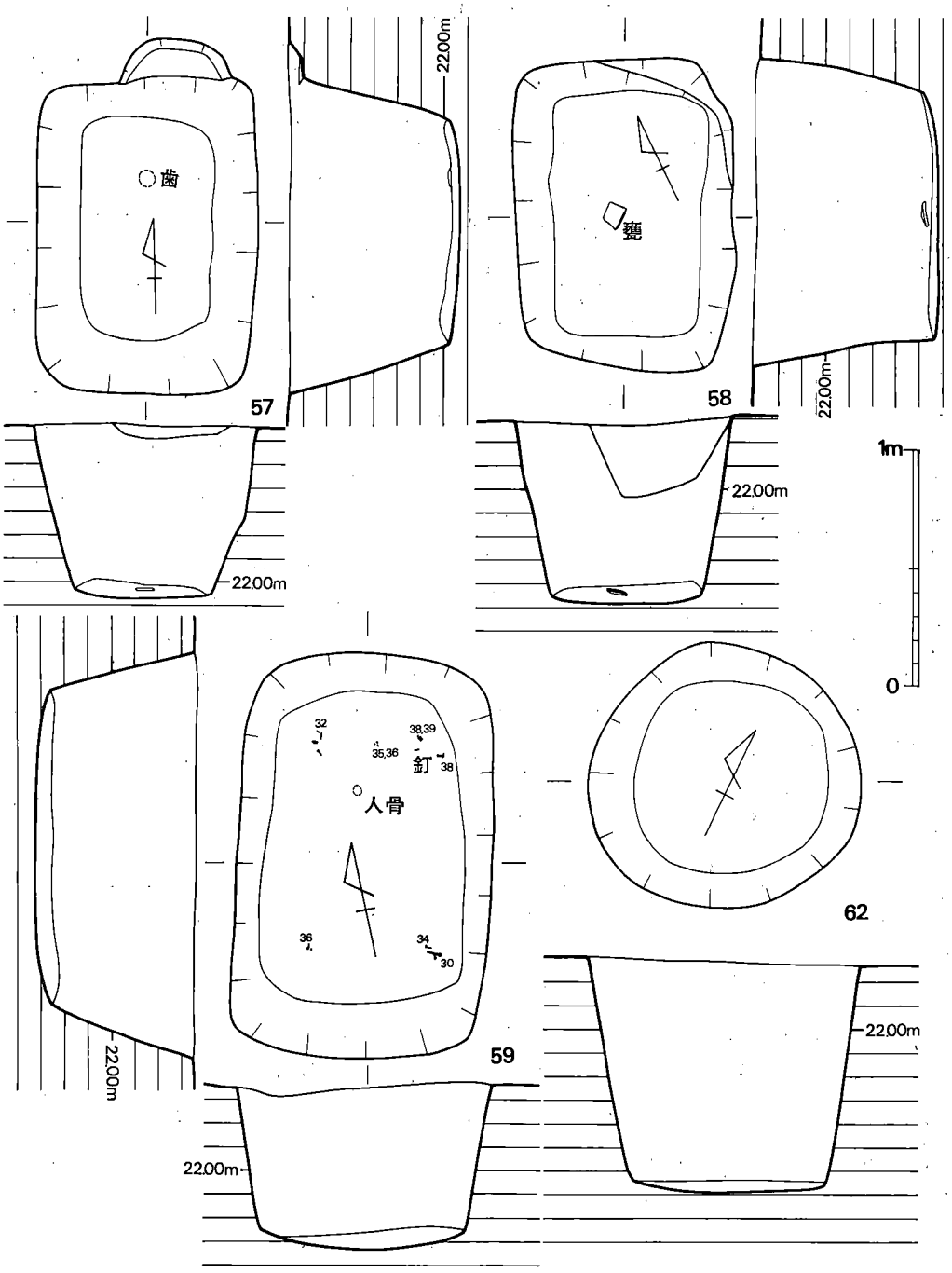
No.	近世墓	径	厚さ	孔径	重量	色調	備考
1	55号	6.8	4.6	1.9	0.2	うすいクリーム色	
2	〃	7.0	4.3	1.6	0.15	〃　（若干つや有）	
3	〃	6.4	4.5	2.0	0.15	〃	
4	〃	6.6	5.1	2.1	0.25	〃	
5	〃	6.2	4.9	2.0	0.1	〃	
6	〃	5.1	5.6	1.8	0.1	〃（つや有）	
7	〃	6.9	5.1	1.9	0.25	〃	
8	〃	6.6	4.8	2.1	0.25	〃	剝落著しい
9	〃	6.6	5.7	2.1	0.25	〃	
10	〃	6.1	5.4	2.1	0.15	〃	剝落著しい
11	〃	6.2	5.0	2.1	0.15	〃	
12	〃	6.4	5.0	1.6	0.1	〃	
13	〃	6.3	4.7	1.5	0.1	〃	
14	〃	6.9	5.4	2.1	0.25	〃	
15	〃	6.6	4.8	2.1	0.15	〃	
16	〃	6.0	5.4	2.0	0.2	〃	
17	〃	5.6	5.4	2.3	0.05	〃	
18	〃	5.9	4.8	2.2	0.1	〃	
19	〃	6.6	5.7	2.0	0.2	〃	
20	〃	6.1	4.8	1.7	0.15	〃	
21	〃	6.4	3.9	2.0	0.2	〃	
22	〃	5.9	4.3	2.1	0.1	〃	
23	〃	—	—	—	—	〃	二つに割れ計測不可能

56号墓（第90図）

55号墓の北7mに位置し、墓壙主軸をN－23°15’－Wにおく。54号・55号墓同様に墓壙の上部を削平され、深さ11cmほどが残る。墓壙の規模は、上縁長軸190cm、短軸74cm。底面長軸186cm、短軸69cmの長方形を呈する。床面北側は、70×60cmで一段掘り凹められるが、理由は不明である。底面は全般に緩やかに内部に対して反りをもち、直立する壁面となる。棺の形態は、寝棺の木棺であろう。人骨、副葬品等皆無。

57号墓（図版58、第92図）

B区の東側で、8号溝の南、55号墓の東15mに位置する。墓壙主軸をN－1°45’－Eにお



第 92 図 57～59・62号墓実測図（1/30）

く。墓壙の形状は、上縁長軸134cm、短軸94cm。底面長軸94cm、短軸56cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ73cmで、壁面は急傾斜を呈し、底面はやや膨らみをもつ。棺の形態は、座棺の木棺と考えられる。また、底面やや北寄りに歯が出土した。その他の骨や副葬品等は検出できない。

58号墓（図版58、第92図）

57号墓の南西4mに位置する。墓壙主軸をN－26°15'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸131cm、短軸93cm。底面長軸103cm、短軸63cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ74cmで、壁面は急傾斜を呈し、底面はやや膨らみをもつ。棺の形態は、座棺の木棺と考えられる。また、底面から甕片が出土した。人骨や副葬品等は検出できない。

59号墓（図版59、第92図）

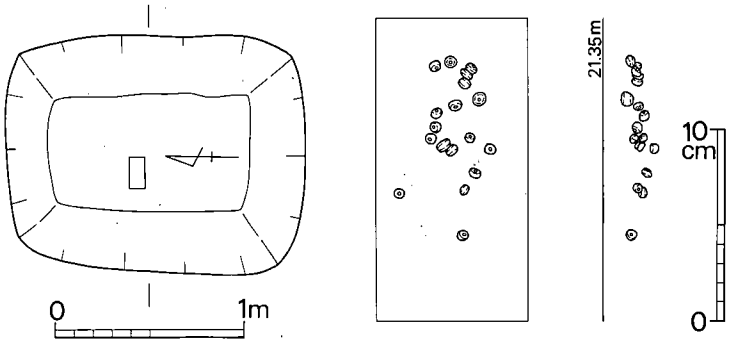
58号墓の東5mに位置する。墓壙主軸をN－11°30'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸173cm、短軸109cm。底面長軸134cm、短軸86cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ69cmで、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺である。そのことは、墓壙内に残る鉄釘の位置から知れる。規模は、長さ85cm、幅45～50cm、高さ20＋αである。また、底面やや北寄りに骨片が少量出土した。その他の骨や副葬品等は検出できない。

出土遺物（図版67、第101図30～40）

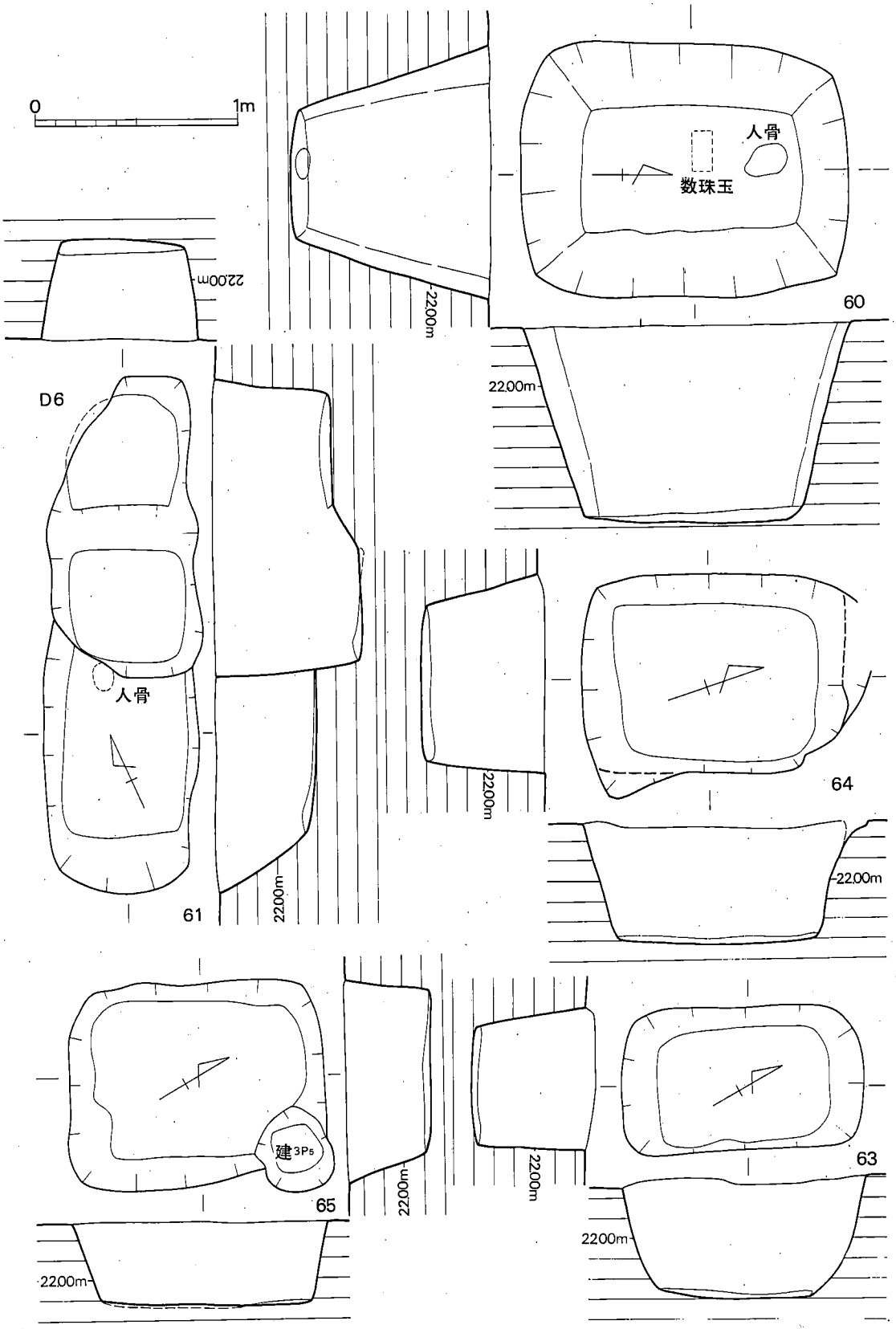
墓壙底より11本検出された。断面方形を呈し、頭部を一方向に折り曲げている。

60号墓（図版59、第94図）

59号墓の南4mに位置する。墓壙主軸をN－1°15'－Wにおく。墓壙の形状は、上縁長軸162cm、短軸125cmの隅円長方形で、底面長軸109cm、短軸61cmの長方形を呈する。断面は、深さ99cmで、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺と考えられる。また、墓壙の北側に頭骨片と歯が、中央やや西寄りに数珠玉が出土



第 93 図 60号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）

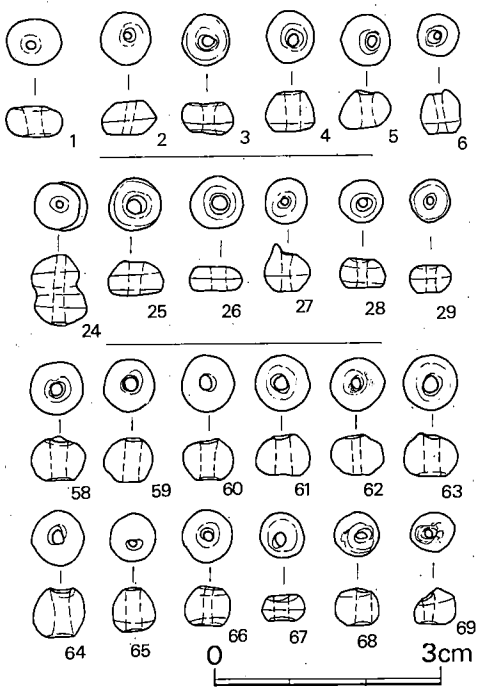


第 94 図 6号土壙、60・61・63～65号墓実測図（1/30）

した。その他の出土品等はない。

出土遺物（図版59、第76図５、第95図24～29）

5は、埋土中より検出した青磁片で、混入品であろう。復原口径13.2cm。灰味緑色を呈し、胎土は精良である。また、数珠玉は34個検出した。全体に磨滅が著しく、表面が粉状に剥落している。ガラス製であろう。径は5.8～7.2mm、厚さは3.1～9.1mm、重さは平均0.2 g、計測値は表４のとおりである。



第95図　55・60・75号墓出土数珠玉実測図(1/1)

61号墓（第94図）

60号墓の東5mに位置する。墓壙主軸をN－24°30′－Eにおく。墓壙は北側を6号土壙に切られる。規模は、長軸上縁で140cm＋α、底面100cm＋α、短軸上縁76cm、底面60cmで、上縁長円形、底面長方形を呈するものであろう。断面は、深さ50cmで、急傾斜を呈する壁面から北に緩く傾斜する底面となる。棺の形態は、寝棺か座棺の木棺と考えられる。また、墓壙の北側に頭骨片が出土した。その他の骨や副葬品等は検出できない。

62号墓（図版60、第92図）

61号墓の北東3mに位置する。墓壙の形状は、円形で上縁114 ～116cm、底面83cmを測る。断面は、深さ97cmで、急傾斜を呈する壁面からレンズ状の膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の早桶と考えられる。また、墓壙内から頭骨、脛骨、腰骨、肋骨片が出土した。その他の出土品等は検出できない。墓壙の形状が他のものと異なり、さらに人骨の出土状況が良い。このような点から春園遺跡で最も新しいものと考えられる。

63号墓（図版60、第94図）

62号墓の北2mに位置する。墓壙主軸をN－30°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸121cm、短軸70cmの隅円長方形で、底面長軸85cm、短軸57cmの歪隅円長方形を呈する。断面は、深さ61cmで、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺と考えられる。また、墓壙底の北東から頭骨片が出土した。その他の骨や出土品等は検出できない。

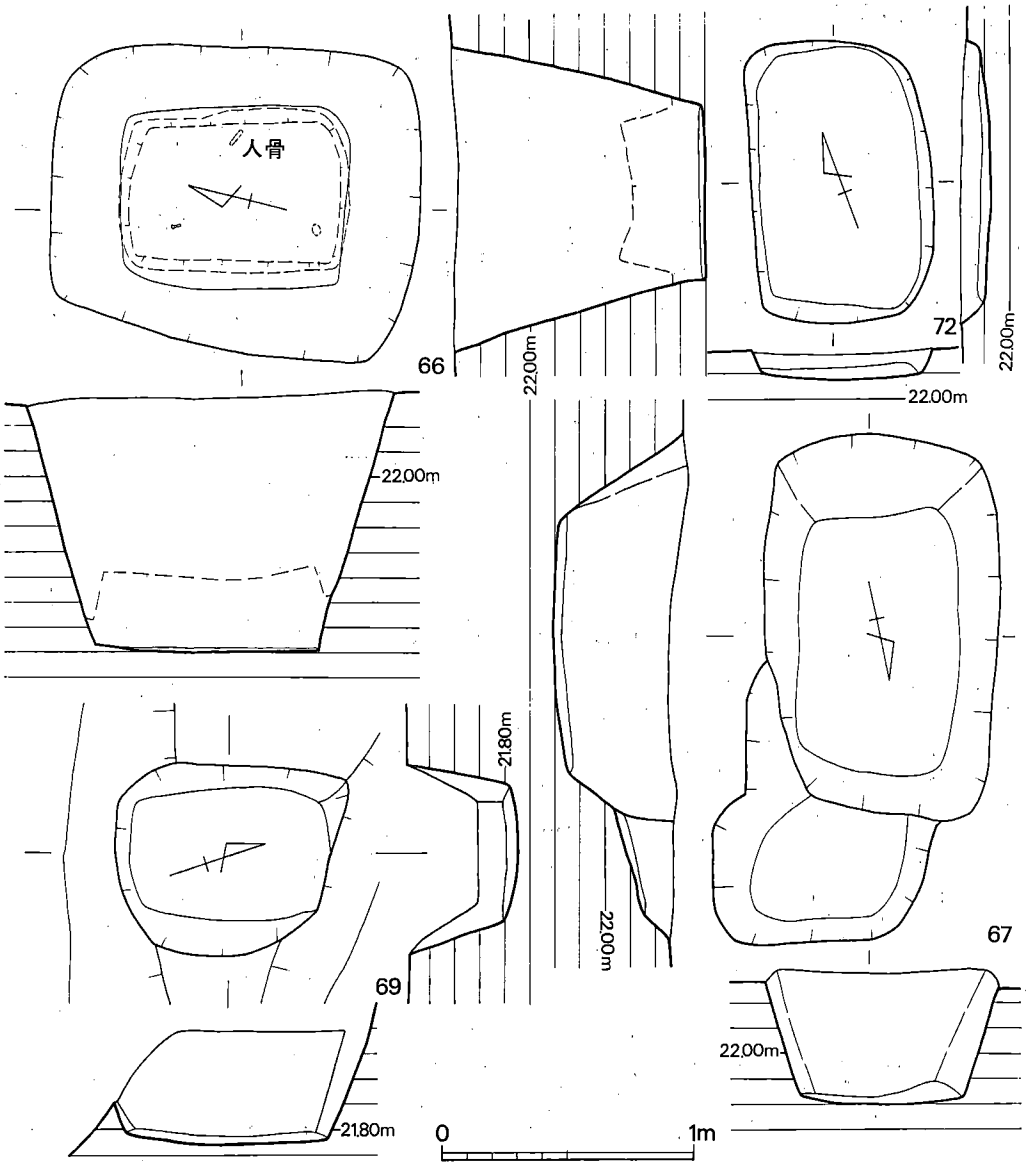
表 4　60号墓出土数珠玉計測表

単位（mm／g）

No.	近世墓	径	厚さ	孔径	重量	色調	備考
24	60号	6.1 6.0	9.1	1.5	0.4	アメ色（つや有）	連玉
25	〃	6.8	4.4	2.2	0.35	不透明	
26	〃	7.2	3.5	2.4	0.2	アメ色（つや有）	
27	〃	6.0	5.0	1.3	0.2	〃	
28	〃	6.0	4.0	1.7	0.05	〃	
29	〃	5.1	3.6	1.2	0.05	〃	
30	〃	6.7	6.1	1.5	0.35	〃	
31	〃	6.6	3.1	2.2	0.15	〃	
32	〃	6.9	5.3	2.6	0.15	〃（つや有）	
33	〃	6.5	5.0	1.4	0.3	〃	
34	〃	5.8	3.7	1.9	0.2	不透明	
35	〃	6.4	4.7	1.6	0.25	アメ色（つや有）	
36	〃	5.8	5.4	1.5	0.2	〃	
37	〃	5.8	4.4	1.6	0.15	〃	
38	〃	6.0	4.2	1.6	0.2	不透明	表面白線が巡る
39	〃	—	—	—	—	アメ色	計測不可能
40	〃	7.1	4.3	2.1	0.3	不透明	
41	〃	6.7	4.7	2.0	0.3	〃	
42	〃	6.6	4.7	1.9	0.2	アメ色（つや有）	
43	〃	6.4	5.1	2.0	0.15	〃	一部欠損
44	〃	6.0	4.8	1.9	0.15	〃（つや有）	
45	〃	6.6	4.1	2.5	0.15	〃（〃）	
46	〃	6.5	5.5	1.5	0.25	〃（〃）	
47	〃	6.0	4.4	2.0	0.15	〃（〃）	
48	〃	6.4	3.6	2.4	0.15	〃（〃）	
49	〃	6.0	5.4	2.0	0.15	〃（〃）	
50	〃	6.4	4.3	2.0	0.2	〃（〃）	
51	〃	6.4	5.4	1.4	0.2	〃（〃）	
52	〃	6.4	4.4	2.0	0.2	〃（〃）	
53	〃	6.1	4.2	1.8	0.15	〃（〃）	
54	〃	6.0	4.2	1.4	0.2	〃（〃）	
55	〃	5.8	4.1	1.6	0.2	〃（〃）	
56	〃	5.8	3.9	1.3	0.2	〃（〃）	
57	〃	5.8	4.0	1.6	0.2	〃（〃）	

64号墓（図版61、第94図）

63号墓の北東2mに位置する。墓壙主軸をN－18°45'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸128cm、短軸98cmの隅円長方形で、底面長軸98.5cm、短軸77.5cmの隅円方形を呈する。断面は、深さ62cmで、急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺の木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。



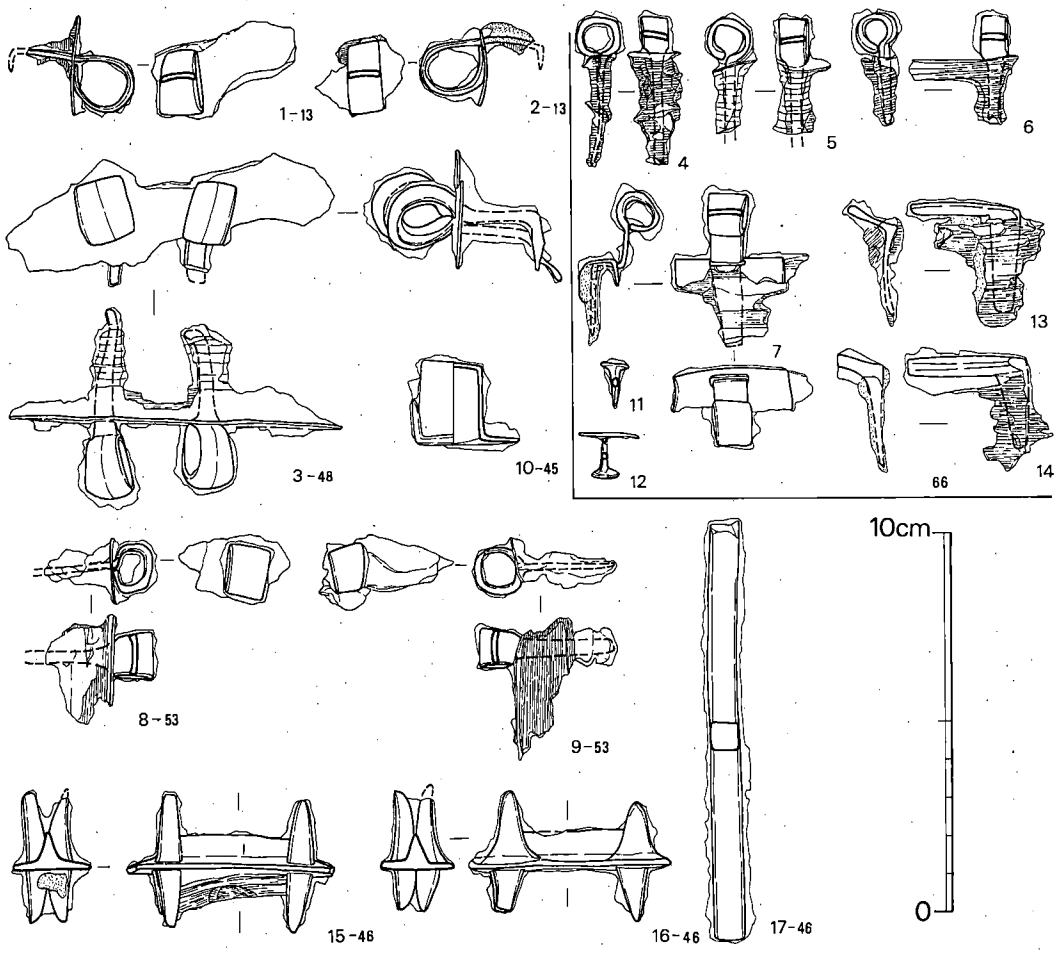
第 96 図 66・67・69・72号墓実測図（1/30）

65号墓（第94図）

64号墓の南3mに位置する。墓壙主軸をN－30°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸120cm、短軸100cmの隅円長方形で、底面長軸105cm、短軸77cmの不整方形を呈する。断面は、深さ42cmで、急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺の木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

66号墓（図版61、第96図）

8号溝の北で、64号墓の北5mに位置する。墓壙主軸をN－14°30′－Wにおく。墓壙の形状は、上縁長軸147cm、短軸120cm。底面長軸89cm、短軸72cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ100cmで、急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。墓壙底の若干浮いた位置で、



第 97 図　近世墓出土鉄器実測図（1/2）

頭骨と下肢骨および鉄製品が出土した。棺の形態は、墓壙の底に巡る小さな溝が検出でき、これに棺の側板を立てていたと考えられる。また、底には板が敷かれていたのであろう。このことにより棺は、座棺の組立て式の木棺であろう。

出土遺物（図版67、第97図4～7・11～14）

いずれも箪笥金具であろう。4～7は頭部が環状になるものである。11は小形の鋲状のもので、12は両端留めの金具である。13・14は蝶番の金具であろう。

67号墓（第96図）

66号墓の東6mに位置する。墓壙主軸をN－12°30'－Eにおく。墓壙は北側を攪乱を受けている。墓壙の形状は、上縁長軸150cm、短軸93cmの隅円長方形で、底面長軸100cm、短軸64cmの歪扇形を呈する。断面は、深さ50cmで、急傾斜を呈する壁面からやや膨らむ底面となる。棺の形態は、その狭小な墓壙底から座棺の木棺と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

68号墓（図版62、第98図）

67号墓の東8mに位置する。墓壙主軸をN－3°45'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸142cm、短軸89cmの隅円長方形で、底面長軸123cm、短軸69cmの不整長方形を呈する。断面は、深さ40cmで、急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。棺の形態は、座棺の木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

69号墓（第96図）

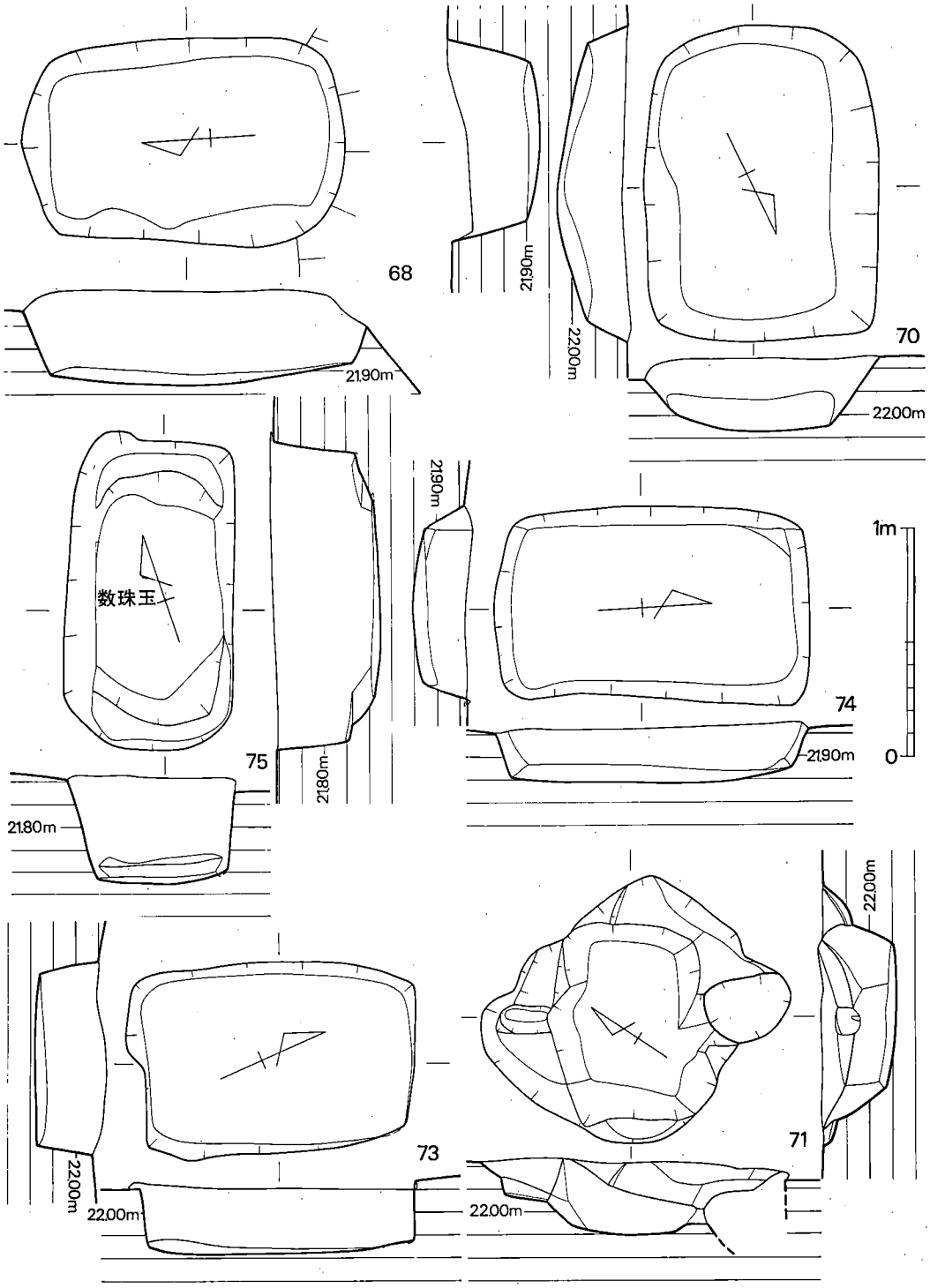
68号墓の東3mで、墓壙の北側が調査区外となる。墓壙主軸をN－18°15'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸90cm＋α、短軸76cm。底面長軸80cm、短軸53.5cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ44.5cmで、急傾斜を呈する壁面からレンズ状に膨らむ底面となる。棺の形態は、小児用の座棺で木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

70号墓（第98図）

8号溝の南で、67号墓の南東6mに位置する。墓壙主軸をN－25°45'－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸139cm、短軸103.5cmの隅円長方形で、底面長軸121cm、短軸67cmの不整長方形を呈する。断面は、深さ30cmと浅く、急傾斜を呈する壁面から中央に緩い傾斜がある底面となる。棺の形態は、座棺か寝棺か定かではないが、木棺であろう。人骨や副葬品等は検出できない。

71号墓（第98図）

70号墓の東7mで、8号溝を挟んで69号墓のすぐ南に位置する。墓壙主軸をN－57°30'－



第 98 図 68・70・71・73～75号墓実測図 (1/30)

Eにおく。墓壙は、木の根やその他削平によりみだれている。墓壙の形状は、上縁長軸85cm、短軸63cm。底面長軸63cm、短軸47cmの隅円長方形を呈するものであろう。断面は、深さ30cmで、急傾斜を呈する壁面からやや膨らむ底面となる。棺の形態は、規模から小児用の座棺で木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

72号墓（第96図）

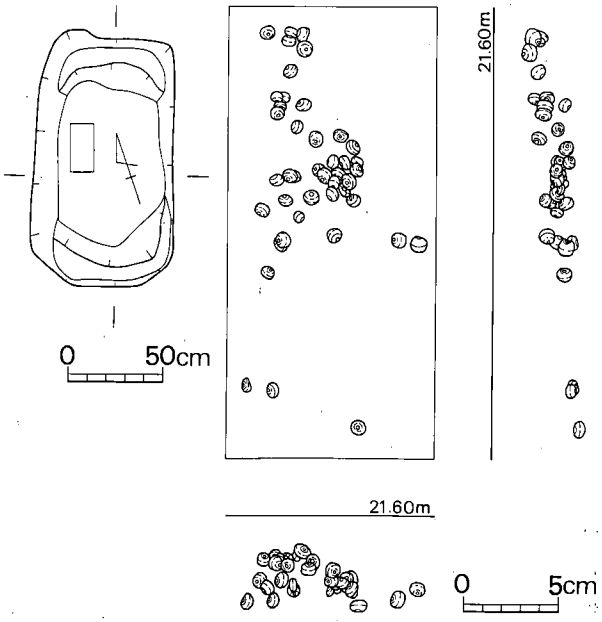
71号墓の南東2mに位置する。墓壙主軸をN－25°15′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸112cm、短軸72cm。底面長軸102cm、短軸63cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ11cmのみが残る。急傾斜を呈する壁面から平坦な底面となる。棺の形態は、座棺であろうが、小児用と考えれば、寝棺かも知れない。棺は木棺であろう。人骨や副葬品等は検出できない。

73号墓（第98図）

72号墓の南東4mに位置する。墓壙主軸をN－24°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸119cm、短軸84cm。底面長軸116cm、短軸74cmの隅円長方形を呈する。断面は、深さ30cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみを持つ底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。

74号墓（第98図）

73号墓の東5mに位置する。墓壙主軸をN－4°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸138cm、短軸84cmの隅円長方形で、底面長軸124cm、短軸68cmの不整長方形を呈する。断面は、深さ22cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺で木棺と考えられる。人骨や副葬品等は検出できない。



第99図　75号墓数珠玉出土状況実測図（1/40・1/4）

75号墓（図版63、第98・99図）

73号墓の南東5mに位置する。墓壙主軸をN－19°－Eにおく。墓壙の形状は、南北に底面から10cmほ

どに段をもつ。上縁長軸135cm、短軸74cmの隅円長方形で、底面長軸85cm、短軸56cmの不整形を呈する。断面は、深さ47cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺で木棺と考えられる。

また、墓壙の中央西寄りに散在して数珠玉が出土した。その他出土品や人骨等は検出できない。

出土遺物（図版63、第95図58～69）

出土数珠玉は総計51個である。いずれも55号・60号墓同様に磨滅が著しい。材質はガラス製である。計測値は表5のとおりである。

表 5 75号墓出土数珠玉計測表

単位（mm／g）

No.	近世墓	径	厚さ	孔径	重量	色調	備考
58	75号	6.7	5.5	2.2	0.35	不透明	
59	〃	6.8	5.6	2.4	0.4	〃	
60	〃	6.9	5.0	2.2	0.35	白濁不透明	
61	〃	6.9	5.0	1.9	0.35	白濁色	
62	〃	6.6	4.6	1.9	0.2	アメ色（つや有）	
63	〃	6.8	5.4	2.1	0.35	〃	
64	〃	6.7	6.6	2.2	0.4	不透明（つや有）	
65	〃	6.0	5.1	1.5	0.3	アメ色	
66	〃	6.3	4.7	1.6	0.35	〃（つや有）	
67	〃	5.6	3.2	2.0	0.1	〃（若干つや有）	
68	〃	5.5	4.0	1.4	0.1	〃	表面剥落
69	〃	5.3	4.1	1.7	0.1	〃（つや有）	
70	〃	7.0	5.6	2.1	0.35	白粉アメ色	
71	〃	6.7	5.2	1.9	0.35	白筋入不透明	
72	〃	6.7	5.6	2.2	0.35	若干白色不透明	
73	〃	6.7	5.0	2.0	0.35	アメ色	
74	〃	6.8	5.5	2.1	0.35	白粉アメ色（内不透明）	
75	〃	6.9	5.1	2.1	0.35	〃（〃）	
76	〃	6.7	5.5	2.1	0.35	不透明	
77	〃	6.8	5.1	2.1	0.35	白粉アメ色（内不透明）	
78	〃	6.7	5.6	2.1	0.35	〃	
79	〃	6.6	5.3	1.7	0.35	〃	
80	〃	6.8	5.7	2.3	0.35	〃	
81	〃	6.2	5.1	1.7	0.35	アメ色（つや有）	
82	〃	6.7	5.6	1.8	0.4	〃	
83	〃	6.6	5.8	1.8	0.4	〃（つや有）	
84	〃	6.6	5.1	1.6	0.35	〃（〃）	

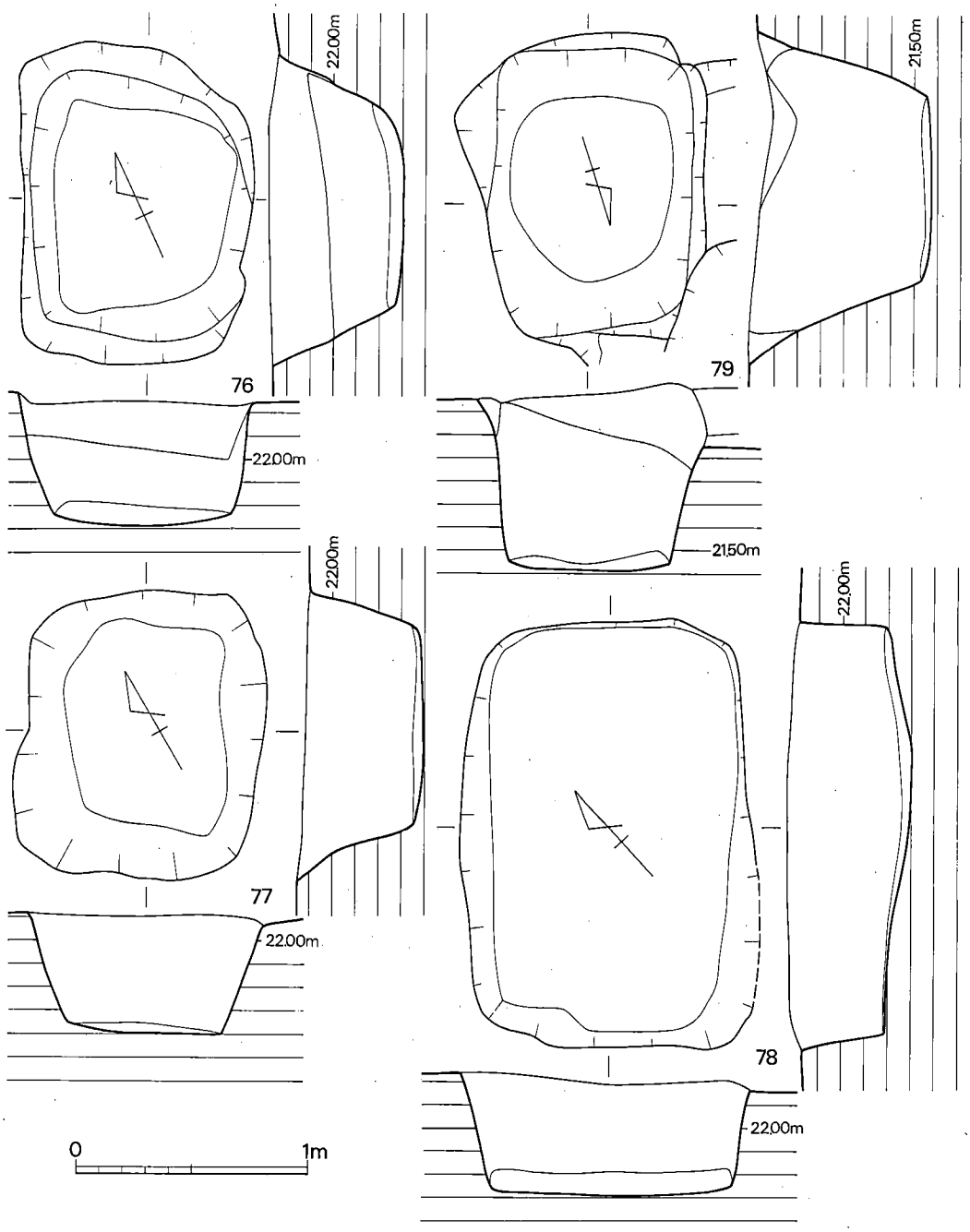
No.	近世墓	径	厚さ	孔径	重量	色調	備考
85	75号	6.3	5.3	1.6	0.35	アメ色（つや有）	
86	〃	6.7	5.2	1.9	0.35	〃（〃）	
87	〃	6.4	5.4	1.9	0.35	〃（〃）	
88	〃	6.2	5.6	1.4	0.3	〃（〃）	
89	〃	6.4	5.2	1.7	0.35	アメ色（不透明部位有）	
90	〃	6.4	4.8	1.6	0.3	〃（つや有）	
91	〃	6.4	5.4	1.7	0.35	〃（〃）	
92	〃	6.4	5.8	1.7	0.35	白粉不透明	
93	〃	6.4	5.9	1.7	0.35	〃	
94	〃	6.5	5.2	2.1	0.35	〃	
95	〃	6.3	5.3	1.7	0.35	〃	
96	〃	6.4	5.2	1.7	0.35	〃	
97	〃	6.5	5.4	1.8	0.35	〃	
98	〃	6.4	5.2	1.7	0.35	〃	
99	〃	6.4	5.4	1.7	0.35	アメ色	
100	〃	6.2	5.0	1.4	0.3	〃（つや有）	
101	〃	6.4	5.4	1.7	0.3	〃	
102	〃	6.1	5.1	2.1	0.3	〃	
103	〃	6.1	4.9	2.0	0.25	〃	
104	〃	5.8	5.1	1.9	0.2	〃	
105	〃	5.6	4.2	1.4	0.1	〃	
106	〃	6.7	5.6	1.8	0.35	〃	二分割品
107	〃	6.6	5.0	1.5	0.35	〃	二分割品
108	〃	6.1	4.0	1.9	0.1	〃	二分割品

76号墓（第100図）

70号墓の南6mに位置する。墓壙主軸をN－25°－Eにおく。墓壙の形状は、不整形を呈し、上縁長軸135cm、短軸74cm。底面は長軸84cm、短軸76cmの不整台形を呈する。断面は、深さ58cm、急傾斜を呈する壁面からレンズ状の底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶であろう。人骨や副葬品等は検出できない。

77号墓（図版62、第100図）

70号墓の南5mに位置する。墓壙主軸をN－30°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸125cm、短軸101cmの不整形を呈し、底面は長軸86cm、短軸67cmの不整形を呈する。断面は、深さ50cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺で木棺か早桶であろう。人骨や副葬品等は検出できない。



第 100 図　76～79 号墓実測図（1/30）

78号墓（第100図）

76号墓の南東6mに位置する。墓壙主軸をN－42°15′－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸184cm、短軸125cmの隅円長方形で、底面は長軸175cm、短軸104cmの不整の隅円長方形を呈する。断面は、深さ54cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、座棺か寝棺かは定かではない。その形状から木棺であろう。人骨や副葬品等は検出できない。

79号墓（第100図）

76号墓の南西3mに位置する。墓壙主軸をN－17°－Eにおく。墓壙の形状は、上縁長軸121cm、短軸87cmの隅円長方形を呈し、底面は長軸79cm、短軸69cmの円形を呈する。断面は、深さ78cm、急傾斜を呈する壁面からやや膨らみをもつ底面となる。棺の形態は、墓壙底面の形状から座棺で早桶であろう。人骨や副葬品等は検出できない。

表 6　近世墓一覧表

No.	形態 平面形状	形態 壁面形状	棺の形態	埋葬遺体残存	長軸方位	長軸長 上縁 底面	短軸長 上縁 底面	深さ	調査時番号(D)	備考
1	長方形	直			N-4°-W	122cm 92.5	55.5cm 44.5	58cm	0	
2	隅円方形	〃		歯片	N-35°30′-E	134.5 125	120.5 95.5	76	1	
3	隅円長方形	急傾斜			N-6°-W	179 103	116 55	90	2	鉄釘10
4	台形状方形	〃			N-36°-W	87 58	87 55	59	3	
5	隅円長方形	〃			N-84°-W	154 83.5	124.5 62.5	66	4	
6	不整長方形	北直立 南緩傾斜			N-27°-W	90 53	76 42	60	17	
7	長方形	急傾斜		頭骨・脛骨	N-11°30′-E	185 108.5	131.5 64.5	93	18	
8	不整方形	緩傾斜			N-2°-W	75 68.5	60 28	10.5	33	坏（盃）1
9	長方形	〃			N-72°-W	148 138.5	51.5 34.5	6	34	
10	隅円長方形	〃			N-84°-W	171 125	124.5 62.5	57	5	
11	〃	〃			N-11°-W	116.5 84.5	87 67.5	31	16	坏（盃）1
12	〃	急傾斜			N-15°30′-E	155 66	112 60	87	7	〃
13	隅円長方形	北急傾斜 南直立		歯片	N-2°30′-E	136 106.5	93.5 76	81.5	6	金具
14	長方形	急傾斜			N-16°-W	120 67	91 55.5	86	8	小皿1
15	〃	〃			N-21°-W	205 117	175 65.5	115	9	鉄釘2
16	〃	〃	早桶		N-18°-W	240 128.5	199 98	121	10	

17	方　形	急傾斜	早桶		N-0°30′-E	124 64	122 63	109	12	
18	長方形	〃		頭骨	N-3°45′-E	168.5 107	127 65	99.5	11	小皿1
19	隅円方形	〃	早桶	下肢骨	N-30°45′-E	220 115	220 100	188	13	鉄釘8
20	長方形	〃		頭骨 大腿骨	N-2°-W	185.5 145.5	150 109.5	110	14	
21	〃	〃	箱棺	頭骨・尺骨 焼骨片	N-23°-W	219.5 142.5	145.5 74.5	130	15	皿1
22	〃	〃	〃	頭骨・脛骨 上腕骨	N-25°45′-E	172.5 111.5	135 83.5	103	19	
23	〃	〃			N-18°-E	159 121.5	118 86	60	23	
24	隅円 長方形	〃			N-2°15′-W	148.5 115	107.5 82	77	24	
25	長方形	〃	早桶		N-17°-W	150 101	96 63	72.5	20	
26	不整 楕円形	〃			N-44°45′-E	78.5 51.5	54.5 45.5	17.5	21	
27	方　形	緩傾斜			N-53°30′-E	50 39	48.5 40.5	12.5	22	
28	不整 長方形	急傾斜			N-17°30′-E	91 70	56 43.5	20	28	
29	長楕円形	〃			N-34°-W	94 64.5	67 50.5	35	29	
30	隅円 長方形	〃			N-26°30′-E	99 59	72.5 47.5	32	27	
31	〃	〃			N-18°30′-E	108.5 60.5	72.5 33	60	25	
32	長方形	〃			N-16°30′-E	150 117.5	108.5 86.5	69	26	
33	隅円方形	〃			N-3°15′-E	121 92	105 72.5	66	30	
34	長方形	〃			N-19°-E	98 73	78.5 59	42.5	31	小皿1
35	隅円 長方形	直			N-22°-E	107 88.5	71 65	41	46	
36	長方形	急傾斜			N-23°30′-E	115-α 95-α	103 66.5	45	45	
37	隅円 長方形	〃			N-7°-E	125 67	101.5 65	80	47	鉄釘片2
38	〃	〃			N-11°15′-E	97.5 72	82.5 57	28	48	
39	〃	〃			N-22°-E	173.5 136	112 87.5	59	49	
40	〃	〃			N-33°-E	117.5 97	94 83	67	50	
41	隅円方形	〃			N-4°45′-W	119 82	107 72	75	51	椀1
42	方　形	〃			N-9°-E	167 90	150.5 67	86	52	
43	隅円 長方形	〃			N-7°15′-E	146 100	112.5 81.5	75	53	杯（盃）
44	長方形	〃		頭骨片・歯	N-16°30′-E	176.5 115	129 68.5	87.5	32	
45	〃	〃			N-29°-E	94-α —	70 68	65	39	鉄釘7 鉄器
46	長方形	直			N-84°30′-W	323.5 330	165 177.5	113	37	鉄器多数
47	〃	急傾斜			N-35°45′-W	74.5 59	53 41.5	22	36	
48	〃	〃			N-10°-E	183.5 133	136.5 96.5	92	35	小皿1 鉄器

49	長方形	急傾斜			N-75°15′-W	216.5 183.5	129 103.5	95	40	鉄釘1
50	隅円方形	〃			N-17°45′-E	162.5 98	139 75	78	43	
51	隅円 長方形	〃			N-8°45′-E	177.5 122.5	113.5 65.5	60	41	
52	長方形	〃			N-7°45′-E	156.5 139	113.5 103.5	29	42	
53	隅円 長方形	〃			N-10°15′-E	140-α 117.5	118 86	70	44	鉄器
54	〃	〃			N-16°45′-E	131.5 121.5	79 72	5	54	
55	〃	〃		骨片	N-11°-E	140 127	99 87	14	55	小皿1 数珠玉
56	長方形	直			N-23°15′-W	190 186	74 69	11	38	
57	隅円 長方形	急傾斜		歯	N-1°45′-E	134 94	94 56	73	57	
58	〃	〃			N-26°15′-E	131 103	93 63	74	58	
59	〃	〃		骨片	N-11°30′-E	173 134	109 86	69	59	鉄釘11
60	〃	〃		頭骨片	N-1°15′-W	162 109	125 61	99	60	青磁片 数珠玉
61	長円形	〃			N-24°30′-E	140-α 100-α	76 60	50	61	
62	円形	〃		頭骨・脛骨 腰骨・肋骨	—	114～ 116	83	97	62	
63	隅円 長方形	〃		頭骨片	N-30°-E	121 85	70 57	61	63	
64	〃	〃			N-18°45′-E	128 98.5	98 77.5	62	64	
65	〃	〃			N-30°-E	120 105	100 77	42	78	
66	〃	〃	箱棺	頭骨・下肢骨	N-14°30′-W	147 89	120 72	100	56	鉄器
67	〃	〃			N-12°30′-E	150 100	93 64	50	77	
68	〃	〃			N-3°45′-E	142 123	89 69	40	66	
69	〃	〃			N-18°15′-E	90+α 80	76 53.5	44.5	67	
70	〃	〃			N-25°45′-E	139 121	103.5 67	30	65	
71	〃	〃			N-57°30′-E	85 63	63 47	30	68	
72	〃	〃			N-25°15′-E	112 102	72 63	11	69	
73	〃	〃			N-24°-E	119 116	84 74	30	70	
74	〃	〃			N-4°-E	138 124	84 68	22	71	
75	〃	〃			N-19°-E	135 85	74 56	47	72	数珠玉
76	不整形	〃			N-25°-E	135 84	74 76	58	74	
77	〃	〃			N-30°-E	125 86	101 67	50	75	
78	隅円 長方形	〃			N-42°15′-E	184 175	125 104	54	76	
79	〃	〃			N-17°-E	121 79	87 69	78	73	

(2) 土 壙

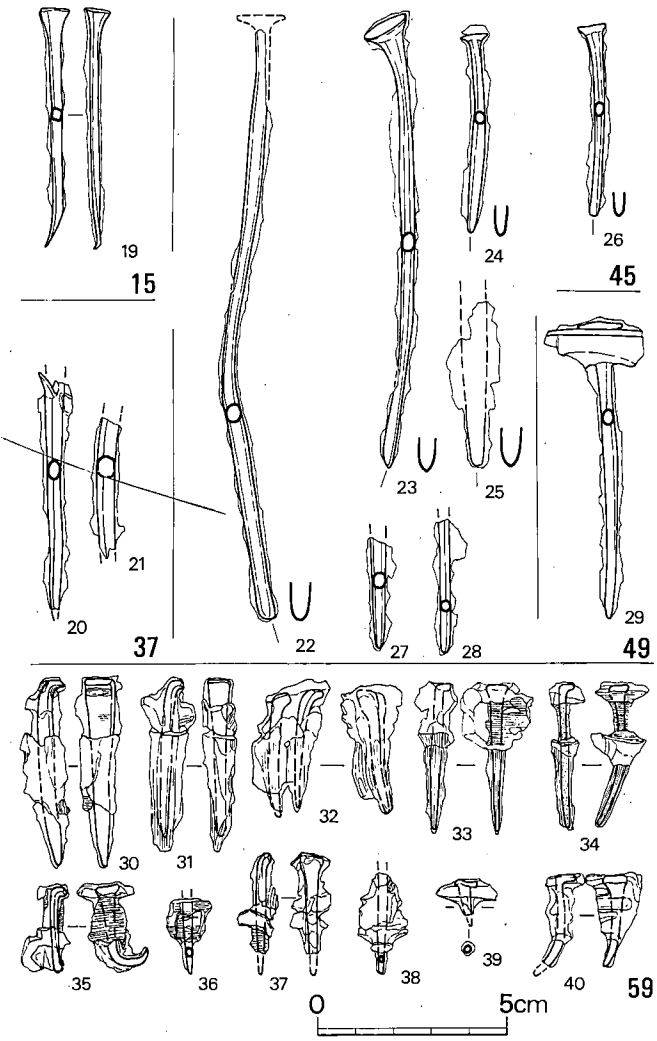
2号検出された。両者ともB区にあり、12号土壙から古銭が出土した。

6号土壙（第94図）

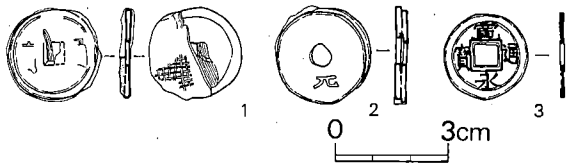
5号土壙の南東2mで、2号掘立柱建物跡の西に位置し、61号近世墓を切っている。長軸方位N－24°30′－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸148cm、短軸75cmの歪長円形を呈する。底面は二段になり、北側上段が長軸55cm、短軸55cmの半長円形を呈し、下段が長軸55cm、短軸56cmの歪方形を呈する。底面全長は132cmを測る。深さは上段で57cm、下段は73cmを測る。断面は、下段の平坦な底面からゆるく登り、平坦な上段から直に立ち上がる。

12号土壙（図版68、第53図）

東西に73号近世墓、74号近世墓があり、その中央やや北寄りに位置する。長軸方位をN－3°－Eにとる。壙の形状等は、上縁長軸97cm、短軸61cm。底面長軸68cm、短軸44cmを測る、歪瓢形を呈する。断面は、深さ14cmと浅く、緩傾斜を呈する壁面からわずかに膨らむ底面となる。壙の中央底に張付けられたように古銭が出土した。



第 101 図　15・37・45・49・59号墓出土鉄釘実測図（1/2）



第 102 図　12号土壙(1・2)、採集銭貨実測図（1/2）

出土遺物（図版68、第102図1・2）

古　銭　1・2ともに壙中央底面から出土し、3枚が重なっていた。しかし、銹が著しく、1は2枚の古銭が銹着している。また2については銹膨れの部分に格子目状の繊維と思われるものと、孔に紐が付着している。この銭を束ねていたものであろう。銭の種類は判然としないが、2にぼんやりと「寶」と「通」の文字が見られる。

表　7　土壙一覧表

No.	形態 平面形状	形態 壁面形状	長軸方位	長軸長 上縁 底面	短軸長 上縁 底面	深さ	調査時番号	備考
6	歪長円形	直	N-24°30′-E	148cm 55	75cm 56	73cm	土6	
12	歪瓢形	緩傾斜	N-3°-E	97 88	61 44	14	P4	

(3)　その他の遺構と遺物

近世の遺構は、他には検出されなかった。また、B区の2号竪穴住居跡付近で「寛永通寶」（第102図3）が1点出土した。また、A区の西寄りで縦断する近年の溝から断面円形、頭部も円形を呈する鉄釘（第66図4）が出土した。（平島）

5. おわりに

春園遺跡からは　先土器時代・古墳時代・奈良時代・平安時代および江戸時代の遺構が検出された。

先土器時代では、ナイフ形石器・角錐状石器の良好な石器群が出土した。

古墳時代では竪穴住居跡1軒と溝2条がA区の低位段丘上に位置する。当期の遺構は台地上のB区には皆無であり、A区の調査状況からしても周辺に住居跡群が広がるとは考え難い。

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡5棟、土壙等がある。そのうち、3・5・6号掘立柱建物はほぼ方向を一にし8世紀中葉頃に位置付けられる。また、4号土壙も同時期の所産であるが、2号竪穴住居跡は若干古く8世紀前半の時期である。4号掘立柱建物は7・8号溝と桁行方向が同じであり、同時期の可能性が強いが、遺物をまったく出土しておらず、時期の特定ができない。切り合い関係からすれば、13世紀代に下る9・10号溝に切られておりそれより古い事は確実である。なお、7・8号溝はまったく平行して掘られ、道路状遺構（幅5.4m）の側溝と考えられる。これについては宮巡遺跡の項で触れているので参照されたい。

平安時代の遺構としては、台地を囲む9・10号溝がある。本来、何らかの遺構群を区画する

目的で掘られたものであろうが、11号土壙しか遺構は検出されていないので、調査区の北側に住居・倉庫等の存在が予想される。

江戸時代の遺構としては、墓が79基発見された。

その他、落し穴と考えられるピットが6基ある。 2～5号ピットがほぼ一列に並んでいるが密集している訳ではない。埋土からすると13・14号土壙の堆積土と同一であり、奈良時代頃の所産かもしれない。

以下、先土器時代の遺物、近世墓について若干記す。

(1) 先土器時代の石器について

出土した石器は、2層とした茶褐色土中のみに文化層がある。この層は厚15～20cmと薄く、下位になると黄味を帯びるが漸移層であり分層できない。従って、便宜的に10cmを境に上層・下層にして遺物をとり上げた。

器種はナイフ形石器・台形石器・台形様石器・角錐状石器、細石刃核・細石刃等であるが、第22・23図のように混在している。しかし、140点と多量に出土した細石刃は2層直上から上部に126点と9割が出土し、56の細石刃核も2層上部からの出土であり、その文化層は2層直上から上層に位置付けられる。細石刃核56は円礫の上下を除去し、縦割りした後に、両側面に調整を下方向から加え、周辺に向って細石刃を剥出して行く。野岳型に属すのであろう。

一方、E4区下部出土のナイフ形石器（1）・角錐状石器（3～6）・剥片の集中区からは、まったく細石刃を出土していないので、細石刃の文化層と分離出来、最低2枚の文化層があったと考えられる。それでは台形石器・台形様石器についてはどうであろうか。台形石器は百花台Ⅲ文化層出土のⅠ型（註1）（15・16）が2層上部から出土し、枝去木型の台形様石器（13・14）は2層下部から出土する。台形様石器は地区的にも層位的にもE4区石器群と同一時期と考えられるが、百花台型台形石器については判然としない。

角錐状石器は、従来、尖頭器・尖頭状石器・三稜尖頭器中に分類されている。三稜尖頭器については両先端が尖がり、中央に稜がとおり二面ないし三面加工を施したものに限定しておきたい。

春園遺跡からは接合資料を含めて13点の角錐状石器が出土した。E4区2層下部から安山岩製の横長剥片利用のナイフ形石器とともに4点が、M20区2層上部からフリント製のものが2点あり、ほかは点在するが、層位的には53を除いて2層下部より出土する。石材の内訳は黒曜石4点（49～51・53）、安山岩7点（3～6・19・20・52）、フリント製2点（88・89）である。素材となった剥片は、52が縦長に近いものである以外は横長で1～1.7cmと部厚いものである。側面の調整は主要剥離面から急角度に施されるが、その調整は荒いものが多く、端部についても細調整を加えていない。従って、尖頭器と異なり先端部を意識させることが少ない。なお、4・

50・89は稜上から細調整を加える。断面形態は三角形を主とするが、中央部では台形を呈すもの（3・49・50・52・53）も多い。全体の形状は片側辺が内弯する特徴がある。

側面の調整から3つに分けられ、かつ大小に細分される。

Ⅰ類　2側面に調整を施すもので、大小2種類がある。

Ⅰa類　5cm以上の大型品で、3・4・88の3点がある。3は6.9cm、88は5.7cmの完形品。両先端部が平坦面を有する、一方が平坦な88があり、4は稜線が通る。

Ⅰb類　5cm以下の小型品で5・6・49・50・51・89の6点がある。5は4.4cm、89は2.9cmを測る。端部は尖りぎみであると表現できる程度である。

Ⅱ類　1側面に調整を施すもので、やはり大小2種がある。

Ⅱa類　5cm以上で19の1点のみ。背面に大きく自然面を残す。

Ⅱb類　5cm以下で52・53の2点出土。52は4cm、53は3.6cm。両者とも断面台形を呈す。

Ⅲ類　自然面側から両側面に比較的丁寧な調整を先端部まで施すもの

Ⅲa類　20の1点のみ出土。

この角錐状石器のうちⅠ類E4区2層下部出土の3～6は安山岩製で、同じく安山岩製の横長剥片を素材とした幅広のナイフ形石器と共伴する。また、13・14の枝去木型台形様石器も前述したとおり共伴する可能性が強い。一方、フリント製の角錐状石器（88・89）は同じくⅠ類に分類されるが、両者とも2層上部出土である。同石材からは他の器種の存在はなく、どの種の石器と共伴したかは不明であるが、細石刃の文化層よりは下位に位置することは確実であろう。なお、第22図の遺物分布図では55・56の細石刃核の出土レベルが下位であるが、これは21～24区にかけては傾斜面に設定したグリッドであることに関係している。

角錐状石器と併出するとされる石器のうち、剥片尖頭器は出土を見ていない。E4層出土の石器群は百花台型の台形石器を伴なう以前の石器群であり、幅広の横長剥片を素材とした片側辺加工のナイフ型石器の存在から岩戸Ⅰに近い時期であろう。また、M20区出土のフリント製角錐状石器は層位的には新しく位置付けられるが、形態・技術的には変化は認められない。福岡県内では、筑紫野市峠山遺跡（註2）、朝倉郡朝倉町鎌塚遺跡（註3）等で出土している。

春園遺跡の先土器時代の石器群について若干記したが、同じ横断道関係の遺跡として朝倉郡原の東遺跡（未報告）がある。この遺跡では縄文早期の押型文土器からナイフ形石器までが重層して検出されており、その時点で再度とりまとめたい。（木下）

(2)　近世墓について

今回調査した近世墓は、いずれもその所在を示す墓石・墓標などが無かった。発掘当初、造営された時機を知るものとしては、隣接して「仲家」の墓所があり、享保七（1722）年から現代まで営まれている点から、これらの近世墓も同時期からの造営と考えた。しかし、14・21号

墓などから出土した17世紀後半の肥前産陶器により、おそらくは「仲家」の墓所よりも先行して営まれていたことがわかった。一方、これらの終焉の時期は、45号墓などの丸釘や49号墓の頭部に座金をもつ丸釘により、ほぼ近現代におよぶと考えられる。

また、墓の構造については、棺材が残っているものはなく、墓壙の形状から、その平面プランが狭長なものについては寝棺の木棺とし、その他は平面プランから明確にできるものはない。しかし、16号墓のように墓壙覆土の掘り下げの途中で、覆土に円形のプランが確認され、棺の形状の痕跡で、棺が早桶であることを物語っている。一方、19号墓については、墓壙上部で円形プランの「早桶」の痕跡が見られ、下位では方形プランおよび少量の釘が出土した点から、前述のごとく2度の埋葬（追葬）が行われていることがわかった。このことは、「夫婦墓」を想起させるものであり、大分市机張原女菰近世墓（註4）で事例がみられる。女菰近世墓では4例あるが、墓壙（遺構）があるものは1例のみである。しかし墓碑銘の年代から17世紀中頃から18世紀初頭であり、14号墓出土の陶器の時期と同じである。これは、17世紀からは18世紀の墓制の中に追葬（夫婦墓）の形態があったことが窺えるものである。

副葬品については、棺の内外に副葬された陶磁器と数珠玉がある。磁器小皿については、所産不明であるが、陶器については「肥前内野山北窯」産と考えられる（註5）。そのことは、青緑釉で蛇目釉ハギと砂目が混在している14号墓の陶器（第76図2）や48号墓の陶器（第76図1）の京焼風の白手物などに表われている。また、41号墓の染付椀もこの窯か、この周辺の所産と考えられる。これらの陶器は、17世紀後半のものである。数珠玉については、すべてガラス製で気泡を多数に含み粗悪な質である。

以上が春園遺跡での近世墓の状況である。この調査により、陶磁器の交易や墓制の範囲を知ることができた。

本報告書の作成にあたっては小石原村教育委員会の日高正幸氏に多大な御教示を得たことを記して、厚くお礼申し上げます。

（平島）

（註1）　麻生優・白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣　1973

（註2）　橘昌信他「峠山遺跡」福岡県文化財調査報告書51　福岡県教育委員会　1973

（註3）　福岡県教育委員会「鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡の調査」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書22　1992

（註4）　大分県教育委員会・日本道路公団「若杉遺跡・机張原女菰近世墓地」九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報　1987

（註5）　「第3回　九州近世陶磁研究会　資料」（平成5年2月6日～7日）

十　三　塚　遺　跡

V 十三塚遺跡

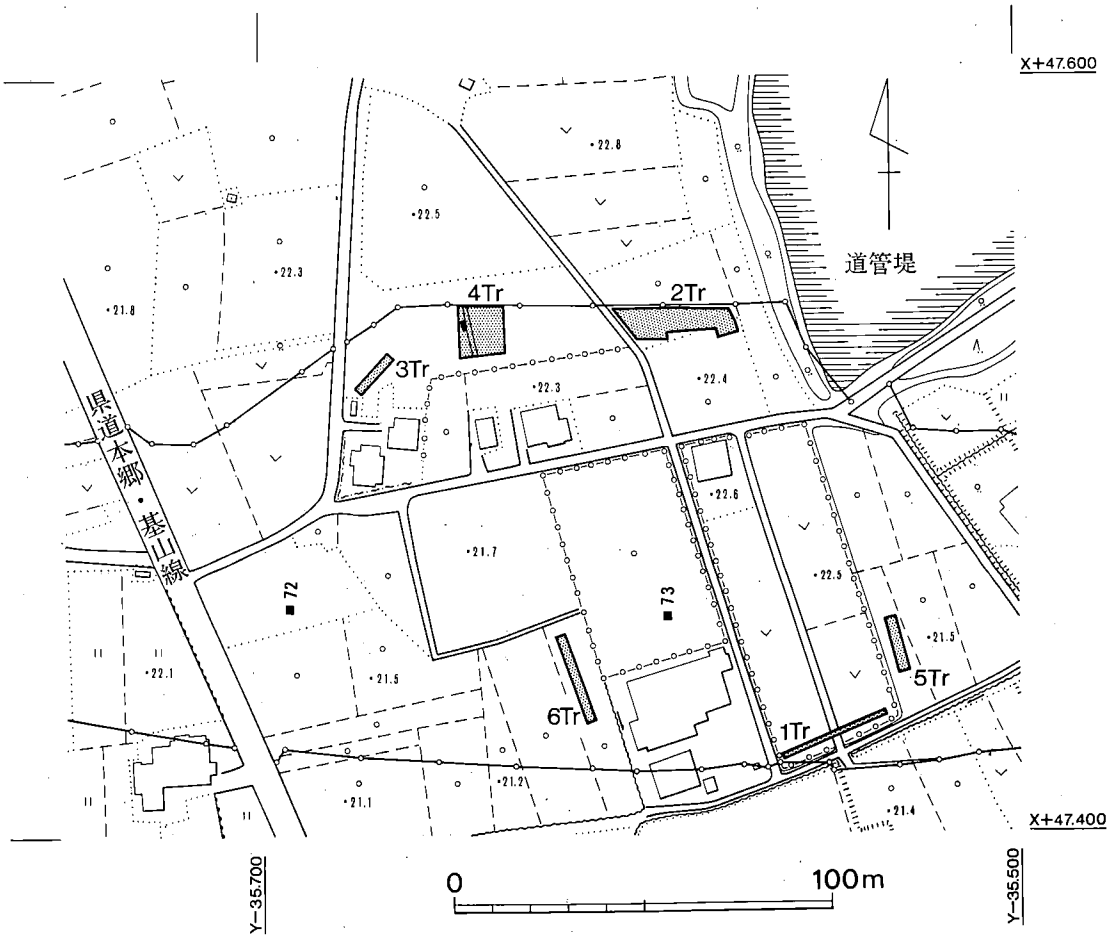
1. 調査の概要

十三塚遺跡は、福岡県三井郡大刀洗町大字甲条字十三塚に所在する。

遺跡周辺の現況は、第103図に示すように、宅地以外は植木の移植に因る攪乱が著しい。

また、遺跡が立地する大刀洗丘陵は、第2次世界大戦時の「大刀洗飛行場」造成で削平・盛土が著しく、その飛行場南縁部に位置する遺跡も、県道本郷基山線東側の削平土で、同西側谷部を1m以上にわたって盛土されていることが、各所に設けた試掘溝で確認された（第103図）。

上述のように、攪乱・削平が著しく、路線内からは、1号住居跡が検出されたのみであった。



第 103 図　十三塚遺跡周辺地形図（1/2,000）

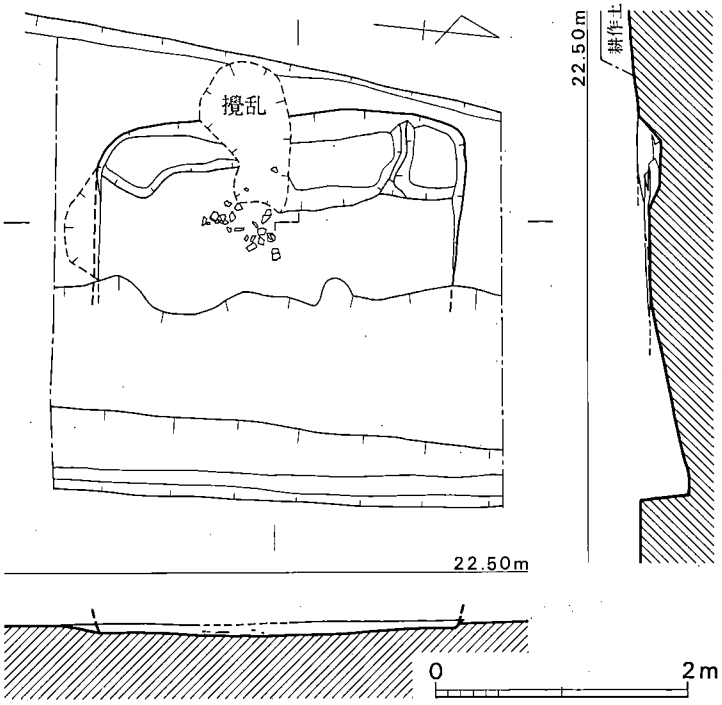
2. 遺構と遺物

1号竪穴住居跡(第104図)

住居プランは、東半部が既述の削平で遺存せず、南北は約2.9mを測り、やや小型住居に若干例を認めるように、明確な主柱穴は設けられていない。

壁溝は、植木で中央部を攪乱された西壁部に、幅30～50cm・床面からの深さ約10cmのものを検出したが、ブロック土で床面レベルまで意識的に埋めもどしている

なお、住居遺存部でのカマド痕はない。



第 104 図　1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

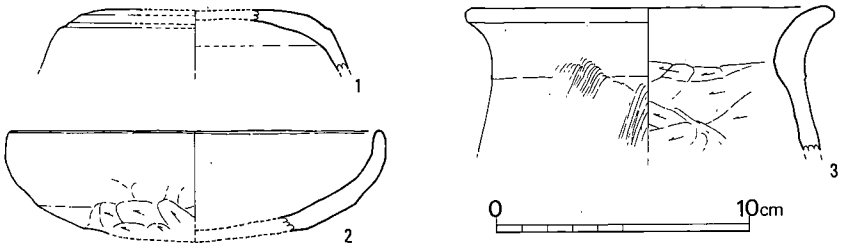
出土遺物(第105図)

1は、須恵器杯蓋（器周残約¼）片で、口径12.6cm・器高3.2cm前後を測り、焼成不良・磨滅著しいが、器外天井部に回転ヘラ削り痕を認める。

2は、土師器杯身（同約¼弱）片で、口径15cm・器高4.4cm前後を測り、焼成普通・砂粒やや多く、器内には黒褐色・薄手の付着物痕を残し、器外体部に手持ちヘラ削りを施す。

3.の土師器甕片は、1・2と共に床面から出土し、いずれも6世紀後半の所産と思われる。

（馬田）



第 105 図　出土土器実測図 (1/3)

図　　版

1　宮巡・春園遺跡航空写真

2　宮巡・春園遺跡遠景（調査前・西から）

図版 2

1　道路状遺構（西から）

2　道路状遺構（南から）

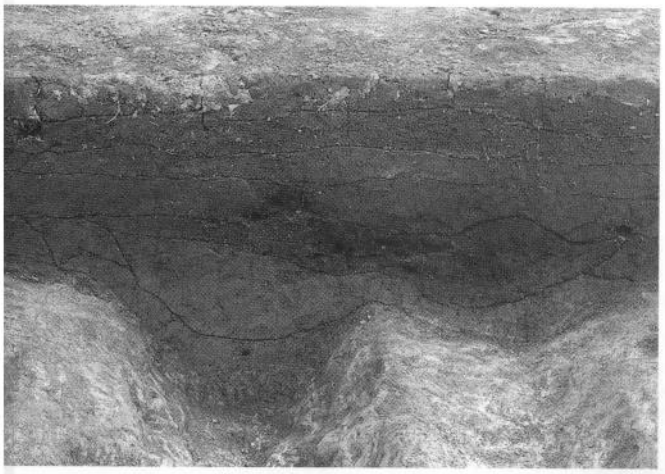
溝6

1　道路状遺構と６号溝（東から）

2　道路状遺構東半

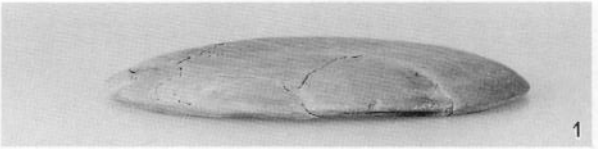
図版 4

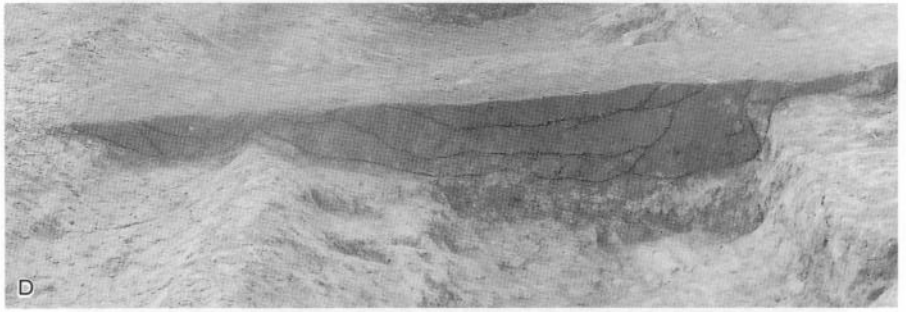
1　道路状遺構土層断面A－A′

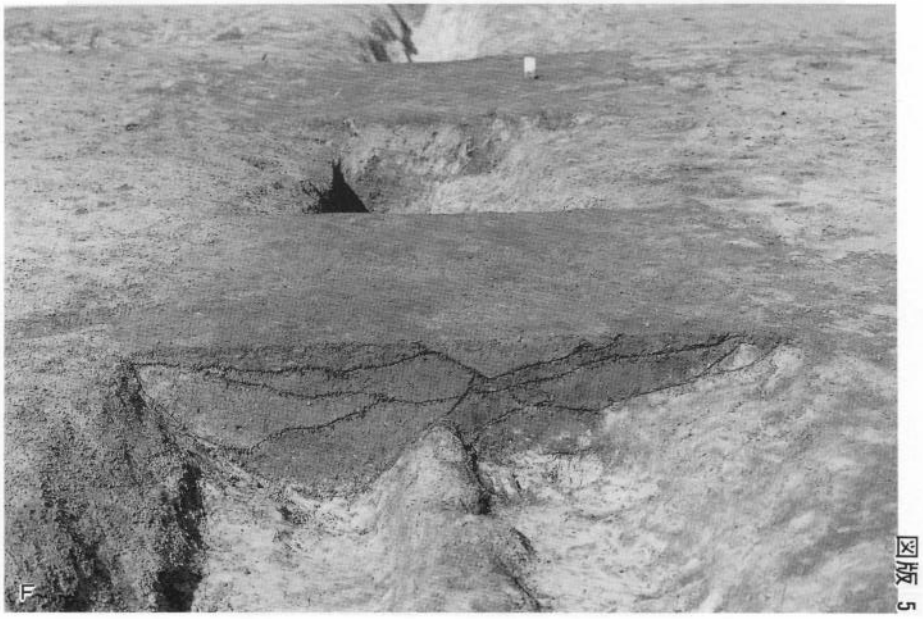


2　1号溝

3　2・3号溝

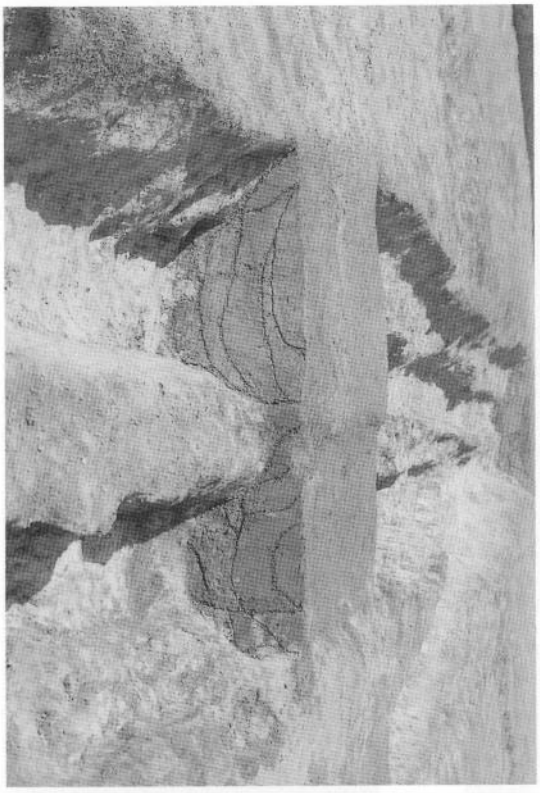


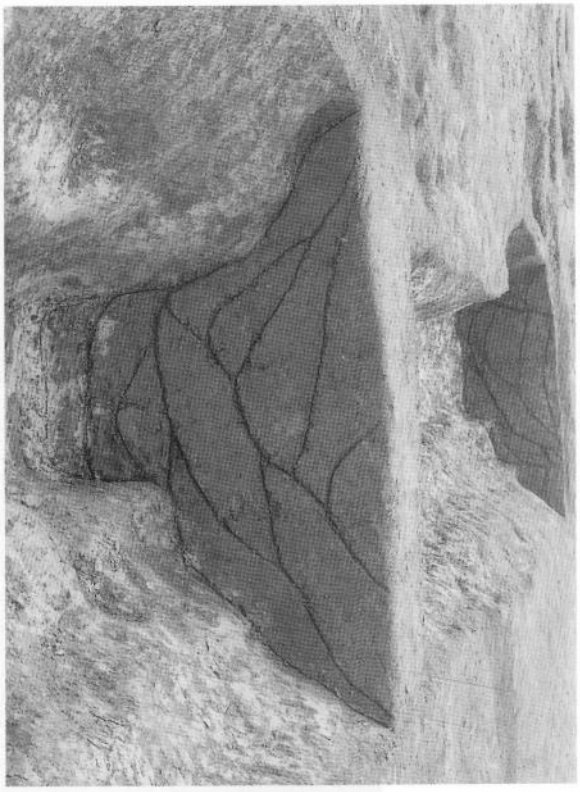




1号溝土層堆積状況と出土遺物

図版 6

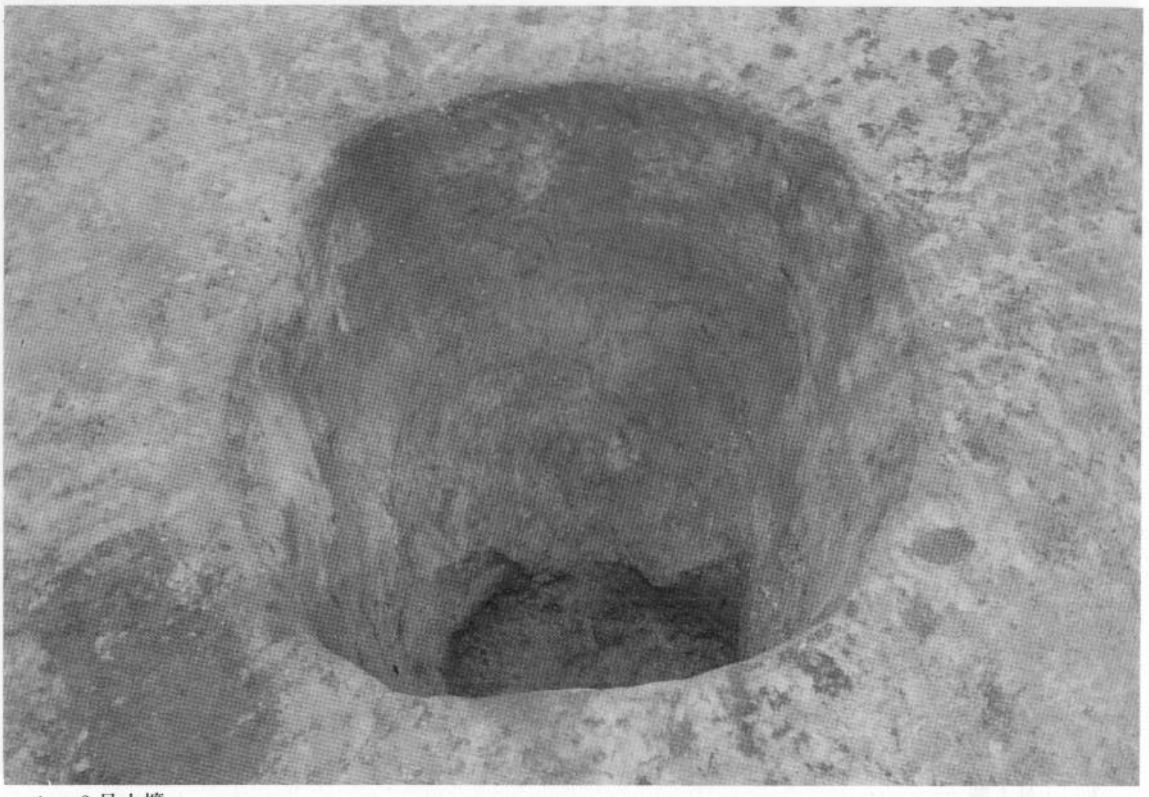




2 号溝土層堆積状況

1　1号土壙

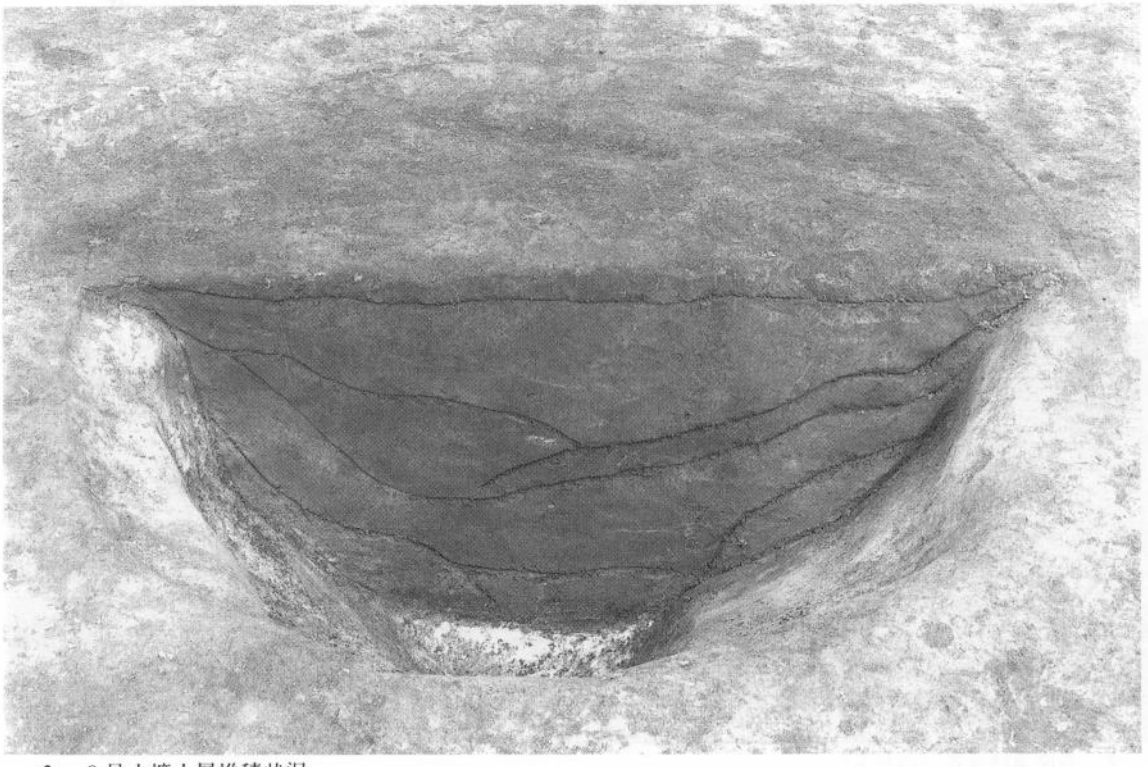
2　1号土壙土層堆積状況



1　2号土壙

2　2号土壙土層堆積状況

1　3号土壙



2　3号土壙土層堆積状況

1　春園遺跡から東方を望む

2　春園遺跡遠景（西から）

1　春園遺跡A区全景（南から）

2　春園遺跡A区南半

1　春園遺跡B区西半（南から）

2　春園遺跡B区東半（西から）

1　春園遺跡B区東半（南から）

2　春園遺跡B区西半（東から）

1　C～G－4 ～10調査区

2　K～O－15～24調査区

1　基本層序

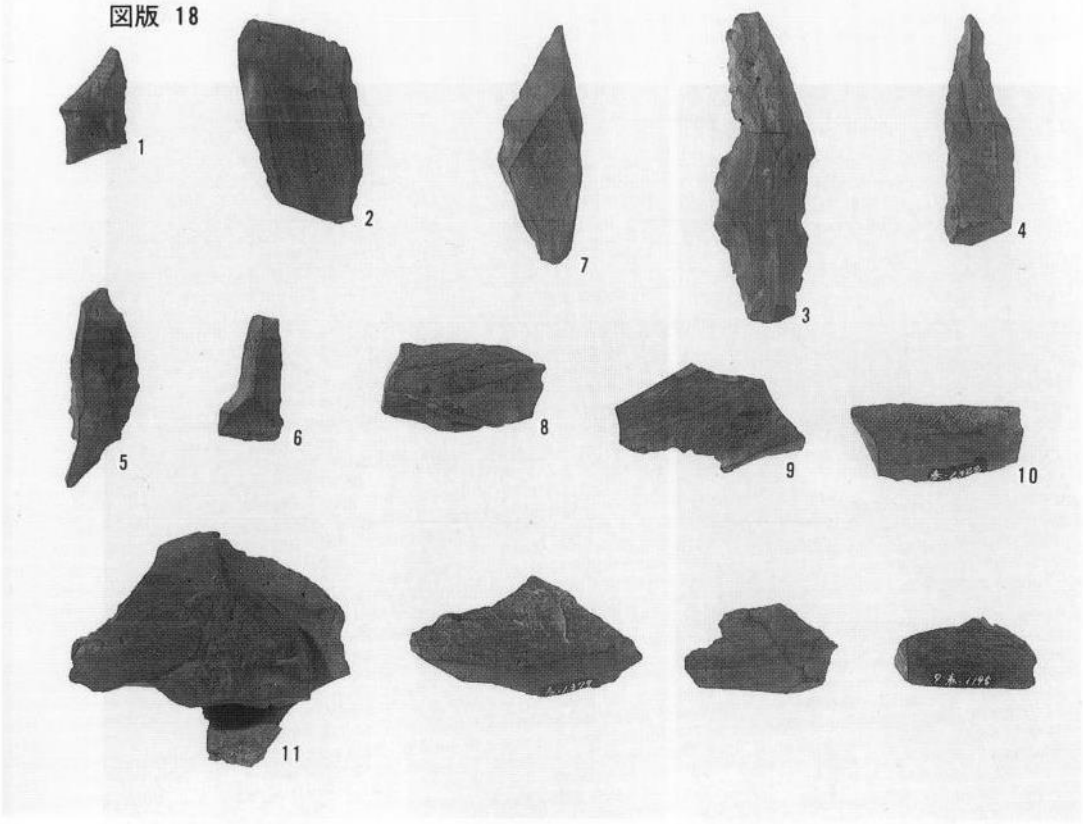
2　K－19区土層堆積状況

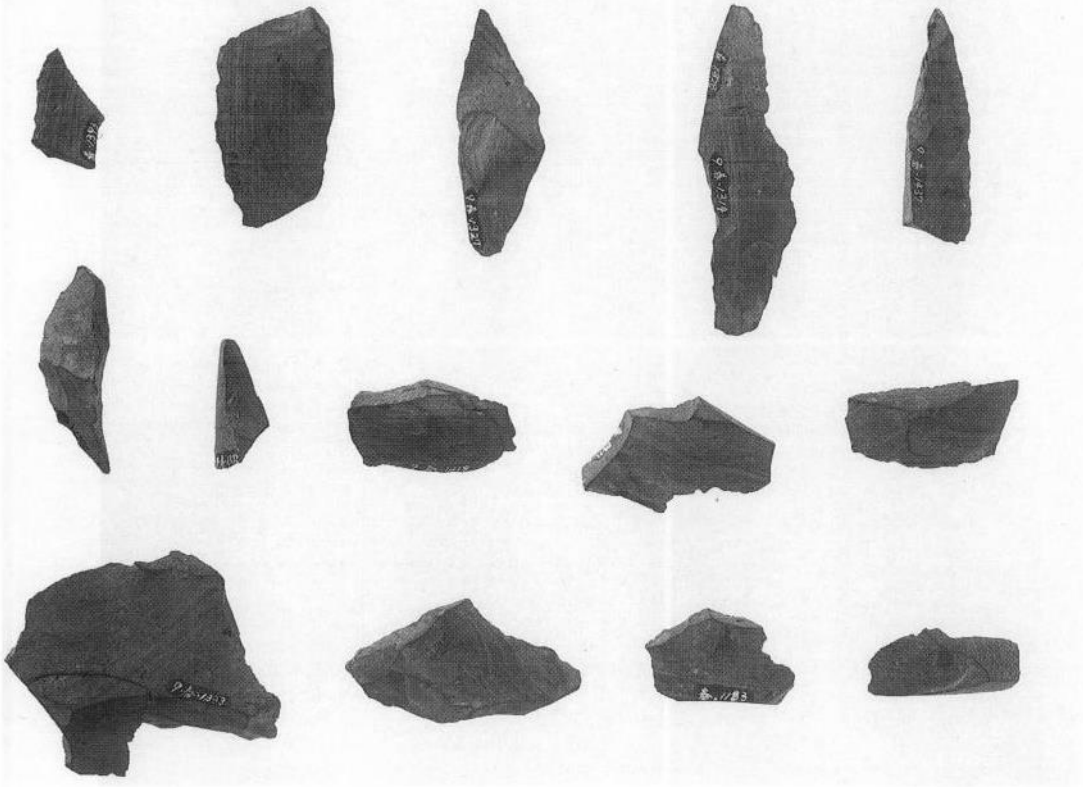
1　E－4区遺物出土状況

2　G－10区遺物出土状況

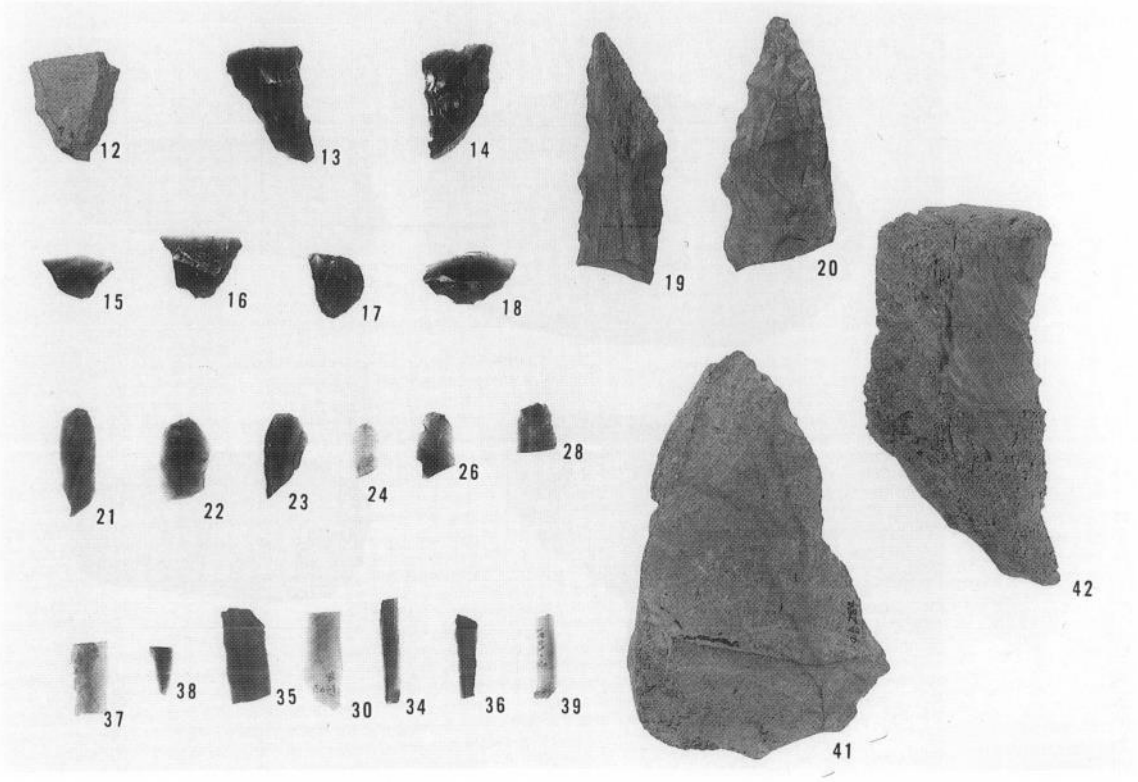
遺物出土状況

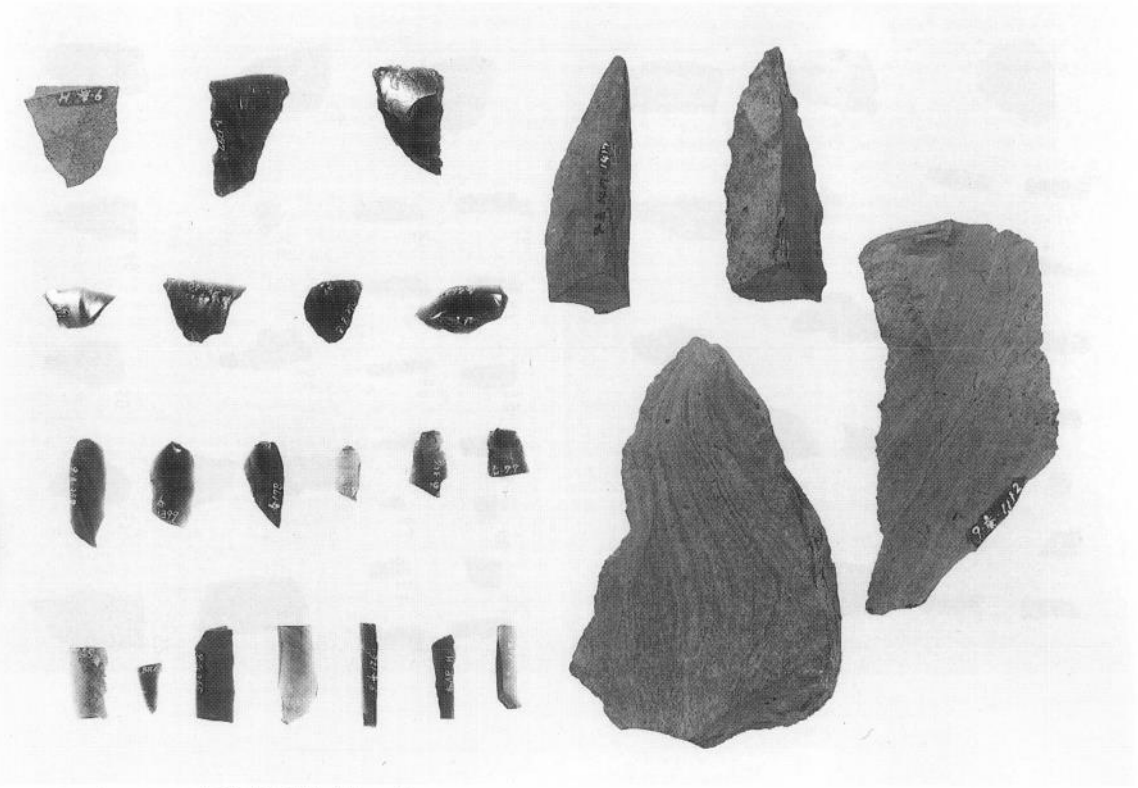
図版 18



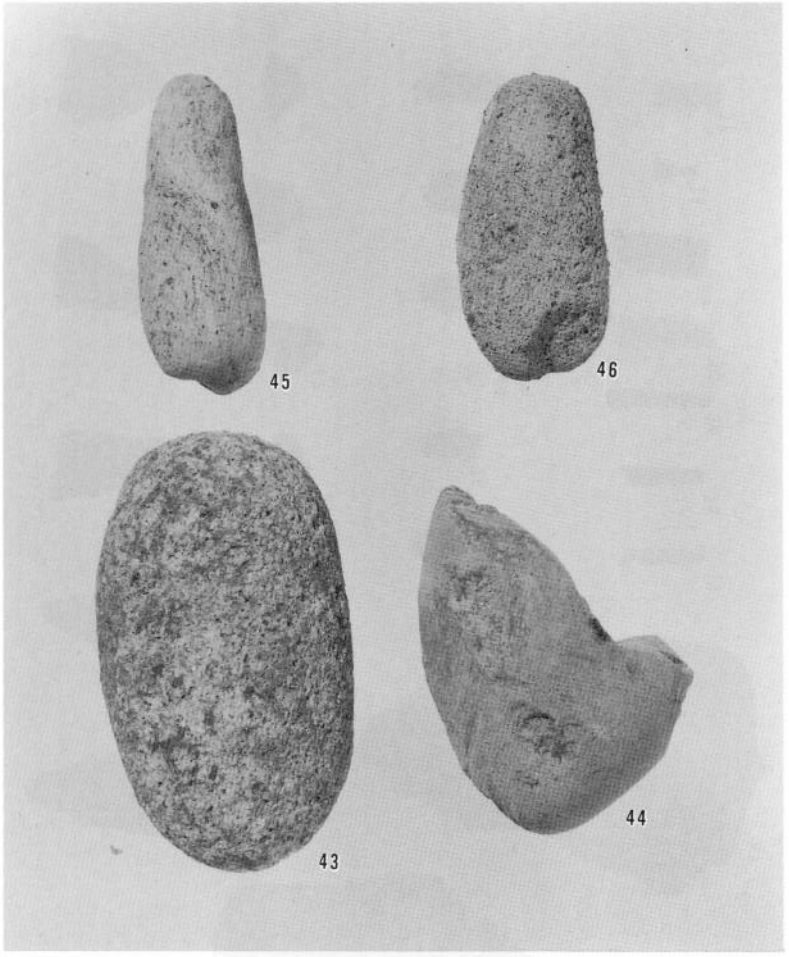


E－4区出土石器（表・裏）

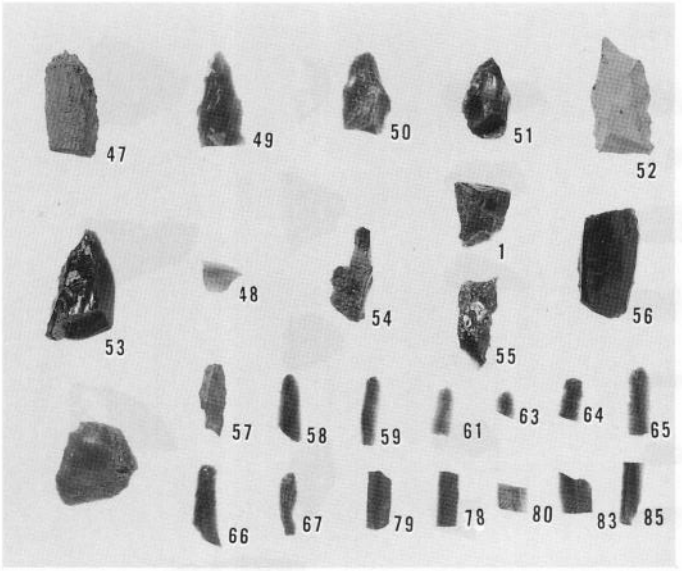


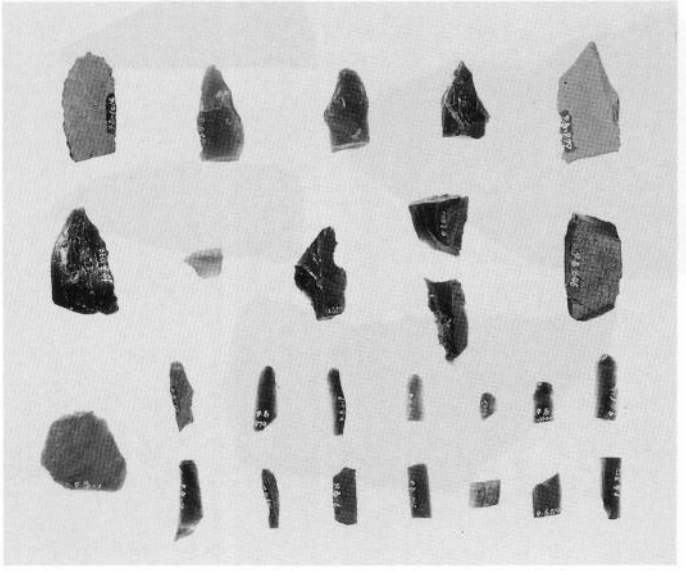


C～G－4～10区出土石器（表・裏）

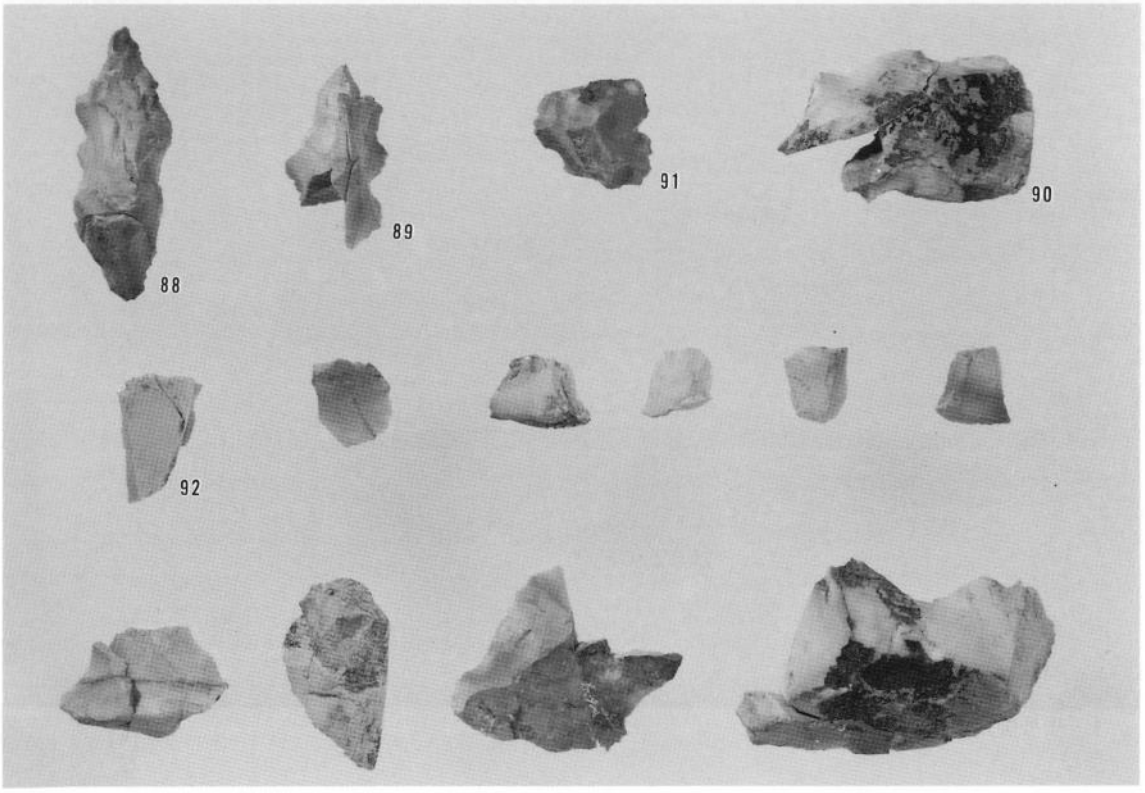


1　スタンプ状石器・磨石





2　K～O－15～20区出土石器（表・裏）



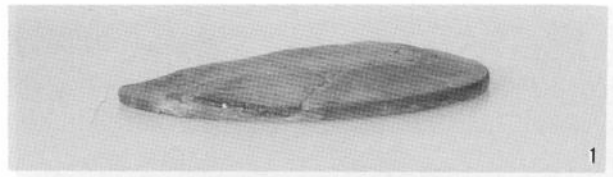
フリント製石器（表・裏）

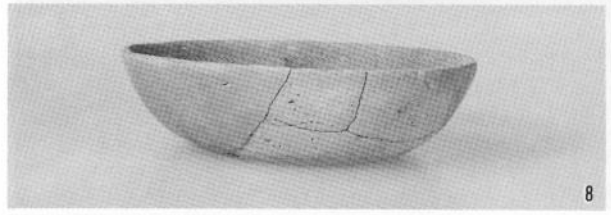
1　1号竪穴住居跡遺物出土状況

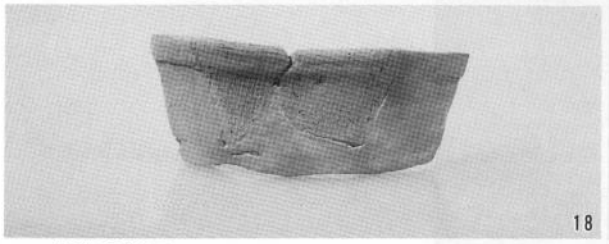
2　1号竪穴住居跡

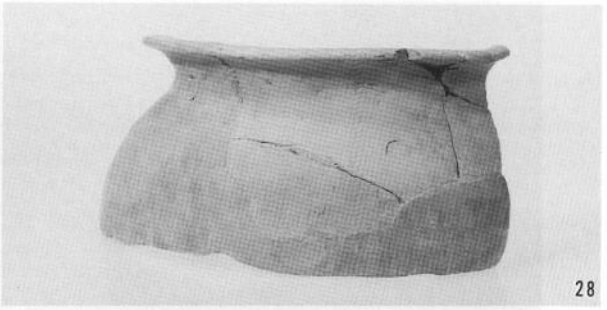
1　1号竪穴住居跡カマド

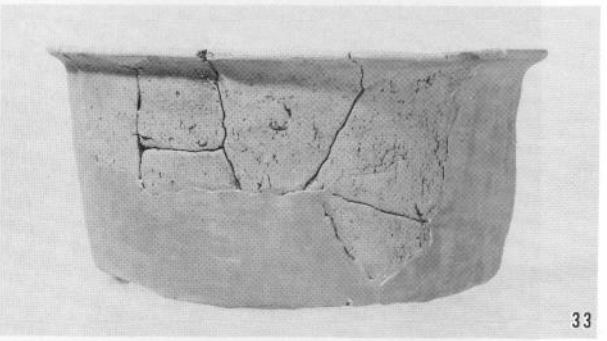
2　床面遺物出土状況

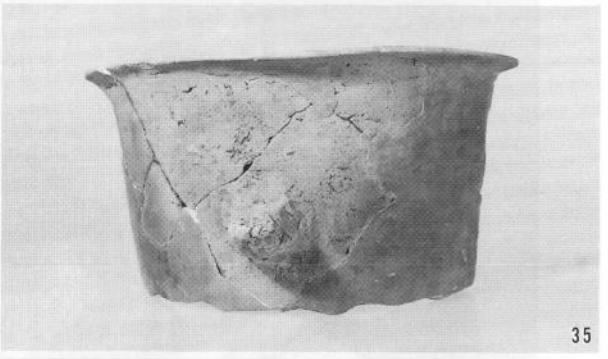


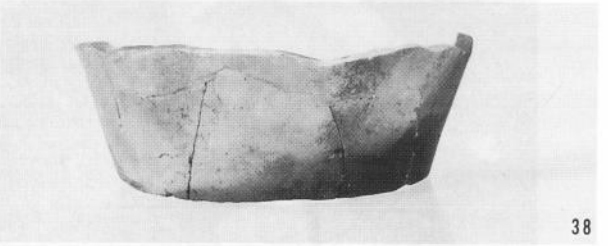










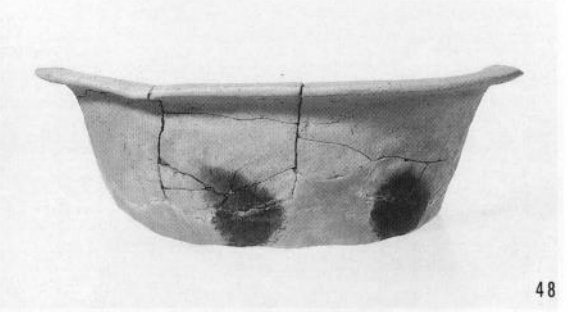


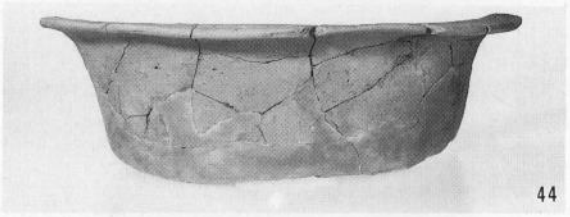
1号竪穴住居跡出土土器

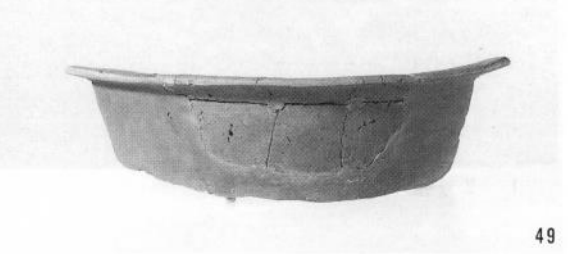
39

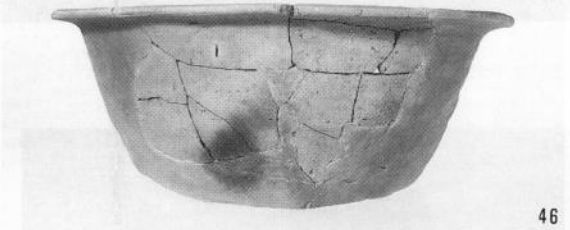
47

40

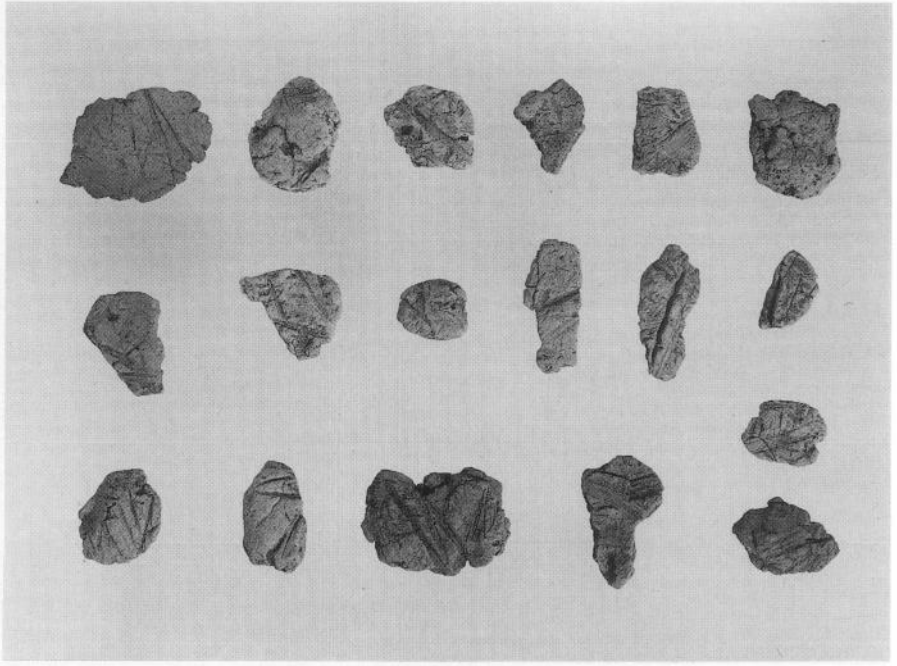

48


44

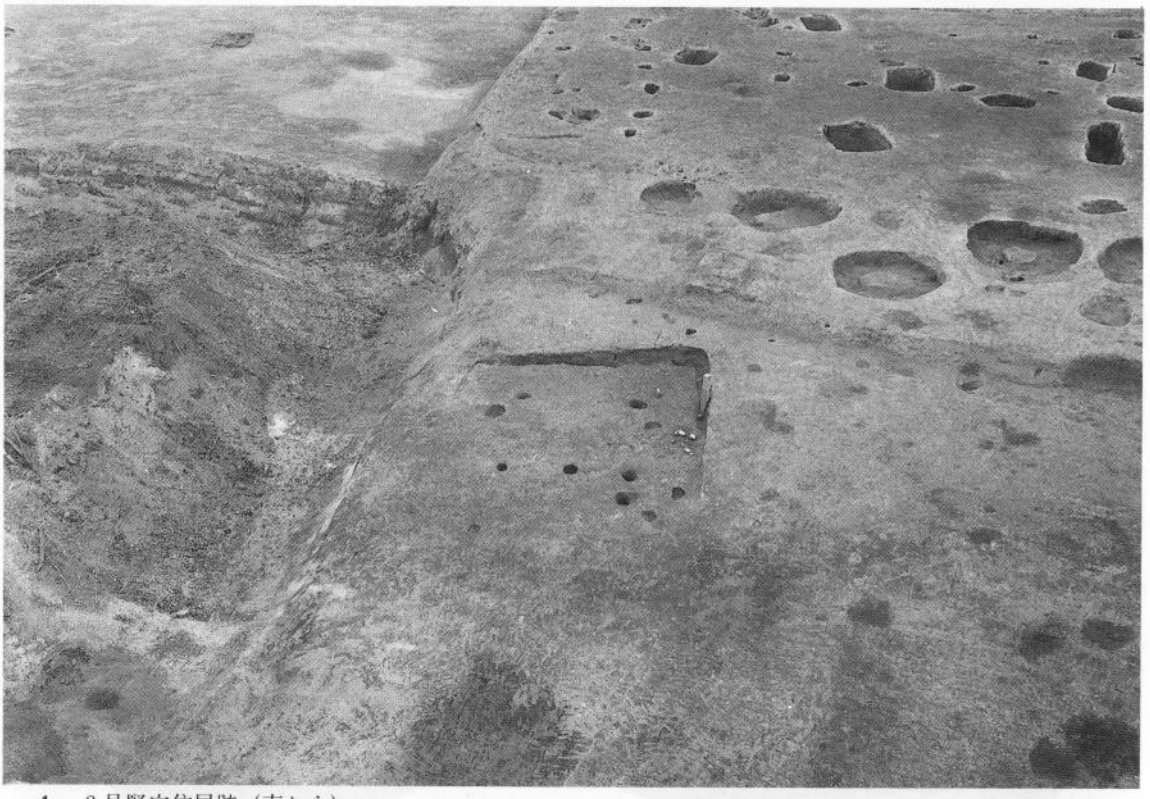

49


46

52



1 号竪穴住居跡出土土器と不明土製品

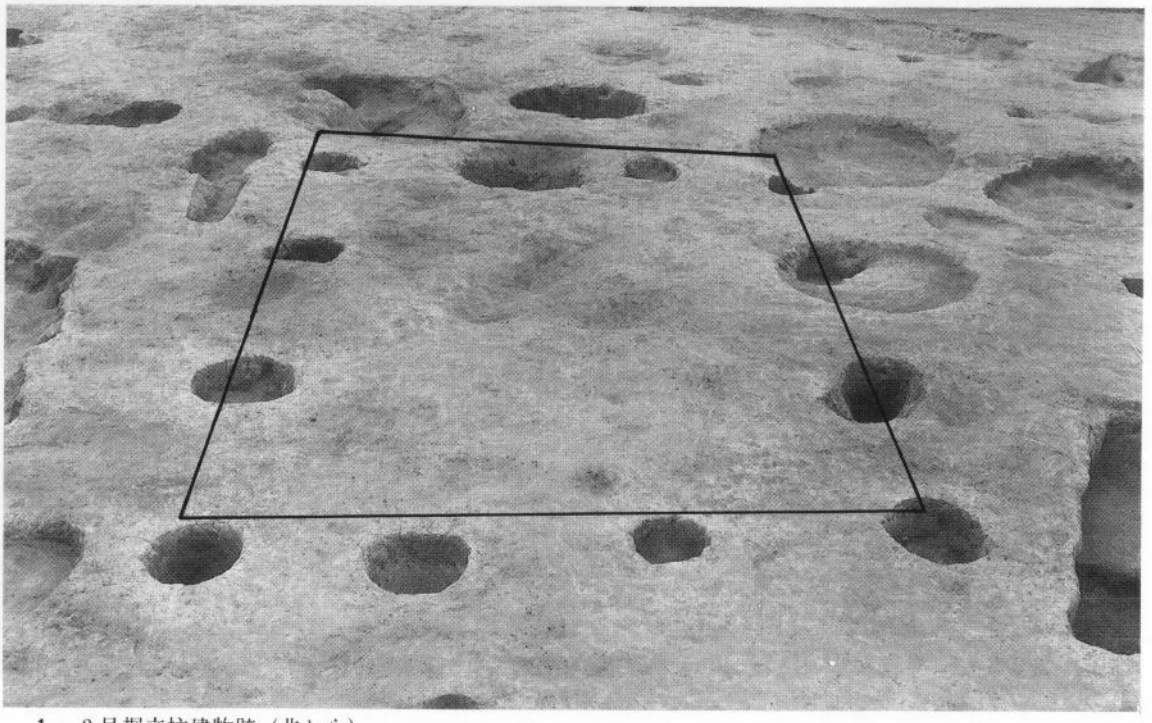


1　2号竪穴住居跡（南から）

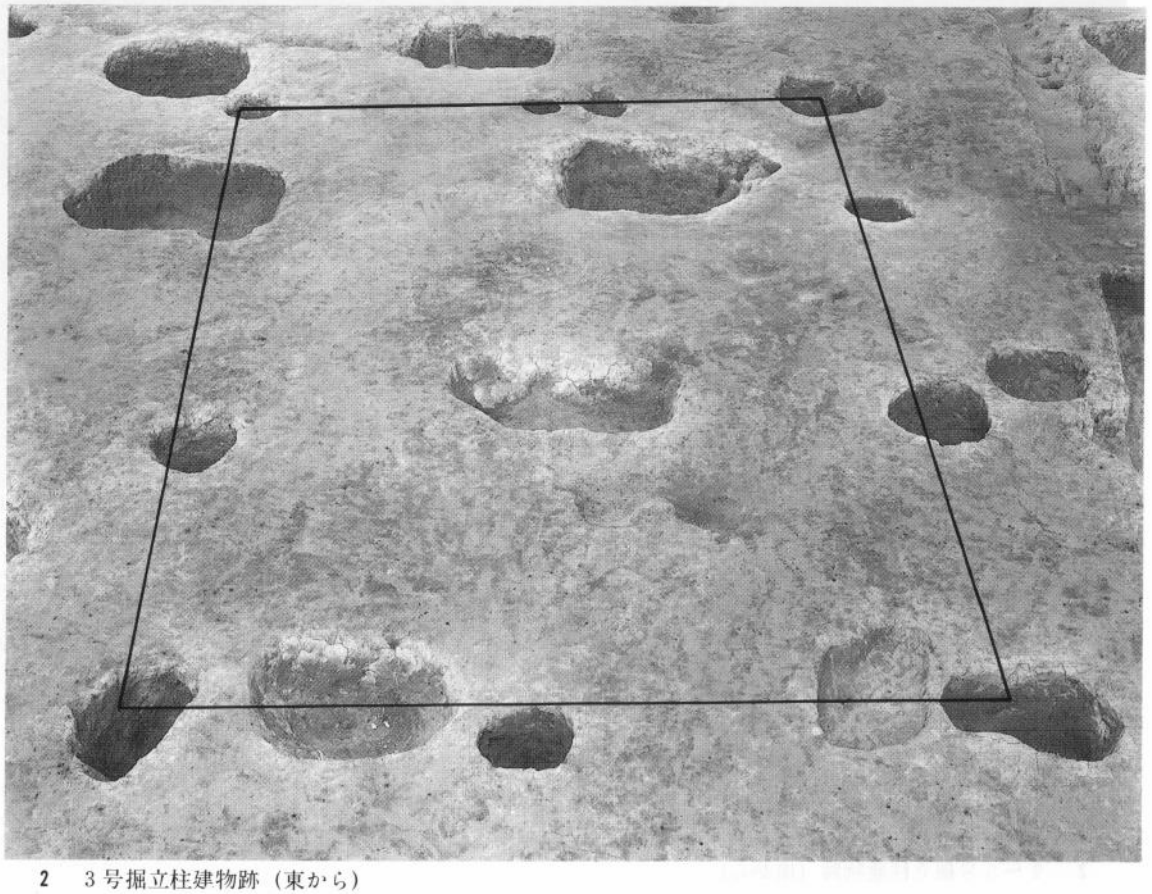
2　2号竪穴住居跡（西から）

1　1号掘立柱建物跡（北から）

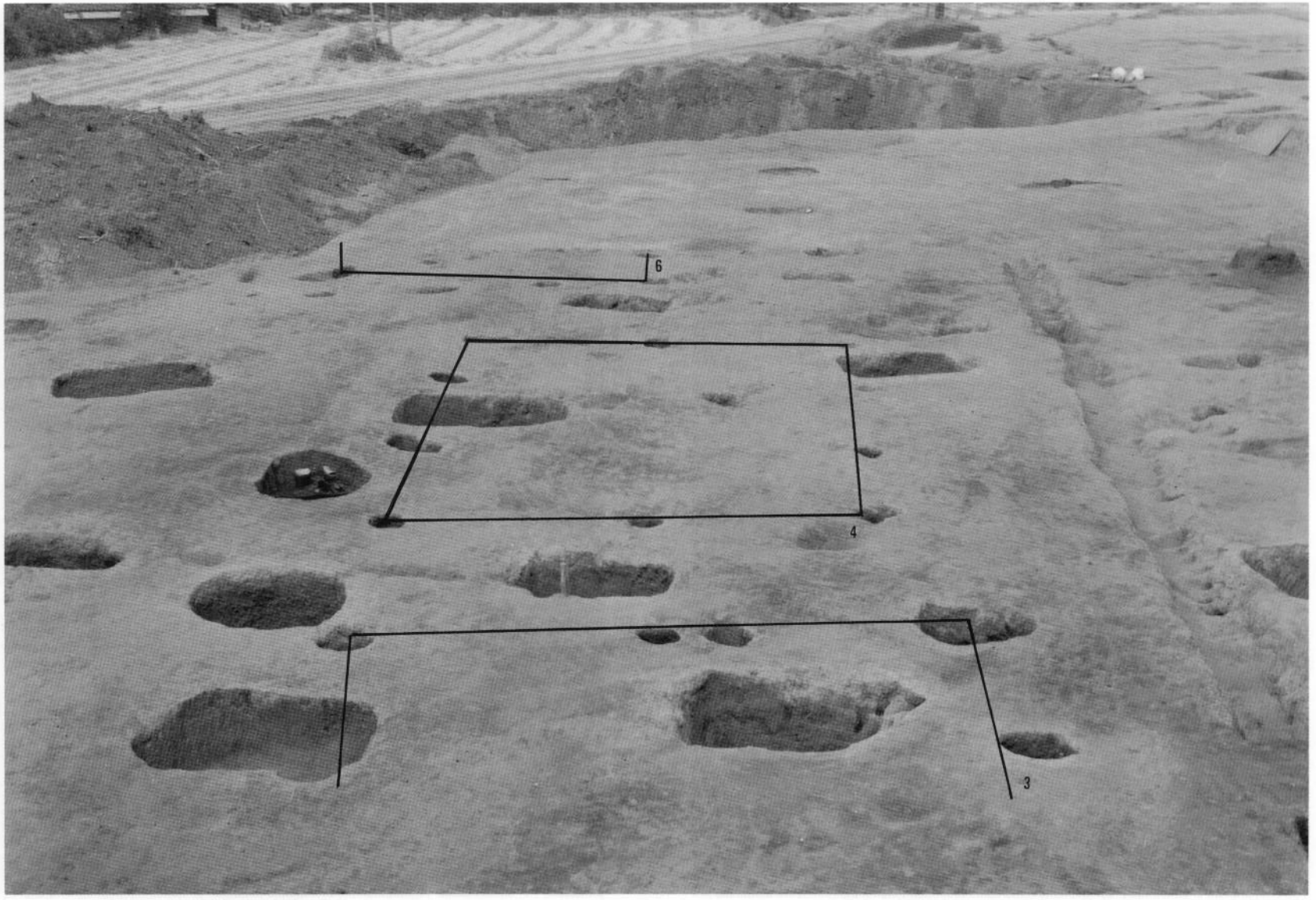
2　2～5号掘立柱建物跡（南から）



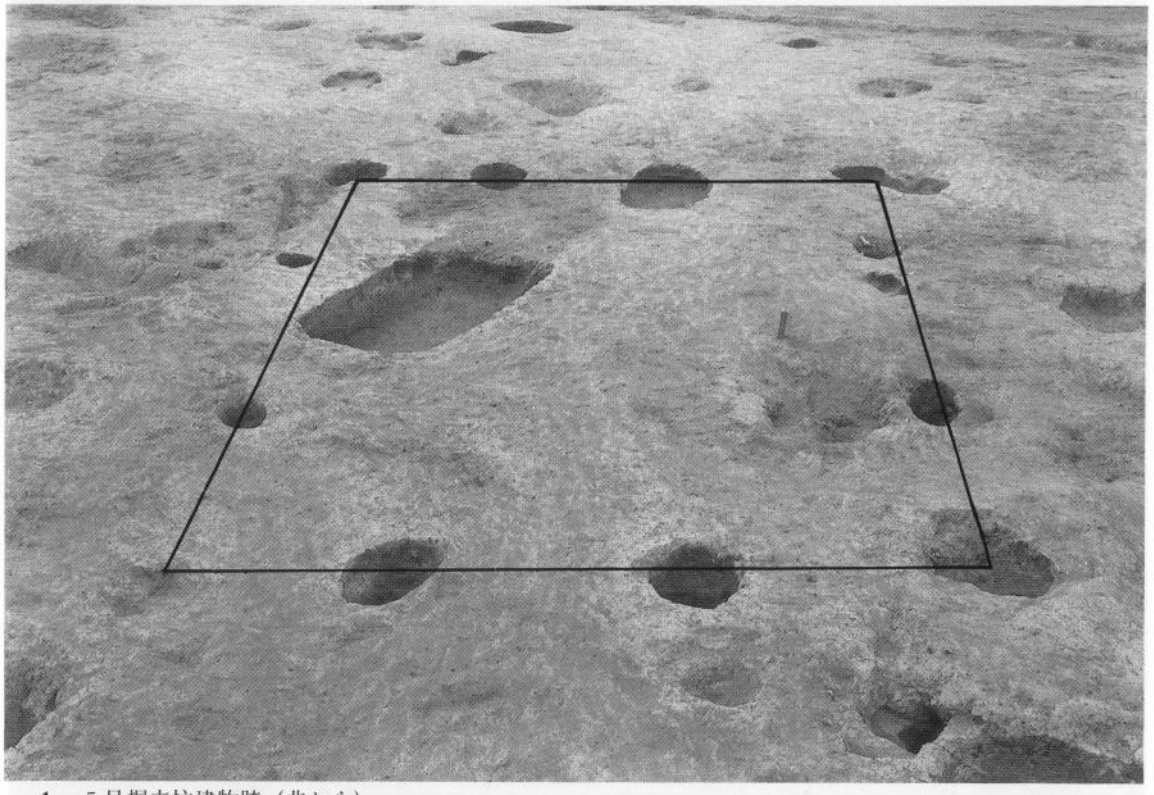
1　2号掘立柱建物跡（北から）



2　3号掘立柱建物跡（東から）



3・4・6号掘立柱建物跡（東から）

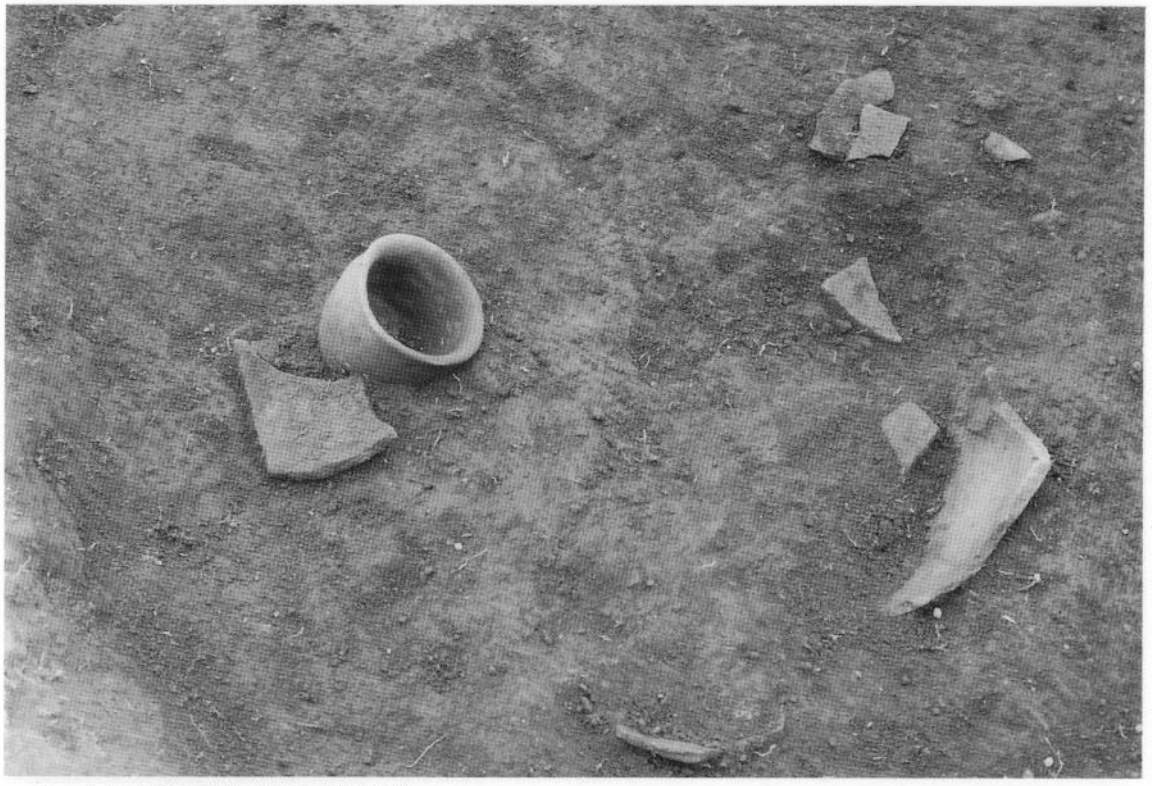


1　5号掘立柱建物跡（北から）

2　6号掘立柱建物跡（東から）

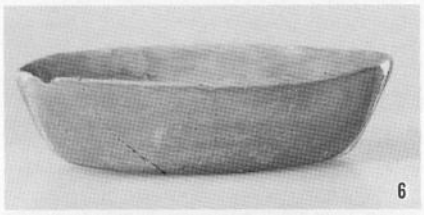
1　4号土壙（西から）

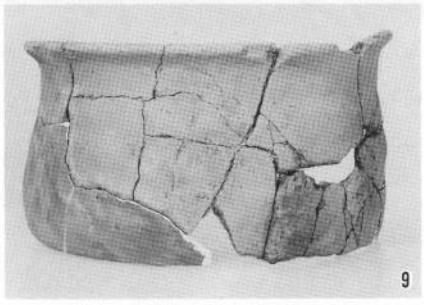
2　4号土壙下層（東から）

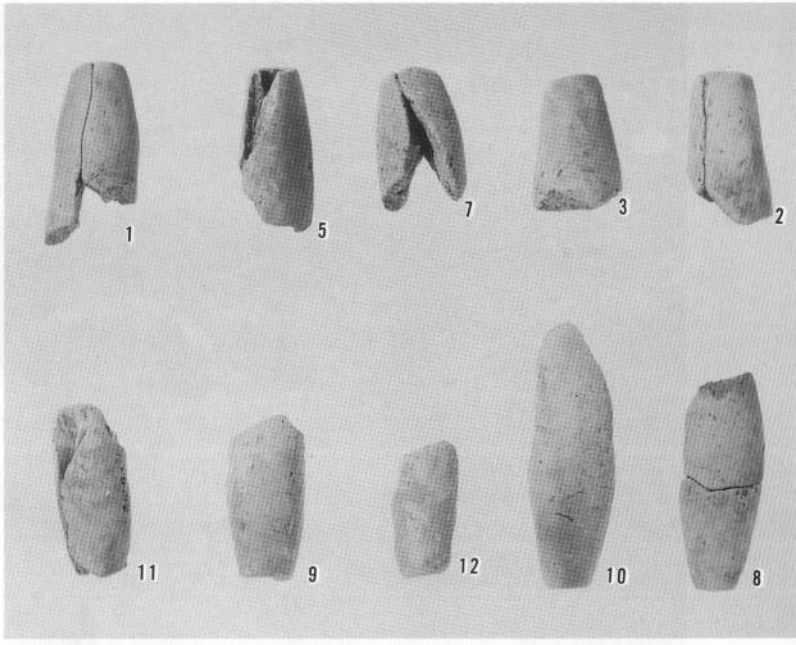


1　4 号土壙遺物出土状況（北から）

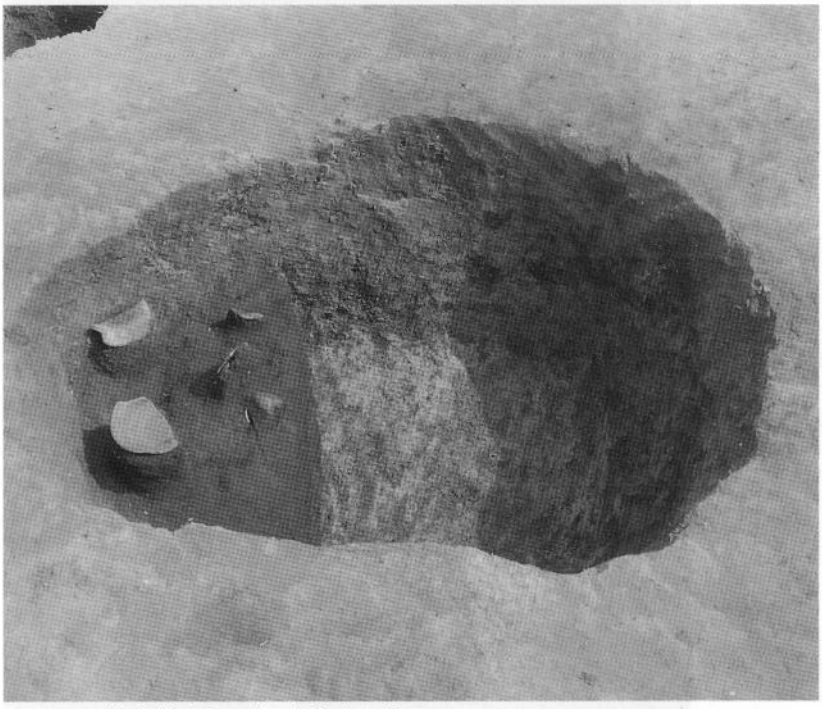
2　4'号土壙土錘出土状況

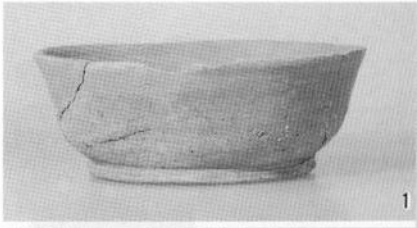


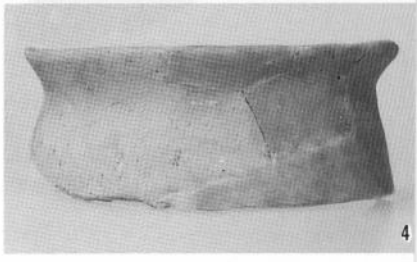




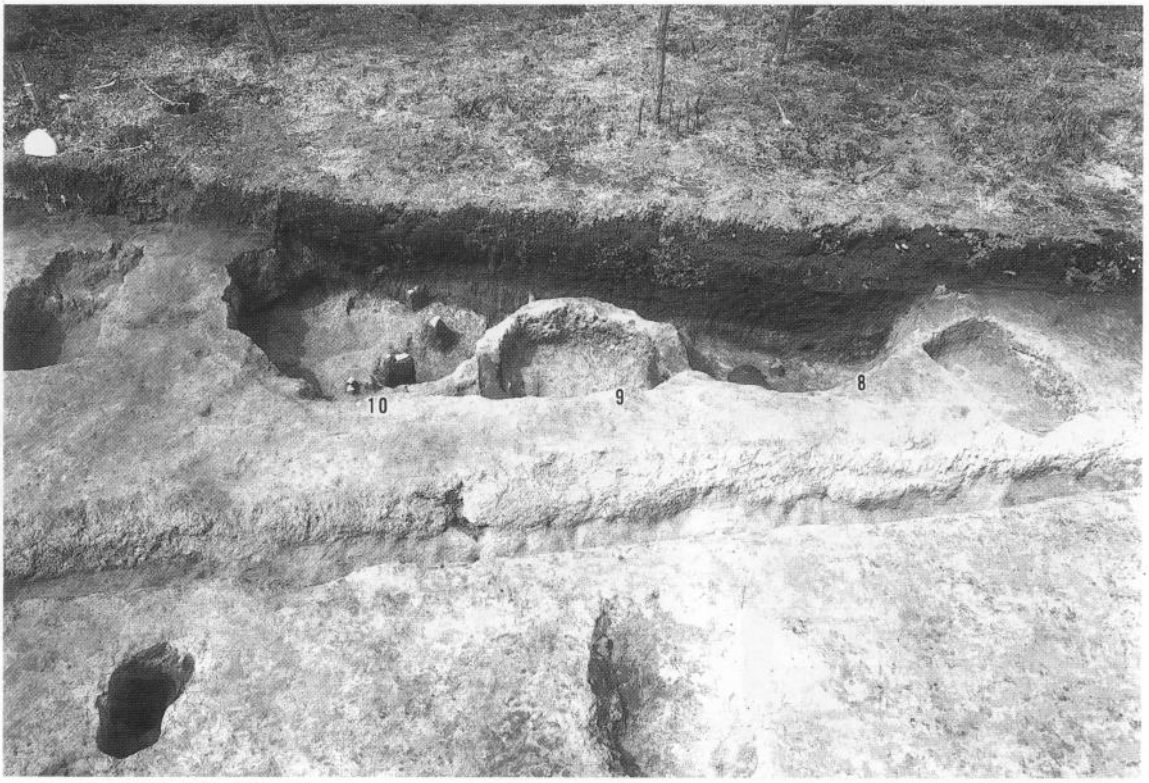
1　4号土壙出土土器・土錘



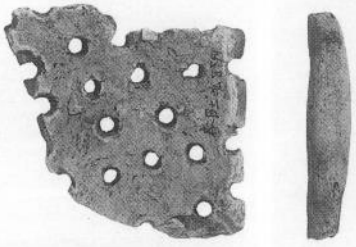




2　5号土壙（南から）と出土土器

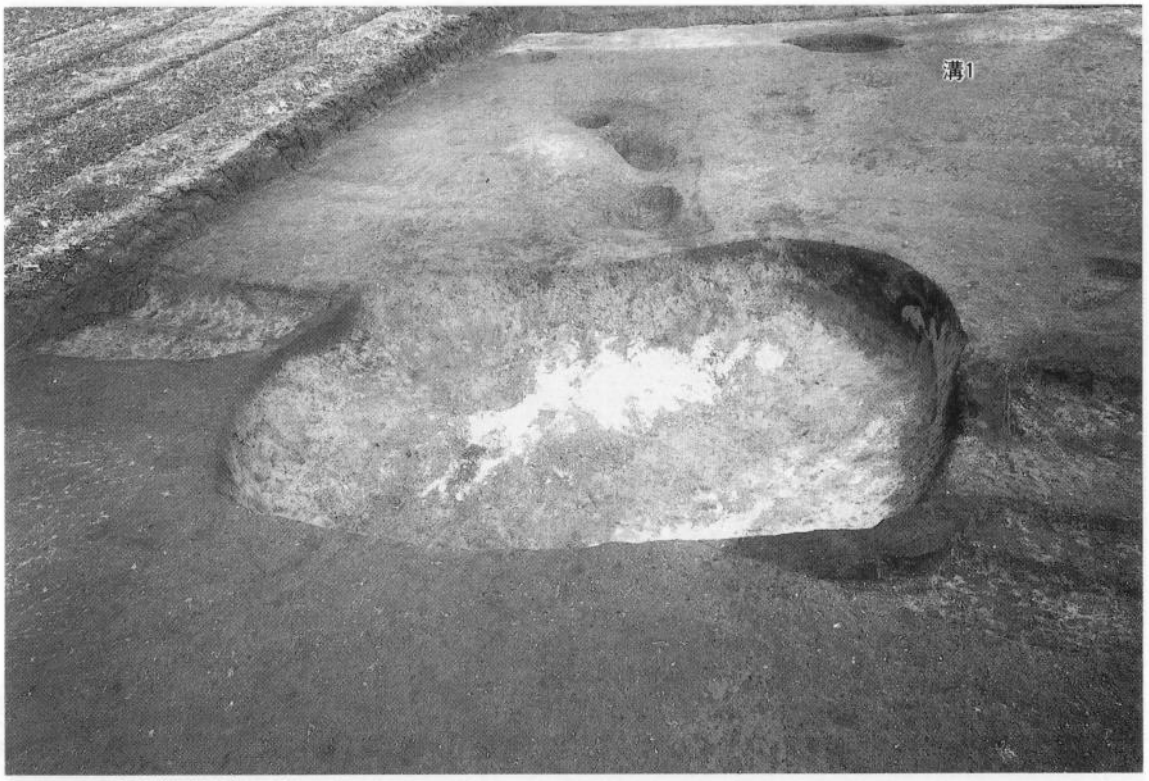


1　8～10号土壙（南から）

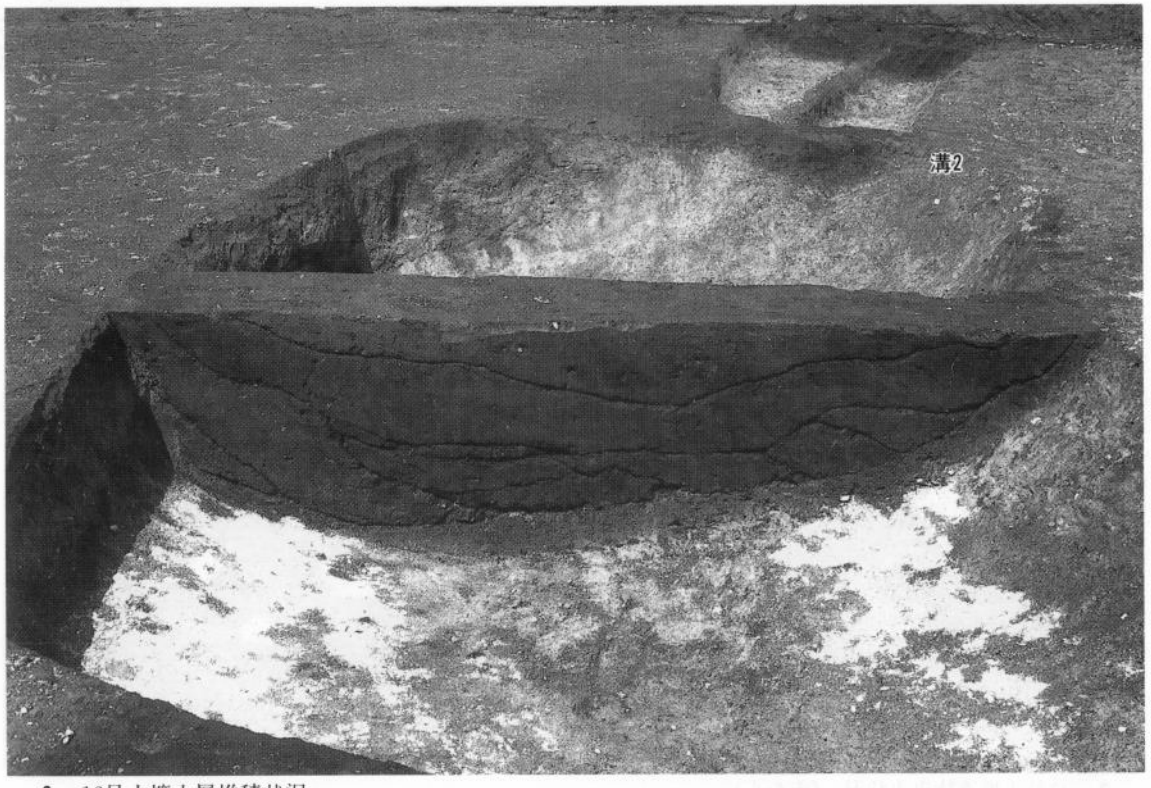


2　8号土壙出土遺物

3　10号土壙遺物出土状況



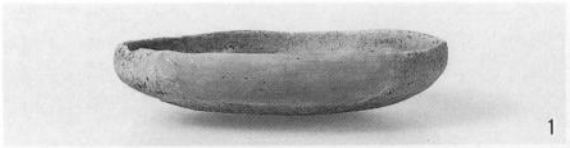
1　16号土壙（西北から）



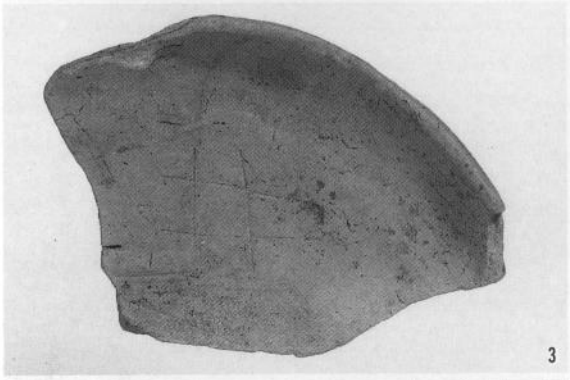
2　16号土壙土層堆積状況

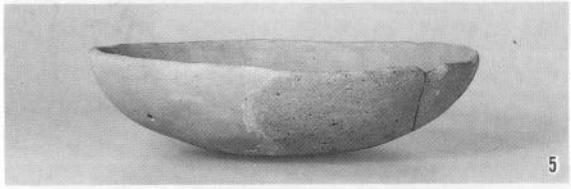
1　17・18号土壙（北から）

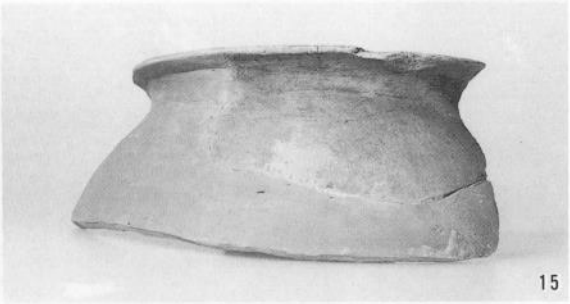
2　17号土壙遺物出土状況　（南から）

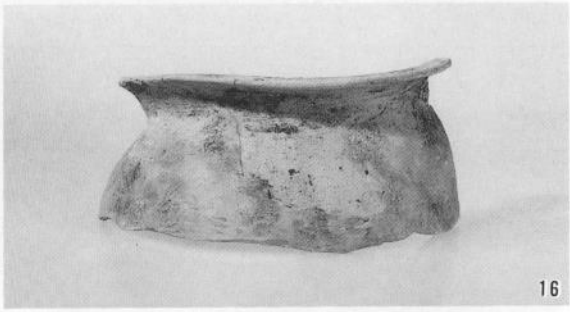

1

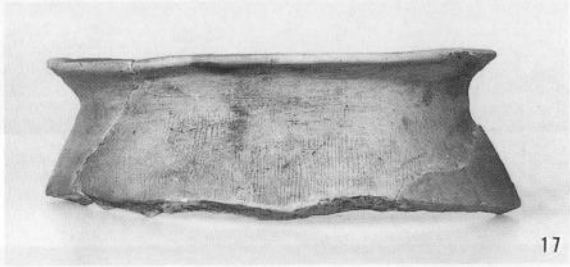
2

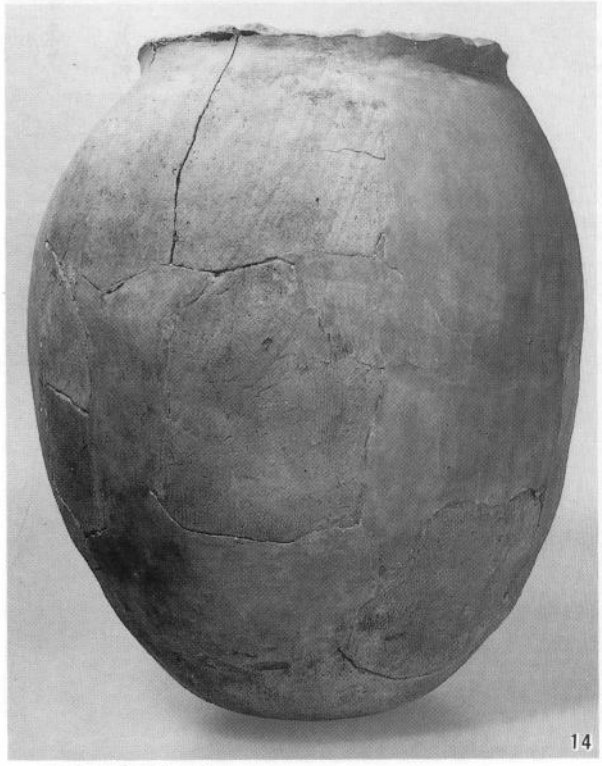

3


5


15

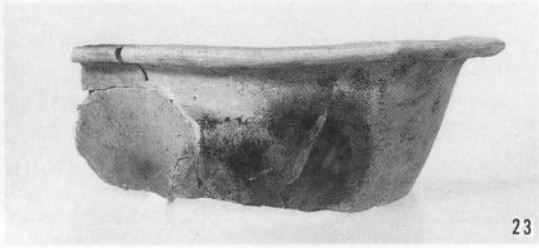

16


17


14

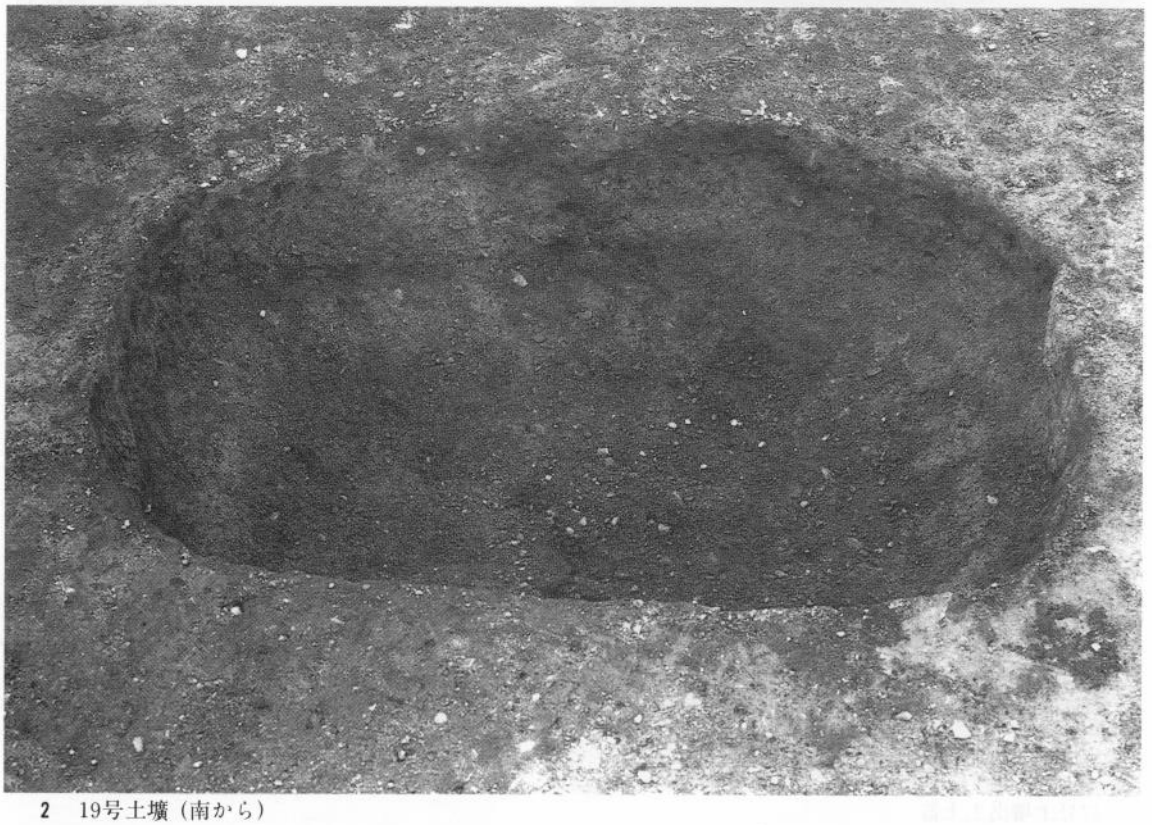
21

22


23

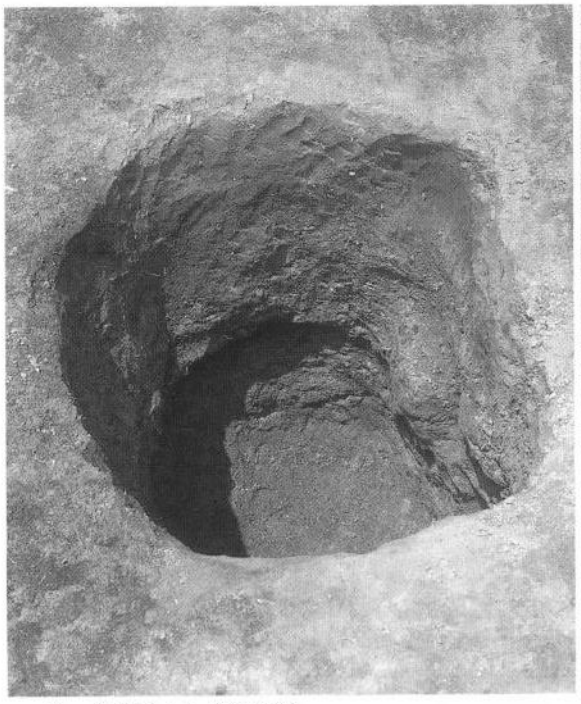
17号土壙出土土器

1　18号土壙（西から）



2　19号土壙（南から）

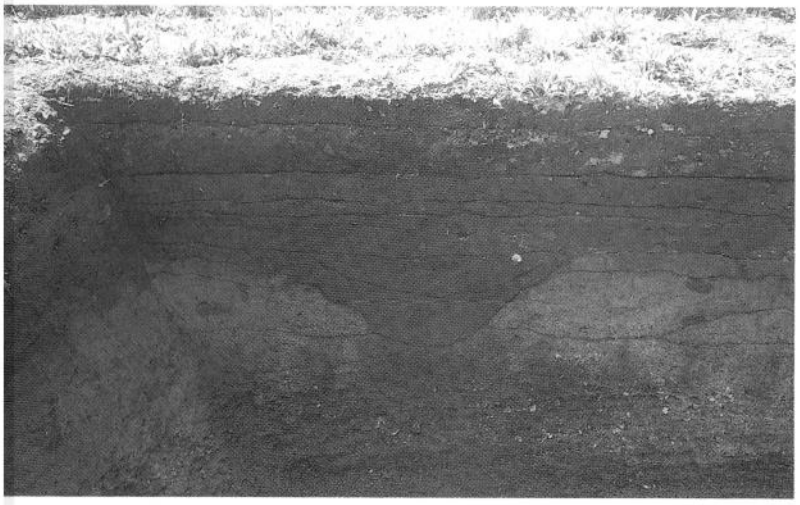
1　1号ピット（東南より）



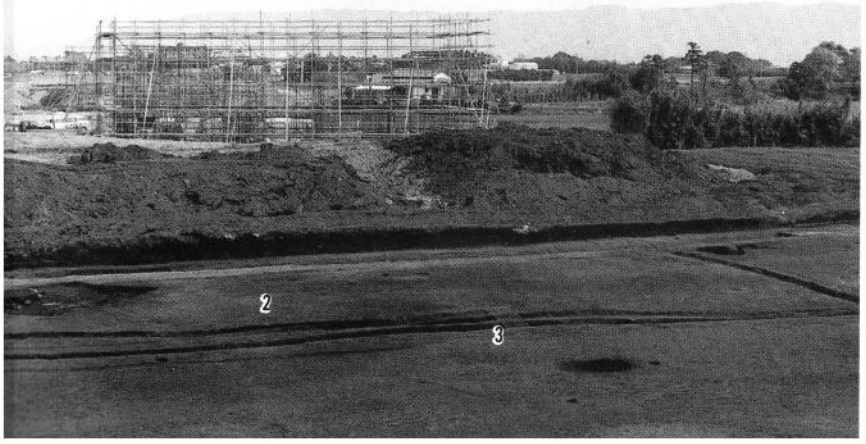
2　3号ピット（東より）

3　6号ピット（北東より）

1　1～3号溝全景（北東から）



2　1号溝土層堆積状況と遺物

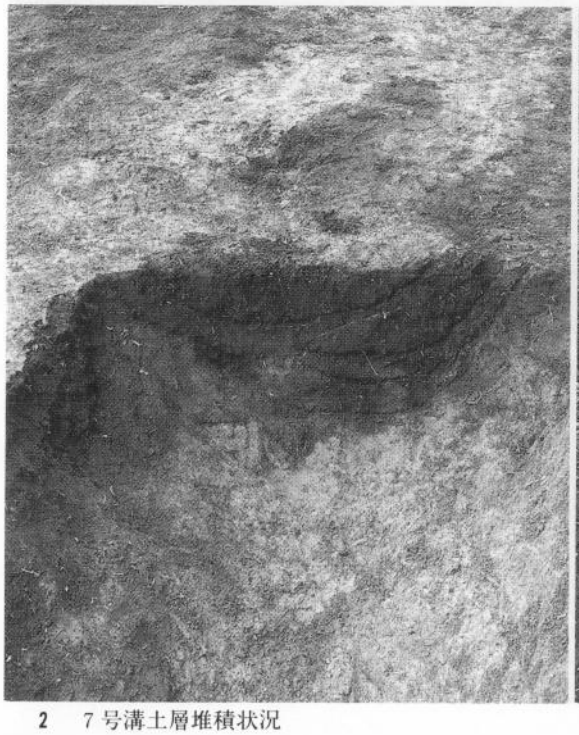


3　2・3号溝（北西から）

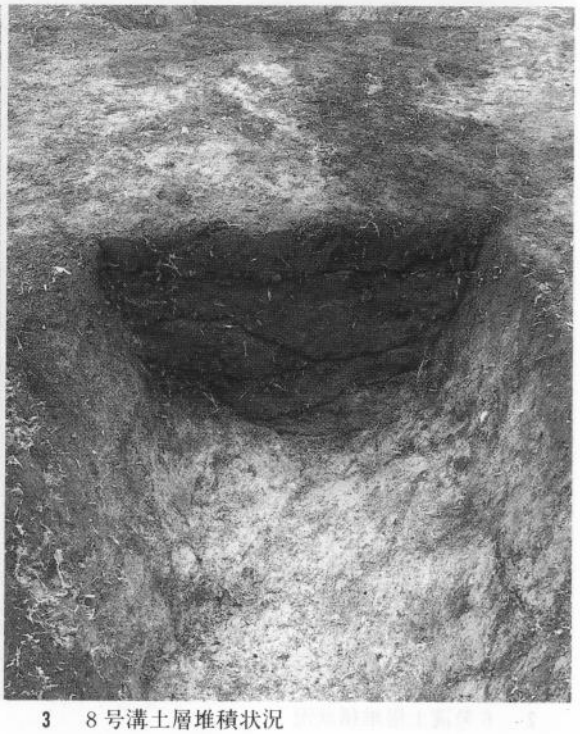
1　4～6号溝（西から）

2　6号溝土層堆積状況

1　7～9号溝（西から）



2　7号溝土層堆積状況



3　8号溝土層堆積状況

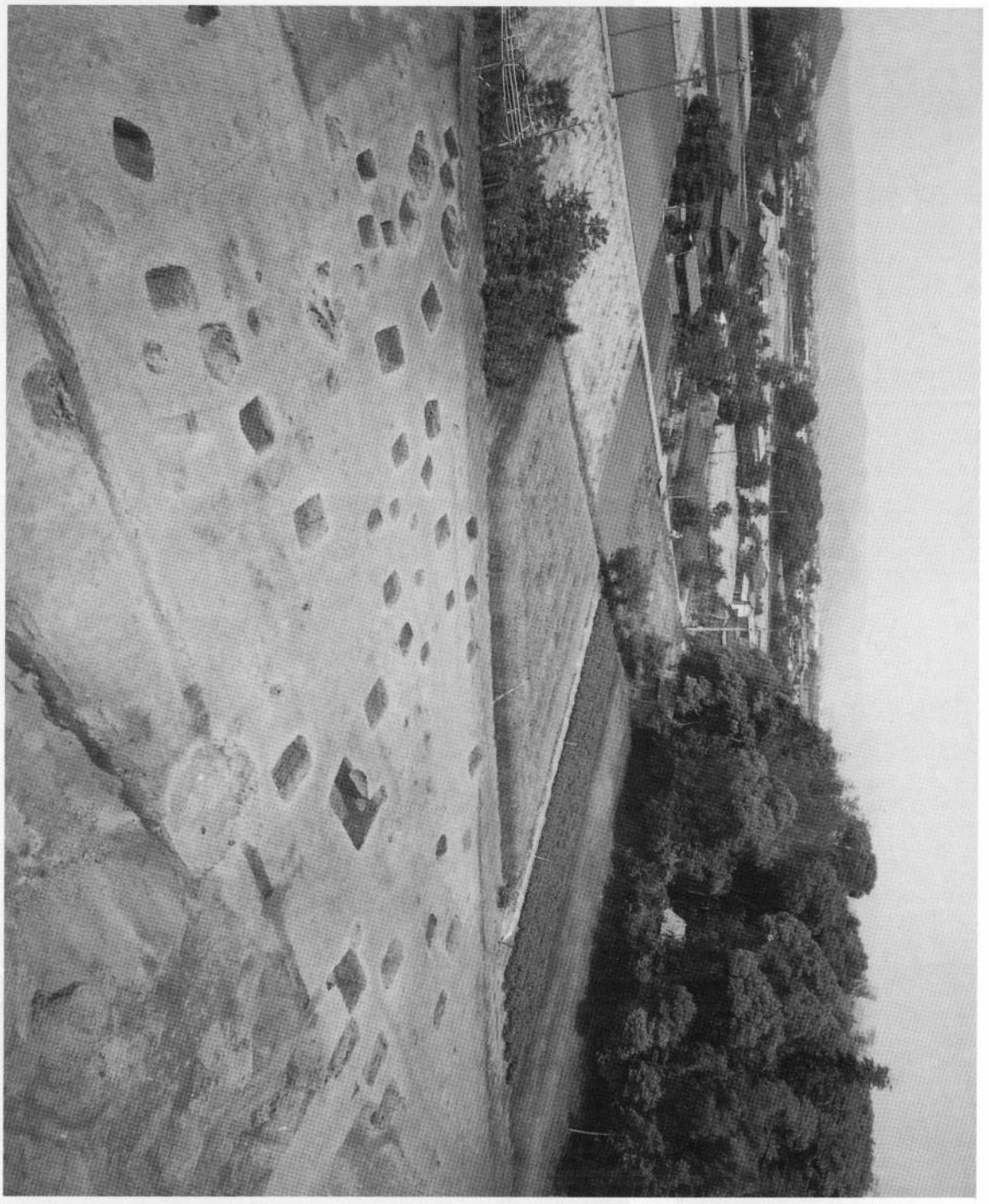
1　9号溝屈曲部

2　7・9号溝の切り合い

5

6

3　9号溝土層堆積状況と出土遺物



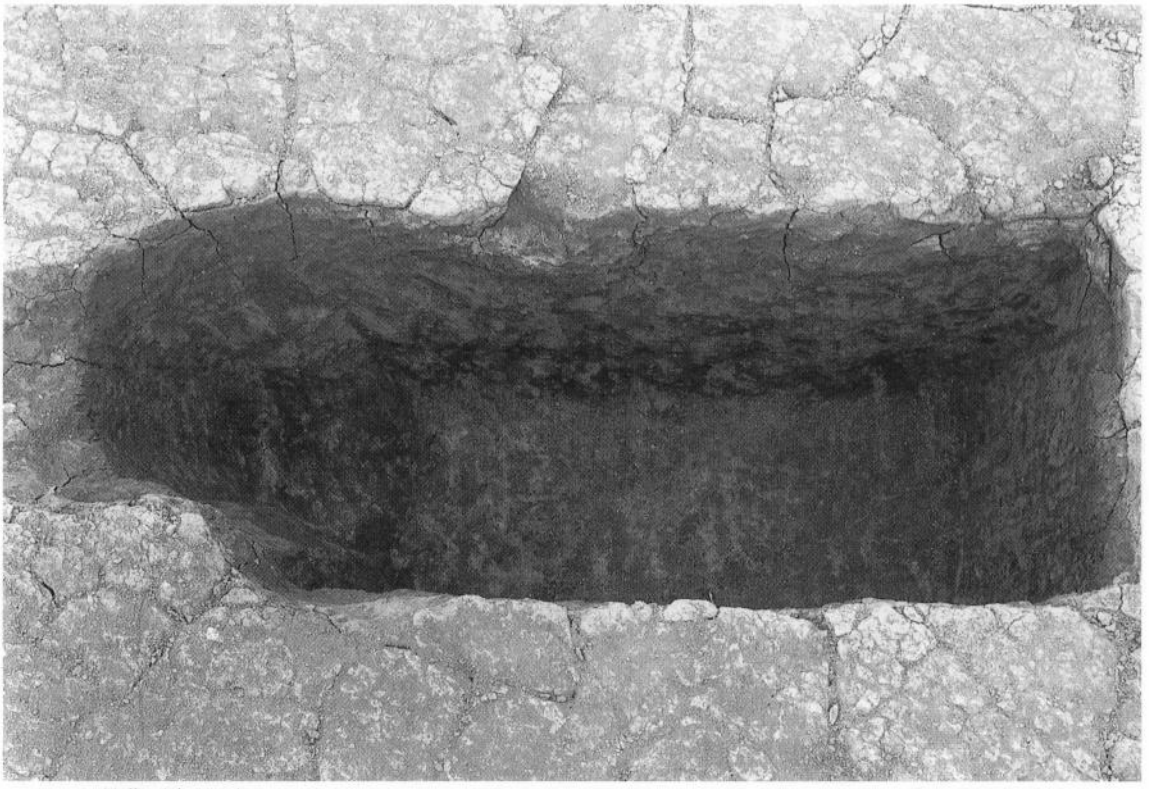
近世墓群西半（南から）

1　近世墓群全景（南から）

2　1～7号墓付近近景（南から）

1　近世墓西半（西から）

2　19～30号墓近景（西から）



1　1号墓（東から）

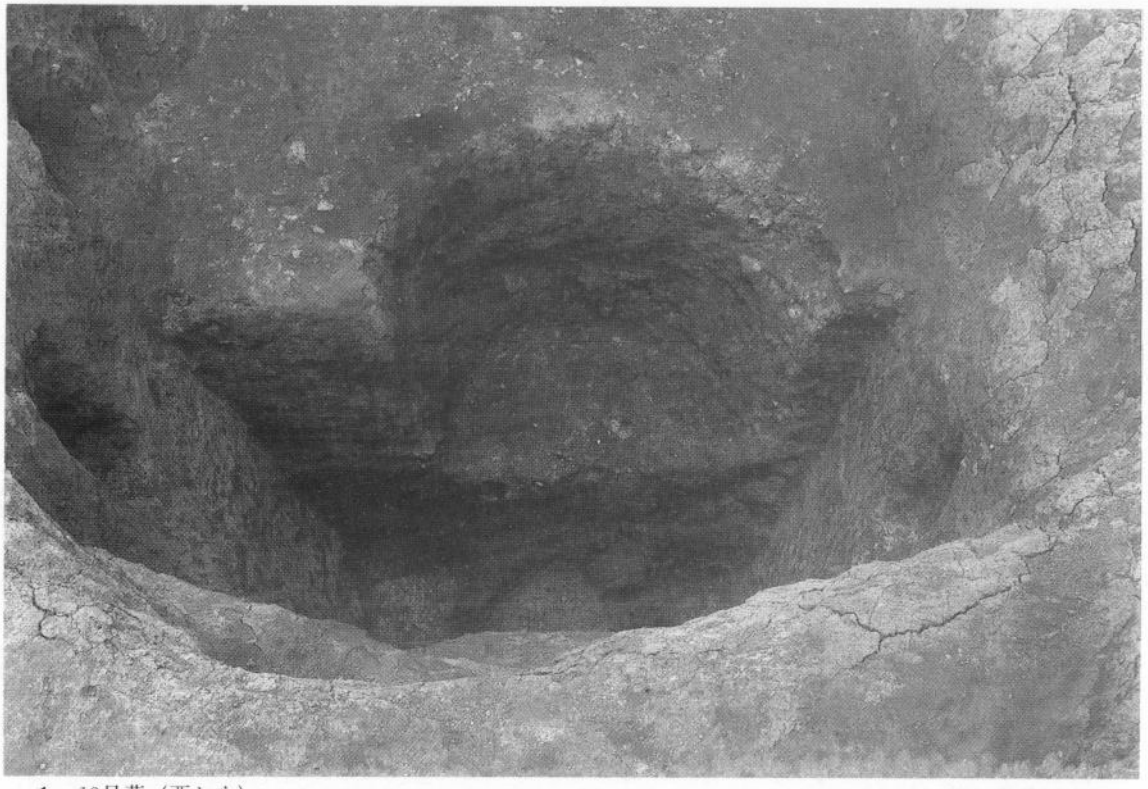
2　12号墓（東から）

1　近世墓調査風景

2　14号墓（西から）

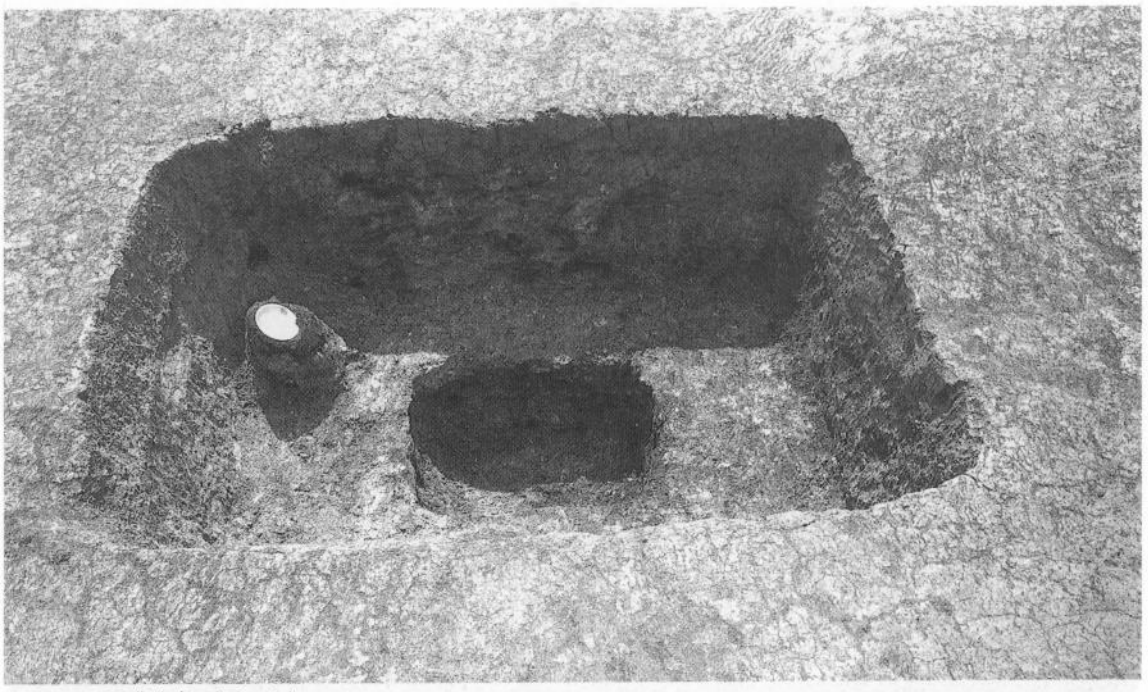
1　17号墓（西から）

2　17・18号墓（西から）



1　19号墓（西から）

2　20号墓（西から）

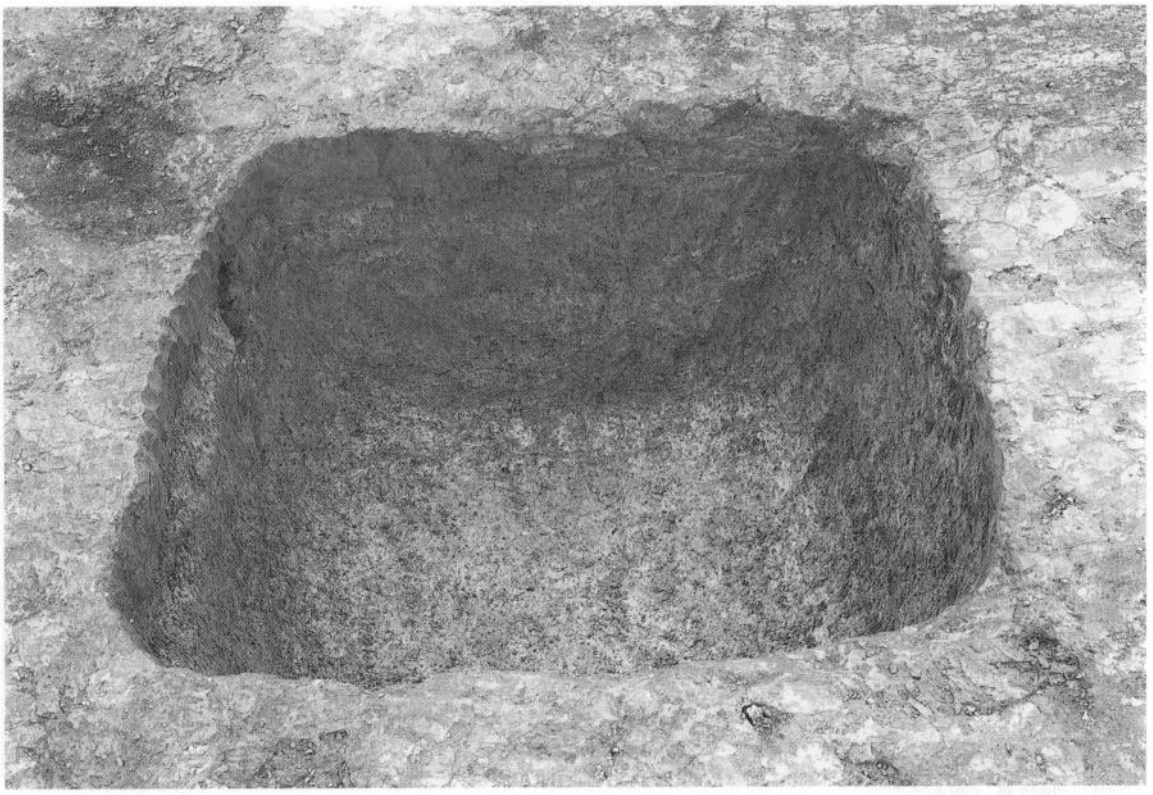


1　21号墓上部（西から）

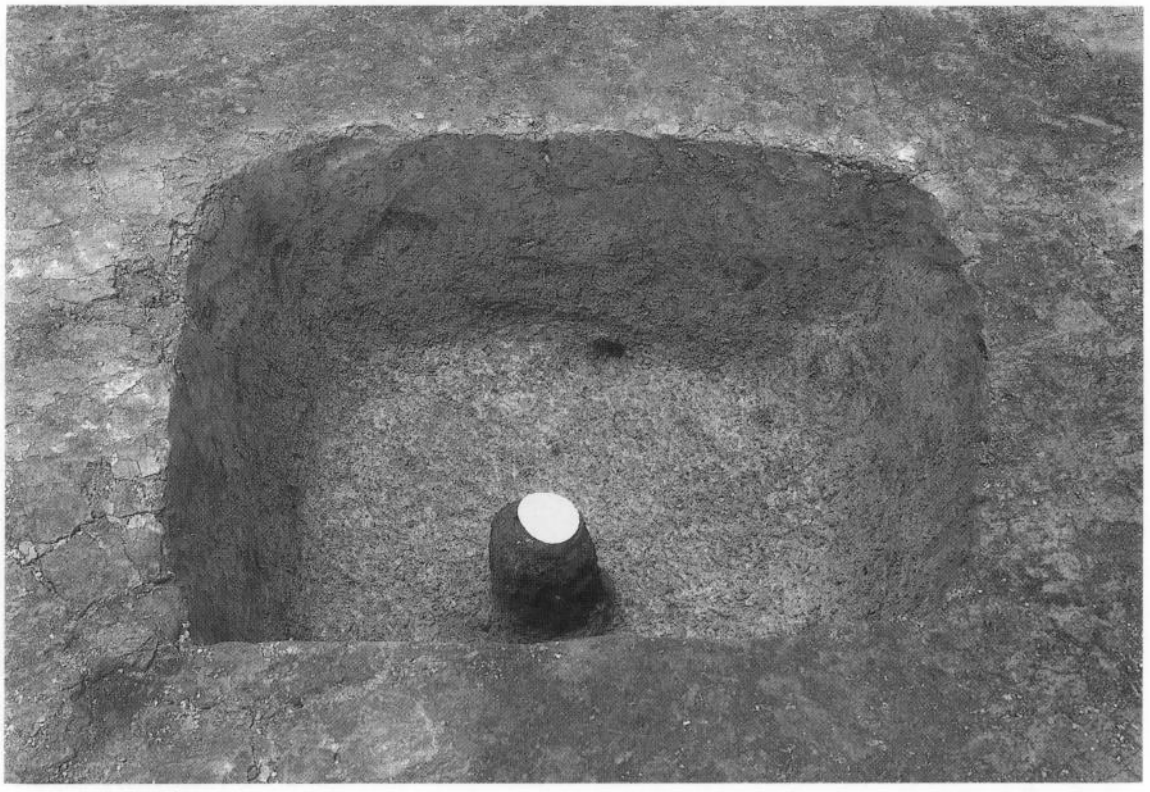
2　21号墓（南から）

1　22号墓上部（西から）

2　22号墓（東から）



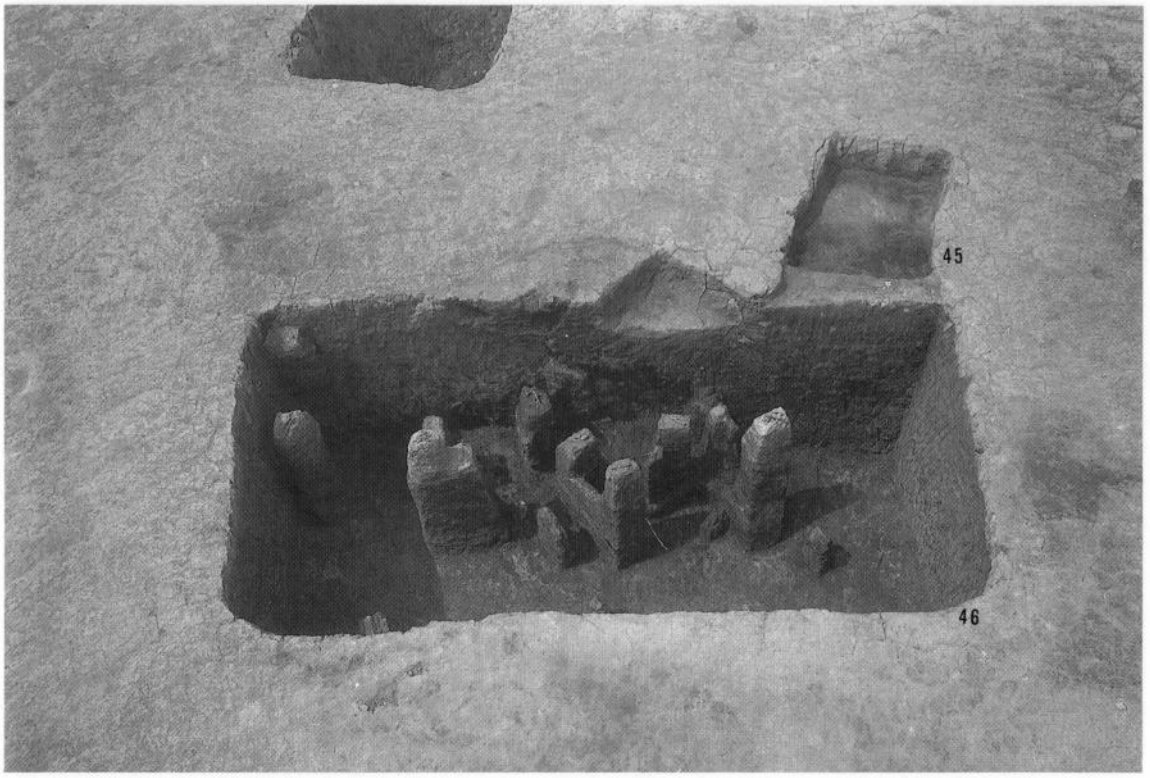
1　33号墓（東から）



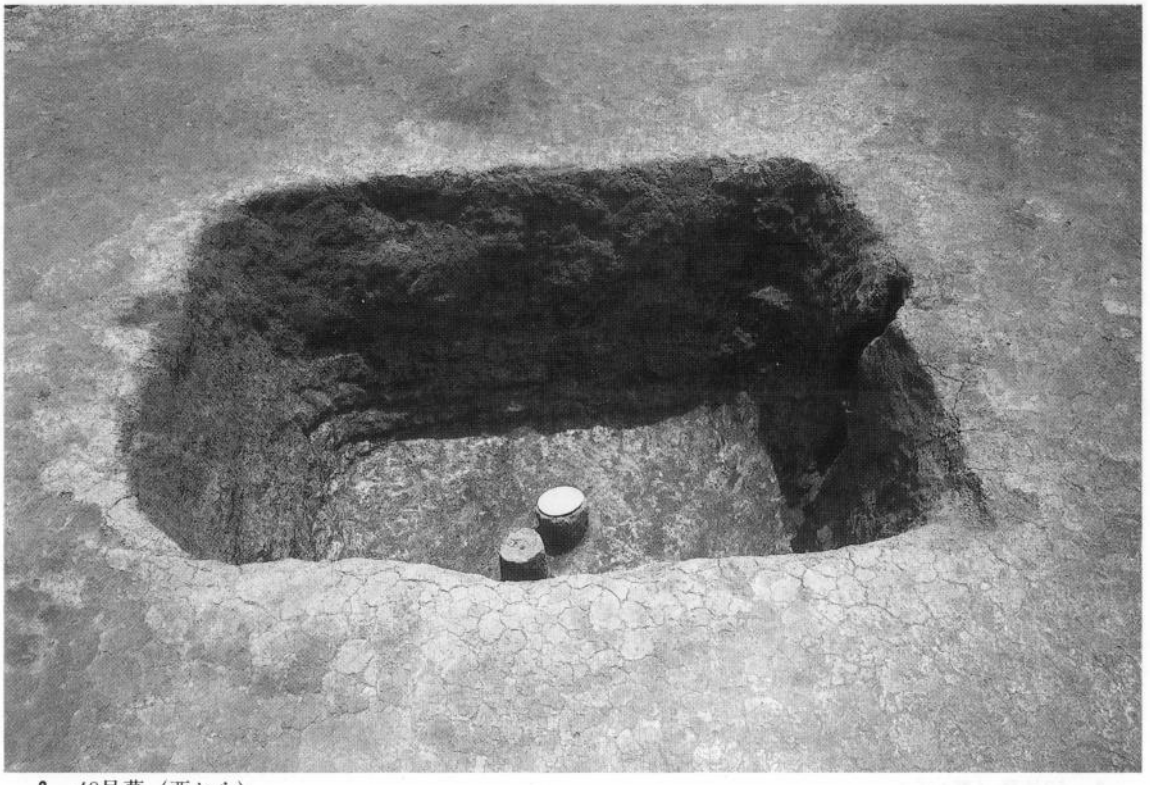
2　34号墓（東から）

1　39号墓（西から）

2　41号墓（北から）



1　45・46号墓（南から）

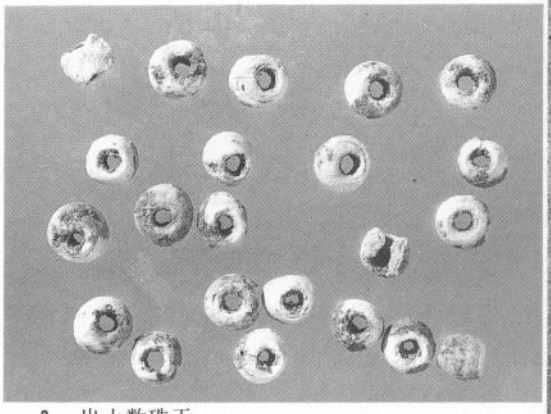


2　48号墓（西から）

1　49・51号墓（北から）

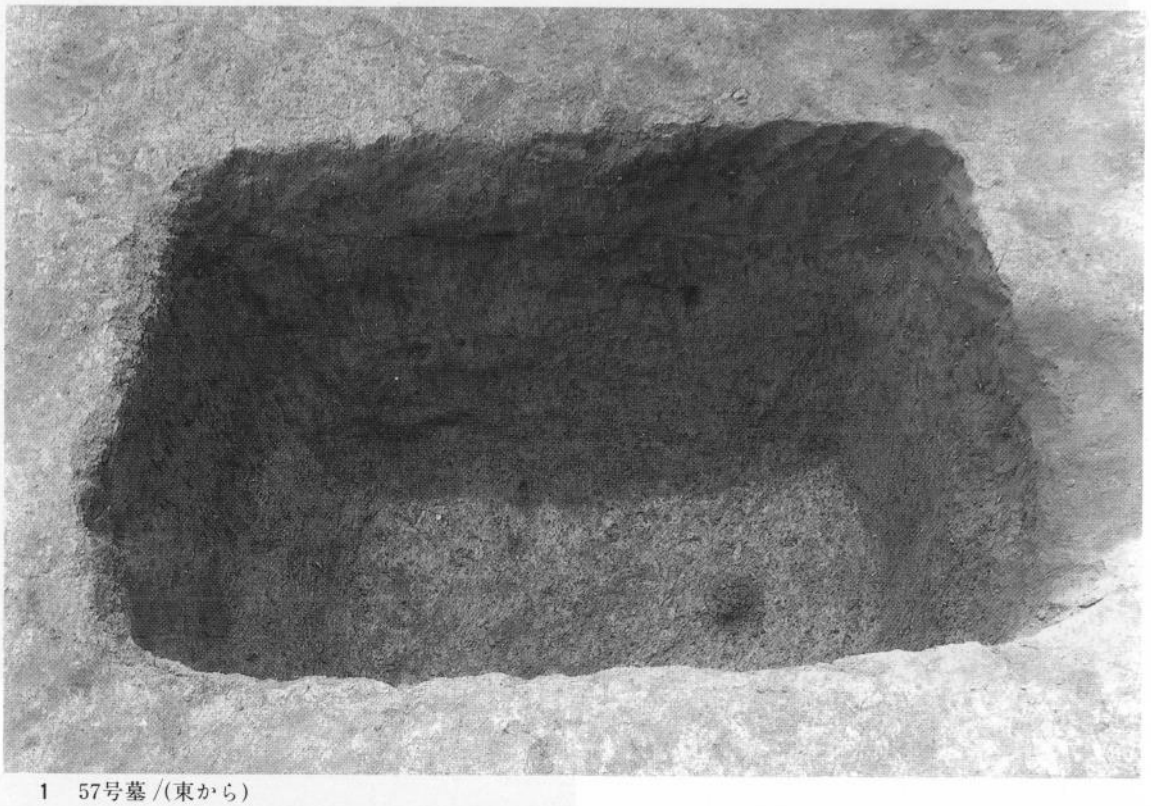
2　53号墓（東から）

1　55号墓（西から）



3　出土数珠玉

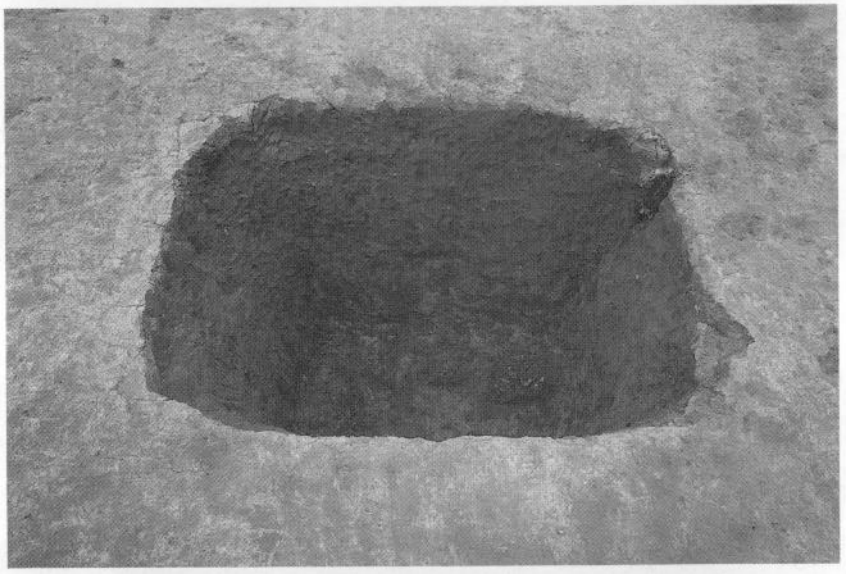
2　55号墓副葬品出土状況

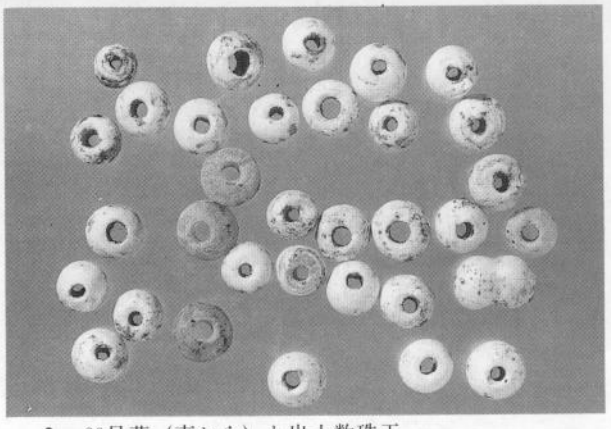


1　57号墓 /(東から)

2　58号墓（東から）

1　59号墓（西から）



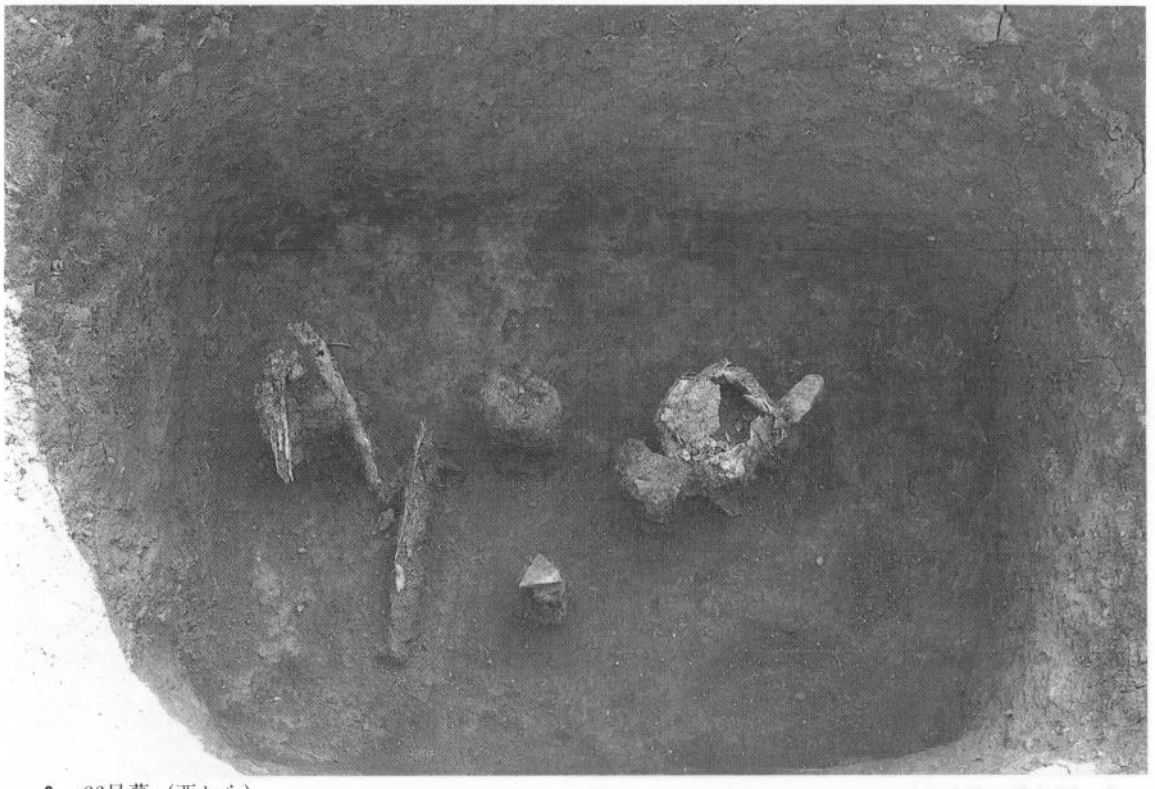


2　60号墓（東から）と出土数珠玉

1　62号墓（西から）

2　63号墓（北西から）

1　64号墓（西から）

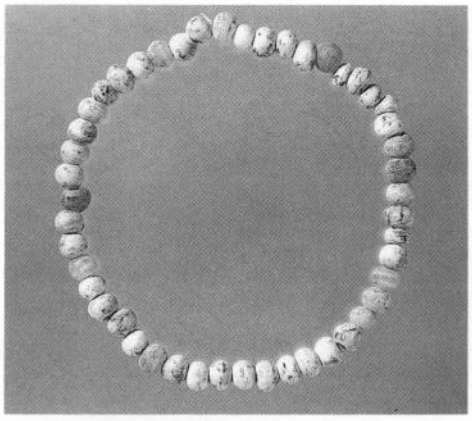


2　66号墓（西から）

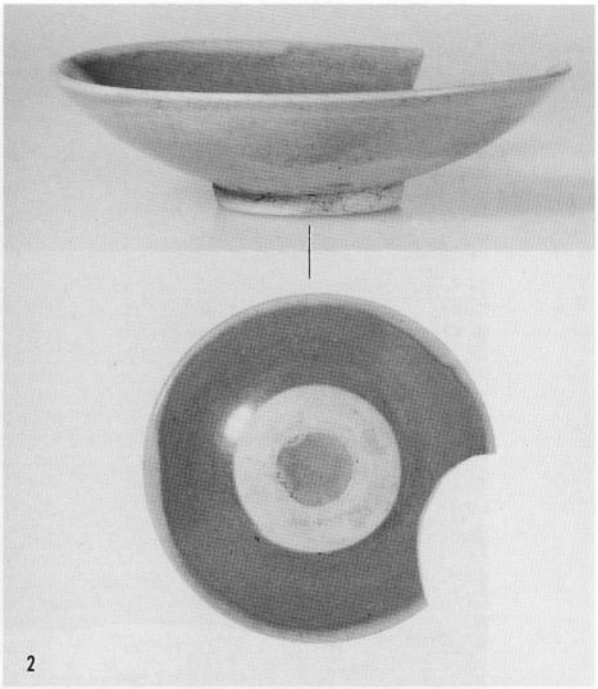
1　68号墓（南から）

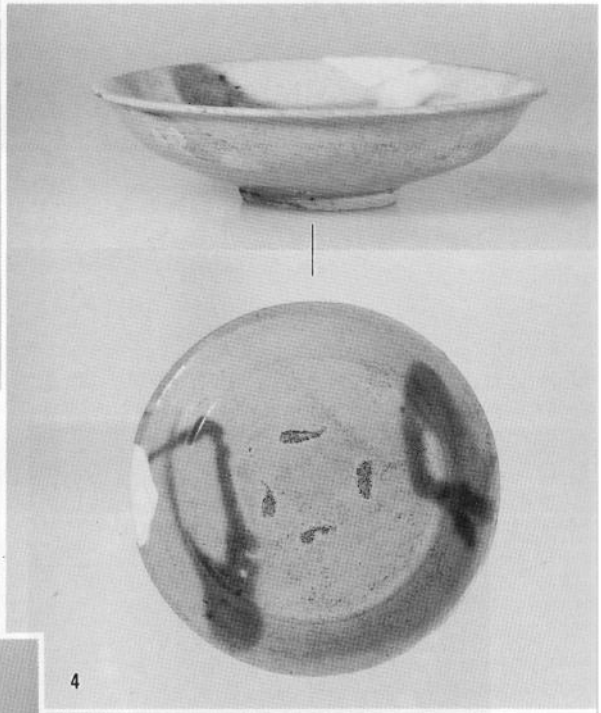
2　77号墓（東から）

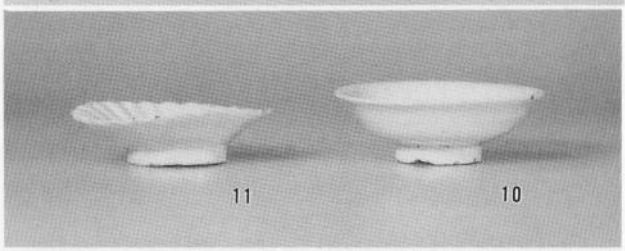
1　75号墓（東から）

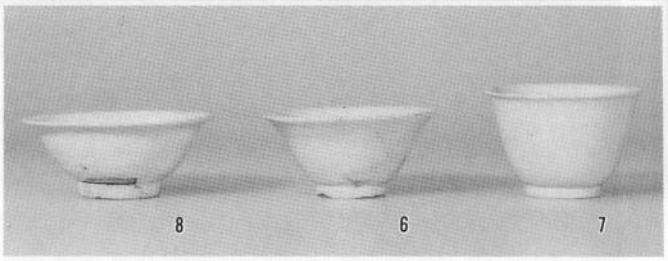


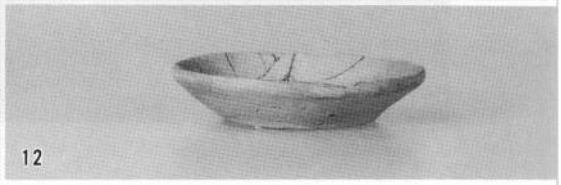
2　副葬品出土状況と数珠玉



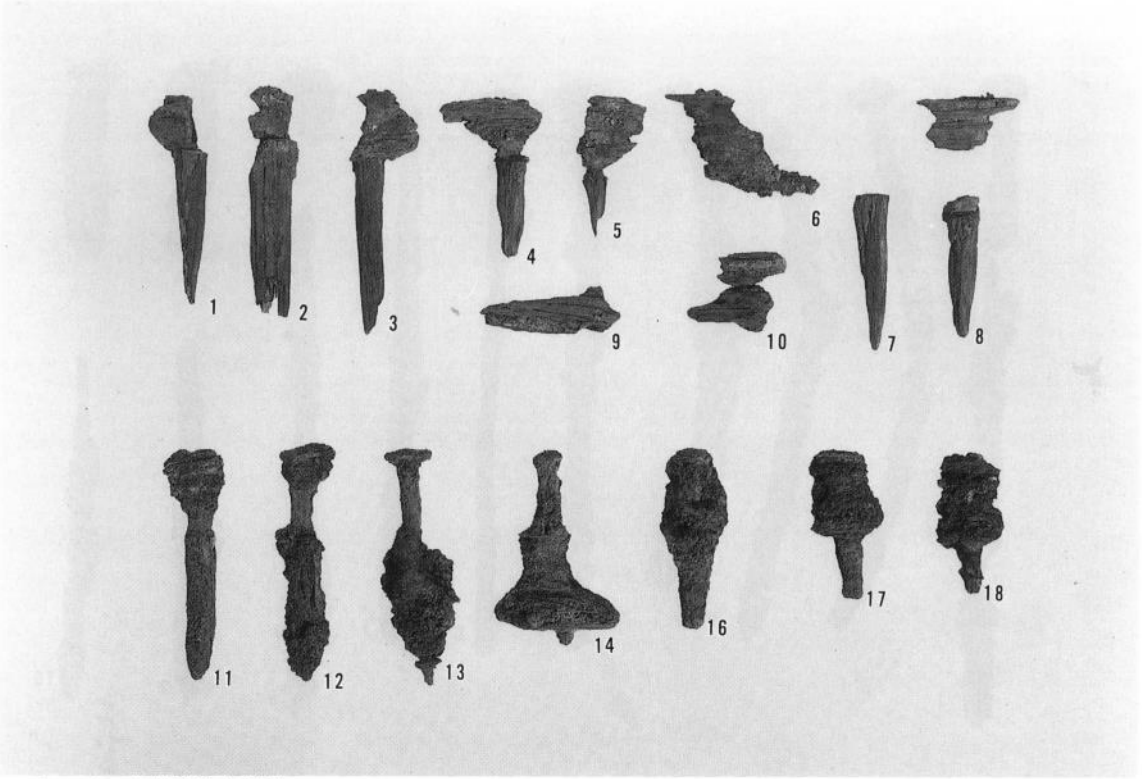




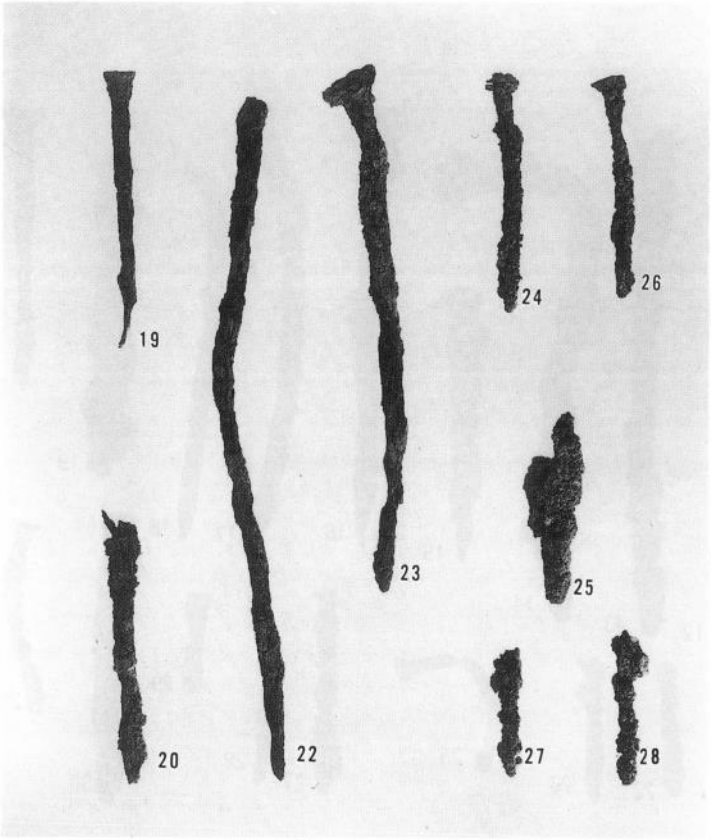




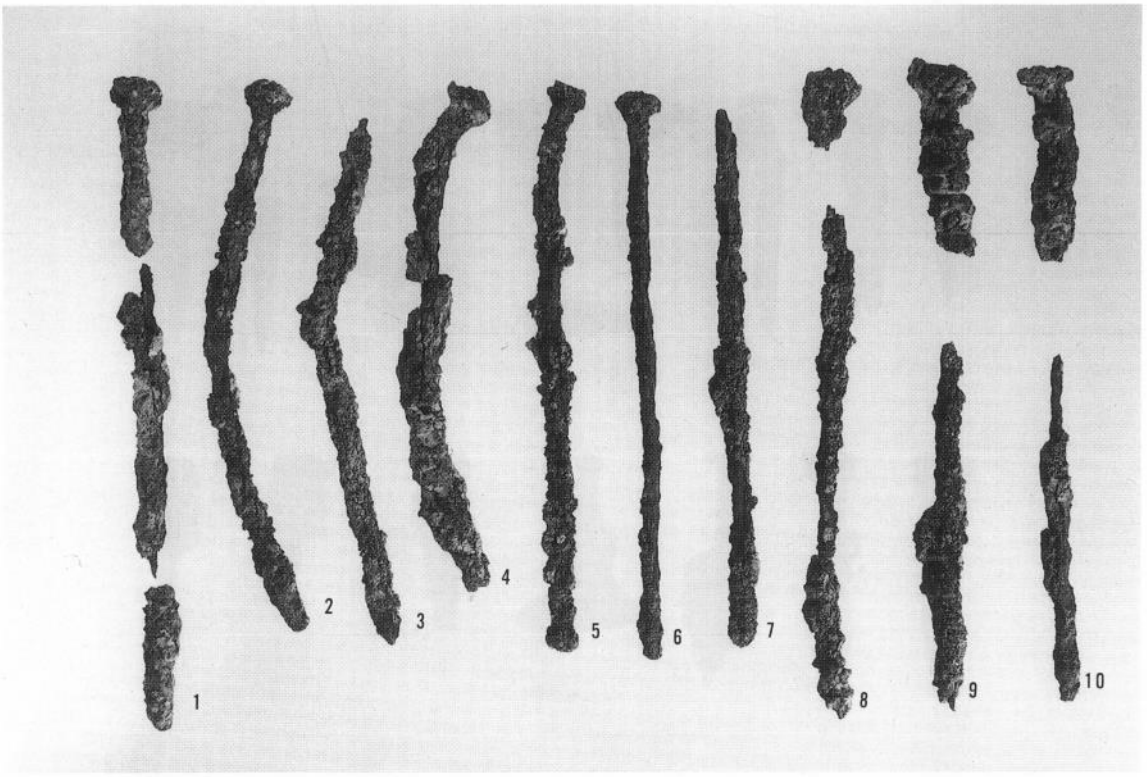
近世墓出土土器



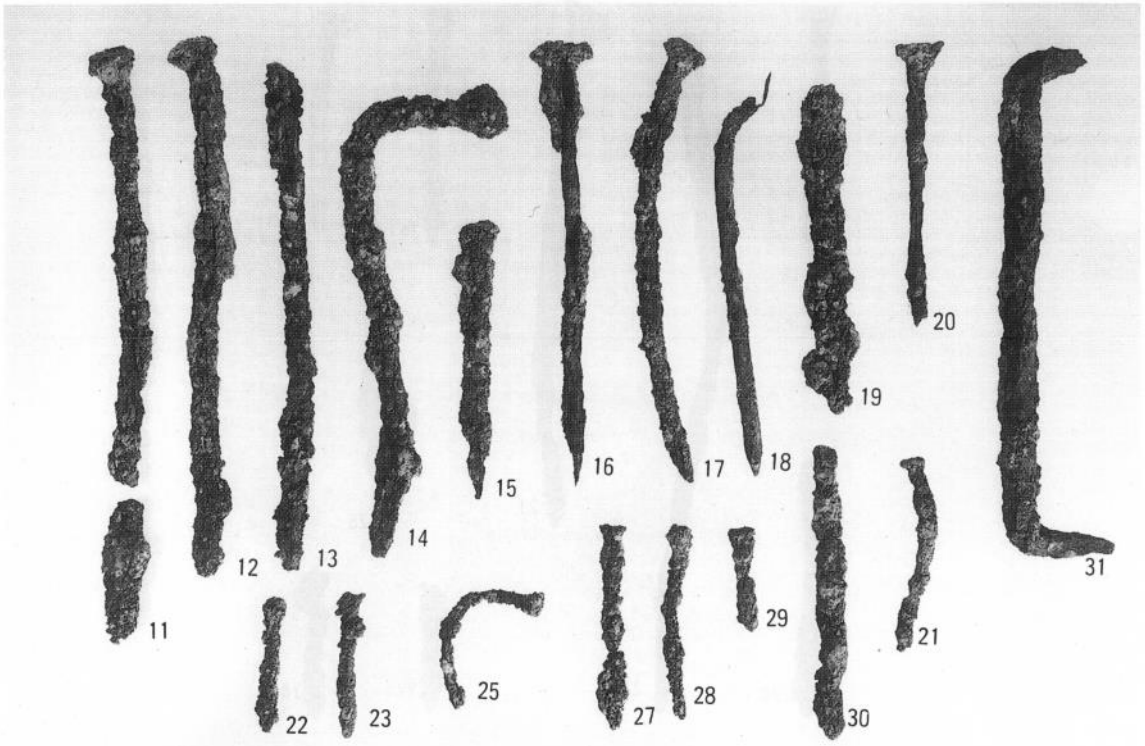
1　3・19号墓出土鉄釘



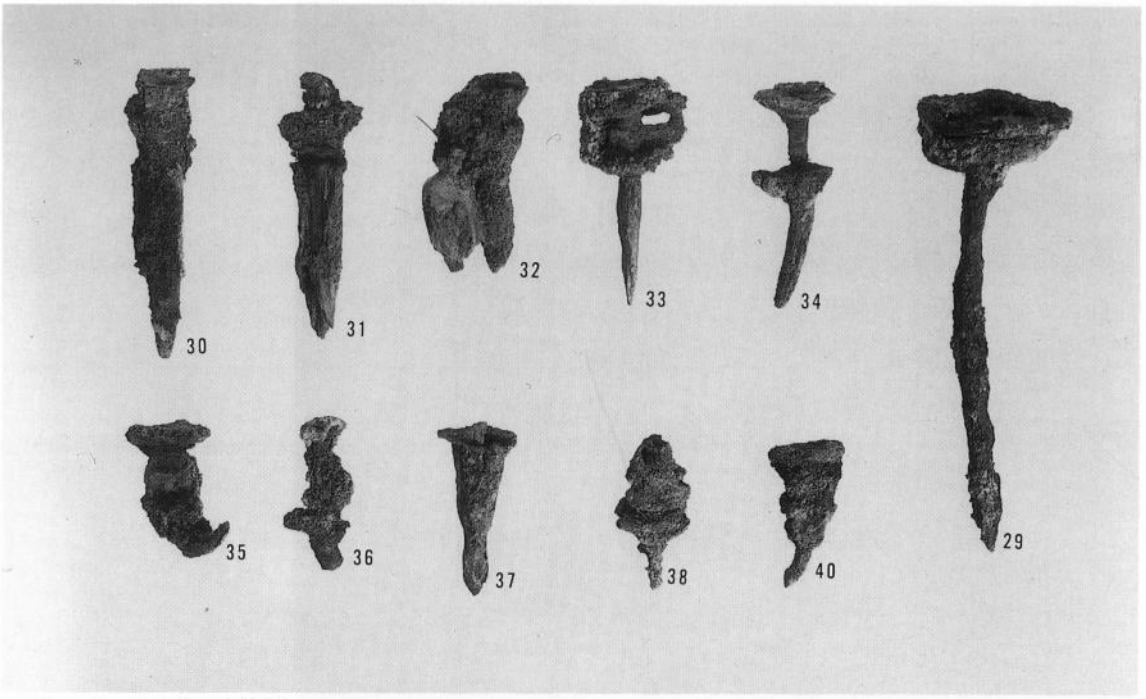
2　15・37・45号墓出土鉄釘



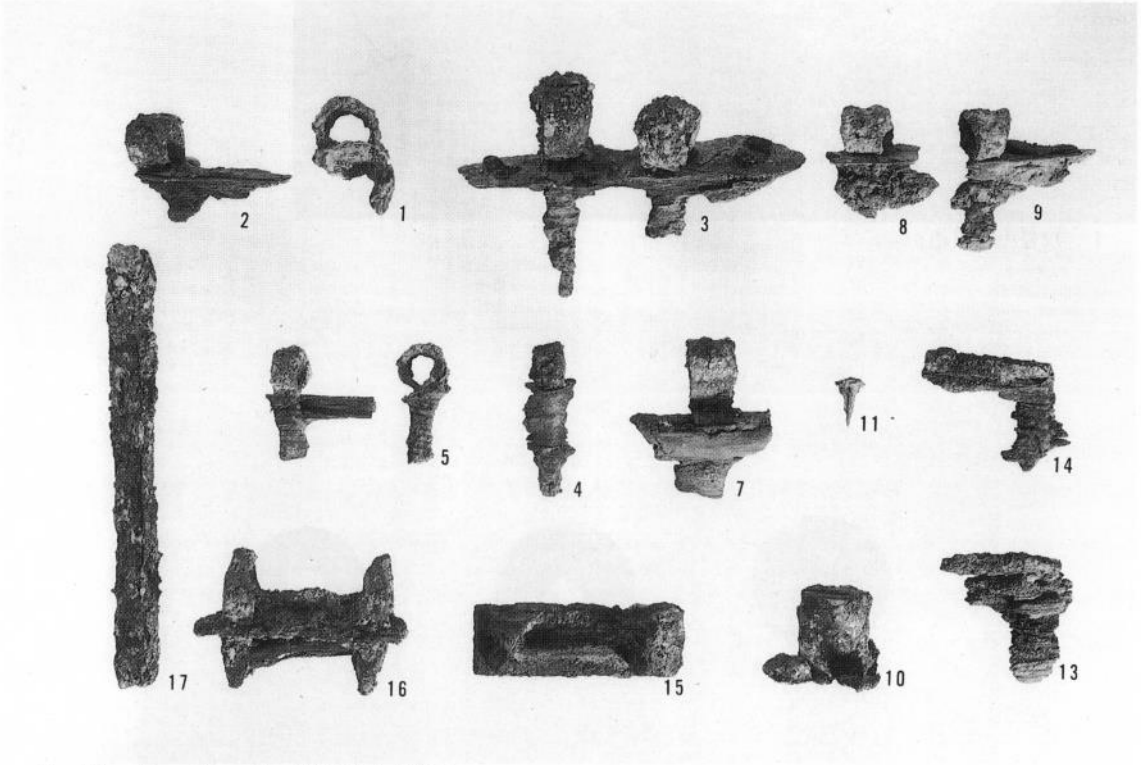
1　46号墓出土鉄器 1



2　46号墓出土鉄器 2

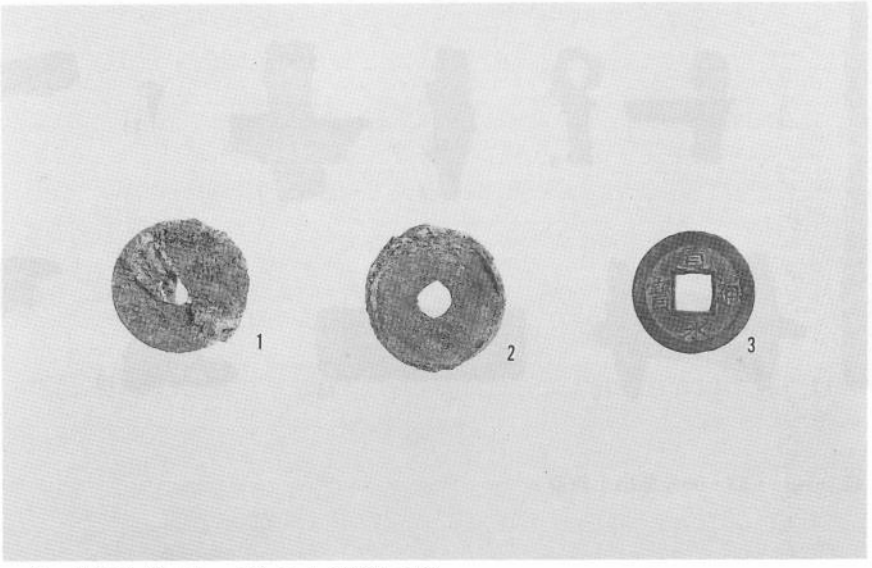


1　49・59号墓出土鉄釘



2　13・46・48・53・66号墓出土鉄器

1　12号土壙（南から）



2　12号土壙（1・2）および採集古銭

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 Ｈ４	登録番号 2

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－26－

平成５年３月３１日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　大成印刷㈱

福岡市博多区東那珂３丁目６番62号